

第5章 嵐の訪れ

——密州、徐州、湖州

■更漏子

熙寧^{きねい}7 (1074) 年、蘇軾^{そしよく}39 歳。

杭州^{こう}を去ってから 5 年の間に、蘇軾^{そしよく}は密州^{みつ}、徐州^{じょ}、湖州^この 3 州の知事を歴任する。相変わらずたくさんの人と交流して多数の詩を詠み、これでいつ仕事をしていただろうかと凡人は疑いたくもなるが、知事としての職務には真剣に取り組み、様々な苦悩があった。そして、その行く手には恐るべき嵐が待ち受けていた。

10 月、蘇軾^{そしよく}は潤州^{じゆん}から長江^{ちやうかう}を渡り、ひとまず江南^{かうなん}の地に別れ、次の赴任^{みつ}先である密州^{みつ}に向かった。このとき孫洙^{そんしゆ}（字は巨源^{あざな きよげん}）（第3章 136 ページに登場）がしばらく同行し、楚州^そで西と東に別れた。これはそのときの送別の詞。

（孫洙は、この8月まで海州^{かい}の知事を務め、任期を終えたのでいったん故郷^{きゆう}の揚州に帰り、それから都に行こうとしたところで、蘇軾がすぐ近くの潤州にいると聞いて会いに行き、そのまま行動をともにした。孫洙が海州を去るに当たって、8月15日に景疏楼^{けいそろう}で送別の宴が開かれたのだが、その宴で妓女が詠んだという設定でこの詞は作

られたと読むことができるであろう)

水涵空、(水と涵^{ひた}しあう空)

山照市。(山と照らしあう町)

西漢二疏郷里。(漢の時代^その疏父子が帰ったのはこの郷里)

新白髪、(父子の新たに増えた白髪)

旧黄金。(父子が散財し尽くした黄金)

故人恩義深。(父子は昔なじみの人達に深い恩義を示したのです)

海東頭、(東の海のほとり)

山尽处。(ここで尽き果てる山)

自古客槎来去。(古来、旅人がここから漕ぎ去ったという様^{いかだ})

槎有信、(槎には皆からの手紙)

赴秋期。(旅立つのは秋のこの時期)

使君行不帰。(知事殿は去ってもう帰らないのでしょうか)

(「疏父子(原詞は二疏^{にそ})」とあるのは漢の時代^{そこう}の疏広とその兄の子の疏受^{そじゅ}。海州の出身で、2人とも優れた業績によって朝廷の高位に昇ると、2人揃ってさっと引退して郷里に帰った。そして、人々を招いて酒宴を開き、財産を惜しみなく郷里のために使った。「二疏」の引退は官僚の身の処し方として一つの理想型とされ、詞の前半はそのことを歌っている。景疏楼の名はその二疏にちなむ。海州は元来帰ってくるべき土地

であるのに、そこから逆に去ってしまう知事との別れを妓女が悲しむというのが詞の後半。知事が乗った槎を見送る妓女の想いは、すなわち孫洙の乗る船を見送る蘇軾の想いである)

■永遇楽

楚州から東に進んだ蘇軾は大陸の縁近くを北上し、前の詞にあった海州かいしゅうに立ち寄った。11月15日に海州知事とともに景疏楼けいそろうに登り、ちょうど3カ月前にそこで送別の宴が催された孫洙そんしゅのことを想ってこの詞を作った。

(旧暦で15日は満月である。かつて景疏楼で孫洙との別れを惜しんだ妓女が、同じ満月の下で悲しんでいるという設定でこの詞は詠まれているのだろう)

長憶別時、(長く憶いつづけるのは別れたあの時)

景疎楼上、(景疎楼の上)

明月如水。(水のようにあたりをひたしていた明るい月)

美酒清歌、(美しい酒と清らかな歌)

留連不住、(それでも引き留められず)

月隨人千里。(行く人とともに千里の彼方に随うのは月の光だけ)

別来三度、(別れてから三度)

孤光又滿、(また満ちる孤独の光)

冷落共誰同醉。(寂しくも共に酔うのは誰と)

捲珠簾、(捲き上げる^{すたれ}簾)

凄然顧影、(しみじみと顧みる私の影)

共伊到明無寐。(月とともに明るくなるまで眠らずにいるのです)

今朝有客、(今朝の旅人)

来従睢上、(来たのは睢河^{すい が}のほとりから)

能道使君深意。(よくぞ言ってくれました知事様の深い^{こころ}お意)

憑仗清淮、(あてにするのは清らかな^{わい が}淮河の流れ)

分明到海、(きつときつと到るのです海に)

中有相思淚。(その中にある知事様が思ってたさる涙)

而今何在、(そしていまいるのはどこ)

西垣清禁、(禁中の西の御殿)

夜永露華侵被。(夜は永く、輝く露が湿らす夜具)

此時看、(その時に看るのは)

回廊曉月、(回廊にかかる暁の月)

也應暗記。(きつと暗^{ひそか おぼ}に覚えていてくれることでしょう)

(詞の後半にある「今朝の旅人」とは蘇軾のことであろう。妓女を想う孫洙の心を蘇軾が伝えにきたという趣向なのである。友情を男女の情愛に擬して詩歌に詠むのは決して珍しいことではない。自由恋愛が許されなかった旧い中国においては、男女の恋

を大っぴらに歌えない代わりに、男同士の友情を濃密に歌ったという説がある)

■次韻陳海州書懷

景疏楼^{けい そ ろう}と一緒に登った海州^{かい}の知事^{ちん}は陳という人(名は不明)で、かつて蘇軾の故郷である眉州^びの知事を務めたこともあった。その陳知事が、疏父子のような隱退^{おも}に憧れる懷いを記した詩を示したので、それに次韻した。

暗くわだかまるあの山は、
遙か東^{そう}の蒼梧^ごの海から流れ着いたものだとか。
海上を眺めやると、
仙人^{ほうらいどう}が住む蓬萊島^{ほうじょうどう}や方丈島は見えるのやら見えぬのやら。
それらの島では草も木も全てが仙薬になるというので、
妻子を棄てて海辺のこの町に逃れてきた人がかつていたという。
私達はといえば、
風雅に遊ぼうという志をいまだに成就できずにいる。
昔馴染同士でこうして会って、
互いに虚しく顔を見合わせている。
酒が醒めると、
故郷で過ごした子供のころのことがしきりと思い出される。

まことに残念なのは、

おうきょう 王喬の二羽のけり鳧にすがりついて彼方の世界に飛び去れないことだ。

(昔の中国の人にとって海の彼方は神秘の世界で、蓬莱島やら方丈島やら、仙人が住む島があると想像していた。そうした島に海州から渡ろうとした者も実際にいた。遙か遠くの海(蒼梧の海)から、プレートテクトニクスではないけれど、流れ着いたといわれる山が海州の近くにあった。「王喬の二羽の鳧」は第1章58ページの詩で見ている。そのときは、仙人の世界からのこの俗世に出てきた王喬の行為を揶揄するような口ぶりだった。この詩でも、二羽の鳧にすがりついて仙界に飛んで行きたいと、真剣に願っているわけではなく、退隱ということを軽いノリで言っているだけなのではありませんかと、問いかけているかのようである)

■次韻陳海州乗槎亭

同じく海州で、かい陳知事ちんの乗槎亭じょう さ ていの詩に次韻した。「乗槎」とはいかだ槎に乗ること。槎に乗って行こうとするのは東の海の向こうにあるとされる仙界であろう。

人間界の出来事には涯はてがなく、

人の一生には涯がある。

故郷かんこうに帰り、漢江に筏を浮かべて釣りでもしようか、

それとも、

荒れる海の筏の上でも泰然自若としていたかの謝安^{しゃあん}を見習うのがよいのか。

世を逃れ去った後にも民衆から慕われ続けるようでありたいと思っても、
なかなかそういうことはないものだ。

乗槎亭から眺めると、

日が昇るとともに、紅い波が翠^{みどり}の山へと寄せ、

潮^{うしほ}がくるとともに、白い浪が青い沙の上で巻く。

この美景と、そして陳知事との清らかな会話は二つとも非常に結構なもので、

いつの間にか、帰りは、馬の鞍に月の光を浴びながらということになった。

(漢江^{しよく}は蜀から流れ出る川で、そのことは何度が詩に詠まれていた。謝安^{しん}は晋の時代
の人で、第2章69ページの詩にも登場し、いかなることに動じなかったという逸話
が多数残っている)

■沁園春

この詞には「密州^{みつ}に赴くに、朝早く馬上で弟に寄せた」と注記がある。

孤館燈青、(ぼつねんと旅館の青い灯火)

野店鷄号、(野辺の店からの鶏の声)

旅枕夢殘。(旅の枕で終わったばかりの夢)

漸月華收練、(次第に収まりつつある月の白い光)

晨霜耿耿、(きらきらと朝の霜)

雲山摘錦、(山に錦を巻く雲)

朝露漙漙、(まるまるとした朝の露)

世路無窮、(窮まるところのない世間の路)

劳生有限、(労苦多く限りある人生)

似此区区長鮮飲。(ちまちまとしてばかりいて少ない飲び)

微吟罷、(もう罷めようか微かに吟じていた詞)

憑征鞍無語、(旅の鞍の上で語らずにいるのは)

往事千端。(過ぎ去った千の事ごと)

当時共客長安。(ともに都に滞在したあの当時)

似二陸初来俱少年。(昔の有名な陸兄弟に似た少年)

有筆頭千字、(筆の先から溢れる千の文字)

胸中万卷、(胸の内には万の書物)

致君堯舜、(我が君のために為そう 堯や舜の治世)

此事何難。(何の難しくもないと思えたこの事)

用舍由時、(用いられるか捨てられるかは時による)

行藏在我、(出るか隠れるかは我による)

袖手何妨閑処看。(懐手をして閑を決め込むのも悪くはないのか)

身長健、(長く健やかな身)

但優游卒歲、(よいのはゆるゆると遊んで終える寿命)

且斗樽前。(ただ一斗樽の前で)

(詞の前半は早朝の旅のスケッチ。詞の後半の最初に原文で「長安^{ちょうあん}」とあるのは都(開封^{かいほう})のこと。父に連れられて科挙の受験のために上京したころのことを回想して、自分たちは晋の時代^{しん}の陸機^{りくき}、陸雲兄弟^{りくうん}のようであったろうかといっている。陸兄弟は若くして当時の都洛陽^{らくよう}に上ると、文才をもって一躍天下に名を轟かせた。宋の世の「陸兄弟」は、いまを古代の聖天子の堯や舜の時代に近づけることだってできるくらいの気構えていたと、(かなり誇張して)自分たち兄弟の輝かしい日々を回顧している。しかし、現実には政争に敗れ、改革の進む政治情勢の中で地方官として不本意な日々を送るのを余儀なくされている。これまでも見たように、弟に向かっては心の底にあるものを率直に言葉にし示している。蘇軾^{ちんじょう}は、杭州で陳襄^{ちんじょう}に向かって送別の詞を多数作ってから、(現存する作品を見る限りでは)ここ数カ月間は詩よりも多くの詞を作ってきた。そして、弟に向けたこの作品をもって、独自の詞の世界を切り開いて新たな段階に入ったとみてよいのだろう。何度も記したように、詞は元来は酒宴の場で歌われる艶っぽいものであったから、自身のこのような(恋愛感情ではない)心情を吐露する作品はそれ以前にはまず見られないものであった)

■上韓丞相論災傷手実書

蘇軾^{みつ}は12月3日に密州に着任すると、前の詞で覗かせた弱気なところなど全くないかのように、ただちに知事としての仕事に取り組み、密州が現在抱える問題点の掌握^{かんこう}に努め、その年のうちに宰相の韓絳^{かんこう}に向けて

意見書を提出した。その冒頭部分を訳す。

密州に至って二十日余り、ここの民は鈍くさく、よそからくる人は稀で、私のような真に愚拙な者が長くいるには結構な場所です。しかし、災害の影響が残り、民衆は疲弊しています。

初めてこの州の境に入りましたとき、蝗^{いなご}をくるんで棄てた藁が道の左側にずっと並び、二百余里にわたって続いていました。一体どれだけの蝗を捕殺したのかと役人に尋ねますと、およそ三万斛^{こく}との答えでした。その一方で、役人が言うには、蝗は災いをもたらさなかったと。はなはだしくは、民のために草を除いたとまで言う者がいました。蝗がはたして民のために草を除いてくれるのなら、民は蝗がきてくれるのを祝うことがあっても、どうしてこれほどたくさん殺したりするでしょうか。

私は、杭州^{こう}にいて、蝗が西北より飛来するのを目の当たりしました。その音は大河の波濤が乱れるのにも似て、太陽も月も覆い隠し、蝗が地上に下ると、草木も覆ってしまって、たまたま落ちたところは見渡す限り何もかもなくなってしまうのでした。その蝗は都の東方にいた集団が南に及んだものでありました。

同じ蝗でありながら、都の東方では害をなさずに、南方では害をなしたというのは、南の人々が偽りを言っているからなのでしょう。

地方の災害の状況については詳細な報告が朝廷に上がっていることでしょう。宰相殿はどうかそれらを少しく信用していただきたいのです。……(後略)……

(杭州からは地方の実情をそのまま報告したのに、密州からは偽りの報告がなされていたのではないかと、蘇軾は指摘しているのである。朝廷に上がってくるのは朝廷が聞きたい情報だけになっているとしたら、蘇軾が神宗皇帝に差し出した意見書で危惧していた(第3章 55 ページ) その通りになってしまったことを意味するであろう。つまり、改革政治はすこぶる順調に進んでいると中央に報告すると受けがよくて自身の出世につながるので、蝗の害などがあっては困るのだ)

■論河北京東盜賊状

上の意見書では密州^{みつ}周辺の自然災害を中心に論じていたが、この報告書では、密州周辺で盗賊が増えている現状を分析し、その対策について提案している。これも 12 月中に朝廷に出されているところを見ると、蘇軾には相応の行政能力があり、かつ勤勉であったと見てよいだろう。報告書のごく一部を訳す。

わたくし　　こうが　　かほく　　けいとう
臣が(黄河の北の)河北地方と(都の東側の)京東地方の現状を見ますに、
ここのところ蝗害と旱害が並んで起こり、さらには盗賊の勢いがますます盛んになっています。いまでも雨が降らず、秋から冬に至っても、数千里四方で麦が成長しておりません。心密かに、明年の春と夏の境のころには、いまよりも甚だしい患いとなっているのではないかと心配しております。このことについて、愚かでありながらも陳述して、万

に一つでも国政を補うなうことができればと存じます。

謹しんで按じますに、(都の北東に当たる)山東^{さんとう}地方は遠い昔から、国家の腹心根本の地でありまして……(中略)……陛下が即位されてより、黄河の北側では北方の民が流動してきたり、天災が起こったりすることでは他の地方よりもはなはだしく、ここ五、六年の間はこうしたことを全く防げずにいます。しかしながら、都の東側の地域では何事も起こっていないとされ、その民は富みかつ安逸に暮らしているので、黄河の北側で何かあったときにも物資を十分に送れるとされてきました。現実には、都の東側の地域でも近年は公私ともに欠乏し、民はお上からの命令に答えられなくなっています。

いま民が飢饉にさらされ流離していることに対しては、国が備蓄している食糧を放出して物価を安定させ、余裕のある民間人にも協力させようということだけが議論されています。盗賊が横行していることに対しては、お上に告げ知らせる者に褒美を与え、厳しく掴まえるということだけが議論されています。そのようなことで効果が上がっているのを見ることはできません。……(中略)……

いま一般の庶民は皆食糧がないために、法を犯して盗みを働き、ついには死刑にもなってしまっています。法を畏れて盗みをしなければ餓えて死ぬしかないとしたら、刑死するか飢え死にするか、いずれにしても等しく死があるだけです。目の前の飢えと、この先の刑死とでは、身にふり

かかる災いに早いと遅いとの違いがあります。盗賊となる理由がそこにあります。盗賊を一日に百人殺したところで、その勢いはやむことはないのです。……（中略）……

わたくし
臣が治める密州は今年の秋から日照りによって、麦を植えても育ちません。十月十三日には雪が降るほどに地が冷え、麦は成長するのが難しく、例年に比べて十分の二ないし三程度しか育っていません。河北、京東ではどこも同様です。……（中略）……これでいつも通りに夏に徴税を行ったならば、民は必ず土地から逃げるででありましょう。逃げ去って、どこかに豊作の地があればまだしも、数千里にわたって麦が稔らない現状でどこに行ったらよいのでしょうか。善良の民が挙って盗賊となってしまうのを恐れます。目のある者なら地に麦がないことは誰が見てもわかります。耳のある者なら民の困窮は誰が聞いてもわかります。朝廷を欺く者でなければ、どうして座視して何もしていないでいるということができましょうか。

河北、京東では塩の国家管理が厳重になって以来、民衆は非常に困っています。……（中略）……河北、京東では塩の専売によってかつて国家が得ていた税額は三十三万二千余貫でありました。熙寧六年には四十九万九千余貫に、七年には四十三万五千余貫と増えました。一方で、法による刑罰は年々厳しくなり、多数の者が捕えられています。庶民は自分のための塩を買えずに困っています。……（中略）……ここ数年盗賊が増え

たために、密州において塩からの税収が去年一年は二万貫の増額になった一方で、盗賊を捕えるための費用として一万一千余貫を費やし、それでも掴まえきれない盗賊がたくさんいます。これらを比較すれば、利害得失がどこにあるのか明らかとなりましょう。……（後略）……

（改革の眼目は、国家経済を国が全面的に管理し、税収を増やし、同時に経済規模を拡大することにあった。そのなかで塩の専売はより徹底され、闇取引を一掃しようとした。塩は必需品であるから、多くの庶民は違法と知りつつも、専売品よりも安い闇の塩を買っていた。闇のルートなくなると、第4章102ページで見たように、庶民はもはや塩が買えなくなってしまう。そして、闇商人は一段進んで盗賊となり、そこに『水滸伝』^{すいこでん}の世界が生まれてくることにもなる）

（改革に反対した人の多くが、国は民と利益の取り合いをすべきではないと（道徳的見地から）主張した。蘇軾はこの意見書で、具体的な数字を挙げて、経費の損得勘定からしても、国家による統制をあまり厳しくし過ぎるのは得策ではないと述べている。国家による統制を嫌う裏側には、実は士大夫層が極めて利権^{したいふ}に近いところにいて、自分達の懐に入ってくる可能性のあるものを、全て国家に吸い取られては困るという、大っぴらには言えない事情もあった。蘇軾が官僚としての権限を使って私欲を満たしたという事実は確認されていないが、先祖が商人であったことから、国家の介入によって商人の自由な活動が阻害されるのを厭う気持ちは強かったと推測される）

■王莽

おうもう 王莽は皇位を篡奪して前漢を亡ぼしたことで、儒学の伝統において極めて評判の悪い人物。蘇軾は歴史上の人物や事件を主題にした詩詞をよく詠んだが、その多くが現代に対する反省ないし批判を眼目としている。

漢朝は天下の治め方を知らなかったのだろう。

とかく新しい事をした者が功名を手に入れた。

ある田舎の役人が朝廷にこう報告した。

「夢に天からの使者を見まして、その者が言いますには——

〈王莽はまことに傑物である。

わしの言葉が真実である証拠に、

汝の庭に深さ百尺の新しい井戸を掘っておこう〉

朝、起きてみると、確かに井戸がございました」

王莽は西に版図を広げようと意図し、

天下に優れた技を持つ者を募った。

すると、一日に千里を飛ぶという者が現れて、千金を獲得した。

ところが、その者が大きな翼を付けて飛んで見せたところ、

数百歩で落ちてしまった。

おうあんせき
(この詩は王安石を王莽になぞらえて批判したと一般的には解釈されている。前半は、王安石が数多の重臣を抜いて宰相になったこと、朝廷に偽の情報が上がっていること

をいい、後半は、王安石が改革に担い手となる人材を十分に吟味せずに集めたことをいうのであろう。あるいは、本章 56 ページで見ると、西方で軍事行動を構える現在の方針への批判でもあるのだろう)

■董卓

董卓とうたく ごかんは後漢末期に政治的大混乱をもたらした人物として、やはり評判がはなはだ悪い。董卓は横暴を窮めたあげく、身边警護りよふを任せていた呂布に殺されてしまう。

董卓は、初めは儒者を用いるよう勧められてそうしたところ、その人達が董卓の暴政に一斉に反発したので、「何事ぞ」とわめいた。

董卓は自分の見識が疑われるような指摘をされると、

「天下にどうせ利口者などはいない」と極論を言い放った。

確かに言った通りで、

自分の最も身近なところに裏切り者の呂布がいることにさえ、気付かないくらいの利口者だったのである。

(改革を主導した王安石おうあんせきは、第4章 155 ページに記したような経緯でこの年の5月に宰相を辞め、神宗皇帝しんそうは、韓絳かんこうを宰相に、呂惠卿りょけいけいを副宰相にして改革を続行させた。その後の朝廷内の動きから、蘇軾は改革政治が変質しつつあるのを見て取っていたの

だろう。王安石は理論家で、改革の実際上の運営は腹心の呂恵卿に全面的に依拠した。呂恵卿は政治的抗争を好み、非改革派を排除して改革を急テンポで進めることに成功した。王安石が宰相を辞めると、呂恵卿は自身が権力を掌握する好機だと見て、王安石が都に復帰できなくなるような工作を進めた。この詩にある呂布がまさに呂恵卿なのである)

■虎児

弟の蘇轍^{そてつ}に第三子の虎児^{こじ とら}(寅年にちなんだ幼名)が生まれ、この詩を詠んだ。

(この詩は、弟が卯年であることから、「兎がどうして虎を生むのか」というジョークをベースに組み立てられている。それを導き出すために「老蚌生珠^{ろうぼうせいしゅ}」の故事が最初に置かれている。「蚌」は「はまぐり」と読むこともあるが、蛤^{はまぐり}ではなく「どぶがい」であるらしい。いずれにしても、貝から真珠^{めいしゅ}(明珠)が生まれる意外性を、平凡な親から非凡な子が生まれる譬えとしている)

古くから、老いた蚌^{どぶがい}が明珠^{しんじゅ}を生むということなら聞いているけれど、老いた兎が虎を生むとは知らなかった。

兎が自分で言うには、

「おれっちは月におるものでして、

速く走る馬ではなく、蟾蜍^{ひきがえる}に騎乗します。

蟾蜍というやつはのったりのったりと蛙跳びで、
すいすいとは進まんです」

だからなのか、君はぱっとしない地位のままで、
白い髭ばかりが長くなってしまったのだろう。

虎は兎とはまるで違い、

己が駿足で癡猛である上に、

くまかいじゅう 黄 熊 を顎で使い、どらかいじゅう 黒 豹 に駕籠を担がせるのだ。

世間の子は不祥を避けるために、

たん さ 丹砂とかし じゃ 紫麝といったまじない薬を塗るものだが、

虎にはそんな必要はなく、

ぎろりとひとにらみするだけで、

妖怪狐だって百歩飛び退いて走ってしまう。

それでも妖怪狐は、

「わしには知恵がある」

と、強がりを言うかも知れないが、

虎は牙を動かすまでもなく、

そんな連中はひと呑みしてしまうのだ。

(知人の子の生後三日の祝宴で笑いを取った詞 (第4章 194 ページ) を念頭に置き、
弟も笑わせてやろうとこの詩を作ったのだろう。先の詞では熊、牛、犀といった動物
を用いたので、ここでは蛙、兎、虎、蟾蜍、熊、豹、狐とたくさんの動物を並べ、や

はり大きな動物をひと呑みにしてしまうというイメージで、子がたくましく育つようにという思いを表現している)

■鉄溝行贈喬太傅

密州の州庁は諸城県にあり、諸城の町の北東に、北に向かって流れる鉄溝水という川がある。喬敘(字は禹功)とともにその川に行き、この詩を贈った。蘇軾はどこに行ってもすぐに詩友ができるようだ。

(宋代の地方の行政区分は、「路 - 州 - 県」の3段階構えになっていて、蘇軾のころには、宋は23の路に区分され、300弱の州、1200余りの県があった(州には、府、軍、監と呼ばれるところもあり、都は開封府、蘇軾の最初の任地は鳳翔府だった)。密州は京東東路に属し、密州のもとに諸城、安丘、莒、高密の4県があった。この詩の喬敘は諸城県の役人で、後の詩に見る段繹は京東東路の役人である)

町の東の丘や農地が何に似るかというど、
風が吹いて海の波が高くなったり低くなったり――。
知事さんは、とにかく気分が悪くて何もできやしないと、
馬に乗って町の中から走り出て、
鉄溝の水のあたりへとやってきた。
川の水は浅くて船を浮かべることができない。
貴君と二人で、昔のある師弟がそうしたように、

釣竿をここに並べてみよう。

ここに魚がいるかいはいかは問題ではない。

その師弟のように、

我が憂いをここで少しばかり詩に写そうと思うのだ。

あの小さな村のあの小さな店には何もなさそうだが、

酒さえあれば、思いのほどを言い合えるだろう。

そろりそろりと山に日が落ちて行くのは、

金の盆が斜めに傾くかのようだ。

我等のこの白髪頭に載っている帽子なんぞは、

いっそひっくり返しにしてやったらよいのだ。

貴公は言う――

「若いときに従軍しまして、

軽い毛衣も速い馬もまったくありませんでしたが、

弓を手にし^や箭を腰に付け、

南山の下で獣たちを追い掛けたものです。

こうやって老いて貴公とともに酔っ払い、

不景気面で、夜になってから帰ったならば、

漢の時代の李^り将軍が引退後には門衛にさえも馬鹿にされましたように、

町の人たちを驚かせる勢いなんぞはこれっばかりもありません」

私は言う――

「来年は、その李將軍が再び大いに用いられたように、

貴公も志をきっと得るであります。

そのときに、李將軍が門衛を罰して憂さ晴らしをしたようなことは、

貴公は決してしないでしょ」

（「思いのほどを言い合」うと、ここでは平凡に訳したが、原文は「狂言を發せんと欲す」で、普通は黙っているべきことも言葉を飾らずに言ってしまうという意味であろう。李將軍とは李広^{りこう}のことで、官職から離れていた間に町の門を守る兵士に馬鹿され、後に再び將軍の地位に返り咲いたときにその兵士に復讐した。蘇軾はそれはつまらない行為だと見ていた。喬紱がどのような事情で不本意な境遇に置かれていたのかわからないが、そういう人をすぐに友人とするところが蘇軾らしい。この詩の終わりで、きっと志を得ると励ましたのは、後で見るように現実のものになる）

■雪後書北台壁二首

密州^{みつ}の官舎の北側にある見晴らしのよい建物^{うてな}（台）の壁に書いた二首の詩。

其の一

黄昏^{たそがれ}どきは、しとしとと雨が降っていた。

夜になると、風はなく、静けさが増し、次第に寒さが厳しくなり、

衾^{かけふとん}や柵^{ねまき}が水をかけたような冷たさになった。

まさかそのときすでに雪が降り積もっていたとは。

真夜中に、軒端のあたりで冷え冷えとした音がし、

夜明け前に、書院の帷とばりにほんのりと明かりが訪れた。

起きて、雪をはらって北台ほくだいに登り、

馬耳山ばじさんを見ると、

二つの尖った耳だけが、まだ雪に埋め尽くされずに飛び出ている。

(馬耳山は諸城県の南にあり、山頂にある二つの尖った巖が馬の耳のように見えるところからその名がある)

其の二

町の上に出てきた朝日を受けて、鴉が翼を翻すと、

道は早くも泥んこ、車輪がのめり込んでしまう。

寒さは、玉楼ぎょくろう(両肩)に氷が張るほど、

ぞくぞくとして肌に粟が立つ。

雪からの反射光が眩く揺れて、

ちらちらと銀海ぎんかい(両眼)に花が生じる。

この雪に驚かされて、蝗どもは地中深くに入ったであろう。

そして、この雪のお蔭で、

麦畑には雲を連ねるような豊かな稔りのときがくることだろう。

かつて氷の柱をみごとに詩に詠んだ人がいた。

それを吟じつつ、

自分の詩の力が、年齢とともに後退してきたのを嘆く

（「玉楼」「銀海」の語は、宋代の人々にとっても難解だったようで、道教の經典に見られる特殊な用語で両肩、両眼を意味するというのは一つの解釈で、異論もある）

（雪は蝗を退治し、麦の生育を促すので豊年の吉兆とされた。氷柱^{ひょうちゅう}を詩に詠んだのは唐の劉又^{りゅう さ}という人。温暖な杭州から寒さの厳しい密州^{こう}にきて、新たな土地にまだ慣れないことを、詩の力が後退したと表現したのだろう）

■除夜病中贈段屯田

おみそか^{おみそか} 大晦日にこの詩を詠んで段繹^{だんえき}（字は釈之^{あざな しゃく し}）に贈った。段繹は前述の通^{けいとうとう ろ}り京東東路の役人。

三十九歳にしてすでにへとへと――

己の生命を疲れさせて人生の半分以上を超過した。

昔、白楽天^{はくらくてん}が、

斜めになってきた大晦日の陽射しのもとで、

我が三十九歳もこれで終わると嘆いたのも、

こういうことであつたかと実感させられる。

まだ今年はほんの一本の線ばかりは残っているのだが、

もはやそれを玩ぶほどはない。

起きて無理にも酒を手にしようとして、
古い友人は雲か雨のように散り散りになってしまっている。
何もないこの部屋で親しい友となっているのは、
次々に続く病気だけである。
冷たく寂しげな燈火と向き合って、
寒い夜はいつ終わるとも知れない。
下僕は倦み疲れて頭を屏風につけて居眠りをし、
腹をすかせたむささび鼯がやってきて空っぽの机を嗅ぐ。
ここ数日間、門を閉ざして臥せっていたので、
白い髪が枯れ草のようにぼさぼさに乱れている。
使いの者がきたとの報せに、
よろよろとたらい盥のところにまで行き、
手を洗い、髪をくしけず梳ってから迎え入れると、
貴公からの手紙がもたらされ、ほっと安堵するのは、
往来が間遠になっていたけれど、
貴公はそれを変に思わずにいてくれたとわかったからだ。
ちゅうれつ 忠烈と おくりな 諡 された だんしゅうじつ 唐代の段秀実——
貴公はその子孫であるから、
気高い義心はきんせき金石をも貫き、
権勢を誇る悪党どもをきっと撃つべく、

いささかも衰えたり怖じ気づいたりなどしない。

私はといえば――

この人生は何に似るのか、

暗い塵に埋もれた灰の中の炭か。

もはや燃え上がることがないのなら、

郷里に帰って田に暮らすと決めるべきである。

この町をいつまでも旅の宿りとしていようとは思わない。

鳥は一本の枝さえあれば暖かく暮らせる巢を作れるのだ。

昔の賢人は退官後に三本の小道を作って友を招く道とした。

願うのは、貴公がその小道をたどって我が一本の枝にきて、

長く逗留して^{わら}榮って話し合うことだ。

（この詩によれば、蘇軾は年末に体調を崩したようだ。^{こう}杭州からの長い移動の疲れと環境の大きな変化、加えて仕事上の困難によるのだろうか。なお、蘇軾の生涯は種々の史料から詳細に復元されていて、この年に初めて痔疾を患ったというのが、ここであう「病」はそれを指すのではないだろう）

■喬太博見和復次韻答之

前の詩に喬^{きょうじょ}敘が和し、それにまた蘇軾が和した。

（前の詩は 16 カ所で韻を踏んでいて、詩の末尾に置かれた韻は「榮」で、前の詩ではそれを「笑う」という意味で使っていた。この詩では「輝く」という意味で使って

いる（^{さんさん}榮は^{らん}燦の燦と通用する））。

百年は三万六千日、

そのうち半分を老いや病が占めてしまう。

しかも、^{ゆう}憂と^{らん}榮が交互にあって、歌い笑うと悲しみ嘆くのが雑ざり合う。

我々は、人生が突如ひっくり返るのも知らずにいて、

運命の神にただ玩ばれる。

万事が一瞬にして風や雨のように散り散りになるありさまは、

笑ってしまうしかない。

この^{ことわり}理を早く知ってからは、

私は子供同士の仲間から離れ、

世間の日々の出来事に関心を寄せる暇などなく、

^{ユートピア}無何有之郷に遊ぶことを想うようになった。

貴公を煩わせるのは恥ずかしいが、

私の混乱した人生をどうか整理していただきたい。

ただし、私は非才でしかも多病であるから、

私を評価するにはこの二点も勘案してもらわなければならない。

貴公は、譬えていえば、

^{ぶん}周の文王の^{おたまや}廟で祭祀に使われる器のように清らかで、

貴公が髭をちょいと震わせただけで、役人たちはぴしと姿勢を改め、

一国の緩^{ルーズ}な風俗をもがらりと変えてしまう。

鳥は高く上がり過ぎると強い風に退かされてしまうものだが、

貴公はそのようなことはなく、

雑魚どもは貴公と並んで進もうとしてもとても及ばないと恥入るしかない。

貴公の議論のほんのおこぼれを聞くだけでも、

意気地のない者どもも勇気を与えられて発奮する。

名剣は炉の炭の力を借りることなく自ら躍り出るというが、

貴公がまさにそれだ。

朝は南の国で秣^{まぐさ}を食らっていた馬が、

夕方にはもう北の国の旅宿を通り過ぎてしまう勢いがある。

いつまでもぬくぬくと同じところに留まってなどいないのだ。

そこで、昔の賢人のように、

私は牛の角を叩きつつ、

君のためにこのように歌おうではないか——

「正しくない世間から離れ、

これから行くところ、

ああ、南山^{なんざん}は粲^{かがや}いている」

（喬紱は先の詩にあったように不本意な境遇に置かれていた。南山は、具体的には長

安の南方に聳える終南山^{しゅうなん}を指すが、世に容れられない高潔な人間が最後に入って行く

神聖な山というイメージがある)

■二公再和亦再答之

きょうじょ 喬紱に返した前の詩に、喬紱と段繹^{だんえき}の2人がまた和したので、さらにまた和してこの詩を返した。

(16個もの同じ韻を繰り返し使った最後のこの詩が最もこなれていて、再三和したものととは思えないとある人は評している。末尾の韻の「粲」はこの詩では王粲^{おうさん}という人名で用いている。王粲は戦乱に迫われて故郷を離れ、身を寄せた土地で高楼に登り、故郷を偲ぶ^{とうろう ふ}「登楼の賦」を作った。それ以来「王粲」あるいは「登楼」は「望郷の歌」の代名詞のようになった)

鶏は朝になろうとするのを知って鳴き、

鶴は夜半になろうとするのを知って鳴く。

同じように、

病に臥せる老いた旅人は、年が改まろうとするのを知って嘆く。

光陰は石を叩くと飛び出る火花と同じ――

眼の前を一瞬過ぎたら、もう玩ぶことはできない。

親しい友も手に握った砂のようなもの――

手を開けばたちまちばらばらになってしまう。

旅から旅へと独り行く私は、

寂しくも伴う友もない身だと、自分で自分を笑うしかない。

しん きょう ち めい
晋の世の喬智明は神のごとき智者といわれ、常に高い評判を得ていた。

かん だんけい
漢の世の段頰は賢い將軍といわれ、机に埋もれての事務もこなした。

現代の喬智明、段頰ともいうべき二君と、

夜たけなわに至るまで燈火を乱して笑い合う。

食べ足らないうちに皿はすでにからつぽになり、

酒は薄くて杯を洗うらいのことしかできない。

私が無作法でのろくさいのをどうか許していただきたい。

ここにはたおやかな美人のたま珠をころがすような歌声はないが、

幸いにも我等三人には縦横に動く舌があるのだから、

剣のような鋭い議論でたわけた連中の目を覚まさせようではないか。

二人の豪傑は、

湿った炭が火を暗くして埋もれているように、いまは下位に沈んでいる。

昔むかし、占いを研究して書齋の内で年老いた学者がいたけれど、

二君は決してそれと同じにはならないであろう。

いつか二君にも富貴が迫ってくるだろうが、

富貴というものには身を焦がしてしまう力があるので、

手をぬくめる程度でやめておくのがよいだろう。

そして、いつも故郷に帰ることを思って、

楼に登って王粲の賦をおうさん唱えるようにしていただきたい。

(大晦日の詩に和して、それにまた和すということを繰り返したので、これら一連の詩は実際には1月になってから詠まれたのだろう。それにしても、蘇軾は詩を作るのが異様に速いからよいとしても、あとの2人は詩作に熱中して仕事はちゃんとやっていたのかと心配になる)

■送段屯田分得于字

き ねい
熙寧8 (1075) 年、蘇軾 40 歳。

題を見ると段繹だんえきを見送る詩なのだが、内容は送別と関係しない。ここに登場する趙昶ちようちよう (諸城県の知事)、趙杲卿ちようこうけい (密州みつの学校の教授) も、段繹きようじょや喬紱と同じく密州にきてから親しくなった友人である。

貴公 (段繹) は農業を興す仕事を授かっているのだから、
古代なら大夫たいふに相当する地位だ。

国家の仕事は決してないがしろにはできないと、
衣服が泥まみれになるのも厭わずに走り回り、
はなはだ身を疲れさせている。

喬 (紱) さんは鬚ひげを恐ろしげに長く二つに伸ばし、
趙 (昶) さんは天をも走る馬のように格好がよろしく、
趙 (杲卿) さんは世間ずれしない学者然としている。

この四人が野外で呑む楽しさは、町の中にはないものである。

四人は自分自身で酒の壺を携えて川辺を歩く。

昔むかしある知事さんが春を楽しもうと、

客人を舟に乗せて、それを村人に曳かせようとしたところ、

ある賢者が笏^{しやく}を取り出して水をかき、

自分たちの遊びのために農民の仕事を妨げてはならないと、戒めた。

そのようなことは、四人はもとより最初からわかっているのだ。

この私は、病みかつ老い、その上、迂闊な知事であるので、

がらんとした部屋で書物を読んで憂いを紛らせようとしている。

昔むかしある人は四十歳までには国家の重鎮になるぞと心に期したものの、

三十六歳でなお遠くかけ離れた地位にあったので、

「我がつむりがどの程度であるのか私は知らないものではない、

もう郷里に帰るべきなのだ」

と言った。

私はすでに四十歳——

人様に妙な具合に評判されるのを恐れて、

ぐずぐずしているのは実に愚かしいのではないだろうか。

（蘇軾は詩詞の中でしばしば官職から退くことを歌っている。さしあたって具体的にその計画があるわけではないので、詩詞の味わいをよくする調味料〈退隠ソース〉をかけて一丁あがりというようなものではなかろうかとの疑いも生じるだろう。恐らく、

海州の陳知事にはそのようなところがあったので、蘇軾はややたしなめるような詩を詠んだのだ（本章 5 ページ）。蘇軾は、国家と民衆に対して重い責任のある知事になって、国や民衆のためにと真剣に考えて行動すれば、いままで以上に厳しい葛藤のもとに置かれ、心身を消耗し（この詩の冒頭は蘇軾自身のことを歌っているかのようでもある）、精神の安定を取り戻すには、心の内に退隱のイメージをいつも宿しておく必要があったのではなかろうか）

■莫笑銀杯小答喬太博

改革に伴ってしばしば公費削減の指令が下り、そのことに関連して喬敘きょうじょに向かつて戯れの詩を作った。

陶淵明とうえんめいは小さな町の県令だったとき、

お上から賜った公田は二頃五十畝けい い ぼの広さ、

その全てに酒を作るための秫もちあわを植え、

食べるための秬うるちは植えなかった。

それによって、独り飲んで独り醒めるには十分な酒が得られた。

私はいま知事としていわゆる二千石せきの年俸で、

その中から年ごとに百石を費やして酒を醸すのでは、

客人を十分に酔わせることなどできるものではない。

銀の杯が小さいのも、どうか笑わないでほしい。

海辺の地域はこのところ日照りで窮迫し、もはや酒どころではない。

陶淵明ならさっさと衣をはらって郷里に帰ってしまうだろう。

そこで私は空想する――

河の神様に手紙を書いてお金を拝借し、

一万斛^{こく}を積載する船を酒でいっぱいにして、

郷里に向かいつつ貴公と楽しく飲み続けようではないか。

（漢の時代に郡の太守（長官）の年俸が二千石であったことから、「二千石」は地方の広域行政区の長官の代名詞となった。それで、蘇軾は自分の年俸は「二千石」であると歌ったが、宋代の州の知事は漢代の郡の太守に比べたら収入はずっと少なく、行政者として自由に裁量できる範囲はかなり限定されていた）

■蝶恋花

この詞には「密州^{みつ}の上元^{じょうげん}」という注記がある。つまり1月15日の上元の日にした詞である。

（上元の夜に多数の灯籠を飾り、それを見物して歩くということは第4章90ページなどで見ている。この詞は前半で杭州の上元^{こう}を回顧し、後半で現在の心情を歌っている）

燈火錢塘三五夜。（杭州の灯籠、十五夜の月）

明月如霜、（霜のような、明るい月の光）

照見人如画。(画のような、灯笼に照らされた人々)

帳底吹笙香吐麝、(帳とばりの内で吹かれる笙ふえ、流れ出る麝香じゃこうのかおり)

此般風味応無価。(これらの風味あたいは価を付けられるものではありません)

寂莫山城人老也。(山に囲まれた寂しい町で老いてゆく人)

撃鼓吹簫、(撃たれる太鼓、吹かれる簫しょう)

乍入農桑社。(始まったのは豊作を祈る村の神様の祭り)

火冷燈希霜露下、(火が消えかかって、灯笼にうっすら降り下る霜)

昏昏雪意雲垂野。(雪を含んだ雲が暗く暗く野に垂れこめます)

■江神子

この詞には「正月二十日、夢を記す」と注記がある。前の詞から5日後に作った詞。

十年生死兩茫茫。(生きる者も死する者も遥かに遠くなった十年の歲月)

不思量。(ぼんやりとするばかり)

自難忘。(忘れられもしない)

千里孤墳。(千里の彼方にぼつねんとある墓)

無処話淒涼。(どのように話したらよいのかこのもの悲しさ)

縱使相逢応不識、(たとえ君に会えたとしても、「えっ、あなたは誰なの」)

塵满面、(僕の顔に満ちるのは人生の塵)

鬢如霜。(鬢はすでに真白なのです)

夜来幽夢忽還郷。(タベ僕は故郷に帰っていた、あれは夢)

小軒窓。(小さな部屋の窓辺)

正梳妝。(君は化粧の最中)

相顧無言、(振り返って、ただ無言)

惟有淚千行。(ぼろぼろと落した無数の涙)

料得年年腸斷、(これからはずっと毎年、心を痛めるのは)

明月夜、(昨夜と同じように明るい月の下)

短松岡。(まだ松が短いかの丘で)

(夢に見たのは 10 年前に亡くなった妻の王弗^{おうふつ}。父と妻を葬った墓地に自ら松を植えたことは第 3 章 77 ページで見た。王弗について初めて歌ったのがこの詞。密州に着任し、年末から体調不良が続き、いまここに王弗がいてくれたらと思うことがあって、それが夢につながり、そしてそのことを詞として書き残しておこうということになったのだろう)

■出城送客不及歩至溪上二首

他所からきた人が町を去り、何かの都合で別れを告げることができなかった。その後を追ったが、その人に会えないまま溪流のほとりに至って

詠んだ詩。

其の一

客人を送ろうと出たけれど、客人はすでに行ってしまった。
ならばと、花を尋ねようとしても、花はまだ開いていない。
町に帰る気になれずに水辺へときて、
ぶらぶら歩いていると、
土地の老人が声をかけてきた。

「州知事様はいまどこにおられますようかなあ。

今年は天候がなかなかよろしいので、
きっと麦がたっぷり収穫できましよう、
お伝えいただきたいものです」

其の二

はくらくてん
白楽天はこう言った――

「春はわずかに九十日、

その間に口を開いて笑わずにいるのは癡^しれ者だ」

春になってすでに六十日、

私はいったいいつ口を開いて笑ったのだろうか。

昔からいうように、

春は後ろ姿を見せて堂々^{そっけな}去ってしまう。

まさしくその通りになるのだろう。

これも昔からいうように、

自然の風光はこちらに姿を見せて得々^{ことさら}にやってくる。

まさしくその通りである。

私は旅に倦み老いつつある。

陶淵明^{とうえんめい}は官を去って廬山^{ろさん}を望む郷里に帰った。

いま東を見れば、

ここにも廬山という名のうずだかい緑の山がある。

ごく小さな山だけれど、我が郷里^{がびさん}の峨眉山にも似ている。

(ふつうに廬山といえば、慧遠^{えおん}が東林寺^{とうりん}を建てた江西省九江市^{こうせい きゅうこう}の廬山を指すが、密州にも同じ名の山があった。次の詩にその山のことが歌われている)

(この詩から、微妙ながらも、蘇軾は心身の不調から脱しつつあると推測することができる)

■遊廬山次韻章伝道

蘇軾は3月に仲間と連れ立って密州^{みつ}の廬山^ろに遊び、廬敖洞^{ろごうどう}、飲酒台^{いんしゅだい}、聖燈巖^{しょうとうん}、三泉^{さんせん}、障日峰^{しょうじつほう}などの名勝を尋ねて詩を詠んだ(ここには訳出しない)。

障日峰が前の詩で峨眉山^{がびさん}に似るといった山で、蘇軾は小峨眉山と呼んだ。この詩は章伝^{しょうでん}(字は伝道^{でんどう}) (密州の学校の教授) が廬山で詠んだ詩

に次韻したもの。

世間の塵にまみれたい私の姿は、

荷車を曳けずにへたばっている馬にも似ていようか。

それでも、

私には、溪流を自由に泳ぐ魚と同じ野性が具わっている。

廬山に登り、

深さ千仞^{じん}の岩壁の中と外とを出たり入ったりして、

我が十年前の筋力と比べてみようか。

先を行く車に美女を乗せて巡る優美な遊びはしないけれど、

後ろの車に酒を入れた袋を積んで行こう。

私のこの詩を読んで、野暮な暮らしをしていると笑わないでほしい。

貴公の詩を得て、それを味読する風雅な心は確かに自分には欠けるけれど、

字の形くらいは知っているので、筆を執ってこの詩を書いたのだ。

■祭常山祝文

先の詩で、土地の老人が今年は天候がよいと言うのを聞いた（本章 36 ページ）とあったが、春から夏に向かって実際には雨がわずかししか降らず、今年もまた旱害^{かんがい}と蝗害^{こうがい}が憂慮されるようになった。州知事の重要な職務に雨乞いがあることは第2章 46 ページですで見たと通りで、4月に

蘇軾^{じょうざん}は常山に登って雨を祈った。常山^{しょうじょう}は諸城県の西南 30 里にあり、あまり高くはないがその神は雨を降らせる靈驗があるとされた。これは山の神に雨を願った文。

天帝^{てんてい}は、山や川などの神々の所轄のもとにその地の民を置き、皇帝は、州や県の役人の所轄のもとにその地に民を置く。神々と役人の職掌には共通するものがあり、民が困窮して生活を失えば、その咎は等しく両者が受けなければならない。

我が州の民は哀れにも日照り^{いなご}と凶作に遭遇したために、流浪し、命を落とした者もあった。その上、蝗^{のこ}が害毒を流し、その遺した種がいまも野に満ちていて、それがもしも変化して飛び上がるようになったら、桑も^{さくら}柘も麦も稲も全てその災いを蒙り、民はもはやその子孫を一人も残せないまでになってしまうであろう。そうなれば、役人は罪を得なければならないし、神はもう誰からも祀ってもらえなくなる。

私は四月一日より齋戒、蔬食し、ここに畏れ多くも、雨が遍く地を潤し、蝗が発生することのないよう、自ら牲幣^{せいへい}を捧げて神の助けを謹んで祈るものである。

ああ、我が州を望むに、神は何をしているのか。古老が言うには、「この山の神に求めて叶えてくださらないことはありません。だから、常に徳があることをもってこの山の名となっているのです」

でありながら、もしも我が祈りに応じてくれないのならば、その名に愧^はじねばならない。

■次韻章伝道喜雨

蘇軾^{じょうざん}は常山の神に平身低頭して願うのではなく、雨を降らせなければ恥をかくのは君だと理詰めで迫った。それで恐れ入ったからなのか、蘇軾が祈って3日後に雨が降り、それを喜ぶ詩を章伝^{しょうでん} (字は伝道^{でんどう}) が詠んだ。これはその詩に次韻したもの。

去年の夏は日照りが続き、秋も雨が降らなかった。

このあたりの海辺の人々は、塩辛い水を飲まなければならなかった。

今年の春は暖かくて、

蝗の幼虫がたくさん湧き出し、

もぞもぞしているありさまは土よりも多いくらいだ。

いま心配されるのは、蝗に二つの翅^{はね}が開いてしまうこと。

そうなったら、蝗にその気はなくても、

口からはまさしく嵐が吹き出すほどにもなってしまうのだ。

この前、蝗は長江^{ちやうこう}を渡って呉^こや越^{えつ}の地方にまで入ってきた。

蝗が空を横断する有様は、

天下を奪おうとする大將軍の陣立てのようであった。

農夫は手をこまねいてただ泣くだけで、
人の力など小さすぎてどうすることもできなかった。
蝗は牛や馬の尾にまで食らいついて苦しみ、
家の戸にも穴を開けて入り込み、衣服までも嚙んだのだった。
知事としては、
このような蝗の害を座視して、民を救おうとしないということはありません。
太古の神は、
蝗が自ら火に飛び込んで亡ぶようにしたと伝え聞く。
昔の皇帝が、
^{せき}一石の蝗を掴まえて土に埋めた者には穀物を一斗与えるとふれたところ、
人々は争って蝗を埋め、飢えからも救われた。
^{じょうざん}常山の神はまことに英烈で、
雷の父に対して指図するし、雷の母を叱りつけもする。
神は、知事が老いて愚かであるのにもかかわらず、
どうにかして民衆の傷を癒そうしているのを憐れみ、
知事が山で祈って帰ると、
すぐに風の様子が変わって、
町に至る道の途中で早くも雨が降り出した。
夜になると、

窓ががたがたと揺れ、松や竹が騒がしく鳴る雨となり、

朝には、

田に白い乳のような水が流れるほどになった。

老農がいうには、

蝗の害と日照りの害は必ず一緒にやってくると。

願うのは、

たっぷりの潤いをもって蝗の残る害を掃い除いて、

今年は豊作となって収穫物をお上に還せるようになること。

一畝^ぼの田に群がる蝗はおよそ一升とか。

町の前ではすでに八千斛^{こく}（八百万升）の蝗を穴に埋めた。

よくいわれるのは、

蚕^{いちみん}が一眠すると蝗はもう生じないと。

いまや蚕^{しゅみん}は初眠を過ぎたのを我々はすでに見ている。

きっと豊年を祝う客が次々に訪れるようになるだろう。

貴公の筆力は私の畏れるところ――

南朝時代の大家である鮑照^{ほうしょう}、謝朓^{しゃちょう}を蹴倒し、徐陵^{じょりょう}、庾信^{いしん}の上にまたがろうとするほどだ。

たまたま談笑する間にも佳篇を得て、

それが世間に広まって、人々に吟唱される新しい型となるであろう。

この田舎の一地方に雨が降るか降らないかくらいは取るに足りないこと。

肝要なのは、我が君の盛んな徳が天下に普く行きわたること。^{あまね}

いつしか我が朝廷を讃える詩を作る詠み手を探そうということになったら、

いったい誰を選ぶのか、諸君等に尋ねるまでもないだろう。

（この詩に「收穫物をお上に還す」（原文では「明主^{めいしゅ}に還す」）という表現がある。優れた為政者の庇護のもと、人民は農地を分け与えられ、平和裏に耕作に勤しむことができるのであるから、收穫物は元来為政者に帰属するものと考えるのである）

（この詩に見るように雨は降ったものの、大地を十分に潤すには至らず、その後も蘇軾は繰り返し常山に祈りに行かなければならなくなる）

■謝郡人田賀二生献花

蘇軾の魅力は、相手が皇帝であろうが一般庶民であろうが、姿勢を変え
ることなく率直にもの言うところにある。この詩は、田員外^{でんいんがい}と賀秀才^{がしゅうさい}の
2人が蘇軾に牡丹の花を献じた謝礼に詠んだもの。「員外」は正規の組織
外のポスト、「秀才」は科挙の一次試験に合格した者を指す語であるが、
次第に本来の意味を失って、ちょっとした町の顔役を「員外」、そこそこ
の教養人を「秀才」と呼ぶようにもなった。

町の中に住む田員外君も、

町より西に住む賀秀才君も、

家といっても四つの壁があるだけの身の上を愁うことなく、

自作の詩文を一千反の錦のように積み重ねている。

珍重すべき優れた作品は艱難の最後に開く――

そのことを体現したような牡丹を二人は贈ってくれた。

花の色は、昨日は、雷雨と戦い、

花の心は、今日は、春を終わらせようとしている落日に苦しんでいる。

老いた知事はこのところ病気がちで、

さか おも
壮んな懐いはもう灰のようになってしまった。

そのような私のために、

二人はこの輝く牡丹を慇懃にも手折ってくれた。

花の姿は、紅の袖を美しい腕が翻すかのようにであり、

花のみずみずしさは、金の樽から酒を注ぐかのようにである。

そこで二人に提案するのだが、

我が頭の白髪をそっくり抜き取って、

これらの牡丹をいっぱい挿してみたらどういことになるだろうか。

（この詩は、蘇軾の詩としてはかなり平易な語句で構成されている。田賀両氏にわかりやすいようにと配慮したのだろう）

■惜花

牡丹を見て、蘇軾が杭州を想わないわけがない。それで次のような序文を添えて「花を惜しむ」という詩を詠んでいる。

きっしょうじ

吉祥寺の牡丹は杭州第一である。三年前の春、その最も盛りのときに皆で賞玩しようと集まった。金色の盆、七色の飾りの付いた籠をそれぞれの前に置いて五十三人が座った。夜になってその一同が帰るのを、大勢の者が沙河の塘の上に並んで見物した。その後で同じことをする者はいなかった。今年密州では、いろいろな家の庭で牡丹の花が盛りを極め、なかでも竜興寺の僧房のひとむれが最もすばらしい。病によって衰え、気持ちが沈む私は、牡丹を見てもなかなか興が湧いてこない。昨日は雹が降り、無事な牡丹がどれくらい残っているのか心配でならず、大きく溜め息ばかりついている。

吉祥寺に積まれた千段の錦――

かの年の玩賞こそはまことに盛んであった。

せいめい

「清明節の日にお越しあれ」

どうじん

吉祥寺の道人に誘われるがままに行ってみたのだった。

寺に着くと、

腰に括り付けた百面の太鼓が一斉に打ち鳴らされ、

春の雷のようなその音とともに牡丹の花が満開となった。

それはあたかも、

げんそう

しゅんこうよ

あんず

玄宗皇帝の面前で「春光好ろし」の曲が奏し終わるとともに杏の花がみな開いた

のと同じであった。

私は花を頭に載せて^{さ か つつみ}沙河の塘を歩いて帰ったのだが、

すっかり酔っ払ってしまったために、

町の人々に笑われたのを実は覚えていない。

そのときはまさか、

鬢の毛がかくも抜け落ちて、

密州の町の西の草深^{ふるでら}い古寺(竜興寺)にくるようになるとは思ひもなかった。

ここでは一人の僧が門を閉ざして手ずから牡丹を育て、

千の枝、万の葉を巧みに^{さんさい}剪裁している。

なかでもひとむれの花は何に似るかというと、

^{め の う}瑪瑙の盤に金の飾りを施した杯を載せたようであろうか。

私はこのところ清齋^{せいさい}して蔬菜^{そさい}だけを食べているので、

せっかく見にきても酒を飲まないから、

花はおかしなことをしていると首をかしげたであろう。

その夜に、李^{すもも}の実ほどもある雹が降ったので、

紅は損なわれ、緑は暗くなってしまったのではなからうか。

——ああ哀れむべきである。

(清齋(身を浄める)していたのは雨乞いのためである)

■和子由四首

弟から送られてきた詩に和した4首のうち2首を訳す。

春を送る

夢の中でなら、

このよき春をいつまでも追いつけていられようか。

せめて、詩句でもって、今日の夕日とともに去り行く春を繋ぎ留めたい。

春の盛りとは、酒^{たけなわ} 闌のころ――

悩みを抱える旅人はただ眠りたいと思う。

春の盛りとは、花の蜜が熟すころ――

黄色い蜂が飛ぶのものうげである。

かくて芍薬^{しゃくやく}も桜桃^{ゆすらうめ}も地に落ち、

座禅^{いす}の榻の上の者の鬢の毛も抜け落ちてしまう。

近ごろ君は華嚴經^{け ごんきょう}の法界観^{ほうかいかん}について読んでいるという。

僕も君に教わって、

人間世界^{じんかん}は万事非^{せ かい ばん じ ひ}であるとの嘆きを洗い去ってしまいたいと思う。

(弟の蘇轍も仏教に強い関心を持っていた。「人間世界は万事非」とは、要するに、世の中は全てうまくいかないということ)

夏^{はじめ}の首の官舎^{つれづれ}での即事

ざくろは春の花の中で最も遅くに開き、

奥深い木からちらりと赤い裾を見せる。

想い見るに、

我が故郷の家は、いまのこの時期に、限りなく好い。

なのに、旅に倦んだ客子はどうして帰らずにいるのか。

昔からいう――

樽に酒がたっぷりある宴席にいても、憂いがないわけではない、

「四事」はいつも巧みにすれ違っている。

ざくろを見て僕は、かえって、西湖の畔のかの寺を思い出す、

柳の深い蔭のもと、扉を閉ざして午睡したのだった。

（「四事」とは、良辰（よいとき）、美景（よい風光）、賞心（めでる心）、樂事（楽しいこと）で、その四者が揃うのは難しいとされた。その「四事」が揃ったのが、故郷の家での少年時代、あるいは西湖の畔の寺での昼寝であった。寺での昼寝は「宝山 昼睡」（第4章 121 ページ）など幾つかの詩に詠まれている）

■文与可字説

蘇軾には、心を許せる先輩にして友人の文同（字は与可）がいた（第3章 78 ページなど）。その文同の字の「与可」について蘇軾なりの解釈をほどこしたのがこの文章。

『論語』にはこのようにある――

弟子が尋ねた。

「村人が皆、その人を好むのなら、その人はどうなのでしょうか」

孔子は答えた。

「それだけでは十分ではあるまいな」

「村人が皆、その人を悪むのなら、その人はどうなのでしょうか」

孔子は答えた。

「それも十分ではあるまいな。村の善い人がその人を好み、村の不善の者がその人を悪むのには及ばないだろう」

この問答に対して次のような議論がある。

「善い人が好み、不善の者が悪むのなら、その人は君子(道徳的に優れた人)であるとするに足りるということなのか」

この問いに対して次のような答えがある。

「それは十分ではあるまい。孔子は問いに応じて、尋ねた者にわかるように、何をもって賢とするのかを答えたまでだ。村に君子がいれば、君子は善き人を推奨し、不善の者を心の内で恥ずかしく思うであろう。それだけのことなので、君子がどうして不善の者から悪まれたりするだろうか。君子は人を悪まないし、人から悪まれもしない。孔子の弟子の子夏は自分の弟子にこう言ったという。『交わってもよい人とは一緒にいるけれど、交わってはならない人と一緒にいるのは拒絶する』。そのことを告げた子夏の弟子に向かって、孔子の弟子の子張はこう言った。『君子は

賢を尊ぶとともに、多くの人を容れる。善をなす人をよしとするとともに、それができない人を哀れに思う。私がもしも大賢の者であるのなら、人との交わりで容れないことはないだろう。私がもしも賢ならざる者であるのなら、人が私を拒絶するであろう。だから、私から人を拒絶するようなことはない』。つまり、子張が言ったのは、交わってもよい人と一緒にいて、交わってよろしくない人は自分からは遠ざけておくということなのではないのだろうか」

それに対して重ねて問うのは、

「交わってよろしくない人は自分からは遠ざけておくというのは、交わりを拒絶するよりもはなはだしいではなからうか。子張もつまりは拒絶したのではないか」

「いや、子張に拒絶する気持ちなどありはしない。もしも拒絶する気持ちがあるのなら、天下の人は結局は避けようとするであろうから、一体誰とともに一緒にいられるというのか」

「しかし、孔子は孺悲じゅひという人の面会を断ったのではないか。これは拒絶ではないのか」

「孔子は病気を理由に孺悲とは会わなかった。そのとき、取次の者がその断りを孺悲に告げている最中に、孔子は楽器を弾かせて歌い、実は病気ではないことを相手に知らせた。それはつまり、会わない理由が孺悲に方にあることをわからせようとしたのであって、拒絶したのではないのだ。拒絶する気持ちがないのだから、交わってよい人となら一緒にいるのである。孔子も子張も同じなのだ」

吾が友の文君ぶんくんは名を同どうといい、字を与可あきよという。「与可」とは子夏の言葉にある

「交わってもよい人とは一緒にいる(可者与之)」からとったものであるから、ある人は文同に、

「君は子夏と同じ考え方なのか」

と尋ねた。

文同は答えた。

「そうではない。子夏の言葉に基づくとはいえ、与^{とも}にいるという方をとって、拒むという方はとっていない。実は子張と同じなのだ」

文同の人となりは、道を守って勢^{せい}を忘れ、義を行って利を忘れる。徳を修めて名を忘れ、不義を為すことはなく、どれほどの俸禄を差し出されようと顧みることはない。しかも、人を悪^{にく}むことはないし、また人から悪^{にく}まれることもない。だから、与可は子張なのである。

(何やらごちゃごちゃして話の筋が見えにくいのが、要するに、君子はいかなる交わりを人と結ぶべきかについてあれこれ思索を巡らしたのだ。改革が強引に推し進められて以降の官界のありさまを見るに、道を守るよりも時の権勢に靡き、正義を行うよりも利益に走り、身に徳を修めるよりも一時期の名声を求め、俸禄を得るためなら不義をも為すような者が目に付くようになった(つまり、蘇軾が改革を批判して、いまは「風俗を厚くする」(第3章 48 ページ) ことが肝要であると指摘したのが的^的中した)ので、ことさらに文同の人柄が慕わしく思われたのだろう)

(名^{あざな}や字^そは何らかの思いを籠めて付けられるものだ。蘇軾^{そ じゆん}の父の蘇洵^{しよく}はいかなる思いで軾と轍の名を付けたのかということ、蘇洵自身が以下のように書き記している。軾

の原義は馬で曳くようなタイプの車の前に付けた横木で、遊園地のジェットコースターの安全バーのようなもの。^{てっ}轍は車輪の通った跡、すなわち「わだち」である。

車に具わっている輪^{りん}(車輪の輪の部分)、輻^{ふく}(車輪のスポークの部分)、蓋^{がい}(車を覆う幌の部分)、軫^{しん}(車体の枠組み)にはそれぞれのきちんとした役割がある。^{しょく}軾はどうなのかというと、それがなくても車は十分にその機能を果たすことができる。そうはいっても、軾を取り除いてしまうと、完全な車であるとは見えなくなる。

我が子、軾よ、そなたは外側をきちんと飾ることを気にかけないようだ。だから、無用なようでも完全であるためには必要な軾をもってそなたの名にした。

天下の車は^{わだち}轍を付けないものではなく、道に轍があれば天下の車はそれに準拠して進もうとする。しかしながら、車の性能をいうときに、轍が関わっているとされることはない。その一方で、車が倒れて巻き添えになって馬が死んでも、轍に非難が及ぶことはない。轍というものは、福の面では恵まれないけれども、^{わざわい}禍の面では及んでこないで、ちょうど両者の間にいることができる。

我が子、^{てっ}轍よ、そなたは跡を残して天下の人がそれに拠るようになるとしても、きっと福からも禍からも免れるに違いない。よって轍をもってそなたの名にした。

この短文は、兄弟の性格の相違と、それによって異なる道筋を歩むようになることをみごとに見抜いていたとされる)

■西齋

密州の住まいの西側にある部屋について詠んだ。

せいさい

西齋は家の奥深くにあっても明るい。

中に六尺の寝台^{ねだい}があり、

朝そこで起きれば十分に眠りが足りていて、

昼にそこに座れば一日がゆっくりと過ぎるのを感じることができる。

ここでとろとろとした心持ちになっているのは決して酔っているのではない。

ここにぽつんと一人でいるのは頭がおかしくなったからではない。

竹のあたりからくる風に衣をそっと曳き上げると、

わずかな涼しさがそろりとやってきてくれる。

立って西側の庭を歩む――

草や木はささやかな香りを含み、

ざくろ^{ざくろ}のひと枝に花が開き、

桑や棗の葉がつやつやと光っている。

鳩は、木蔭が困ってしまうくらいによすぎるのだろう、

すっかり飛ぶのを忘れている。

うぐいす

黄鳥は、自分の美声に喜んでいるのだろう、

のどを変えて囀りを新しくしている。

自然の移り変わりを観察しつつ、我が生きるありさまを顧みると、

万物はおのおの時を得ているのではないか――

しかし、自分の生き様はやたよたとして、一体どこに行こうとしているのか。

(末尾にある「万物各得時、我生日皇皇」(万物は各おの時を得て、我が生は日に皇皇)
ばんぶつ おの せわしない

とは、本来、道みち (宇宙の基本原理) に従うのなら自然界も人間界も調和が保たれて事なく運行されていくものであるはずで、自然界は確かにそうであることが目の前に見えているのに、己は明らかに違っているという思いを詠んでいるだろう)

■小児

先に弟の子について詩を詠み、前の妻について詞を詠み、今度は自分の子について詩を詠んだ。題にある「小児」は三男の蘇そ過か (4 歳) であろう。

小児は、愁いを知らない。

小児は、私が立っても座っても衣を引っ張るので、

私は、小児を叱ろうとする。

妻は、小児におしろいたずらをするよう仕向ける。

「児というものは、もとからおろかなのです。

あなたさまときたら、もっとおろかではありませんか。

だって、おろかな児がおろかなことをしたからといって叱ろうとするのですもの。

楽しもうとなさらずに、愁いてばかり。

いったい何をなさりたいのですか」

妻の言葉に、私がいつものように恥ずかしく思っていると、

妻は盞を洗って私の前に置いてくれる。

そうか、我が妻は、

酒代をちまちま節約しようとしたあの劉伶^{リョウレイ}の妻よりもずっと勝るのだ。

(表題は「小児」でありながら、実は妻について詠んだのだった。「劉伶の妻」とは、こういう話である。劉伶は大酒飲みで、「喉が渇いて仕方ないから酒を用意してくれ」と言うと、妻は酒を捨て、酒器を壊し、「飲み過ぎです。お体にさわれます。どうかお酒を断って下さい」と泣いて頼んだ(蘇軾はこのことを酒代を節約したと脚色している)。劉伶は「わかった。では神に誓って断つことにする。ついでには神に捧げる酒と肉を用意してくれ」と言った。妻がそのようにすると、「このわしは酒でもって天下に名をなした劉伶だ。一度に一斛^{こく}を呑み、二日酔いをさますのに五斗を呑む男だ」と言って、神に捧げる酒を飲んでしまった)

■寄劉孝叔

劉述^{リョウシュツ}(字は孝叔^{コウシュク})に寄せた詩。劉述^{リョウシュツ}は王安石^{オウアンゼキ}と考えが合わなくて江南^{コウナン}に左遷され、蘇軾が飢餓対策で杭州から潤州^{ジュン}の間を行き来していた時期に一度会っている。この詩は、かなりあからさまに改革を批判している。

皇帝は驕りたかぶった外国の悪党を懲らしめようと思い立たれた。

銅山をことごとく掘り尽して銅銭を鑄て軍資金を用意させ、

三十七人の將軍を都に勢揃いさせ、

西方に馬を走らせておのおの司令部を開けと命じられた。

南の山では、木を伐って車の軸を作り、

東の海では、鼉^{わに}を捕えて陣太鼓の皮とし、

人々は戦の準備で遅れを取るまいと、汗を流して奔走し、

軍用に物を十分に供出できなくて、処罰されてしまうのを恐れている。

今日に至るまでに、

村々に自衛組織を作れとの号令はまだ十分に行きわたらず、

土地の計測を正確にする作業もお山積みになっている。

新たに細かく課税対象を増やして、

ひげ根の先までも残さずに取り立てようとしたので、

あまりの行き過ぎに、皇帝は人民を深く憐れむ詔を出した。

しかし、役人は浅はかりにも民衆が労苦するのを放置している。

かねてから、私の学問は「流俗」であるとばっさり切り捨てられ、

大勢の者が一斉にただピーピーやかましく笙^{ふえ}を吹く中で、

一人だけ正しい音を出そうとしてみたものの全く聞いてもらえなかった。

おかしい楽曲ばかりが演奏されると、正しい楽譜はすたれてしまう。

民衆は毎年毎年飢饉に苦しみ、

木や草を剥いで齧り、泥を食らうありさまだ。

今年は雪や雨がちょうど時節に合致しているのに、

蝗に肢が生え、翅が出てきたとの報せもある。

私は憂いに襲われ、
盞を洗って無理にも酔ってみようかと思ひもするのだが、
がらんとした部屋にあるのはからっぽの樽で、
それを枕に寝ることしかできない。
役場の厨からはもう十日も煙が立っていないのだ。
まして華やかに妓女が舞うような遊びは望むべくもない。
古くからの友人がくれる手紙への返事としては、
まさに故郷に帰るべきときがきたと記す以外に言葉がないはずなのに、
官服を脱ぎ棄てて、そこらの壁にでもひっかけて去って行こうとしないで、
雀や鼠のように官の倉から米を盗み食いすることを私は続けている。
「呉興の長者」(劉述のこと)は正しく真理をわきまえていて、
朝廷にあって補うところが多々あったにもかかわらず、
人が集まってこようとする都から逆に出て、
いまでは湖と山の地の主となっている。
長者の高い行いは釣り人とまじわる身となり、
「大隠」は必ずしも官服を脱がなくてもよいということを実践している。
昨年お会いしたときには、
道を尋ねてそのごくあらましをお聞かせいただいただけで、
十分には話せなかったので、
官職を捨ててそちらに行って学業を遂げたいと思う。

長者の家は呉興とうけいの霅溪のあたり、

白い雲が羽のように広がる下にあるという。

私は俗世間との縁が切れなくて、進退ははなはだもたついている。

「安心あんじん」を説いた達磨大師だるまを思うべきなのだろう。

（この詩の初めの部分では、西方の夏国かとの間の積年の問題を軍事力の行使によって決着させることを皇帝が志向し、それに応じて朝廷が動いていることを批判している。劉述りゅうじゅは呉興の出身であることから「呉興の長者」と呼んでいる。呉興は第4章74ページなどで見た張先ちやうせんがいる町でもある。「大隠」とは町の中で普通の社会生活を営みつつ、精神は隠者と同じであることをいう（第4章26ページなど）。最後に唐突に達磨大師が出てくるのは、劉述と蘇軾あんじんの間でかつて「安心」（心の安定）について話題にしたことがあったからなのだろう）

■孔長源挽詞二首

孔子こうしの四十七世の孫である孔延之こうえんし（字は長源ちやうげん）の挽歌。2首から1首を訳す。

其の二

公はかつて杭州の小堰門しょうえんもんにほど近い柳の木に船を繋いだ。

公が呉山ござんの有美堂ゆうびどうで宴を開いたときには、月光むしつが筵を照らし、

夜中せんどうこうには、銭塘江を遡る潮が千の巖に当たる音が響いた。

そのとき公は詩を詠み、

その句は翌朝にはもう万民の間に伝えられていた。

ところが、思いもかけず、公は寿命の長きを全うできず、

日が傾くようにしてたちまち亡くなったとの報せに、

私は驚かされた。

公の無窮の業績も墓地に納められてしまう。

南を見つつこの詩を作って、^{かみ}牋に涙がしたり落ちる。

■寄呂穆仲寺丞

^{りょちゆう ほ} 呂仲甫（字は^{ぼくちゆう}穆仲）に寄せた詩。呂仲甫とは杭州で親しくしていた（第4章32ページなど）。

^{こざん} 杭州孤山の寺の門前には、すぐそこにまで水が迫る。

私とその寺に行っても最初に見たのは、

貴公が酔って書いた墨の痕だった。

杭州には一人の役者がいて、貴公の真似をするのを得意としていた。

貴公が杭州を去ってしまった後でも、その役者がいると、

いまでも貴公が談笑し、あるいは規律を正そうとしていると思えた。

先に杭州を去った貴公は、いまは塵埃の降る都の道を踏んでいる。

後から杭州を去った私は、いまは桑や棗を産する村を訪ねている。

首を回らせば、西湖は真に一場の夢。

しかし、もういまい——

心の火が消えて灰になったとか、髪が抜けて白くなったとか……

(蘇軾がどれほど杭州の風光を愛していたのか、この詩にある「西湖真一夢」(西湖は真に一夢)の語に集約されている)

■答陳述古二首

杭州の日々を想う詩が続く。杭州といえば、最も信頼関係が厚かったのが、当時杭州知事であった陳襄(ちんじょう)(字は述古(じゅつこ))である。いまは都にいる陳襄から送られてきた詩に答えた2首から1首を訳す。

其の一

さんとう
密州は山東第二の州であるとか。

なつめ
棗の林、桑の入り江に春を尋ねる遊びにはまだ行けていない。

町の西には千もの紅い牡丹があるとか。

あわれにもさらに老いた私の髪に挿されたのでは、

花はますます恥ずかしがるだろう。

(蘇軾は杭州で、牡丹は老人の頭に載せられるのをはじらうと諷に詠んでいた(第4章17ページ))

■懷西湖寄晁美叔同年

5 月に晁端彦^{ちやうたんげん}（字は美叔^{びしゆく}）が杭州に赴任すると聞いて寄せた詩。晁端彦は同じ年に科挙に合格した「同年^{どうねん}」の間柄。

（蘇軾^{そし}が科挙に合格したのは 18 年前^{ひざん}。眉山県から上京した蘇軾にとって都は未知の土地で、友人といえる者はそこにはいなかった。合格後に最初に兄弟の下宿に訪ねてきたのが晁端彦だった。晁端彦は歐陽脩^{おうようしゅう}の弟子で、蘇軾と必ず交わりを結ぶようにと師に言われてやってきたのだった）

西湖^{せいこ}は天下一の景勝地だ。

そこに遊ぶ者は、

賢かろうが愚かだろうが、あるいは浅くあるいは深くそれぞれに得るところがあり、
しかも誰もその全てを知ることができない。

ああ、私はもとかからおかしなくらいに真直ぐで、

世間から早々と棄てられてしまった。

だからこそ杭州の山水の楽しみをもっぱらにすることができたのだから、
むしろ天からその機会を授けられたのだろう。

三百六十の寺を奥深く訪ねて一年を使い果たし、
行けばどこにでも妙所があった。

それは心に知っても、口で伝えるのは難しく、

いまになっても夢に見て、目覚めた後もありありと目にも耳にも残る。

貴公は朝廷から杭州に派遣されることになり、
その風采の輝きに杭州の雲も霞も融かされてしまうだろう。
清らかな流れも陰しい山も、
貴君のために特にそうするかのように、
麗しくその姿を見せることだろう。
貴君にお勧めするのは――
従者を退け、寺で僧榻そうとうを借りてしばらく眠ってから、
私が壁に書いた詩を読み、
清涼な空気に日頃の煩わしさを洗い流した後で、
道のあるなしによらず、心の赴くままに歩むのがよからう。
そうすれば、古の「漁父」いにしえ　ぎょほのような人が、葦の間を自在に行くのに出会うであろう。
もしその人に道を問うて会得するところがあったならば、
どうか魚を値切って買うような野暮なことだけはしないでくれたまえ。
（「漁父」ぎょほは中国の文化史におけるかなり特徴的なキャラクターである。舟に乗って自由にどこへでも行く孤独の漁父は詩にも画にしばしば登場する。漁父のイメージの決定版ともいえるのが唐の柳宗元の「漁翁」りゅうそうげん　ぎょうおうの詩である。

漁翁は、夜には西の巖に舟を寄せて眠る。

暁には清らかな水を汲み、竹を燃やして朝飯を支度する。

朝靄が消えて日が昇るころには、その人の姿はもうない。

棹をさす声はどこかで一つ響くと、あとは山と川の緑があるだけ。

漁翁はすでに天の涯を顧みつつ、中流を下っている。

もとの巖の上では、心を持たない雲が追い掛け合っているのである。

そのような漁父と会って脱俗的な会話を交わしておきながら、別れ際に「その魚、なんぼ？」とか言ったら台無しであろう)

■張安道楽全堂

恩人の張方平ちょうほうへい（字は安道あんどう）（第3章 104 ページなど）に寄せた詩。張方平らくぜんどうは楽全堂という建物を作り、「楽全堂居士らくぜんどう こ じ」と称した。

「楽全らくぜん」(100 パーセントの楽しみ)とは何であろうか。

列子れつ しは、ふわりと風に乗ってどこへでも行けたから、

なかなか結構な楽しみを自在にした。

しかし、莊子そう じは、汲々として風に頼っておるではないかと列子を批判した。

世の中が非常に厳しかった時代に、

酒や琴に逃れて己の生命を保全しようとした者がいた。

己の生命を全て尽くせたからといって、

それだけでは「至楽し らく」(100 パーセント超えの楽しみ)とはいえないだろう。

釈迦ゆい ま きつの弟子の維摩詰は病氣になり、

己の命を全て尽くせたわけではなかったのだが、

何もない部屋で悠然と過ごし、

それは「至楽」に近かったのではないだろうか。

楽全居士殿は天から与えられたものを^{まっど}全うしようと、

かつては飲んで^どいた酒をやめ、琴は初めから持っていない。

^{どうえんめい}陶淵明は弦のない琴を抱いて最高の音を楽しんだと聞か、

無弦の琴よりもそもそも琴が存在しない方がより完全なのではなかろうか。

そもそも楽全居士殿は天より英雄としての素質を与えられ、

まさしく竜や鳳凰の姿を具え、

自ら発する輝きでまわりの魚や鳥を照らし出し、

朝廷に座っていれば、北方や西方での紛争も談笑する間に片が付いてしまう。

ところが、老いてからはもっぱら帰ることばかりを思い、

私に細々と手紙に書き、詩を添えて送ってこられた。

それでお尋ねするのは、

「楽しみを100パーセントにするとは何を100パーセントにするのでしょうか」

莊子はこういうことを言っている――

100パーセントを求めようとすれば必ず欠けたところがある、

もとより100パーセントを求めなければ欠けるところはない。

（蘇軾は、自分の楽しみを100パーセントにすることを求めるよりも、民の楽しみを

100パーセントにするよう努めてほしい（直接的には言っていないが）との期待を込

めてこの詩を詠んだのだろう。蘇軾が^{はんちゆうえん}撞れた大先輩の^{せんゆうこうらく}范仲淹の「先憂後樂」（天下の

憂いに^{おく}先んじて憂え、天下の楽しみに後れて楽しむ）も念頭にあったことだろう。「北

方や西方での紛争」は先の劉述^{りゅうじゆつ}に寄せた詩（本章 55 ページ）の冒頭にあったように、皇帝が外で軍事行動を起こそうとしていることに関連している。後に張方平は、戦争に反対する意見書を皇帝に提出する（本章 170 ページ）

■次韻劉貢父李公抃見寄二首

劉攽^{りゅうはん あざな こう ぼ}（字は貢父）と李常^{りじょう こうたく}（字は公抃）から送られてきた詩に次韻した。

劉攽は第3章 80 ページなどに、李常は第4章 194 ページに登場している。湖州知事を務める李常のもとに劉攽が訪れて2人で詩を詠んだのだろう。

其の一

白髪となった二人の旧い友人が顔を合わせた。

二人の眼は、幾度となく時事が新たになったのを見た。

曲の調子が高くなると唱和する者が少なくなり、

議論の調子が高くなると理解できるものが少なくなるという。

李公は湖州周辺で飢饉が続いているために好い詩を歌い上げるひまがない。

劉公は奥様を亡くしたばかりで夜長に親しく語る相手がいない。

私はいえ、思い煩うことはなく、

誰にも負けないくらいによく眠り、

鼻息は雷鳴のごとく四方を揺り動かすのである。

(よく眠っているとここでは言いつつ、次の詩を見れば実態は異なるのである)

其の二

誰が私に勧めてここにこさせたのか。

絃管の楽器は使われずに苔が生え、米櫃には埃しかない。

酒は唇を濡らすだけで、蓄えはわずかしかない。

蝗が人の顔を打つほどに飛びまわり、すでに三回にわたって退治した。

刀を磨いて谷に入り、盗賊となった者を追うこともある。

町を回って、涙をこぼしつつ捨て子を拾うこともある。

地方の町を治めるのはまことに遊びが少ない。

しかし、それでも嘆くには及ばない――

塵にまみれて都の道を往来していたころに比べたならば……

■劉貢父見余歌詞数首以詩戲聊次其韻

りゅうはん あざな こうほ
劉攽（字は貢父）が蘇軾の最近の幾つかの詩を詠んで、戯れに（実際は本気で）忠告する詩を送ってきたのでそれへの返事。

私はこれで十年ばかりも都の外でふらふらし、

これからどうなるのかさっぱりわからぬ身、

都の花を見て再び詩を詠むことはあるまいと思う。

こんな私が我が家の門の先でうっかり憎まれ口をきいたのを、
一体どなたが貴公に伝えたのか。

酔って吐き出したふざけた詩など、自分でも知ったことではない。

昔、過激な言論で刑死した男は、息子の舌を錐で刺して口を慎めと言った。

昔、権威者の横暴を止めようとした者は、眉毛を火で炙られることも辞さなかった。

一緒に飲むのなら、こういう野暮な話はなしにしようではないか。

まさに春の盛りの最もよい時節なのだから。

（蘇軾は、政治のあり方についても、思うところをそのまま詠んでいる。劉攽ならずとも慎みなさいと助言したくなる。それでも（蘇軾は蘇軾なり自制していたのかも知れないが）、「腐ったものは吐き出さずにはいられない」（本章 94 ページ）と言うほどに、思ったままと言葉をとして出してしまうのが蘇軾の曲げられない本性であった。そのことが、「嵐」を呼び寄せたのを本章の終わりで見ることになる）

■和梅戸曹会獵鉄溝

秋になっても天候不順が^{じょうざん}続き、常山で神を祭り、その^{てつこう}帰りに鉄溝（本章 19 ページ）のあたりで^{ぼい}獵を行った。密州の役人である梅君が詩を詠み、それに和した。獵で梅君も^{ちやう}趙君も獲物を射ることができなかったことをネタに詩を構成している。

趙君、梅君は山西^{さんせい}の出身ではなからうか。

山西は昔から猛者^{もさ}が出ることで知られている。

貴君らのような文官でも、

いざとなったら命がけて城を守るくらいはするものだ。

この界限では盗賊が多く出没し、

近ごろさし首にされた者たちはまだ土に埋められていない。

盗賊の親玉は討っても、

草の根に潜む狐や兎までは驚かさずともということはあるかもしれない。

その昔、大酒呑みで有名な趙さんやら、

詩が得意で妻子を棄てて姿をくらました梅さんやらがいたけれど、

諸君等はよもやそっちの間ではあるまい。

かつてある大臣は、美人の妻を娶ったものの、

妻は夫の顔があまりにも醜かったので三年の間全く口をきかなかった。

その大臣が妻の前で雉を仕留めると、

妻は初めて笑って夫と言葉をかわした。

諸君等もこれで何も射ずに帰ったのでは、

家で待つ美しい奥方にそっぽを向かれてしまうのではないのかな。

（蘇軾自身が獲物を仕留めたかどうかはわからないが、弓の鍛錬をしていたことは第2章 103 ページで見ているので、それなりの腕前はあったのだろう）

（本章 10 ページで見たように密州周辺では盗賊が横行していた。この詩に、盗賊を

捕えてさらし首にしたことが詠み込まれているが、討伐をする兵士のモラルが低くて問題を起こすことも少なくなかった。密州でも、兵士が民衆から物を強奪し、さらには殺人もして、法を犯した兵士が処罰を恐れて逃亡する事件があった。人々は逃亡兵が反乱を起こすのではないかと恐れ、蘇軾に征伐してほしいと訴えた。蘇軾は「そういう大袈裟なことにはなるまい」と訴状を斥けた。それを伝え聞いた逃亡兵は安堵し、騒ぎは静まった。蘇軾は投降を呼びかけ、出てきたところを捕え、首謀者を処分した。兵士がかえって民衆を害することがあるという問題について、蘇軾はかつて制科の試験の答案の中で議論していた（第2章12ページ）。

■江神子

みつ
「密州で獵に出る」と注記のある詞。

（詞は酒席において主として男女の情愛を歌うものとして、詩とは別の世界を形成してきた。これまでに見てきた蘇軾の詞もその延長線上で軟らかな情を歌うものであった。この詞は一転して勇壮な獵の場面を歌い上げ、詞の世界を広げようとするものだった）

老夫聊発少年狂。（老人はにわかに少年のような物狂い）

左牽黄、（左手に黄色の犬）

右擎蒼。（右手に蒼い鷹）

錦帽貂裘、（てん フォー錦の帽子に貂の裘）

千騎卷平岡。(低い岡を取り巻くのは千の騎馬)

為報傾城随太守、(報せが走って知事に随う町中の人々)

親射虎、(知事自ら虎を射るのは)

看孫郎。(まるで孫権そんけんを見るかのようですぞ)

酒酣胸膽尚開張。(酒たけなわにして開いてみせる胸の内)

鬢微霜、(鬢にまじる白髪)

又何妨。(それもまたよかろう)

持節雲中、(皇帝の命令を受けて行く国境の地)

何日遣馮唐。(いつの日か漢の大將軍のように)

会挽雕弓如滿月、(よし引いてみせよう満月のようにこの弓を)

西北望、(西北を望んで)

射天狼。(天狼星てんろうを射るのですぞ)

(冒頭の「老夫」は蘇軾自身のこと。千の騎馬とか城を傾けて知事に随うとか歌っているのは実景ではない。三国志の英雄の孫権のようだと見栄を切ってみせるのはむしろ遊びである)

■和章七出守湖州二首

章惇しょうじゆん (字は子厚しこう) が湖州の知事となって詩を寄せてきたのでそれに和した。章惇は第2章57ページで登場し、親友を得たと弟に報告してい

た。2首のうち1首を訳す。

(章惇は、これより4年前に蘇軾が都を出たのと入れ違おうあんせきうようにして王安石によって中央に抜擢され、改革の担い手として活躍き ぶいしていた。熙寧7(1074)年4月、天災の影響で王安石が宰相を辞め、韓絳が宰相、呂惠卿が副宰相という体制で改革を続けて行くようになると、章惇を初めとして多くの朝臣は野心家の呂惠卿のもとにつき、韓絳は宰相でありながら自身では何事も決定できない事態となった。韓絳は密かに神宗皇帝に王安石を呼び戻すよう勧め、熙寧8(1075)年5月、皇帝は王安石の宰相復帰を決断した。何も知らずにいた呂惠卿は驚き慌てた。それより前に呂惠卿は王安石が中央に戻れなくなるような工作をしていた。王安石が都に戻ると、韓絳はよりいっそう何もできなくなってしまつて8月に宰相を辞め、呂惠卿も10月には副宰相を降り、呂惠卿第一の子分と見なされた章惇は朝廷から出されて湖州知事となった)

(詩題にある「章七」の「七」は兄弟排行で、兄弟・従兄弟等同世代の中での年齢順はいこう。ちなみに蘇軾の兄弟排行は九十二であるらしく、眉州には同世代が大勢いたようだ)

其の一

仙人は東の海の渺茫びょうぼうたる彼方より現れ出たと聞く。

だから、気高こころい情すいうんは水雲きどの郷を愛するのだ。

功名は尊ぶべきであつても、

さすがに一カ月に三度も勝利を連ねる者はいない。

世を過ごすには、

なかなかできるものではないけれど、
 是と非の両方とも忘れて自然に任せるのがよいのだろう。
 私も貴君も、早くに官を退いて心身を休めたいとの心がもともとからある。
 そうした後に会えたならば、ゆっくと語り合えるに違いない。
 今はまだ皇帝の重い恩に報いることができてないので、
 貴君の夢は、時に皇城の奥へと行くことであろう。

（「水雲の郷」とは、太湖のほとりにある湖州のことをいう。章惇の気高い心が「水雲の郷」を選んだようにこの詩の中では歌っているのである。政治的立場は異なっているが、友情は続いているというのがこの詩の主題であろう）

■酔白堂記

この年の6月24日に韓琦が67歳で亡くなった。韓琦の死によって、蘇軾が8歳の頃から憧れてきた4人のスーパースターで健在なのは富弼1人となった。蘇軾は大先輩の死を悼んで祭文を作った。その後、韓琦の息子の韓忠彦の依頼でこの「酔白堂の記」を書いた。

（冒頭に「魏国忠献韓公」とあるのは、韓琦が朝廷の要職に就いたときに「魏国公」に封じられ、亡くなってからは「忠献」の諡を皇帝から賜ったからである。韓琦は改革に反対して相州に退き、この文章にある酔白堂を建て、「酔白堂の歌」を作った。「酔白堂の歌」はこの年の2月に詠まれ、韓琦の最後の詩とされる。）

ぎ こくちゅうけん かんこう すいはく はく
魏国忠献韓公は、私邸の池のほとりに堂を作って「酔白」と名付けた。それは白

らくてん はくきょい
楽天(白居易)の「池上の詩」にちなむものだ。公は「酔白堂の歌」を作り、その詩は、白楽天を羨んで自分は及ばないと言っているかのように読むことができる。

ひと
天下の士はこの詩を聞いて不思議に感じた。公には、遠い昔に国政を補佐して後世の手本となった伊尹や周公旦にも恥じることのない立派な業績があるのに、どうして白楽天を羨んだりするのだろうかと疑問を抱いたのである。

私はこれを聞いて笑って言った。

「公はただ白楽天を羨むだけでない。ごく普通の人、特に聞こえることのない人間でありたいと願い、しかしそうはなれなかったのだ」

天がこの人をこの世に生んだのは、天下の重い任務に当たらせようとしたからである。天下の人々は、凍える者は衣を求め、餓える者は食を求める。何らかの不足のある者はそれを得ようと求める。民が求める物を与えようとするならば、決して十分ということにはならない。だから、民が求める物を与えようとする者は、常に憂患の内にあって、利害のからみあう道を進まなければならない。それは公の望むところであったのだろうか。

公は三代の皇帝のもとで宰相となり、天下を安定させると、水が流れるようにして官界から去り、家において老いの日々を送ろうとした。しかし、天下は皆で引き留めてそれを許そうとしなかった。まさにそのときに、公が白楽天を羨んだのは、少しも怪しむことではない。

白楽天がその生涯にしたことと同じことが公にもあるだろうかと探し求め、二人の

成し遂げたことを比較してみるならば、どちらが厚くどちらが薄いのか、どちらが浅くどちらが深いのか、後世の評価はきつと一つに定まるに違いない。

文においては太平をもたらし、武においては乱れを定め、かくて国家を安定させて、しかもそれを自分の功績であるとはしない。賢才を求めることを急務とし、地位や俸禄などは軽く見て、しかも用いられた人には自分に恩があるとは知られずにいる。殺伐とした戦場で果敢に行動し、軍隊は安心してその指揮に従い、四方八方の外国にその風采が聞こえるところとなり、天下の安危はまさにその人の一身にかかっている。このようなところは公にはあっても白楽天にはない。

身体がなお強健のときに官職から退いて隠居すること十五年、日に朋友とともに詩を賦し酒を飲み、山水園池の楽しみを尽くし、箏箏にはたくさんの絹があり、倉庫にはたくさんの穀物があり、しかも音楽をもって仕える妓女が家にいる。このようなことは白楽天にはあっても公にはない。

忠言を為し、良い謀はかりごとを巡らし、その効果がその時代に現れ、文采は後世にまで現れ、死生窮達において節操を守り、道徳が古の人よりも高い。このようなところは公と白楽天は同じである。

公は、白楽天よりも多いところがあるのを自分で多いとは思わず、白楽天よりも少ないところがあるのを自分で少ないとは思わず、まさに同じであるところをもって、白楽天に思いを寄せたのである。

公は酔白堂を作って、自分の生きる形を一醉の内に寓しようとした。それは、得るも喪うしなうも同じ、禍も福も忘れ、貴きも賤せんも一緒、賢も愚も等しいとして、万物と一体と

なって、造物者とともに遊ぼうとしたのである。つまり白楽天と自分を比べようとしただけのことではないのである。

^{いにしえ}古の君子は己の身の処し方に厳しく、名声を得ようとする気持ちは薄かった。実質こそが大切で、名声などは浮ついたものであるとしたのだ。それで世の人は、その君子のすばらしさを称賛してやまないのである。

我々は孔子は聖人であるのを知っているが、孔子自身は、せいぜい賢大夫といわれた老彭くらいで、歴史家の左丘明と同じになればよくて、弟子の顔淵には及ばないと考えていた。

ところが、後世の君子とされる人は、実質はそれほどでもないのに、皆に驕る心がある。自分自身で聖人だと言った臧武仲という人がいたし、自分は古の聖天子の禹と同じだと言った白圭という人がいたし、自分は昔の大將軍である藺相如のようであるとして名を相如に改めた司馬長卿という人がいたし、自分は孟子の上を行くと言った揚雄がいたし、自分は漢の高祖を補佐した張良の再来であるとした崔浩という人がいた。しかし、世の人はそれにはまるで同意しないのである。

このようなことを見れば、ごく普通の人でありたいと願った公の賢さは遠く人の及ばないところなのである。

かつて公はその子息の韓忠彦に、「酔白堂」についての文章を私に求めるように言われ、それを果たす前に亡くなった。すでに葬儀を終え後に、韓忠彦からそのことを告げられ、私は義として辞退することはできないと思い、泣きながらこれを書いた。

■晁君成詩集引

前の「^{すいはくどう}酔白堂の記」と同様に、遺族に依頼されて書いた文章。^{こう}杭州に赴任している間に知り合った^{ちょうたんゆう}晁端友（字は^{くんせい}君成）が47歳で亡くなり、その息子の^{ちょうほし}晁補之から、父の詩集に序文を寄せてほしいと頼まれた。

（内容的に前の文と通じるところがある。歴史上のよろしくない例として再び^{ようゆう}揚雄が引かれている。漢の揚雄は文章に優れ、学者としても一流で、高く評価されることもある。しかし、なぜか蘇軾のみならず宋代の人々の間では、上辺の言葉だけが立派で実質を伴わないということで、評判が芳しくない）

^{けん}賢を称揚した人からは立派な子孫が出る。漢の時代の^{ちょうとう}張湯がその例だ。張湯は苛酷な人であったから、後継者がいなくてもよいようなものであったけれど、その子は名臣となった。

実質がないのに名声だけを^{ぬす}竊み取ろうとした者からは立派な子孫は出ない。漢の時代の^{ようゆう}揚雄がその例だ。揚雄は優れた文化人であったから、後継者がいてもよいようなものであったけれど、その子孫にこれといった者は出なかった。

このことから、賢を称揚した者には立派な後継者があるけれど、賢を蔽い隠すようなことをした者には立派な後継者がいないと私は知った。そして、その実質がなくて名声を竊むような者には立派な後継者がなく、その実質があっても名声を求めようとしない者には立派な後継者があると私は知った。

賢とは、それによって民が生きるもととなるものだ。賢を蔽い隠すとは、すなわち民を絶つことである。

名声とは、古も今も最も尊ぶところで、富貴よりも重いものだ。これを竊み取るとはすなわち天を欺くことである。

民を絶ち天を欺けば、その後継者がいなくて当然である。一方で、賢を称揚する者と、実質があっても名声を求めない人には立派な後継者がいる。私は常にそのように言ってきた。

私は杭州に赴任したところ、しんじょう ちょう 新城の晁県令、あざな くん せい いみな たん ゆう 字は君成、諱は端友は、君子であった。私は三年間晁君とお付き合いし、その君子たることを知った。しかし、文章をよく書き、詩をよく詠むことは知らずにいた。晁君はそのようなことは一言も言わなかったからだ。

その後、晁君は都で亡くなり、その子ちょう ほ しの晁補之が晁県令の詩三百六十篇を私に見せてくれた。これを読んで私は驚いた。

詩というものは、その指し示すところは微妙ではあるけれど、その美悪あるいは高下は、言葉によって表現されているので、はっきりと見てとることができる。人が賢であるのか不肖であるのか、深く遠く茫昧として知り難いことでは、詩よりもずっとはなはだしい。

私は、晁君がよく詩を詠んだことを知らないまままでいたならば、果たして晁君が君子であることを十分に知り尽くすことができたであろうか。晁君は科挙の進士科に合格して官員となり、行く先々で民に安寧をもたらすことを楽しみとし、民は晁君が

任期を終えて去ってしまうことを恐れた。そして、晁君は自分のしていることを顕彰してほしいと、一言も求めたりしなかった。官員として仕えること二十三年、次の新たな官職を得ようとしているときに亡くなった。そのようなことから、晁君が君子であることを十分に知り尽くしていなかったのは私だけではなく、世の人々も皆そうであったのだ。

晁君の詩は清く厚く静かで深く、その人となりそのままである。しかもどの詩にも新たな情趣の発見があり、際立った語句の使い方がある。それは人が皆愛すべきものであって、晁君が秘匿しておかずにいたならば、勢いとして人が必ず知るべきものであったのだ。

その子^リ晁補之は、文を書いてよくないところはなく、語彙が豊富で内容も優れ、人々の遙か上を行き、必ず世に顕れないことはないであろう。つまり、晁君父子を見れば、実質があって名声を求めることがない者には必ず立派な後継者があるといことが、ますますはっきりとわかるのである。

昔、漢の時代に李^リ固^コは蜀の地方の町役人であった。皇帝は二人の使者を派遣し、平民の衣服で蜀に入らせた。二人は李固の家に泊まった。李固は星を見て、二人が皇帝の使者であることを知った。その後、使者の一人はその地方の太守となったけれど、李固はやはり町役人のままだった。世間の人々は李固のことを特に知らずにいたのである。李固が実は博学で徳を己の内に隠していたことは、その子^リ李固^コに及んで顕れ出て、李固は漢朝の大官となった。

『詩経』に「徳の和らげる先祖の霊^{シキョウ}は、子孫の心を安らかにし、子孫に恵福を与え

る」とあるのは、まさにこのことを言うのであろう。

（ここで蘇軾は「賢を称揚する者と、実質があっても名声を求めない人には立派な後継者がいる」と力説しているのは、にわかには納得し難いものがある。しかし、蘇軾は確信をもってこの説を後に再び展開する（本章 321 ページ）。なおここにいる「賢」は、知的に優れてかしこいだけでなく、道徳的に優れてかしこい行動をするということも意味し、かしこいという状態をいうだけでなく、かしこい行為とそれを行う主体も含めた広い意味がある。同様に、仁や義や節や孝といった語も、必ず実践を伴って初めて意味を為すものである。なお、いわゆる「ずるがしこい」は「賢」のなかには含まれない）

■和張子野見寄三絶句

ちょうせん 張先（字は子野） しや から 3 首の絶句が送られてきたのでそれに和した。張先は第 4 章 74 ページなど何回も登場した風流老人。3 首から 1 首を訳した。

かつ 旧て遊んだところを よぎ 過る

前の世に私はすでに杭州に到った――

杭州で行ったところはすべて、

かつて遊んだところのようであった。

いま想うのは、

杭州役場のしがないい小役人となり、
 静かな場所に小さな庵を結んで、
 この現世に寄せるしばしの時を過ごすこと。

（蘇軾は杭州で「私は本来、西湖に一艘の舟を浮かべる釣り人であったのだろう」と歌っていた（第4章153ページ））

■減字木蘭花

諸しょ城じょう県知事の趙ちよう昶ちよう（字は晦之かい し）（本章30ページに登場）が官職を失つて海州かいに帰るのを見送った詞。

賢哉令尹、（『論語』にある言葉通りです——賢なるかな、この知事は）

三仕之無喜愠。（官職に三度就いて、喜怒哀楽を見せなかった——）

我独何人、（では、私は何者なのでしょう）

猶把虚名玷緇紳。（虚い名をもっているも官界を辱めているのです）

不如歸去、（よりよいのは帰り去ること）

二頃良田無覓処。（でも、求めることができないのです、わずかな田も）

歸去来兮、（陶淵明の言葉——帰りなん、いざ——を）

待有良田是幾時。（良い田が得られるのを待っていたら、いつ唱えられるのでしょうか）

（趙昶が失官した理由は不明。この詞の冒頭の「賢哉令尹、三仕之無喜愠」は、楚

の令尹（^{れいいん}知事）であった子文（^{しぶん}）を孔子（^{こうし}）が褒めた『論語』の文章を 10 文字に要約したものの。後半の「^{かえりなんいざ}帰去来兮」は陶淵明（^{ききょらい}）の『^{ききょらい}帰去来兮の辞』にあるのをそのまま用いたもの。蘇軾は古典の言葉を自分の作品の中に効果的に取り込むのを得意としたが、これはその典型例。なお、蘇軾は密州に赴任する前に海州に立ち寄っている（本章 4 ページ）

■超然台記

蘇軾（^{みつ}）は密州の住まいの周囲に手を入れ、官舎の北側にもともとあった見晴らしのよい高い建物を改修した。弟の蘇轍（^{ちようぜんだい}）がそれを「超然台」と名付け、「超然台の賦」を書いて送ってきた。そして 12 月に蘇軾はこの文章を書いた。

物という物には全て（^み）観るべきところがある。観るべきところがあるのなら、どの物も楽しむことができる。怪（^{ふしぎ}）な物、奇（^{めづら}）しい物、偉（^{りっぱ}）な物、麗（^{きれい}）な物でなくても楽しむことができるのだ。酒をしばった糟（^{さけ}）を食らったって、薄（^{うす}）い水のような酒を啜（^{すす}）ったって酔（^よ）うことができるし、木の実（^{きのみ}）を食べたって、野菜（^{やさい}）を食べたって、それこそ木（^き）を齧（^{かみ}）り草（^{くさ}）を噛（^か）んだって、腹（^{はら}）をいっぱいにする（^{はら}）ことはできる。このことから類推（^{るいすい}）するに、私はどこに行こうとも（^い）楽しめない（^{あそ}）ということない（^{あそ}）のである。

福（^{ふく}）を求めて禍（^{わざはひ}）を避けようとするのは、福（^{ふく}）は喜（^{よろこ}）ぶべきであって、禍（^{わざはひ}）は悲（^{かな}）しむべきであるからだ。人が欲（^ほ）しがることには窮（^{きう}）がなく、しかし、物（^{もの}）が人の欲（^ほ）を満（^み）足（^{そく}）させるのには限（^{かぎ}）りがある。心（^{こころ}）の中で美（^{うつく}）しいか醜（^{みにく}）いかの弁別（^{べんべつ}）をして目の前（^{まへ}）の物（^{もの}）を取る（^と）るか去（^さ）るか

の選択をするのなら、楽しむべきものは結局のところ少なくなり、悲しむべき物は結局のところ多くなってしまうだろう。これは禍を求めて福を避けるということになっているのではなかろうか。

禍を求めて福を避けるのは、人の普通の情ではないだろう。物の存在によって心が蓋われてしまっているからこのようなことになるのである。物の存在の内側で右往左往して、物の存在の外側に出て自由に遊ぼうとしていないのだ。物にはもともとは大きいとか小さいとかの区別はない。物の存在の内側にあつて物を観るのなら、全て高く大きくない物はない。物が高く大きなところから見下ろしてくるのなら、人は常にぐらくらおろおろしていなければならない。譬えれば、狭い隙間から大きな合戦を覗き見るようなもので、勝負がどのようなになっているのかなど知りようがないのである。このようなことから、美や醜やらがやたらと生じ、憂いと楽しさがやたらと出てくるのである。大いに哀しむべきではなかろうか。

私は銭塘(杭州)から膠西(密州)の知事に移り、舟に身を任せる安楽さを捨てて、車馬に身を揺られる労苦を強いられ、彫刻が施された美しい堀に囲まれた家を出て、丸太で作られた家に住まわねばならなくなり、湖と山の景観に背を向け、桑と麻の野を歩まねばならなくなった。初めてここに来たときには、穀物の稔らない年が続いていて、たくさんあるものといったら、野に盗賊が満ち、町に裁判沙汰がやたらとあるくらいで、台所はいつもすっからかんで、杞の葉やら菊の花やらを毎日食べなければならなかった。

こういうことであるから、きっと私は楽しんでいないと人は思ったようだ。ところが、私

はここにいること一年となって、見た目がふっくらとし、髪は白から黒へと日に日に戻ってきた。私はここの風俗が淳朴であるのを楽しみ、この人々は私の拙さにも安んじて暮らしているのである。

ここにおいて私は、果樹園や畑を整備し、家や庭をすっきりさせようと思い、安邱^{あんきゅう}県^{こうみつ}や高密県^{こうみつ}の木を伐って、とりあえず壊れたところを修理する計画を立てた。そして、園の北に城壁に寄り添うようにして旧い見晴らし台があったのを、屋根を葺き直して新しくすることにした。

折々に人と連れ立ってその見晴らし台に登ってあたりを^み覧ると、意は放たれ、志を^{おもい}肆^{こころ}になる。南を望めば、馬耳山^{ばじさん}や常山^{じょうざん}が、出たり沈んだり、見えたり隠れたり、近くにあるようでもあり遠くにあるようでもある。その山にはきっと隠れ住む君子がいることだろう。東を望めば、^{ろざん}廬山^{ろざん}があり、秦の時代に^{ろこう}盧敖^{のが}が遁れたところである。西を望めば、^{ぼくりゅうかん}穆陵関^{たいこうほう}が黒くもっさりとして城郭のようで、そこには太公望^{かん}や齊の桓公の武威がここにまで及んだ跡がいまも残っている。北を望めば、^{いすい}濰水^{いすい}の流れがあって、そちらを見て慨然と嘆息するのは、漢の時代に^{かんしん}韓信^{かんしん}が偉大な功績がありがならず、その終わりをよしなかったことを残念に思うからである。

この台は高いけれども安定し、奥深くにあるけれど明るく、夏は涼しく冬は暖かい。雪が降る朝にも、月のよい夕べにも、私がそこにいないことはなく、客人と一緒に^{むちあわ}行かないことはない。畑の野菜を摘み、池の魚を取り、^{かち}秫^{かち}で酒を醸し、玄米を粥にして食べ、皆で言うのは、
「楽しいかな、この遊びは」

この時、私の弟はたまたまさいなん済南にいて、このことを聞いて賦を作り、この台に「超然」と名付けてくれた。それによって私がどこに行こうとも楽しまないうるることがないのは、物の存在の外へと超然と脱け出て遊ぶからであるということを示そうとしてくれたのである。

（「物にももとは大きいとか小さいとかの区別はない」と書いているのはそうし荘子の哲学に基づく。物の大小の区別は相対的なものでしかない、だから（と荘子は論理を飛躍させて）、物には元来大小の区別などではなく全ては等しいとする。馬耳山は本章 22 ページの詩に詠まれていた。その「北台」を修理したのが「超然台」なのだろう。常山は本章 38 ページで見たように、蘇軾が雨乞いに行った山。廬山は本章 37 ページにある）

（蘇軾はこの文章と弟の「超然台の賦」を多数の友人に送った。すると、ふんどう文同、せん う しん鮮于侁、ちょうらい張耒、り せいしん李清臣、し ば こう司馬光といった人々が「超然台の賦」に唱和した）

■書子由超然台賦後

そ てつ蘇轍の書いた「超然台の賦」にこの短い文章を添え書きした。

弟の文章は、言葉の使い方が精密で意味が正確であることにおいて、私には及ばないところがある。しかし、全体の構成の妙や格調の高さにおいては、私は弟に及ばない。私も弟もそれぞれに及ばない点を乗り越えようと勉めたのだが、天から授かった資質によるので、足りないところからはついに脱け出ることができな

った。ところが「超然台の賦」を見ると、精確かつ高妙で、弟はふたつともほとんど
会得したようである。最も貴いというべきである。

■和蔣夔寄茶

しょう き

蔣夔という人が茶とともに詩を寄せたのに和した。

(茶について詠んだ詩は、これまでもいくつか見た(第4章 45 ページ、157 ページ)が、特有の語句が用いられてなかなか難解である。この詩も一応の文脈がたどれる程度の大まかな訳である)

私の生き方は、百事すべて縁に随うというもの。

よ も

四方の水域だろうが、陸域だろうがどこでも結構である。

ちっぽけな舟に身を任せて、

ちようこう

ごえつ

長江を渡って呉越地方に行ったところ、

三年の間というものは、

飲むものも食べるものも新鮮で旨いものばかりだった。

あえもの

なます

金のような 齏、玉のような 膾、雪のようなご飯、

水中から出たばかりの海の蟹やら川の貝柱、

それらを風に吹かれつつたらふく食べたら、そのままごろんと眠り、

目を覚ましたならば、

「花の乳」ともいうべき茶に軽やかに泡が浮かんでいるのを飲んだのだった。

その後、私は舟を捨てて東の野を行き、桑や麻の畑を巡る川に到ったところ、

毛を刈り取った羊が馬ほどの大きさであるのに驚かされ、

ろくかく

鹿角という魚は生臭さがそこらに渦巻くのに驚かされた。

くりや

厨では粟を蒸し、肉の上にてんこ盛りし、大きな柄杓で酸醬さんしやうをぶっかける。

そのすっぱそうな匂いに涎が垂れるようになった。

そしてこの地での茶はどうかというと、

しゃらん どうてん

「柘羅」「銅碾」といったかねからあるお流儀は棄てられて、

しま はくど ぼんけん

「脂麻」「白土」「盆研」といったものが用いられているので、

私は目をむいてびっくりしてしまい、

人々からは、

「昔ながらのご趣味ですな」

と私は言われてしまった。

さけい ほうえん

「沙溪茶」と「北苑茶」の区別を、

ほんのひと滴で見分けてやろうと先を争ったりもしている。

貴公は、千里の彼方より、二首の清らかな詩とともに、

一万銭の価値のある紫の茶、金の茶を百餅かたまりも送って下さった。

詩を吟じて茶を烹かしても、とにかくどちらもすばらしいので、

人が「私も欲しい」と言ってくる煩わしさをいまから恐れている。

ところが、妻や子供らはせっかくの茶を大切にすることを知らなくて、

我が郷里に昔からある作法で、薑しょうがと塩を入れて煎出してしまい、

すでにもう半分も残っていない。

それはそれとして、

人生においては、出会うものすべてをよしとすべきなのだろう。

北も南もそれぞれに嗜好があり、

いずれが賢でいずれが愚ということはないであろし、

どちらが甘くてどちらが苦いか、美しいか醜いかを争うことはしないであろし、

死生も禍福もどちらかだけ一方を選ばずにいてよいのだろう。

貴公の詩によって、

貴公は厳しい境遇に置かれても自棄することがないのを知った。

この詩は謝礼を申し上げるとともに、いささか自分の思いを述べた次第である。

■塩官大悲閣記

塩官県えんかんに安国寺あんこくがあり、そこの禅僧きよそくの居則だいいが大悲閣ひかくを造ったのを記念して、蘇軾はこの文章を書いた。塩官県は、杭州時代に運河の掘削工事の督促をしたときに訪れた土地（第4章63ページ）で、安国寺にも立ち寄っていた（そのときの詩は訳出していない）。

「羊ひつや豕しはうまいものである」「酸すいっぱい、苦い、辛い、鹹しおい、甘いかんの五味を調和させる」「秬こ稲うで酒をつくるには曲まが蘖ねを用いる」。これらのことは天下のどこであっても同じである。材料が同じで、水や火の作用が同じで、寒暖や乾燥・湿潤の気候条件が同じであっても、二人の者が腕をふるったときに、出来のよしあしが等し

いと限らない。

よい出来の人はどこか違うのか。数多く実践するかしないかによるのではないだろうか。古の優れた技の持ち主は数を惜しむようなことはなかった。よくする者は数を経て妙所を得るのだが、よくしない者は数をおろそかにして概略だけを得る。要するに数が大切であって、それをよくするかしないかで、出来のよしあしが現れるのだ。人は結果だけを見て、よい方を求めて背後にあった数は見ないし、そこに至った過程を棄てて結果の妙所だけを追いかける。そして「私は酒食のよしあしを知った」と言うのである。よしあしを分けるのが何であるかをいい加減にし、数を経ることを捨て、大切なのはそこにはないとして、己の思いで造る。世間には数を経る過程を大切にする人は少ない。

いまの学問をする者の病も同じだ。天文・地理・音楽・律暦・宮廟・服器・冠婚・そうき喪紀の法則、史書の『春秋』しゅんじゅうが記録したかしなかったかの意味、礼がよしとするもの、刑が禁じるもの、歴代の興廃、人の賢・不肖、これらは学ぶ者が力を尽くさなければならぬものである。ところがいまの学問をする者はこのように言う。「これらは皆学ぶに足りないものだ。書物に載せることができずに、口で伝えられるものを学ぶべきである」

孔子の弟子の子夏し かはこう言った。「まだ身についていないところを日ごとに知り、身についてできるようになったところを月ごとに忘れないようにする。このようにすれば学ぶことを好むといえるであろう」。古の学ぶ者は、まだ得ていないところとすでにできるようになったことを一つ二つときちんと数えて、日ごと月ごとに見直したので

ある。今の世の学ぶ者は、果たして何を得ているのか、何ができているのか。

孔子はこう言った。「私はかつて昼間は食わず、夜は眠らず、ずっと考え続けた。そして、それは無益であると知った。考えるのは学ぶのには及ばないのだ」。このことから見るに、学ばずに考えるのは孔子の禁じたことであるのだが、いまの世の人はそれがよいとしている。

学問をする者だけでなく、仏の道に仕える者も同じである。齋戒して規律を守り、經典を講誦し、塔廟を崇めて飾る。これは仏教者が日夜人に教えていることである。しかし、中にはこう言う者がある。齋戒して規律を守るよりも無心が大切、經典を講誦するよりも無言が大切、塔廟を崇めて飾るよりも無為が大切だと。そして、無心、無言、無為だと言って、その実は飽食して楽に暮らしているのである。これは大いに仏を欺く者ではなかろうか。

杭州の塩官県の安国寺の僧の居則きょそくは九歳で出家し、十年後に重い病でほとんど死にそうになった。居則は、戒律を一生守り、千手千眼の観世音像を造り、その名を千万遍唱えたと誓った。病は脱したものの力はなく、かろうじて生きること三十余年、ほんのわずかずつ積み上げていって、ついに成就するところとなった。観世音像の高さは九仞じん、それを容れるのは四重の大屋である。

そして私はこのことについて文章を書くように求められた。かつて私は杭州の人々にここに記したようなことを話したことがあった。しかし、納得して実践しようとした者はわずかであった。居則が勤苦して従事してなしとげるところがあり、志を篤くして節を守り、老いて衰えず、仏を欺く者と大いに異なるのを私は喜ばしく思う。よってこのこ

とを記して、我が密州の人々に知っていただくと思うのである。

(この文章には「^{すう}数」という語が何度となく使われている。大森信徳『書如其人(書は人なり)』蘇軾の書論に関する一考察——文章論・絵画論を視野に入れて(2015年)にこの文章の一部が引用されていて、『数(度)』は『法度(きまり、規範)』と同義と捉えてよいだろう」と記されている。きっとその通りで、前半はそれに従って理解することができる。しかし、後半とどのようにつながるのか、私にはよい知恵がなく、それでこの訳文では、「数」は「数多くこなす」という珍解釈によってまとめてみた)

■梟約先生詩集叙

^{ふ やく}梟約先生 ^{がんだいしよ}顔太初の詩集の序文。梟約先生がどのような人であるからは本文中に記されている。

^{こう し}孔子は言った。

「昔の人々は、歴史を記録するに当たって、明らかでないところは欠文のままにした。新しい馬を得たときには、人に貸して乗り馴らしてもらった。いまはこうした慎重さが失われてしまった」

欠文や馬を貸すことは、世の中の損益に特に影響することではない。それでも孔子がこうに言ったのは、世の人が手本とすべきかつての君子や長者が年々遠い存在となって、その人たちの立ち振る舞いを若い人たちがもう見なくなると、

日に日に小賢しくて口先だけへと流れてしまって留まることがないと考えていたからだ。先の二つのことは世の中の損益に特に影響しなくても、君子や長者の余沢が後世に及ぶか及ばないかが必ず世の損益につながると孔子は考えていたのだ。

私の父はかつて都^{しだいふ}に行き、士大夫と交わり、帰ってくると私にこのように言った。「今のままでゆくと、文章は日に日に巧みになるだろうが、本当に大切なことは失われてしまうだろう。人々は遠大なことを好み、身近なことをおろそかにしている。華やかさを貴んで、実直であることを賤^{きた}んでいる。私は都でこうした兆^{きざし}を見たのだ」

そして、魯^ろの人の^{ふやく}臧約先生の詩文十余篇を私に示し、「このことを覚えておけ。これから数十年の間に、天下にこのような詩文はもはや存在しなくなるであろう」

臧約先生の詩文はどれも実践を踏まえて作られたもので、見かけは精悍ではなはだごつごつとしていて、世の中の過ちを言い当てないことはなく、五穀がきつと飢えを癒すのと同じように明瞭で、薬が病を伐るのと同じくきっぱりとした物言いである。高く遊離したところで議論をもてあそんだり、半端な言葉で美しく見せたりするようなことは、臧約先生には一切ない。

それから二十余年が経ち、我が父は亡くなったけれど、その言ったことは的中した。人々が文を作るとき、現実に存在するものから超然と抜け出て、明瞭でない言葉で高邁なことを論じようと、そのようなことばかりしている。漢や唐の文章などは野

暮であるとし、正しい議論を軽んじ、やたらと難癖をつけてまわっている。梟約先生の文を貴ぶようなことはない。

私は先の孔子の言葉と同じような意味で、このことを悲しむのである。父の遺訓を思っ、私はますます先生の文を求め、先生の子の顔復がんとくからこの詩集を得たので、このことを記録して我が蔵書とする。

梟約先生の諱は太初たいしよ、字は醇之あさな、姓は顔氏がんしである。孔子の弟子の顔淵がんとんの四十七世の孫であるという。

（父の蘇洵が梟約先生の詩文を蘇軾そしに示したのは、蘇洵が科挙に落第して帰郷したときだったのだろう。蘇洵は空疎な美文がもてはやされる風潮に絶望して故郷で独り研鑽に励んだ（第1章62ページ）。顔太初の子の顔復は蘇軾より2歳年長で、王安石の科挙の改革に反対して都を出ていた。この少し後に蘇軾は顔復と直接会う（本章185ページ）。この文章には、科挙の改革が学問の本質を損ないつつあるとする問題意識があり、先の『塩官の大悲閣の記』と共通性がある）

■立春日病中邀安国仍請率禹功同来僕雖不能飲当請成伯主会某当杖策倚几於其間觀諸公醉笑以撥滯悶也二首

長い詩題の大意は次の通り。「今年は12月のうちに立春となった。体調不良でくさくさするので、文勛ぶんくん（字は安国）を呼んで、喬紱きやうじよ（字は禹功）を連れてきてほしいと頼んだ。さらに趙庾ちやう ぐ（字は成伯）も呼んで3人で酒宴を開かせ、自分は飲めないながらも人々が酔って談笑するのを見て

楽しんだ」。2首のうちの1首を訳す。

(文勛は公務を帯びて密州にきていて、喬紱は本章 19 ページなどに登場、趙庾はこの年の秋に副知事として密州に赴任した)

其の一

ぽつんと一つの燈火が私を照らす。

夜はまだまだ長い。

花の枝を手にしても、見るのは気おくれがする。

まして、簪の代わりに花を挿すのは、この白髪では恥じらいに耐えない。

立春の日に盤に盛る御馳走も、病にある私には、野菜の粥だけでよい。

この地では、春になると、犬の肉を煮て宗廟に供え、

畦道に牛の形の土の像を競って並べて今年の豊凶を占う。

昔の人はこのように言った――

「老人だって遊びたかったりするものだ」

というわけで、私だけが部屋の隅の方を向いていたら、

一堂の者だって遊びがないのではないかな。

ありわらもと

(ちなみに、暦の関係で12月のうちに立春がきてしまうことの不思議を詠んだ在原元

かた ころぞ
方「年の内に春はきにけり ひととせを去年とやいはん 今年とやいはん」を巻頭に

置く『古今和歌集』の撰進の勅命が下ったのは蘇軾のこの詩の170年前のことである)

■密州通判庁題名記

この文章は蘇軾が密州を去ってから後に書いたもの。前の詩に登場した趙庾とかねてから交流があったことが知れるのでここに掲げる。

趙君(趙庾)はかつて眉州の丹稜県の知事となり、町の人はいまに至るも趙君のことを褒め称えている。私はその隣の町の人間であるから、そのことを詳しく知っている。趙君が丹稜県知事を辞めたときに、私はたまたま(父の喪に服して)眉州に帰っていたので、趙君と初めて識り合うことができた。

その後、私が都から杭州に出ることになったとき、趙君は泗州の副知事となり、同じ日に朝廷で辞令を受けた。宮殿の外の門で二人は顔を合わせ、手を取って語った。そして杭州に赴く途中、泗州で趙君と会い、先春亭で大いに飲んで大いに酔って別れた。

そして、私が密州の知事として移った後で一年もしないうちに、趙君が副知事としてやってきた。

私は、本性として言葉の慎みに欠け、親しいか疎いかの区別なく、人に向かって腹の内にあることをそのまますぐに言葉に写して残さず出してしまうところがある。喉から下っていこうとしない腐った物を必ず吐き出してしまわずにはいられないのと同じである。人によっては、私の言葉を胸に刻み、私を怨んで咎めるようになったりもする。そのために私はたくさんの人と深く付き合うことができない。

趙君と馴染になってみると、趙君は穏やかにしておおらかで、表も裏もなくいつも

からりとしているので、趙君との付き合いを私ははなはだ楽しむようになった。しかも、趙君は役所の仕事に励み、お上の仕事を自分の家のことのように熱心に取り組むので、密州に副知事としてきてくれてからは、私はゆっくりできるようになった。

趙君はこう言った。

「副知事の庁舎の壁には、額に掲げた文章がありません」

そして、趙君は、かつてここで勤めを為した者の姓名を集め、一文を添えるように私に託した。

ところが、私はそれを書く暇がないままに他所に移ってしまった。私が徐州^{じょ}に赴任してから、趙君からの手紙はいつもこのことが書かれていて、「貴殿に頼むのは不朽のものとしたいからだ」と言うのである。その訳は、昔、羊祜^{ようこ}が襄陽^{じょうよう}の峴山^{けんざん}に登ったときに、同行した鄒湛^{そうたん}に向かって羊祜はこう言った。「宇宙があるようになって以来、この山がある。これまでに、我等と同じように、ここに登って遠くを見た者があまたあったろう。それらの人々は全て埋もれて消えてしまい、誰がいたと聞える人はいない。悲しいではないか」。鄒湛は言った。「公のお名前はきっとこの山とともに後世に伝えられることになりましょう。私のごときの者が公のおっしゃる通りになるだけなのです」。天下の人々がいまに至るも鄒湛が峴山にいたことを知っているのは、羊祜が賢者であったからだ。それと同様のことを趙君は期待しているというのだ。

ところが、私は頑なで野卑で自分勝手に、かつ老いてしまって、後に世の人から顧みられるようなことはまずない。自分自身が言うに足りない者であるのだから、

その上に、趙君が名を残すようなことになろうはずがない。しかし、一言も書かないというわけにもいかないであろう。もしこの文章が、数百年の後に、崩れ去った壁や埋もれた井戸から見つかったりしたならば、茫然と嘆息するくらいのことのよすがになってくれるのかもしれない。

（蘇軾は峴山を実際に登っていて、そこで詠んだ詩を第1章 53 ページで見ている。やはり羊祐が提示した永遠性がテーマになっている。蘇軾はここで、自分と趙庾の関係は羊祐と鄒湛のようににはならないと書いているが、実際には、蘇軾のこの文章によって趙庾の名は後世に伝わるようになった。先の詩で見た田員外や賀秀才（本章 43 ページ）のような一般庶民の名は蘇軾の詩文を通してしか我々は知ることができない。今後そのような事例を多数見ることになる）

■一叢花

熙寧^{きねい}9（1076）年、蘇軾 41 歳。

「初春に病より起きる」と副題が添えてある。前の年のうちに立春があったことから歌い出している。

今年春浅臘侵年。（今年の春が浅く始まったのはまだ十二月のうち）

冰雪破春妍。^{あでやか}（でも、氷や雪に破られてしまった春の妍さ）

東風有信無人見、^{たより}（それでも、春の風は人には見えなくてもまことのある信）

露微意、^{こころ}（かすかな意は露にも）

柳際花辺。^{きわ}(柳の際にも花の辺にも)

寒夜縦長、(なおなお長(寒い夜)

孤衾易暖、(でも、暖まりやすくなった夜具)

鐘鼓漸清円。(鐘の音は少しずつまるやかになってきています)

朝来初日半含山。(朝がきて、まだ半ばは山に含まれている太陽)

楼閣淡疏煙。(楼閣がまとう淡(まばらな)霧)

遊人便作尋芳計、(人がいましも作ろうとするのは^よ芳きところを尋ねる計画)

小桃杏、(小さな桃や杏子)

応已争先。(きつとすでに先を争っているでしょう)

衰病少情、(でも、病に^{おも}疲れてさえない情)

疏慵自放、(面倒臭いとやけっぱち)

惟愛日高眠。(つまりは日の高くなるまで眠っているのを愛するのです)

(冬と春の境目、病氣と健康の境目、それらの間を行き来している己をもやもやと歌っている)

■刻秦篆記

先の詩にあった文勛(^{ぶんくん}字は^{あんこく}安国)(本章 92 ページ)は篆書^{てんしよ}をよくした。
それについての小文。

秦の始皇帝しん し こうていの二十六年、秦は初めて天下を統一した。二十八年、始皇帝は東の海のほとりにまで巡行し、琅琊台ろうやたいに登って海から日が出るのを見た。楽しさに帰るのを忘れ、付き従う者三万人がその台の下に家を建て、秦の徳を称える頌詩しょうしを石に刻んだ。秦の二世皇帝の元年、皇帝の詔書をその傍らに刻んだ。

いま頌詩は亡び、始皇帝に従った大臣で名が知れるのはわずかで、二世皇帝の詔書だけが残っている。始皇帝の二十八年は壬午じんごの歳、いま熙寧九年きねいは丙辰へい しんの歳であるから、千二百九十五年の隔たりがある。

蜀の人蘇軾は密州に来て、この詔書を写した古い紙を民間に得た。いまそれを見るに、なお完全な姿をしているのは、存在しているべきものには磨滅する日がなということなのだろうか。

廬江の文勛ろ こう ぶんくんがたまたま職務を帯びて密州に来た。文勛は古を好み、篆書いんしえをよくし、篆書の祖とされる秦の李斯り しの筆の運び方を会得している。文勛は秦の篆書を模して二世皇帝の詔書を石に刻んだので、それを私は超然台に置いた。

秦は無道で、国家の事業を成就させるために民衆の命を絶つようなことをした。しかし、その時代に文字が巧みであったのは、ほかの時代の及ぶところではなく、それは消えてなくなってよろしいものではない。後世の君子はそうしたことをこの超然台の石を見るべきであらう。

正月七日甲子こうしに記す。

（秦の始皇帝はいわゆる「焚書坑儒」を行うなど、儒学の伝統からすると最悪の暴君であり、秦の統一の基礎を作った李斯もはなはだ評判は芳しくない。しかし、秦が立

派な書体を残したことは高く評価しなければならない。そうした矛盾をこの文章は提起しているのだろう)

■満江紅

ぶんくん文勳 (字は安国 あんこく) は 1 月 13 日に都へと帰り、これはそのときの送別の詞。

天豈無情、(天はもしかして無情)

天也解、(いえ、天もわかっていて)

多情留客。(行く人を留めようとするあつい情 こころ)

春向暖、(暖かくなろうとしている春)

朝来底事、(でも、この朝はどういうこと)

尚飄輕雪。(まだ風に舞い降る雪)

君遇時来紆組綬、(時節に遇って朝廷に並ぶ貴君)

我応老去尋泉石。(老いて山や泉を尋ねる私)

恐異時杯酒忽相思、(このさき酒を飲んでふと互いに想うことがあっても)

雲山隔。(私達は雲と山に隔てられてしまっているのです)

浮世事、(浮世のこと)

俱難必。(きっとこうなるようにはならない)

人縦健、(人はたとえ健康でも)

頭応白。(白くなってしまう頭)

何辞更一酔、(断らないで、もう一杯)

此飲難覓。(これからは求められないこの遊び)

不用向佳人訴離恨、(佳き人には訴えてはいかないのです、別れの恨み)

涙珠先已凝双睫。(だって、二つの目についてしまう涙)

但莫遣、(なつてはならないのは)

新燕卻来時、(燕は帰ってきましたけれど)

音書絶。(手紙が途絶えてしまいましたと)

■答李邦直

李清臣り せいしん (字は邦直ほうちよく) の詩に答えた。李清臣は都から職務を帯びて密州にきて、「超然台の賦」を詠むなどの交流があった。この詩は李清臣が密州を去ってからのものであろう。

すてきな人は春風に似ていようか。

春風が吹いてきたばかりのとき、物はなかなかそれに気づかない。

旅の憂いは氷雪に似ていようか。

春風に会えばすぐに融けて流れてしまう。

遠くから春風がやってくると、町の人たちはみなうきうきし始める。

私は病をおしてその様子を見に出ると、
春風は、私が何とも衰えてしまったことに驚いた。
春風は、私が久しくもの憂れているのを知って、
新しい詩を作って私の心を元気にしようとしてくれた。
詩は旨い酒のように全身に薫りを溢れさせ、
詩であるからいくら飲んでも酔うことはないはずなのだが、
和そうとしたところ、心も体もすべてにとろんとしてしまった。
とにかく懐^{おもい}を放とうと、言葉を選ばずに詩を和すと、
春風は手をたたいて笑い、あげくには顎をはずしてしまった。
春風を西の部屋に案内すると、
しばらく蜜^{えびす}の民が作った帳^{とばり}を揺らしていたけれど、
夜になると風雨が激しくなって、どこかに行ってしまった。
春風と別れてから、物はどれも春の姿を見せるようになり、
柳は日に日に暗い蔭をつくっている。
貴君が今度またきてくれるのはいつなのか。
そちらは楽しかろうが、私はいま遊びに出歩くことができないので、
ここのへんてこ知事はどうあっても憂いをとくことができないでいる。
貴君には素敵な奥方がおられ、家門は繁栄を謳歌していると聞く。
ならば、財布をさかさまにして芸妓を揃えて演奏を習わせ、
私のこの詩を歌わせるようにしたらよろしかろう。

(この詩は、春風と李清臣と李清臣の詩の三者を渾然一体として詠んでいる(訳文はそれを十分に生かせなかった)。「西の部屋」とあるのは 52 ページで見た「西齋」のことで、李清臣をそこに案内したのでろう。李清臣は蘇軾の4年先輩で、科挙に合格したのも4年早く、将来を嘱望されて、韓琦^{かん き}の姪を妻とした。その後、その妻が亡くなると孫巨源^{そんきょげん}(第3章 136 ページなどに登場)の娘を妻とした。士大夫同士が姻戚関係を結んだ例は極めて多く、科挙を優秀な成績で合格した若者は、都の有力者の間で取り合いになった。蘇軾が受験の前に地元の王氏^{おう}の娘を娶り、再婚相手も同じ一族の娘であったのは、父や蘇軾には自分たちは蜀^{しよく}の人間であるとの意識が強くあったからなのだろうか)

■望江南

「超然台^{ちょうぜんたい}での作」と添え書きのある詞。

(「望江南^{ぼうこうなん}」は、もとを遡れば、長江より南の地への想いを歌った唐代の曲。原曲はもっと短かく、これは長いバージョン。詞はほとんどの場合に題名と内容は関係しないのだが、「望江南」はその名が主題となっていることがよくある。蘇軾はこの作品で江南への想いを直接的に歌っているわけではないが、杭州の春への憧憬が底にあるとみても間違いではないだろう)

其の一

春未老、(いまなお盛りの春)

風細柳斜斜。(細やかな風、斜めに揺れる柳)

試上超然台上看、(ふらりと超然台によって見る)

半壕春水一城花。(壕の半ばは春の水、町は一面の花)

煙雨暗千家。(煙る雨に千の家が暗くとざされています)

寒食後、(寒食^{かんしょく}の後)

酒醒却咨嗟。(酒が醒め、ふっと溜め息)

休対故人思故園、(思うのはやめましょう、懐かしい人、故郷の園)

且將新火試新茶。(さあさあ火をつけ、煎れるとしましょう新たなお茶)

詩酒趁年華。(詩と酒でもって追い付きましょう、一年の最も華やかな時に)

(「寒食^{せいめいせつ}」は清明節の前に、火を使わずに冷たい食事をとる行事。「寒食」が終わって最初につける火を「新火^{しんか}」という。清明節は春分から 15 日目ですすでに晩春に入るので、うかうかしていると季節に置いて行かれてしまう焦燥感を最後に歌っているのだろう)

其の二

春已老、(すでに盛りを過ぎた春)

春服幾時成。(もうできていてよいはずの春の晴れ着)

曲水浪低蕉葉穩、(曲水の宴の流れは緩やかに、静かに浮かぶ盃)

舞雩風軟紵羅輕。(風は軟らかく、雨乞いの踊りに、軽やかに翻る衣)

酣詠楽升平。(酔って歌って泰平を楽しみましょう)

微雨過、(細やかに過ぎゆく雨)

何処不催耕。(どこでも忙しく野良仕事)

百舌無言桃李尽、(百舌は鳴き終わり、花が終わった桃と李)

柘林深处鶉鴒鳴。(柘の林の奥深くで鳴く鶉鴒)

春色属蕪菁。(春の色はいまは蕪菁のものになっています)

■和文与可洋川園池三十首

文同(字は与可)(本章 48 ページなど)はこのころは洋州知事の任にあり、遠く離れていても、「超然台の賦」を詠んだり、洋川の風光を歌ったこの 30 首の連作を唱和したりするなど、親密な交流が続いていた。12 首を訳す。

(この連作は、唐の王維と友人の裴迪がおのおの 20 首を詠み合った『網川集』をかなり意識しているようだ。『網川集』は、王維の広大な別荘である網川荘にあった 20 のビューポイントを詠んだもの。宋代の一知事である文同がそれに匹敵するような庭園を構えるのは不可能で、平凡な田舎の風光の奥に、手の込んだ庭園の美にも劣らぬものを見出して詩にしたということなのだろう。なお、詩を和すとは、必ずしも同じ韻を用いなくてもよいものであるようで、この連作はそうになっている)

(洋州は漢水の流域にあり、地域区分としては蜀の範囲内で、蘇軾はそこも郷里に含

まれるとしている。ただし、広大な中国であるから、洋州と眉州は直線距離でも 500km ほど離れている)

こ きょう
湖橋

夕暮れ時、
橋の朱い欄干と画を施した梁に湖水が照り映える。
その上を、白い衣に黒い帽子の古めかしい姿の君が行く。
橋の下には、無数の魚やら亀やらが集まってくる。
君が杖を鳴らし、履を引きずりがちに橋を過ぎる音をちゃんと知っているのだ。
(30 首のオープニングで、湖橋より洋川を巡り始める)

ち く お
竹塢

晩年に至って孤高を保つ人は、
歳の終わりの寒さの中で、
竹とだけ楽しみをともにする。
かつて名高い詩人がいたけれど、
その詩才は実は粗雑で笑うべきものだった。
竹の林を、十万の軍勢が剣を立てて並ぶありさまに譬えたのだから。
(詩題の「竹塢」は竹の生えた土手。原詩では文同のことを「晩節先生」と言い表している。文同は何度も触れているように、竹を友とし、ひたすら竹の画を描いた。粗

雑な詩人と評されたのは杜牧で、「竹林外裏兮十万丈夫、甲刃^{とほく}從從密陣而環侍」（竹林は十万の兵士が刀を立てて陣を組んでいるようだ）という句がある）

ぼううんろう
望雲楼

かげ
陰ったり晴れたり、朝になったり夕べになったり、

楼台はそのたびに何度も新たになる。

人は楼台に立ち、その身を虚空にあずける。

虚空に出るときは無心、

虚空から帰るときも無心。

白雲を望んで好^よしと思い、

白雲もまたその人を好しと思う。

たいげつだい
待月台

月は志の高い人とあらかじめ約束をしていたのだろう。

軒にかかり、低く戸にさしこみ、そしてその人の眉を照らす。

昨日は十分に満ちた姿があったので、

闇^つという海から氷輪^きが出てくるのが、

少しく遅くなった。

り いんてい
吏隠亭

人間の世界には憂患が縦横に満ちている。

ところが、おかしなことに晩節先生は日々呑気にしている。

昨日は、清らかな風の入る北の窓辺に眠り、

朝には、西の山からの爽やかな気配に包まれる。

（「吏隠」とは、本当の隠者になれないけれど、官職に就きながらも、精神の高潔さは変わらないということ。第4章26ページで見た「中隠」^{ちゅういん}と同じである）

かんきょてい
涵虚亭

水と花は美しさを競い合う。

秋の月は水をよしとし、春の風は花をよしとして、

それぞれに最良^{さいりやう}するところがある。

この亭は虚^{ひた}を涵すというからには、

亭のまわりには、実は水も花も何もないのだ。

何もないければ最良^{さいりやう}するところもない。

だから、涵虚亭より見るのは――

天の全てを尽くした一切欠けるところのない万景^{ばんけい}なのである。

けいこうてい
谿光亭

湖の波が夕暮れとともに去り行くのは情がある。

溪流の輝きが日の出とともに軒に動き出すのはさらによい。

その光を画に描いたのはまだ見たことがないので、

貴君の詩をたよりに一つ写してみたいものだ。

か け い て い
過溪亭

身は軽く、穏やかに歩むと、帰るのを忘れる。

四本の柱だけの過溪亭の前に丸太の細い橋がある。

橋の先の俗界には出ないと貴君は決めていたのに、

友と話すうちに思わず橋を渡ってしまった。

二人で大笑いすれば、

水鳥は驚きのあまり、その緑の衣を落としてしまう。

か ん た ん て い
菡萏亭

日ごとに床几を移して蓮の葉の下の風を追う。

いつまでも続く清らかな香りに思いは窮まるところがない。

どうかしてこの身を亀に変え、

蓮の葉の揺れる中で千年という歳月を過ごしたいものだ。

（「菡萏」とは蓮の花のこと）

うんとうこく

簀簀谷

簀簀谷の竹は立派であるけれど、その値は蓬のように安い。

ここの筍は伐り取るのを禁じられている。

清貧を自称するこの実は大食らいの知事殿が、

いつも竹が胸中にあると言いつつも、

本当は自分だけが腹の内におさめようとしているに違いない。

やじんろ

野人廬

少年のころは鋤鋤の仕事に苦勞したので、

山に囲まれた故郷の暮らしを嫌ったものだ。

老いてみると、

立派な建物での暮らしなどは意味がないとわかる。

だから、時には野人の住むところに行かずにはいられないのだ。

ほくえん

北園

かんすい はざん ようせん
漢水もあれば巴山もあって、洋川にはまだまだ楽しみが余りある。

私は、ひとたび手を振って故郷への帰途につくことを想う。

貴君に頼むのは、

北園の草や木にこのように尋ねてほしい――

「蘇君がこのあたりの主になっても構わないかい」
あるじ

(これが連作の結び。洋川の楽しみを文同から引き継ごうというのである)

■寄題刁景純蔵春塢

じゆん 潤州の大長老である刁約 (ちようやく 字は景純 けいじゆん) (第4章 163 ページなど) に送った詩。このとき刁約は82歳。

(刁約の家の近くぞうしゆんに蔵春つつみという名の塢があることは、第4章 178 ページで見ている。刁約は引退後にそこにたくさんの松を植えていたので、蘇軾は自分の植林技術を提供しようと詩に詠んでいた)

先生は白髪になっての後に郷里に帰り、

丘に一万本の松を植えた。

松が千尺の高さにまで成長し、

寒風に揺れ動く姿を見るのを先生は楽しみに待っている。

ということは、己の年齢などというものは、

造物者が万物をこねて作り出す工程の外に抛り投げてしまったのだろう。

春は、あたかも先生がつく杖の先から生まれ出るかのようで、

柳の枝は同じ長さに垂れ下がって小暗い蔭を作り、

ゆすらうめ 桜桃の花はすっかり満開にとなって紅い色が滴り落ちる。

じょ いつかは徐君を誘って先生のもとを訪ねたいものだ。

(詩の終わりは、原詩では「徐元直じょげんちよくを誘って襄陽じょうようの龐徳公ほうとくを訪う」となっている。

「襄陽の龐徳公」は諸葛孔明も教えを受けたとされる有名な隱者。徐元直も龐徳公に教わったことのある賢者。刁約を龐徳公に、刁約と蘇軾の共通の友人で徐姓の誰かを徐元直に比べたのだろう。実際には刁約との再会は果たせなかったことは本章の終わりの方（351 ページ）で見ることになる）

■ 零泉記

常山じょうざんの近くにある泉を、蘇軾う せんは零泉と名付け、そのことについてこの文章に記した。

常山みつは、密州の庁舎のある諸城県しよじょうの南二十里にある。常山はさほど大きくもなければ高くもない。山から下に町を臨むと、町はちょうど山の真下にあつて、垣根や樓觀が一つ一つ数えられるほどにくっきりと見える。町から上に山を望むと、山はちょうど町の真上にあつて、家で食べたり寝たりするときにも、外を出歩くときにも、この山がいつでも見えている。このようであるから、常山の神が町の人からの捧げものを得ているのはごく当然なことである。

密州は海に近くて風の吹くことが多く、水が長く川に留まらないので、いつも旱害に苦しめられる。しかし、この山に祈るならば、山の神は応えてくれないことはない。民衆はそれで常山の神を信じて頼りにしている。山の神がいつも民衆に対して徳があることから、この山を常山というのだろう。

熙寧八年は春も夏も日照りて、私はそのつど山の神に祈った。いつも響くように応

じてくれた。そこで私は常山の神の廟を新しくした。その廟門の西南十五歩のところに泉があり、湧き出る水は車輪のようにぐるぐると回る。清涼な水は滑らかで甘く、冬も夏も変わることがない。泉から溢れ出た水は山の下へと達する。

私が思うに、この山がいつも民衆に対して徳があって、雲を出して雨を降らせ、民衆に信じられているのは、この泉があることによるのだろう。そうでありながら、泉には名がなく、農民は軽んじて、草や木が生えるがままになっている。

そこで、私は石を並べて泉を囲むことにした。その深さは七尺、幅はその三分の二である。そのほとりに亭あずまやを作り、泉を「雫泉うせん」と名付けた。

古の人は「吁嗟うさ」と言って雨を求めた。それで雨乞いの祭りを「雫う」というのである。

いまの民は、求めて獲られないときに「吁嗟うさ」と言ったり、痛みに呻吟して「吁嗟うさ」といったりする。官職にある者で、そのような民衆の声をきちんと聞いて哀れみ、その求めるところに答えようとして、常山の雫泉のように、民に信じられて頼みとされている者がどれだけいるのだろう。私はこのことを神に愧はじるものである。

（この後に「吁嗟の詩」が続くが、内容はすでに記されたことと重なり、日本語に訳しづらい韻文であるので省略する）

■和路公超然台次韻

超然台ちょうぜんたいの詩を詠んでくれた人に文彦博ぶんげんはくがいた。その詩に和して返したものの。

(文彦博は蘇軾よりも 31 歳年長の大先輩で、富弼とともに宰相となって潞公に封じられた。文彦博は改革に反対して朝廷を去り、このときは北京大名府にいた。なお、宋はいざという時のために、首都の周りに首都に準じる機能を持った三つの都市を配置し、それと首都と合わせて四都体制をとっていた。首都を東京開封府、あとの三都を、北京大名府、西京河南府、南京応天府という)

潞公は富貴を嫌っているのにもかかわらず、
常に国家のための仕事に苦しみ続けなければならない。
潞公は実は古の仙人である赤松子と約束をしていて、
嶺にかかる白い雲を永遠に見続けることになっている。
潞公が談笑するだけで清らかな風が生じ、
天下の人々がそれに共鳴して声を合わせる。
その潞公が超然台の詩を吟じて、
雑草が生えたようになってしまっていた私の心を洗ってくださった。
私はもとはいかなる人間なのかというと、
鹿が無理に官員の装束をまとい、
身は微小であるのに、志だけは空しく大きい――
潞公との交わりは浅いにもかかわらず、しばしば深い言葉を寄せてくださる。
潞公がもしも承してくださるのなら、
退職した暁には真っ先に潞公のもとに報告に参上したい。

ただ恐れるのは、
 そのとき私には酒を買う銭が全くなくて、
 路公が財布を逆さにして振るわなければならないこと。

(文彦博はこの時代として驚くべき長寿で、この先 92 歳までまだ 20 年間も政界で活躍する)

■聞喬太傳換左藏知欽州以詩招飲

密州^{みつ}にきてからの友人^{きょうじよ}に喬紱^{きやうふ}がいる(本章 19 ページなど)。その喬紱が武官から文官に移って^{きん}欽州の知事を拝命したので、別れる前に飲もうとこの詩で誘った。

(何らかの事情で失意の内にあった喬紱を、来年にはきっとよいことがあると蘇軾は励ましていた。それが的中したのである)

果たせるかな、今年、もとの將軍は再びに起つことになった。
 かねて夢に見て詩に詠んだのは、我ながら神業であったのだ。
 貴君は、戦場で倒れて屍^{しかばね}が馬の皮に包まれるようになったところで、
 ごくさいなことと見なしていた。

そして、必ず大官になる相があると言われていた。
 貴君は、あるときは、風土病の流行る土地で戦争の迫りくるなか、
 羽根の扇を悠然と振って軍を指揮しようとしていた。

これから欽州に行く貴君と痛飲できる日々はあと幾日あるのか。

西の軒端にさす月の光がいよいよ冴えてきている——

さあ、その光に乗じてここにきてはくれまいか。

(いよいよ喬紋が発った日には、鷺鳥や鹿の肉を煮て見送った)

■寄黎眉州

故郷の眉州び れいじゆんの知事を務める黎錞き せい（字は希声）に送った詩。

(黎錞のために「眉州遠景樓の記」を書いたことは第1章33ページですで見ている。黎錞は孔子が編んだ(とされる)歴史書である『春秋』しゆんじゆうを深く研究して欧陽脩おうようしゆうに認められた。王安石は、『春秋』は官報の切れ端を集めたようなものでしかないと言(名言?)を吐き、そのことが詩の半ばに詠まれている)

ここの密州の高いところから、故郷はどどこかと望むなら、

一片の千切れ雲へと夕日が落ちてい……

あたりであるのだろうか。

そちらでは、春が終わってもなお瓦屋山が おくさん うずたかには堆く雪があり、

雨の後に空に、峨眉山が びさんの緑があたりを掃うようにして聳え立っていることだろう。

貴公はそちらで古の經典を研究して、『春秋』を笑う者を嗤っているが、

有望の士おうようしゆうを好んだ欧陽脩のような賢者がいま天下にいないのを私は悲しく思う。

いつか私も陶淵明のように『歸去來の辞』を詠んで帰るであろうから、

貴公とともに詩と酒をもって残る歳月を送ろうではないか。

■和趙郎中捕蝗見寄次韻

趙庾ちょう ぐ（字は成伯せい ぱく）が蝗いなごを捕えた詩を詠んだのに次韻した。趙庾は本章92 ページなどに登場している。

麦は、穂たが出てその長けは人の背ほどにもなり、
 稲は、苗が伸びて牛が埋もれるほどにもなった。
 このときに、天はどうしてか、蝗が発生するのを抑えてくださらなかった。
 農事は一時もゆるがせにできず、
 蝗は駆除せよと、法令にきちんと定めがある。
 我が僕しもべたちは手足が傷だらけになるまで、
 我が馬は走りまわって疲れ切るまで、
 蝗退治に努めたので、
 ようやく飛翔する数は減ってきたけれど、
 人も馬もう力は完全に尽きてしまった。
 かくて私はひたすら眠いだけであつたのだが、
 貴公からの百篇の詩を得てようやく目の覚める思いがした。
 はじめは水がちょろちょろ流れるくらいの感じだったのが、
 ついにこれは大海を溢れさせるほどの勢いとなり、

貴公の詩をもっと読みたいくて、

貴公のもとに人を十回走らせてもやめようとは思わない。

日頃から妄庸^{ぼんくう}を軽んじている貴公であるから、

私のごとき詩は貴公にじっと見られては笑われてしまうかない。

貴公のすぐれた詩の才能はすばらしいのに、

世間はとかく批判して詩を切り刻むことばかりする。

いま民衆は苦しみにあえいでいつ癒えるとも知れない。

官職にはそれぞれに役目があってそれを超えてよいものではない。

貴公は貴公の任務に励んで世事を口の端に載せることなく、

空^{くう}に向かって「咄咄^{とつとつ}」と書くようするのがよいであろう。

(詩の終わりは晋の殷浩^{しん いんこう}の故事による。殷浩は讒言によって左遷されたとき、口では何も言わずに、「咄咄怪事^{とつとつかいじ}」(実におかしなことだ)と中空に書いて過ごした。この詩では、職務以外のことを言わない方がよいと趙興に向かって忠告しているようだが、むしろ戒めるべきは蘇軾自身であったのかもしれない)

■薄薄酒二首

これは趙杲卿^{ちやうこうけい}(字は明淑^{めいしゆく})に贈った民謡調の戯れの詩。次のような序文がある。2首のうち1首を訳す。趙杲卿は本章30ページにすでに登場している。

こうせい ちやうめいしゅく

膠西の趙明叔先生は、家は貧しく、酒を飲むのを好む。酒は種類を選ばずに何でも飲む。いつも言うのは「薄い薄い酒でも湯や茶よりはまし。醜い醜い女でも妻がいないよりはまし」。その言葉は洗練されたものではないけれど、真理に近いところがある。それで先生のこの言葉を推奨して広めようと、東国風の楽府^{がふ}(民謡)を作ってみた。見る人が一発笑ってもらえたらと思うだけである。

其の一

薄い薄い酒も湯や茶に勝り、
粗い粗い布も衣がないのに勝り、
醜い妻も醜い妾も空房に勝る。
朝廷の高官に昇ったところで、
寒い冬の早朝に霜を踏んで皇帝のもとに伺候するのは、
何の用事もなくて、夏の日中も、涼しい北向きの窓の下で昼寝をしていられるのに
は及ばない。
皇帝になったところで、
飾り立てた万人の列に送られて御陵に埋葬されるのは、
つぎはぎの衣を着ていても、独り呑気に朝日を背に受けて座っているのには及ば
ない。
生前の富貴よりも死後の文章というけれど、
百年は一瞬、万世も慌ただしく過ぎるだけ。

大賢人も大盗賊も己の本性を捻じ曲げたら同じこと。

とりあえず酔っ払って、

是非も憂楽も皆忘れてしまうのが一番なのだ。

■同年王中甫挽詞

嘉祐^{か ゆう}6 (1061) 年に一緒に制科^{せい か}に合格した王介^{おう かい} (字は中甫^{ちゅう ぽ}) が亡くなり、それを悼む詩を詠んだ。

(蘇軾が特別試験の制科に合格したことは第2章の冒頭で見ている)

仁宗^{じん そう}皇帝は一代の間に、制科の合格者を自ら十五人選んだ。

その十五人が、三千里の高さへと飛び上がる鵬^{おおとり}鳥のような活躍をするのを、天下の人々は眼を凝らして見つめていた。

王介君が取り組んだことは、国家の事業としてまことに用いるべき価値があった。

私ごときはぐずぐずと衰えるばかりで、言うべき価値がない。

十五人が出たり退いたり、あるいは昇りあるいは降りること幾十年を経て、生きるのも死ぬのも一緒にと約束した仲間も、

いまでは一体何人が残っているのか。

いつしか都に行って王介君が活躍した跡を尋ねたならば、

いま都の人々が流している涙の痕がきっとそこらの草にも残っていることだろう。

(仁宗皇帝は在位期間は41年に及んだが、その間の制科の合格者はわずかに15人。

蘇軾自身の注によると、この詩を詠んだ時点で存命だったのは、富弼^{ふ ひつ}、張方平^{ちやうほうへい}、錢藻^{せんそう}、蘇軾、蘇轍の5人だった。富弼は蘇軾が8歳のときに憧れた4人の1人、張方平は蘇父子にとっての恩人、錢藻については第3章73ページで送別の詩を詠んでいる)

■七月五日二首

趙庾^{ちやう ぐ}(字は成伯^{せいはく})とともに超然台上り、趙庾が詠んだ詩に和したもの。

2首のうち1首を訳す。

(趙庾は先の詩(本章116ページ)でも見たように、(蘇軾と同様)言葉が過ぎることがあったらしく、ここでは訳出しなかった別の詩でも、座中でうっかりしたことを言わないようにと蘇軾は諭している)

其の一

諍りを避けて詩は詠まない、
病を畏れて酒は飲まない、
このように決めて、北向きの窓の下で寂しくいて、
この夏の長い一日を、誰が一緒に過ごしてくれるのだろうか。
今年はやたらに暑く、草や木は煮て焦がしたような臭いがきつい。
私は早々と衰えてしまった人間で、
気力は糸のように細く、やっとのことで暮らしている。
秋がきてくれたら佳^よい心持ちになりもするだろうか。

稲にもそろそろ露が宿すであろうから、

「稲が収穫されるのを見るだけで、

新酒の汁が滴り落ちる心地がする」

と、杜甫^{と ほ}が詠んだのに和して、

静かに詩を吟じてみるのもよからうか。

(詩は詠まない、酒は飲まないという誓い(暗に趙庾にもそれを勧めている)は守れないというのがこの詩の結論であろうか)

■趙郎中見和戲復答之

趙庾^{ちょう ぐ}が前に詩に和したので、それにまた答えた。

趙君が詩を吟じるのは、水を撒くかのようで、

ひとたび手を揮うなら三百六十の文字が飛び出てくる。

私に習って詩をやめようとするのは、

絶世の美人の西施^{せい し}が人ごみに紛れこもうとするようなもので、
はなから無理なのだ。

趙君が酒を飲むのは、灰に水を注ぐようなもので、

いくらでも吸い込んでしまい、

一日に三百杯、一年で十万八千杯。

早いうちに趙君を止めなかったら、

東の海も呑みつくして、海底の赤い土があらわになってしまうであろう。

私は衰えて、政事に関わっての誤りが多い。

趙君がきびきびとして秋の鶚^{たか}のようであるのが羨ましい。

これからは、趙君は『老子』を愛読書として毎日飲んで暮らすのでよろしかろう。

仕事の方は、私が趙君の秘書として右から左に署名の代筆をして進ぜようから。

(趙庾は本当に酒が好きだったようで、趙庾の家で開かれた酒宴に招かれて詠んだ詩

もある。その酒宴^{ようねえ}で楊姐さんという歌妓が芸を披露し、同じ蜀の人であることから、

楊姐^{ようきひ}さんを楊貴妃(やはり蜀の人)に譬えた詩を贈っている)

■和晁同年九日見寄

杭州^{こう}にいる晁端彦^{ちようたんげん}(字は美叔^{びしゆく})(本章 60 ページなど)から 9 月 9 日^{ちよう}の重陽^{よう}の節句の詩が送られてきて、それに和した。

天を貫き刺すようにして渡り鳥が飛んで行く。

仰ぎ見る私は、

老いてもはや富貴も功名も思わない、

病んだ馬には千里を走る志さえない。

いつの世も、詩を詠む人は、秋がまたやってきたのを悲しむ。

古来、九月九日はそのような日である。

私は西湖^{せいこ}と別れてから、

その風光は誰に託したらよいのかと思っていた。

貴君を、愁いを窮めさせる境遇に置いたのは、

きっと天の意志なのだろう。

なぜなら、杭州の山水は、

君によって優れた詩に詠まれることを待っていたのだから。

（この詩の終わりは「困窮して後に人は諷刺に巧みになる」という欧陽脩の言葉（第4章 181 ページなど）を踏まえている）

■水調歌頭

「^{へいしん}丙辰の歳の中秋に、朝まで大いに飲んで大いに酔い、これを作り、兼ねて弟を思った」と添え書きがある。丙辰とはこの年である。

明月幾時有、（明月はいつからあるのでしょうか）

把酒問青天。（酒を手し、青い天に問います）

不知天上宮闕、（私にわからないのは、天の上の宮殿では）

今夕是何年。（この夕べはいつの年であるのでしょうか）

我欲乘風歸去、（私は風に乘って天の上に帰り行こうとし）

又恐瓊樓玉宇、（でも恐れるのは、天の上の玉の宮殿は）

高處不勝寒。（高くて寒さに耐えられないのではと）

起舞弄清影、（立って月の光とともに舞うなら）

何似在人間。(こも人間世界ではなくなるのです)

転朱閣、(月の光は朱い楼閣の上を転がり)

低綺戸、(美しい戸口から低くさしこんで)

照無眠、(眠れずにいる人を照らします)

不応有恨、(月の光に恨みがあるはずがないのに)

何事長向別時円。(どうしていつも別れているときに限って円いのでしょうか)

人有悲歡離合、(人には、悲しみと歡び、別れと合うとがあります)

月有陰晴円欠、(月には、陰りと晴れ、円いと欠けるとがあります)

此事古難全。(これらのことがぴったり一致するのは古から難しいのです)

但願人長久、(ただ願うのは、君よ長く久しくあれ)

千里共嬋娟。(千里離れていても、同じ月の光もとで)

(前半は中秋の宴に同席した同僚に示したものの、後半は弟への想いを歌ったもの。これは蘇軾の詞の中でも最も優れたものの一つとされる)

■蓋公堂記

密州^{みつ}の黄堂^{こうどう}(州庁の中の最も立派な建物である正堂^{せいどう})の北側に奥の間を作^{こうこうどう}って蓋公堂と名付け、この文章を書いた。

私が郷里にいたときのこと。

寒気がして咳の出る者が医者に見ると、これは腹に悪い虫がいるせいで、治療しないと虫に殺されてしまうとされた。それで、百金を費やして治療することに、虫下しの薬を飲んだ。薬が腎や腸を攻め伐ること、体の皮膚を焼くかのようにあって、かつ旨いものを飲み食いすることが禁じられた。ひと月ほどすると、いろいろな症状が出てきて、体の内側は熱く、悪寒がし、咳がやまなかった。まことに毒虫にやられてしまったようだった。

それで、別の医者を見つけたところ、その医者は熱を下げるための薬を処方した。薬を飲んだところ、朝には吐き、夜には下し、ついにはまったく食べることができなくなってしまった。

怖くなってその薬をやめ、^{しょうにゅう}鐘乳やら^{うかい}烏喙やらあれやこれや試したところ、^{ひょうそ}癰・疽・^{ようかいげんぼう}癰・疥・眩・瞽といった症状で出ないものはなかった。三度医者を替えて、ますます病気がひどくなったのである。

村の老人が病人に言った。

「これは医者が悪い。薬が間違っていたのだ。君には、^{やま}そもそも疾いがあったのだろうか。人の生命というものは、^き気が主人公であって、食がそれを助ける。君はずっと薬ばかりを飲んで、他のものを口にしなかった。薬の臭いが体の外にまで乱れ出るありさまだ。君の体の中で、百の毒が戦い合ったために、主人公である気をすっかり疲れさせてしまったのだ。その上、助けとなるべき食べ物も隔ててしまった。それがまさしく病なのだ。君はこれからただ静養して、医者を断り、薬をやめて、好きなものを食べればよい。気が完全になること、うまいものを食べること、こ

れが最良の薬だ。きっと効果があるだろう」

これに従うと、ひと月で病は良くなった。

昔の国を治めることもこれと同様であった。秦の孝公しん こうから始皇帝し こうていまでの時代を見ると、新たな法を作り、制度を改め、民衆を酷使して処罰することを徹底的に行った。秦が亡んで漢かんの世になると、宰相しやう かの蕭何そう へや曹参そう さんは秦が民衆を虐げた禍わざわいを実際に見ていたので、戦乱の後に生き残った民に対して何かをさせようとしてもただ嫌われるばかりであるのを承知して、何はともあれ休息を与えることにした。それによって天下は安定した。

曹参は宰相になる前に齊せいの地を治めたのだが、そのときに長老や諸先生を集め、民衆を安定して住わせる方法を尋ねた。齊の地の儒者が何百人もきてそれぞれに異なることを言ったので、曹参はどうしたらよいのか決められなかった。そのとき、蓋公こうという者がいて、黄帝こうていや老子ろう しの教えをよく知っているということを聞き、人を使わして教えを請うた。蓋公は、「治道は清浄を貴び、民は自ずから安定する」ということを言い、それを根本命題として、そこからさまざまなことを引き出して述べた。曹参は、自分は正堂の外に出て蓋公を招き入れ、その言葉を用いたところ、齊は大いに治まった。その後、齊を治めたのと同じようにして天下を治めたのである。天下の人々は今に至るも曹参は賢者であったと称えている。

私は密州の知事となり、蓋公がこの邦の人であると知ったので、その墳墓を探し、子孫を求めた。しかし得るところがなく、残念に思った。蓋公の言葉から、その人となりを想像し、ぜひとも蓋公のような人に会いたいと思った。

私は州庁の正堂の北側に奥の間を新たに作り、ごたごたしたものを整理し、障壁となるものを除いて、州庁の全ての門をからりと開くと、町の南から北まで、一本の縄を引いたように見通せるようにして、これを蓋公堂と名付けた。時々賓客や役人仲間を連れてそこらぶらぶらとし、私はそこに住まうことなく、蓋公のような人がきてくれるのを待った。

曹参は漢朝一代の名臣で、蓋公はその師であった。二人が並ぶ姿は壮観であったろう。しかし、史書には蓋公がどこで終焉を迎えたのか記されていない。古の至人^{しじん}で道を得た者は死なないということであったりするのだろうか。密州の東は海で、南に九仙山^{きゅうせんざん}があり、北に牢山^{ろうざん}がある。その三方には昔から隠れた君子が多いという。そのように聞いてはいても、隠れた君子は実際には見ることができない。もしも見られたとしても招き入れることはできないであろう。

蓋公は民衆にまじってそのあたりを行き来しているのだろうか。どうかして会えたりしないだろうか。

(この文章が進行中の改革を批判しているのは明らかであろう)

■李氏山房蔵書記

廬山^{ろざん}にある白石庵^{はくせきあん}の僧舎には李常^{りじょう} (字は公叔) の蔵書^{こうたく} 900 卷余りが納められ、学問を志す人に供覧されていた。そのことについて記した文章。なおこの廬山は、本章 37 ページで見た密州の廬山ではなく、本家本元の方の山。李常は第 4 章 194 ページに登場している。

象の牙、犀の角、珠玉あやといった怪しくも珍しい物は、人の耳目を悦ばせはしても、実際の用には適してはいない。金属や石、草や木、絹糸や麻糸、五穀等々は実際の用に適しているけれど、これらは使えば古びるし、これらを費やせば尽きてしまう。

人の耳目を悦ばせ、実際の用に適して、これを使っても古びないし、これを費やしても尽きないし、賢い人もそうでない人もおのおのその才能に従って得るところがあり、賢い人もそうでない人もおのおのその身の程に従って仁や智について教えられることがあって、才能や身の程が違っていても求めさえすれば必ず獲られるものがあるのは、ただ書物だけであろうか。

孔子こうしや古の聖人いにしへも、その学問は必ず書物を読むことから始めた。しかし、そのころにたくさんろの書物を持っていたのは老聃ろうたん（老子ろうし）だけで、晋国の韓宣子しんかんせんは魯国ろに行き初めて『易象』や『魯春秋』を見ることのできた。呉国の季札ごきさつは北方の国々を親善訪問して初めて『詩経』の風、雅、頌を聞くことのできた。楚国で『三墳』ふん『五典』ごてん『八索』はちさく『九丘』きゅうきゅうといった書物を読んでゐたのは倚相いしやうだけだった。この時代りくきやうに生まれた人で『六経』を見ることのできたのはわずかしかなかった。学問をするのは実に難しいことであつた。そうでありながら、その当時の人々が礼楽に習熟し、道徳を深く身に具えていたことは、後世の君子のとてども及ぶところではない。

秦や漢の時代以降は、書物を作る人がますます多くなり、紙も筆記の道具もますます簡便となつて、書物がますます増え、書物を持たない人はいなくなった。とこ

ろが、学問をする者がますます粗略になったのはどうしてなのだろうか。

かつて私は老成した儒学の先生方に会うことができた。先生方が言われるには、
「若い頃に『史記』や『漢書』^{しき}^{かんじょ}を読みたいと思っても書物がなかった。幸いにも書物があれば、皆自分の手で書き写し、日夜、声に出してそれを読み、理解が十分ではないのをただただ恐れた」。

近年は、商人が書物をさかんに刷って、諸子百家の書物が何万という紙によって日々世に広められている。学問をする者にとって、書物はこれほどまでにたくさんあり、かつ手に入れやすくなったのである。ならば、書く文章にしても学術の水準にしても昔の人の何倍も立派になってしかるべきであるのに、いまの人たちは書物を手にしてもきちんとは読まないで、根拠のないことを適当におしゃべりしているだけである。これはまたどうしてなのだろうか。

私の友人の李常は、若い頃に廬山^{ごろうほう}の五老峰の下の白石庵の僧舎で書物を読んだ。李常がそこを去ってからも、廬山の人々はそのことを思っ、その僧舎を指して「李氏山房」^{りしさんぼう}と呼ぶようになった。蔵書はおよそ九千巻余り。李常は九千巻の書物からなる学問の大河を渉ってその源を探り、そこにある華と実を採り、その深い味わいを咀嚼し、それらを自身の内に納め、文章として外に出し、また実践してみたので、現在の世にその名が知られるようになった。そうしたことがあっても、書物はもとよりそのままであって、少しも減ったりするところがない。来る者があれば与え、無窮の求めにも無尽蔵に応え、その才能と身の程に従って得ようとするものを十分に満たしてくれる。

李常はこのような書物を家に内にしまっておくのではなく、もといた僧舎において人々の目に供している。それは仁者の心というべきである。

私はすでに衰え、かつ病んでしまって、世に用いられるところがない。これからは暇な時間を得て、まだ読んでいない書物をことごとく見てみたいと思っている。しかも、廬山はもとより遊んでみたいと願うところであってまだ行けていないのだから、まさに廬山の五老峰に退隠して、李常の蔵書を開いて見るべきなのである。もしかして、李常が拾い損なったものも得て我が身を補うような結構なことがあればと思うものである。

私は記念の文を書くよう李常に求められた。そこでこの文章を書き、この山房に来る者に次のことを知ってもらいたいと思う。昔の君子は書物を見るのが難しかったこと、そして、いまの学問をする者は書物がありながら読まずにいるのは惜しむべきであること。

（前の文章や本章 87 ページで見た「えんかん だいひ かく塩官の大悲閣の記」を合わせて見ることで、蘇軾の学問観を窺い知ることができるであろう。科挙の改革案に対して「經典のおよその大義を理解すれば十分であるとの意見が出てくるのでありますが、それは実に粗雑な考えです」と批判していた（第3章 38 ページ）のと通じるのであろう）

■次韻周邠寄雁蕩山図二首

こう杭州で親しくした周邠（しゅうはん字は開祖）（第4章 123 ページなど）から、雁がん蕩山を描いた画とともに詩が送られてきたので、それに答えた。2 首の

うち1首を訳す。雁蕩山は杭州より南の温州樂清県おん らくせいにあり、海に臨んで聳える天下の奇秀とされる。

其の二

西湖せいこでの三年間は貴君と一緒にだった。

いまの私は、塵の中の馬、籠の中の鶴。

雁蕩山の画に入り――

私は、東の海のほとり、

海のそのまた向こうから日が昇るのを見る、

山の中にある石の橋を渡り、

そのまた向こうの長い虹を踏む――

いまは遥かに思いを寄せるだけ。

別れて以来、貴君にも白髪が増えたであろう、

ときには酒樽の前で、この病気の翁のことを話したりしているだろうか。

残念なのは、貴君が蜀しよくの山々を知らないこと。

いつか手を携えて、蜀の山に分け入り、

竹筒に入れた酒を飲もうてはないか。

■送碧香酒与趙明叔教授

趙杲卿ちようこうけい（字は明淑めいしゆく）（本章117ページに登場）に碧香酒へきこうしゆを贈ったのに添

えた詩。碧香酒の由来は詩の中にある。

聞くに、貴君の奥方かみこ おおくは賢くて廉で、

素足でもって自ら安酒を買いに行かれるし、

貴君に向かって、

「決して大臣などにはなつてくださるな」

と言っておられるとか。

貴君も、陛下の御前で珍しい料理を賜ることを羨ましく思ったりなどしない。

私が感心するのは、

貴君がいよいよ風変わりであるのを少しも恥じたりしないこと、

その上、貴君が吟じるのは、

「妻は醜くてもよろしい、

他人が夫を嘲り誇るのを憎んでくれるならば」

冬の暖かい日にも、貴君の家では、

「寒い、寒い」

と叫んでいるとか、

それは布団がないからだ。

世間の人はそういうことを聞くと失笑する。

そこで私は、布団の代わりといつては何だが、酒を贈ろうと思う。

これは先帝の嬪殿の家から届けられた碧香酒というもので、

ヨーグルトのように濃厚である。

私は、ひたすら飲むことをだけを求めたかの有名な大酒呑みとは異なり、

碧香酒を独り占めする気はないので、

貴君の家を和やかにする助けとしてひと壺を贈らせていただく。

(先帝の嬪^{おうしん}とは王詵で、王詵については本章 154 ページで改めて触れる。「かの有名な大酒呑み」とは本章 55 ページにあった劉伶^{りゅうれい}。この詩に和して趙果卿が答え、それに蘇軾が答え、さらに趙果卿が蝗退治の仕事で1カ月ほど外に出てから帰ってくると、酒をまたひと壺贈って慰労し、同じ韻で詩を詠んで添えたりしている)

■雪夜独宿柏仙庵

11月の雪の夜に、密州^{みつ}の柏仙庵^{はくせんあん}に泊まった詩。

しとしとと降り続いていた晩からの雨は、

いつしかみぞれとなった。

ゆるゆると小さな庵で眠るのはなかなか風情がある。

ふっと夢から覚めると、窓辺に雪が打ち付けている。

雪の夜は更け行くにつれて静かになり、竹のそよぐ音だけが聞こえる。

この冬も暖かさがようやく衰えて、天候がびしっとひきしまったようだ。

それでも、この程度の雪では、

秋からの日照りを潤すにはまだ足りなくて、

田畑を耕すのはなお先のことであろうか。

天がどのような意向であるのか読み取るのはまことに難しい。

かくして、翌朝には、春爛漫のような晴天になった。

■和孔郎中荊林馬上見寄

蘇軾^{みつ}は密州にきてまだ2年であったが、この月に詔が下り、河中府^{かちゅう}の知事として移動することになった。後任の孔宗翰^{こうそうかん}（字は周翰^{しゅうかん}）が密州に向かってくる途中で詩を詠んで送ってきたので、それに答えた。

密州のあたりでは、

今年の稲は眼の高さにも成長しなかった上に、

来年のための麦の種はわずかしかない。

私は知事として、

この邦の人たちが苦勞ばかりしていて、

肌には草の棘がいつも刺さっているのを恥ずかしく思う。

普段から五千卷の書物を読んだと胸を張っていないながら、

その一文字も民衆の飢えを救うのに役立たせることができなかった。

民衆は肌着すらないことを怨み、

賢人の訪れを切望している。

孔子二十世の孫は漢代の孔融^{こうゆう}；その堂々の気風は周囲を圧倒した。

孔子四十七世の孫の貴君、いまこちらにこられることになった。

貴君が密州の郊外にまだ至らぬうちから、

清らかな風がそちらより吹いてきている。

困苦するこの地の十万の民を、

貴公のような君子を煩わせて託すことになった。

この私は、^{どうとう}滔滔と流れる大河に押されて、はたしてこれからどこに行くのだろうか。

いつか蜀への帰路をとって、

春の山に^{ほととぎす}子規を聞くことがあるのだろうか。

■江城子

^{みつ}密州を離れることが決まってから^{ちょうぜんたい}超然台に上ってこの詞を詠んだ。

前瞻馬耳九仙山、（前に見るのは^{ばじさん きゅうせんざん}馬耳山と九仙山）

碧連天、（天に^{みどり}連なる碧）

晚雲間。（暮れゆく雲の間）

城上高台真箇是超然。（町のこの高台はまさしく「超然」）

莫使匆匆雲雨散、（雲も雨もすぐに消えてなくなってくれましょう）

今夜裏、（今夜は）

月嬋娟。（美しい月）

小溪鷗鷺静聯拳、(小さな川で静かに身を丸めている鷗や鷺)

去翩翩、(去り行く一羽二羽)

点輕烟。(淡い雲の彼方に点となります)

人事淒涼回首便他年。(人間界のことは寂しくも、首を巡らす間にもう前の年に)

莫忘使君歌笑处、(忘れないでください、知事が歌ったり笑ったりしたところ)

垂柳下、(柳の垂れる下)

矮槐前。(低い^{えんじゅ}槐の前)

■河満子

馮京^{ふうけい} (字は^{とうせい}当世) に寄せた詞。

(馮京は蘇軾^{そしつ}の 15 年先輩。慶暦^{けいれき}8 (1048) 年、馮京は 28 歳のときに蜀^{しよく}の鄂州^{がく}で科挙の一次試験を受けて首席で合格し、翌年に都で行われた二次試験も三次試験もすべて首席で合格した。世に稀なこととして馮三元^{ふうさんげん}と称賛された(科挙を首席で合格した人を「状元^{じょうげん}」という)。富弼^{ふひつ}の娘を娶り、政界で活躍し、副宰相にまで昇った。王安石^{おうあんせき}の改革には批判的で、改革の問題点を鋭く衝く蘇軾を朝廷の重要な職に推したこともあった(成功しなかった)。飢饉のために王安石が宰相を降ると(本章 16 ページ)、次の宰相候補として馮京の名が上がったものの、呂惠卿^{りょけいけい}によって阻まれ、都に外に出た。この年の 3 月に蜀の茂州^もで少数民族が反乱を起こすと、馮京は郷里の危難を救うのは自分であるとして、朝廷に願い出て成都に赴き、10 月までに治安を回復させた。そのことを聞いて、蘇軾はこの詞を作った。冒頭の 12 文字は、蜀の山と川の名を挙

げて反乱の顛末をイメージ的に歌っている)

見説岷峨凄愴、(見られましたのは、^{びんざん が びざん}岷山と峨眉山の惨憺たるありさま)

旋聞江漢澄清。^{ちようこう かんすい}(しかし、すぐに聞かれましたのは、長江と漢水は清らかに澄んだとのこと)

但覺秋来歸夢好、(これでわかりました、秋に見るべきは故郷に歸る夢)

西南自有長城。(蜀には長城というべき貴公がおられるのですもの)

東府三人最少、(都においてかつて貴公は三人の副宰相で最年少)

西山八国初平。(西に行かれてはざらりとハカ国を平定されたのです)

莫負花溪縱賞、(^{かん か けい}必ず存分に愛でていただきたいのは浣花溪)

何妨藥市微行。^{くすりいち}(庶民に雑じって遊んでください成都の薬市)

試問当壚人在否、(試しに聞いてみてください、いまいるのかかの酒売り娘)

空教是処聞名。(たぶんあやふやな名を聞いただけとなるでしょうか)

唱著子淵新曲、(^{おうほう}でもきっとあるはずです、漢の王褒のような埋もれた才人の新曲)

応須分外含情。(貴公がそれを唱えれば格別の情がありましょう)

(詞の後半では、成都の名所や行事を楽しんだ上で、蜀の地に埋もれている才人を見出してほしいと言っている。父の^{そ じゆん}蘇洵は、まさに馮京と同じように混乱を收拾しにき

た^{ちようほうへい}張方平によって見出されたのであった (第1章62ページ))

■留別雫泉

12月上旬に孔宗翰^{こうそうかん みつ}が密州に到着し、代わって蘇軾^{そし}は新たな任地に向かった。雫泉^{うせん}（本章 111 ページ）で開かれた送別の宴での詩。

酒を挙げて雫泉に捧げる。

王維^{おうい}は送別の詩に、

「旅人となって、黄金は尽きはて、

家に還って、白髪が新たになっただけ」

と歌ったが、

雫泉に映る我が姿はまさにそれだ。

泉の水の中にある空、

それがこの私をまた照らすことがあるだろうか。

二年の間、雫泉の水を飲み、雫泉の魚や鳥と親しくした。

もう一度、雫泉の水を掬う。

その手をまわして、傾く日を遮る。

これから私は西に向かって行くのだ。

（新たな任地として命じられた河中^{かちゅう}府は遠く西方にある。唐の時代に杜牧^{とぼく}は、長安^{ちやうあん}に向かったとき、「手で西日を遮りつつ進んで行く」と詩に詠んだ。蘇軾^{そし}は王維と杜牧の2人の詩を踏まえて、即興でこの詩を詠んだのである）

■別東武流杯

川のほとりの流杯^{りゅうはい}という場所で別れの詩を詠んだ。

笑ってしまうのは、

官僚の住まいなんぞは宿場の旅館のようなもの。

人の世に生きるのは浮き雲に等しい。

百年の後になれば、

いかなる老人だって知りもしない、

いまこのときに知事だった者がここに立っていたことなどは。

ただあの二本の松だけは覚えていてくれるだろうか。

■董儲郎中嘗知眉州与先人遊過安丘訪其故居見其子希甫留詩屋壁

蘇軾^{しよじょう}は諸城県を発つと、北に進んで 120 里^{あんきゆう}の安丘^{とうちよ}で、董儲^{とうちよ}がかつて住んでいた家を訪ねた。詩題は「董儲^びはかつて眉州^その知事となり、父の蘇洵^{じゆん}と交流があった。私は安丘を通過した際に董儲の故居を訪れ、子の董希甫^{とうきほ}と会い、壁に詩を書いた」。

(この詩にはたくさんの故事が詠み込まれているので、若干の説明を補って訳す)

白髪に至っても、皇帝に知られることなく、

大きな役目が与えられなかった——

董知事の不遇は、漢代の顔驄がんしに似ていようか。

顔驄が若かったときの皇帝は文を好み、顔驄は武を好んだために、用いられなかった。

顔驄が壮年になったときの皇帝は美顔を好み、顔驄の顔は醜かったので、やはり用いられなかった。

顔驄が老いてから後の皇帝は若者を好んだので、またしても用いられなかった。

しかし、顔驄はついには報いられた。

人々はいまに至っても、董知事の文章は最も優れていたと記憶している。

魏の曹操そうそうは、たまたま橋玄きょうげんの墓の近くを通ったときに、

自ら祭文を作って墓に捧げ、

今後ここにきたときには必ず二羽の鶏をもって祭ると誓った。

漢の武帝どうちゅうじょは董仲舒の墓の横を通るときには必ず馬から下った。

この二つの故事には及ばないものの、

私は所縁ゆかりある人を忘れまいと、董知事の墓に詣でたのだった。

楚の宰相であった孫叔敖そんしゆくごうが亡くなると、

その子は貧窮の余り薪を背負って売って歩かなければならなかった。

晋の向秀しん きやうしゅうは若い頃に都で著名人との交流があったが、

その当時の人たちは政敵によって皆都を追われてしまい、

向秀は西に旅する途中で、かつての著名人の旧宅を過り、

たまたま隣人が吹く笛の音に昔を思っ泣いた。

董知事の子は、この冬のさなかに、薪を背負って売って歩かなければならないような境遇は免れているとはいえ、

私は隣人が吹く笛の音に心を碎かれて耐えることができない。

君主のために命をも捧げる活躍をしたいと、君は思っているだろうけれど、
敢えてそのことを言うのはやめよう。

私は董知事の墓に涙を注ぎつつ、

西南の空に浮かぶ白雲を見つめるのである。

(西南の白雲とは、都の上の雲のであろう。都の人たちが董儲のことを思い出して、
子の董希甫に活躍の場を与えてくれまいかと願ったのである)

■跋董儲書

上の詩に詠まれた董儲^{とうちょ}が遺した書^{しよ}に記した跋文が二つある。書いた時期は明らかではないが、二つを合体してここに訳す。

董儲^{あんきゆう}は密州安丘^{ほうげん}の人で、詩の名手として宝元、慶暦^{けいれき}のころに知られた。書も極めて巧みだったが、人に知られることがなかった。その書を見ると、かつて一世を風靡^りした李建中よりも勝れている。近年でも董儲の書に比肩するものはなかなか見ない。ところが、人々はそのようには思っていない。私は書を善くする者ではない。ところが、世の中の人私の書を良いという。このことから、どれが良くてどれがそうではないのか、どうやら一つには決まらなないと私は知ったのである。

■除夜大雪留濰州元日早晴遂行中途雪復作

き ねい
熙寧10（1077）年、蘇軾42歳。

あんきゆう
安丘からさらに北に進んだ濰州で大晦日を迎え、夜のうちはかなりの雪だったが朝には晴れたので、元日も留まらずに出発した。途中でまた雪となり、この詩を詠んだ。

大晦日は雪によって足止めされ、

元日は晴天によって送り出される。

昨夜飲んだ酒に、春になったばかりの風が吹いてきて、

痩せ馬の上で、ゆらりゆらりとまだ夢の残りの内にある。

暁の明かりがほんのり開いてきたかと思うと、

あたりの花の上で光がぐるぐると巡る。

まことに結構な気分、馬から下って野で一杯やりたくなるが、

相手をしてくれる者は誰もいない。

にわかに暗い雲が合わさり、

鳥の羽根のような雪が、空からいっばいに乱れて降ってくる。

おどり
私は白い鳳になって飛んで行くかのようだ。

ここに傾いた棟が連なっているのは、

都の東の地方は三年の間旱魃が続き、

逃亡した家がたくさんあるからだろう。

農家の老人は鋤をほうり捨てて嘆き、

涙は餓えた腸をさらに痛ませることだろう。

春の雪はいずれ終わるとしても、

春の麦をいまから植えてまだ間に合うのだろうか。

人々は労働の苦役を怨まずにはいられない。

せめてもの手助けになればと、

農事暦を詠んだ古い童謡でも歌ってみようか。

(春にはあれをして、夏にはこれをして、といろいろ挙げて、秋には米櫃がどっさり
いっぱいになると歌いあげる童謡があった。現実にならばとの願いを箝めて、蘇
軾は歌おうというのである)

■大雪青州道上有懷東武園亭寄交代孔周翰

濰州から雪のなかを北へ北へと青州に向かいつつ、密州の園亭を思い出
し、新しい知事となった孔宗翰(字は周翰)にこの詩を寄せた。

超然台の上に雪が降るときには――

街並みも山も川もすばらしい限り、

海の風が波を碎いて、青いガラス片を空に飛ばすのも、

その向こうに、三つの神山の白銀の宮殿があるのも、

超然台から見えようか。

こうこうどう

蓋公堂の前に雪が積もるときには――

緑の窓と赤い戸が雪明りに映えて、

堂の中には一人の美女が雪と妍けんを争い、粲然さんぜんと笑うと、玉のような真っ白な歯が輝く。

さんどう

それよりも山堂の雪はもっとすばらしい――

青い松、怪しい石に白い糸が乱れ舞い、

ここに知事殿は遊んで帰らずにいて、

真夜中になってようやく憂い顔で馬に乗る。

君は知っているだろう――

りそ

唐の時代の李愬が大雪の中、

独り蔡州城さいに入って賊の呉元済ごげんさいを縛り取ったのを。

君は知っているだろう――

もうこうねん

唐の時代の孟浩然が大雪の中、

独り驢馬に乗って長安に向かう道で詩を吟じたのを。

いつか貴君と雪のなか、戸を閉じて美酒をとものにしたいものだ――

人の毀誉褒貶をほしいままにする連中がいなくなったときに。

（蘇軾は雪の中でいろいろな空想を楽しんでいる。超然台（本章 81 ページ）、蓋公堂

（本章 124 ページ）、山堂はいずれも密州にあって蘇軾が改修したり造ったりした。

後半では、李愬を孔宗翰に、孟浩然を蘇軾に譬えた。孟浩然是雪の中で「落雁は沙渚

に迷う」と、長安に上ったものの皇帝に用いられずに終わったことを予感するような句を詠んだ)

■至済南李公枋以詩相迎次其韻二首

蘇軾は黄河沿いの、この地方では第一の都会である済南(齊州)を目指した。そこに着く前に、齊州知事の李常(字は公枋)から詩がもたらされた。それに返したのがこの詩。

(李常は本章127ページなどで見ているが、これより少し前に齊州知事になっていた)

其の一

よれよれの褰コートに瘦せた馬、

古いにしえの大河のほとりに立つと、

野は広く天は低く、白い米粒を撒くようにして雪が落ちてくる。

笑ってしまうが、

私のこのありさまは、雪を噛み毛の敷物を食らった蘇武であろうか。

これから会うのは、官位を売って酒を買ったという李白であろうか。

官遊かんゆうは到るところに身を寄せるようなもの、

農事を自分の手で行うようになるのはいつのことか。

新しい詩を作って貴君の詩に和すので、

昔からよくいわれるように、

風雨のために暁の鶏が鳴かなかったなどと言いつきをしないで、
早起きをしてこれを読んでもらいたい。

（自分を漢代の英雄である蘇武に、李常を唐の大詩人である李白の譬えたのは、もちろん戯れである。「官遊」は官僚として各地を転々と移り行くこと。「身を寄せるようなもの（身如寄）」は蘇軾がしばしば用いた表現で、何に身を寄せるのかという対象が明示されていないだけに広く深い含意がある）

其の二

夜にどうすい雪水のほとりで笙歌を聞いたあの楽しさは、
頭を回らせばすべては塵。

あのとき貴公は湖州知事になったばかりで、
密州知事として赴任する私を見送ってくれた。

いま貴公は齊州知事になったばかりで、
私は河中府知事として赴任するのを見送られる。

私はいつもどこかに行く途中に、貴公を主人として逢うのである。
集まったり散ったりするのは、よく考えればすべてが夢だ。

名声と我が身とどちらが大切かという問いがある。
ようやくそのどちらでもないとわかってきた。

貴公と会って話すときは、夜に蠟燭を継ぎ足す心配はない、
蝙蝠が飛ぶ夕方から鶏が鳴く暁までたちまち時間が飛んでしまうのだから。

(雪水は本章 58 ページにあった呉興^{ごこう} (湖州) の名所。道の途中で李常にこの詩を返して少し進むと、甥^{そてつ} (蘇轍^{そち}の息子) の蘇軾^{そてき}と蘇适が出迎えにきた。弟は前年の 10 月まで齊州掌書記としてこの地にいたのだが、家族を残して都に帰還していた。蘇軾は済南に着くと、李常や弟の家族とともに 1 カ月余りをそこで過ごした)

(弟が都に帰還したのは、王安石が再び宰相から退いて政界を引退するという大きな変化があったからだ。王安石は一度は宰相に返り咲いた(本章 71 ページ)のだが、神宗^{しんそう} 皇帝も壮年に至ってなおも全てにおいて王安石に従うことに不満を抱くようになり、一方で、王安石が最も頼りにしていた長男の王雱^{おうほう} が 33 歳の若さで死んで気力を失ってしまったことを主な要因として、王安石はまた宰相を辞め、その後朝廷に戻ることはなかった。王安石が去った後、呉充^{ごじゅう}、王珪^{おうけい} の 2 人が宰相として改革を続行していくことになったが、馮京^{ふうけい} (本章 136 ページ) が成都から朝廷に呼び戻されるなどの変化も見られた。蘇轍は王安石の去った後の都に行くと、これまでの改革の問題点を指摘する文章を朝廷に提出して政策の大転換を訴えた)

■祭柳子玉文

杭州時代に深い交流があった柳瑾^{りゅうきん} (字は子玉^{しぎょく}) が亡くなり、蘇軾はこの祭文を書いた。原文は 1 句 4 文字の韻文で、言外に響く余韻に深い味わいがあるのだが、ここでは普通の散文として訳す。

ああ、柳先生^{りゅう}は南国に秀で、はなはだ敏^{スマート}かつ文^{ダンディ}で、発する声は幼^{ソフト}であった。武

器庫のように縦横の知識を蓄え、文壇において光り輝き、とりわけ詩は鳥が轉るように天賦のものであった。唐代の詩人の元稹^{げんしん}は軽薄^{はくきょうい}、白居易^{もうこう}は通俗、孟郊^{かうこう}は寒々しく、賈島^{かうとう}は痩せているといった欠点があったけれど、先生がひとたび詩を吟じると、他の人のあまたの作品はどれもつまらないものに見えた。古くからの友人にしても、新たに付き合う公卿大臣^{こうけい}にしても、先生のまわりに集まったのは、地位などは青空に浮かぶ雲か何かのように視る者ばかりだった。人は、先生は志を得ないままに白髪が長く肩にまで垂れるようになったと言う。先生は世俗から高く抜きん出て、頓着のない性格であったために、人の謗りを受けやすかった。思うところがあって、世間から離れ、山の猿を友としようと決め、官服を棄てて帰郷した。山の麓の土地を耕し、夜具には綿がなく、朝飯の釜には粥がないような暮らしを楽しみ、世間の欲しがるものには一切見向きもせず、俗な臭いは一切なかった。これはいわゆる、出世して得るものと失うものを差し引きしたらどうなのか、あるいは、病むところがあってこそ天寿を全うするといったことに当てはまるのであって、不幸ということではなく、誰かに咎められるようなことでもなく、先生にかねてから具わっていた生き方だったのである。

かつて私が杭州にいたとき、先生は喜んで私を迎えて下さり、半年の間を一緒に過ごし、毎日酒を飲み交わした。朝に南屏山^{なんぺいざん}に遊び、日暮れに靈鷲寺^{れいじゅう}に泊まり、雪の窓辺で腹を減らしながら清らかな詩を詠み合ったこともあれば、沙河^{さか}のほとりを夜に歩き、真昼ように白い月が照らす下で、先生の古めかしい服装が土地の婦人たちを驚かせ笑わせたこともあった。人と人との会合の難しさは、刺繍の糸

のようで、ひとたびほどけてしまえば元には戻り難く、あるいは水をひっくり返したならば救いようがないようなものである。先生は老齢に至って名も徳も盛んであったが、厚く付き合う人は少なく、私は先生のもとに来るのが遅かった。

先生には立派な子がいて、先生の後をより大きくしてゆくであろう。特に伸び盛りの二人の孫がいる。それは私の甥に当たる。

先生がすでに永遠のもとに帰ってしまったことを思うと涙が落ち続けて止まらない。この詩を歌って先生に一樽の酒を捧げる。

(この文章の初めの方で、唐代の4人の詩人をかなりの辛口で批評している。「元輕白げんけいはく俗、ごく こうかんとうそう郊寒島瘦」はわずか8文字でありながら的確な評としてよく知られる。柳惝と半年の間一緒に過ごしたといっているのは、飢饉対策のために奔走した時期のこと(第4章 154 ページ)。柳惝の孫の柳閔りゅうこうと柳闌りゅうへきは、蘇軾の伯父の蘇渙そかんの娘の子であるから、蘇軾から見ると甥に相当するということは第4章 164 ページで見ている)

■僕曩於長安陳漢卿家見吳道子画仏碎爛可惜其後十余年復見之於鮮于子駿家則已裝背完好子駿以見遺作詩謝之

蘇軾は齊州せいしゅうを発って都に向かい、途中の鄆州うんしゅうで鮮于侁せん うしん(字は子駿ししゆん) (本章 84 ページでその名を挙げた) と会い、吳道子ごどうし(あるいは吳道玄ごどうげん) が描いた画を贈られ、この詩を詠んだ。詩題は「私は先に長安の陳漢卿ちんかんけいの家で吳道子が描いた仏画を見た。しかし、惜しいことに破れてぼろぼろになっていた。それから十余年後のいま、鮮于侁の家で同じものを見せ

られたところ、みごとに修復されていた。鮮于君はその画を私に贈ってくれたので、詩を作ってその謝礼とする」。

（呉道子は唐代一とされる絵師。その画を蘇軾は鳳翔時代に見て詩に詠んでいる（第2章 29 ページ）。長安の陳漢卿の家で見たのは、鳳翔の任期を終えて都に戻る途中のことだったと推測され、^{すいどう し ず}「酔道士図」（第2章 118 ページ）を見たのと同じときであったのだろう）

世間の貴人は、

お金がたくさあって体も閑なので、

銭勘定を度外視して書画を争って買ったりする。

^{りょう}梁の時代^{いんてっせき}の殷鉄石が模倣して書いたものを、

^{おうぎし}かの王羲之の真筆だとしてつかまされたり、

^{ごどうし}呉道子の画だとして出回っているものは、

ほとんどが唐の終わりの^{しゅう}朱繇が描いたものであったり、

そんなことがよくあるのだ。

仏画というのは、

^{くすぶ}香の煙に燻られ、雨漏りに損なわれることも多く、

それを立派な軸で外見ばかりを立派に装って売り買いするのは、

^{はくろく}昔、白鹿^{たま}の皮で壁を包むのが流行ったようなもので、

壁の値はたかだか千数百銭なのに、白鹿の皮の値は四十万銭、

どちらが価値があるのかわかったものでない。

呉道子の仏画の技は神から授かったもの――

呉道子は夢の中で空を飛ぶ仙人となり、

覚めてから筆を下し、

心に何かを思うこともなく、

妙所に迫る神技は線の末端にまで及んだ。

私は昔この画を長安で見て、

至宝が無残な姿となっているのに涙をこぼした。

絹の糸が切れ切れとなり、一部の断片が蝶のようにひらひらと飛び去ってしまった

ありさまは、

見る忍び難いものがあった。

鮮于君はこの画をよく收拾して補綴したので、

消え失せてしまったところはあっても、

描かれた精神はついに全きを得た。

ここで思い出すのは、

ある人が杜^と甫^ほの詩集を得て読み進めたところ、

「身軽一鳥」とだけあって、句末の一文字が欠けていた。

人々と、ああでもないこうでもないと思案したのだが、

後に善い本を得たところをそれは「過」の字であって、

誰一人として当てることができた者はいなかった。

つまり、俗眼をもって画の傷んだところを補おうとしたところで、それはできもしないのだ。

貴君に尋ねると、まことによく画の意^{こころ}を把握している。

世間の貴人が画を一見して、

これはよいとか何だとかいい加減なことを言うのは全く恥ずかしい。

財産をはたいて買ったところで意味がない。

ぼろきれとして使うのにも値しないものをつかまされ、

火を付けて煙にしまうのがよいのだ。

(末尾は調子に乗って、ややブラックなユーモアをきかせるところが蘇軾らしい)

■満江紅

蘇軾は鄆州^{うん}から黄河^{こうが}に沿って都に向かい、一方で蘇轍は兄を迎えるために都を出て、2人は澶州^{せん}と濮州^{ぼく}の間で行き会った。これはそのときの詞。

(兄弟が会ったのは、潁州^{えい}に隠退^{おうようしゅう}していた欧陽脩のもとと一緒に訪れて以来、ほぼ6年ぶりだった。この詞の前半は、6年前に、蘇軾が潁水^{えいすい}の流れに乗って東に進み、弟が西に帰って行った場面を回顧している(第3章120ページ)。牀^{ベッド}を並べて夜の雨音を耳にしながらしみじみ語り合う「夜雨対牀^{やうたいしゅう}」こそが兄弟の最も願うものだということは第2章21ページで見ている。詞の後半は黄河のほとりでの再会を歌っている)

清潁東流、(東に流れる清らかな潁水)

愁目断、(愁いの目はもう届かない)

孤帆明滅。(見えたり見えなかったりする一艘の船)

宦遊処、(官員として行く先は)

青山白浪、(青い山、白い浪が)

万重千疊。(万に重なり、千に畳まれるのです)

辜負当年林下意、(背くのは、あのときに林の下での意^{こころ})

対牀夜雨聴蕭瑟。^{べいど}(牀を並べて、夜の雨音を静かに聴こうと決めたこと)

恨此生、(恨むべきはこの人生)

長向別離中、(長く別離の中にあって)

添華髮。(増えるのは白い髪ばかりなのです)

一樽酒、(ここに一樽の酒)

黄河側。(黄河のそば)

無限事、(限らないことごとを)

従頭説。(初めから話しましょう)

相看恍如昨、(逢えばぼんやりとして昨日のよう)

許多年月。(でも長い歲月)

衣上旧痕余苦淚、(衣の上には涙の旧い痕が残っていても)

眉間喜氣添黃。(顔に喜びの色が添えられます)

便当君、(さあ、まさにいま君と)

池上覓残春、(池のほとりで春の終わりをさかししょう)

花如雪。(雪のごとき花に)

■洞仙歌

蘇軾と蘇轍は都へと進み、陳橋駅ちんきょうに着いたところで、蘇軾には改めて徐州知事に任命するとの辞令が2月12日に朝廷から下ったと聞かされた。また、同じ日に南京応天府なんけいおうてんの知事に任命された張方平ちやうほうへいが、自分の幕僚として蘇轍を南京に連れて行く意志であるということも聞かされた。これはよい報せではなかった。改革の大幅な見直しを求めた蘇轍の訴えは聞かれず、兄弟は都で活躍する場を得ることができなかつたのである。

兄弟が都の門に到着すると、蘇軾はそこで足止めされ、中に入ることが許されなかつた。都に入れなかつた理由は明らかではないが、改革派が蘇軾を恐れたのだろう。当時、都にいた陳襄ちんじやう(かつて杭州知事として蘇軾と親しくした人)らが蘇軾を朝廷で用いるよう運動したが、それは叶わなかつた。行き場に困った蘇軾は、やむをえず都の郊外にあった范鎮はんちんの東園に居候することになった(范鎮は蘇軾の大先輩で、重職を歴任した人)。

東園に滞在するうちに、春は盛りを迎え、3月2日の寒食かんしよくに、蘇軾は王詠おう詵しんに誘われて都の北郊外にある四照亭ししょうていのあたりで遊んだ。そのときに詠んだと推定されるのがこの詞。「柳よを咏む」と注記があり、柳および柳を

人格化した女性を、なよなよと情緒的に詠んだ。本来の詞らしい詞であるといえるだろう。

(王誥は、先代の皇帝である英宗^{えいそう}の娘の婿^{しんそう}(つまり神宗皇帝とは義理の兄弟という間柄になる)で、豊かな暮らしをし、書や画を好む風流人であった。蘇軾が杭州に行く前に都にいた頃から親しくし、杭州や密州にいた間も、折につけ珍しいものを都から届けてくれたりしていた(本章 133 ページで見た酒の贈り主は王誥)。王誥は、都に入れずに困っている蘇軾に酒食を贈るなど何かと支援した)

江南臘^{こうなん}尽、(十二月の終わりの江南)

早梅花開後。(早くも梅の花が開いたその後)

分付新春与垂柳。(新たな春が分け与えられるのは垂れ下がる柳)

細腰肢、(なよなよとした腰つきも)

自有入格風流。(自ずから品格のある風流なありさま)

仍更是、(それはまさしく)

骨体清英雅秀。(芯^{せい}から具^{えい}わる清、英、雅、秀^{がしゅう}なのです)

永豊坊那畔^{ちようぶん さいほう}、(長安の永豊坊とはどこ)

尽日無人、(そこには一日中誰もなくて)

惟見金糸弄晴画。(ただ金の糸のような柳の枝が春の光のもとで揺れています)

断腸是、(気持ちちが断たれるのは)

飛絮時、(^{わた}柳の絮の飛ぶとき)

緑葉成陰、(緑の葉がつくる蔭)

無個事、(何事もないままに)

一成消瘦。(ただ痩せてしまうのです)

又莫是、(だってないのですもの)

東風逐君来、(東の風に乘ってあなたが来ることなどは)

便吹散眉間、(眉の間に吹きくる春風によって)

一点春皺。(また一つ春の皺が寄るのです)

(詩の前半の終わりに置かれた「清英雅秀」の4文字を簡潔に適切な日本語に置き換えるのは簡単ではないので、漢字からイメージしていただくのがよいだろう)

■送范景仁遊洛中

都に入れない蘇軾が身を寄せた^{はんちん}范鎮(字は^{けいじん}景仁)は、蘇軾より29歳年長で、^{しよく}蜀の^{せいと}成都の人。同郷のよしみもあり、政治的立場も同じであるということから、親身になってくれたのだろう。その范鎮が(たぶん私用で)^{らくよう}洛陽に行くのを見送った詩。

(^{じんそう}范鎮は^{えいそう}仁宗、英宗の時代に朝廷の要職にあり、^{しんそう}神宗皇帝が^{おうあんせき}王安石を抜擢して改革を始めようとしたときに強く反対した。熙寧3(1070)年、王安石は自分の好みで人事を左右していることなどを批判して王安石を怒らせ、^{きおい}范鎮は朝廷の職を解かれた。不適切な人事として范鎮が挙げた事例には、蘇軾を要職に推薦したのに用いられなかつ

たこと、孔文仲^{こうぶんちゆう}を推薦^{せい}して制科の試験に受けさせたのに不合格になったこと（第4章57ページ）、母の喪にあることを隠していた李定^{りてい}を用いたこと（第3章97ページ）などがあった。范鎮が辞職すると、（当時都にいた）蘇軾^{こう}は「公はお退かれても名誉はますます重んじられましょう」と賀意を范鎮に贈った。すると、范鎮は「天下が害を受けて自分が名誉を受けるなど、自分の本意ではない」と応じた）

小人^{しょうじん}（つまらない連中）は、事の軽重がまるでわからない。

公は、地位を軽^{こう}く見て、暇な地位に退くのも少しも難しいとはしない。

公は、広々とした天下の大道を歩み、心にひっかかることは何もない。

公の言論は深く、聴く者の肝を寒くさせる。

公は若い頃からずっと時事に憂いてきたので、髪が真っ白だ。

しかし、仙薬のお蔭であったりするのだろうか、

いまでも元気にこの俗世に留まっている。

公は無心であるから、どこにいても安らかで、

誰と会っても、酒を飲むのを楽しみとしている。

公は六十三歳で職を退き、

ある日思い立って万里を旅し、郷里の蜀の各地を巡った。

老いて身はいよいよ健やかで、

そこの山を登ったくらいでは十分に満足しなかった。

公がおられるところの道は、

いずれも雲の彼方へと飛び行く鳥の道につながっている。

このたび公が西の洛陽へと行くのは、

ゆすらうめ
桜桃が咲き、筍が熟すころだと思っただろう。

くつ
杖と履を携えてあちらに着いたなら、園亭の客となってここかしこを見て歩くだろう。

はんちく せきろうたん
斑竹寺で花を手折り、石楼灘で水遊びをし、

かつて売られてしまう馬を憐れんだ白楽天に同情してみたり、

雷に驚いてやたらと恐れた韓愈かん いうを笑ってみたりするであらう。

すうざん
はたまた、嵩山に登って苔むす洞穴を見たり、

てんだんさん
天壇山に登って松が空を覆うのを見たりもするだろう。

りゅう
そして試みに劉先生を誘って、

せい
かの靖長官に会ってみてはいかがでしょう。

（例によってたくさんの故事を踏まえた詩であるが、最後の劉先生と靖長官は何のこともわからないだろうと、蘇軾自身が注を書き添えている。「劉幾がこのように言った。『嵩山の奥深いところで、眼光が猫のような人に会ったのだが、あれはきっと靖長官だったのだろう』。靖長官とは、唐の終わり頃の役人で、官職を捨ててついに仙人になった人で、その姿を宋代の役人である劉幾が見たのである。それで、范鎮も今回の旅で靖長官を探してみてもはどうだろうか」と戯れたのだ）

■書韓幹牧馬図

先に登場した王詵おうしんが、蘇軾のもとに韓幹かんかんが描いた「牧馬図」を見せにき

て、何か添え書きをしてほしいと言うので、この詩を作った。

(韓幹^{かん かん}は唐代の有名な画家で、馬を描くのを得意とした。画を曹覇^{そう は}に習い、同じ時代を生きた杜甫^{と ほ}は、曹覇の画について幾つかの詩を詠んでいる。その中で弟子の韓幹について次のように言及している。

弟子の韓幹は早くから曹覇について学び、

やはり馬を描くのが得意で特別なスタイルを窮めた。

しかし、韓幹は肉を描くばかりで骨を描かないので、

駿馬^{しゅん め}も気が抜けたようになってしまい、残念である。

馬は、一般的に肉がひきしまって骨格が顕われ出るのがよいとされていた。肉付きよく描いた韓幹の馬を、杜甫は感心しないと言っているのである)

(蘇軾^{そ しかん}のこの詩の冒頭で「開元^{かいげん}、天寶^{てんぼう}」と言っているのは、玄宗皇帝^{げんそう}の治世下の元号で、ちょうど韓幹や杜甫が活躍していた時代である。また途中に「騅^{すい}、駉^ひ云々」とあるのは、馬の様々な性質を表す語で、意味はわからずとも、語呂よく専門用語が並べられていると見るだけで十分であろう)

長安^{ちやうあん}の南の山の麓、

汧水^{けんすい}と渭水^{いすい}の間、

想い見みるのは開元^{かいげん}、天寶^{てんぼう}のころ――

牧場^{しん せん}は八カ所に分かれて秦川のあたりにまで迫り、
四十万匹の馬が雲のように地を覆って広がっていた。

馬の種類はと見れば、

騅、駄、駟、駱、驪、騊、駟、白魚、赤兔、騂、皇驄、

竜の顔に鳳の頸、擗げなのもいれば妍かなのものもいる、

奇しい姿や逸徳さで、鶯 頑を隠しているものもいる。

馬を世話するのは碧い眼の胡兒、

季節がくると、手足の動きも鮮やかに毛並みを整え、

皇帝の御前へと馬を送り出す。

迎える皇帝は礼服を召し、

池のまわりに後宮の美女三千人を並べて待つ。

美女の紅い化粧が日に映え、その光が淵を流れる下る。

そこに馬が現れ出るやいなや、

一瞬にしてあたりは寒いくらいにぴんとひきしまり、

馬が往きつ戻りつ、歩んだり跳ねたりするたびに、

早瀬に波が生じて水しぶきが飛ぶばかり。

ここにあまたの画工は筆を執って描こうとするが、

ただ顔料を合わせるだけで手が出ない。

独り、曹覇將軍の弟子の韓幹だけが描いて見せたのがまさにこの画。

厩舎で育った馬は、肉が多くて尻の骨が円く、肉の中の骨を描くのは難しい。

馬に、金色の羈、玉の飾りの勒、繡羅のついた鞍を付け、

さらには、鞭箠を加え烙印を刻んだりするのは、

天より与えられた馬としての完全性^{やぶ}を傷るもので、
この画に描かれた自然に近い馬の姿には及ばない。
いまかの牧場のあった平原は荒れ果て、草が生い茂っている。
この画中の馬は、そこを自在に駆け廻り、
^{おどろ}鴻を驚かし、兔を跳び出させ、己とどちらが速いか争いたいと、
思っていることだろう。
あるいは古代の馬術の名人が行ったように、
万里を超えて、飛んで天にまで昇りたいと考えているだろうか。
いずれにしても、首をうなだれて車を曳くようなことは断じてしないのである。

■韓幹馬十四匹

事のついでに、韓幹^{かんかん}の馬の画に関する詩と文章を合せて見ておく。一つ目は韓幹が14頭の馬を描いた画を見て詠んだ詩。

(古来馬を詩に詠み込むのは難しいとされた。若い頃^{とほ}の杜甫は、己の才能を世間に認めさせて官職を獲得しようと必死だったので、他の人が尻込みするようなテーマにも果敢に挑み、馬の詩も幾つか作って具眼の士をうならせた(当時も科挙はあったが、試験の成績よりも、事前にどれだけ有力者に気に入られるかということの方が決定的に重要だった。杜甫はたくさんの詩を作って各方面の有力者に献じ、それは涙ぐましいまでの努力をしたのだが、報われなかった。杜甫の詩才は保守的な実力者には理解されなかったのである)。杜甫の一連の馬の詩を超えることは誰にもできまいと思われ

ていたのだが、蘇軾は韓幹の馬の画に触発されて、宋代の代表選手として馬の詩に挑もうと思い立ったのだろう)

先頭を二匹の馬が並んで走り、八つの蹄が一つに集まる。

次に二匹の馬が頸を^{くび}曲げ、^{たてがみ}鬃と尾が平行に並び合う。

一匹の馬が前に進もうとして、後ろ脚を挙げる。

一匹の馬がその後ろに退いて嘶く。

^{ひげ}髯の長い老いた異邦人の飼育係が馬にまたがり、後ろを顧りみて何かを言う。

その者は前世には馬であったので、馬の言葉に通じているのだろう。

飼育係の後方にいる八匹の馬は水を飲んだり歩いたりして、

水の流れが口に入るときの音が聞こえてくる。

八匹のなかで前にいるのは林から出た鶴のように水を涉り終え、

後方にいるのはこれから水を涉ろうとして佇む鶴のようである。

最後に残った一匹こそは馬の中の竜ともいえ、

嘶かないし、動かないし、尾が風の中で揺れるだけ。

韓幹が画く馬はまさに真の馬、

私は詩を作ることを画を見るようでありたいと思う。

いまの世には良馬を見出す^{はくらく}伯楽もいなければ、

この画を描く韓幹もない。

この詩とこの画は、果たして誰が見るべきものであるのだろうか。

■韓幹画馬賛

次は4頭の馬が描かれた画に添えた賛。前の詩とよく似た構成になっている。

かんかん
韓幹が描いた馬は四匹。

一匹は陸にあって、首を立て、たてがみ鬣を奮い、何か望むところがあるようで、脚を留めて長く嘶く。一匹は水を涉ろうとしていて、尻を高くし首を下げ、渡るによいところを選びつつ、いまはまだ進みかねている。残りの二匹は水にあって、前なるものは後ろを振り返り、鼻で何やら語ろうとしている。後ろなるものはそれに応じるでなく、水を飲もうとして留まっているようだ。

厩で飼われている馬かと思えば、前にまわりつく手綱がなく、後ろに叩かれる鞭がない。野生の馬かと思えば、目がぐりっとして耳がぴんと立ち、胸に豊かに肉が付き、尾が細く、どれも良馬としての基準に当たっている。

この静かなたたずまいは、賢者揃いの貴公子たちが帯を緩め、かぶりものをとって、悠然と水に臨んでいるのにも似ていようか。

馬も貴公子も想うのは——高く飛んで遠くに遊び、鹿を友として天寿を全うしたい。

しかし、そうしようとしても、それはなかなか得られることでない。せめて、あくせくすることなく、悠々と遊んで、ゆるゆる歳月を過ごすことならできであろうか。

■送魯元翰少卿知衛州

はんちん とうえん
范鎮の東園に滞在する蘇軾のもとには、都からの訪問客が大勢きてなかなか賑やかだったようだ。魯有開（字は元翰）が衛州知事として赴任することになり、旅立つ前に蘇軾に会いにきた。魯有開とは杭州時代に交流があった（第4章145ページ）。

（魯有開は立派な髯を蓄えていたので、この送別の詩では、髯卿（髯の君）と呼んでいる。また、魯有開はかつて副宰相まで務めた魯宗道の甥であることから、「堂堂の元老の後」と詠まれている）

無用な人間は居場所がなく、^{はん}范公の園庭に身を寄せている。

そうこうするうちに、^{ゆすらうめ}桃李が蔭を作り、^{なずな}薺も麦も伸びて、繁るまでになった。

門を閉ざしていると、春の昼は永く、黄色い蜂がにぎやかに飛ぶだけ。

誰かが酒を携えてわざわざきてくれたりしたならば、

^{にれ}榆や柳が群れ立つ村にでも行ってともに酔いたいものだと思っていたところ、

^{ひげのみ}この髯卿はどういう人なのか、

これで一カ月に三度も我が門を叩きにきてくれたではないか。

私から出向いて挨拶することがないのに、

髯卿はきてくださるのでその意はいよいよ敦いものがある。

髯卿は堂堂の元老の甥で、^{じんじん}仁人の言を倦むことなく説き続ける。

憶えば、杭州にあった年は、髯卿と私の情好は兄弟にひとしかった。
時には氷雪の中であっても、笑って語れば春の温もりを覚え、
時には夜に急に飲もうということになって、
酒を求めて我が家のうちを探してみたものの、簞笥の隅にも酒の肴になるようなものはなく、
かたじけなくも、髯卿が自ら煙の中で火をおこしてくださった。
杭州で別れてから今までにどれほど経ったのか、
向き合っていると、あのころのことが夢のように覚える。
このたび、髯卿は北に行くと私に告げて、
新しい詩とすばらしい酒樽を贈ってくれた。
髯卿が行かれるのは太行山たいこうざんが斜めに連なるところ、
こうが黄河の湧き立つ波を越えた先にある。
それでも、髯卿は官員として不遇というわけではない。
えい衛州は都の西北の垣根に当たる場所だ。
民衆はいわば魚のようであって、網を見れば驚いて逃げ惑う。
水は、千丈の深さまでくっきり見えるほどに澄んでいるよりは、
一寸先も見えないほどに濁っている方がましである。
刑罰を司るのは地方官の重要は職務ではあるけれど、
思うに、民の源を養うべきである。
どうということかという、昔のある知事は、

民衆がきちんとした下着を身に付けられるようになる政治をしたところ、しばらくすると、人々は善政を讃える歌を唱えるようになった。そのような政治をしていれば、盗賊についてあれこれ言うようなことは必要がなくなるのだ。

(蘇軾は密州での経験から、困窮のあまり追い詰められて盗賊となった者を厳しく取り締まる政治よりも、民衆の生活の基盤を確保する政治をすべきだと言っているのである)

■次韻子由送蔣夔赴代州学官

同じころに、蔣夔^{しょう き だい}が代州にある学校の教授として赴任することになり、弟の蘇轍が作った送別の詩に蘇軾が次韻した。蔣夔は本章 85 ページに登場している。

(代州は北の辺境の地で、改革に批判的な蔣夔はそのようなところにしか居場所を見出せなかったのだろうか)

功利を求めて先を争うのは、法を変える端緒となる。

旧来の典型を守るのは、いまや世間の落ちこぼれとなった老成した人だけだ。

人は困窮に置かれて後に立派な詩が作れるようになる――

この説は十分には信じられないが、

凝った刺繍は市場に投じる金額の多寡による――

こちらの説はかねていわれている通りだ。

代州の若者は、志は大きく不器用であると聞く。

貴公を困んで種々の議論を戦わせ、心に適う説を求めるであろう。

貴公が向こうから帰ってきたときには、

「あちらの雁は旨かったかい」

などつまらないことを私は問わない。

世俗を憎んだかの王符おう ぷが著した『潜夫論』せん ぷ ろんのような著作を、

貴公がものにしてきたのを見せていただくとしよう。

（この詩の前半は改革への批判となっている。刺繡云々は、より精緻な刺繡を求めるのならそれだけたくさんのお金を投じなければならないという昔からの言い回しを踏まえて、何でも国庫の増収に結び付けようとする改革を皮肉ったのである。最後の雁云々は少々この解説が必要である。後漢の時代に皇甫規こう ほう ぎという人（蘇軾そ しかに比する）がいて、ある職務を終えて郷里に帰った。同じ時期に官職を金で買って雁門が ん も ん（＝代州）の知事になって勤めを終えた人物（改革の時流に乗ってにわかに職を得た者を比する）も郷里に帰ってきて、皇甫規のもとを訪れた。皇甫規は寝たまま出迎えに出なかったが、その者はずかずかと入ってきたので、「あちらの雁は旨かったかい」とだけ言った（私服を肥やす以外に何もしなかっただろうという皮肉）。一方で、王符（蘇軾に比する）がくると、皇甫規は驚いて出迎え、飲を尽くして語りあった。王符は郷里に退いて世の中の是非を論じる『潜夫論』を書いたので、蘇軾はそのような著作を書くことを蘇軾に期待すると言って励ましたのである。これだけの内容が「帰來問雁吾何敢、

疾世王符解著書」という 14 文字に籠められているので、詩を味読する人にはそれなりの読解力を必要とした。蘇軾は複雑な故事の用い方をすることを得意とし、注釈家がいくら頭をひねっても何が言いたいのかもまだに解明できていない詩句が幾つもある)

■京師哭任遵聖

この時期に、長男の蘇邁^{そまい}が結婚したようだ。宋代の士大夫は有力者同士で通婚し合う例が多かったが、蘇の家では同郷同士で結婚することが多く、蘇邁の妻も眉州^{せき}の石氏から迎えた。

そうした慶事があった一方で、同郷の先輩である任孜^{にん し}（字は遵聖^{あざな じゆんせい}）が亡くなったとの報せが届いた。任孜は弟の任伋^{にんきゆう}とともに科挙に合格し、郷里の偉人として「大任^{だいにん}」「小任^{しょうにん}」と呼ばれていた（第3章 25 ページ）。この詩では任孜のことを「老任^{ろうにん}」と呼んでいる。

私は故郷に帰らずにいること十年、
子供達は日夜に成長しているが、
自分はやたらと年齢を重ね、しかも次第に衰え凋みつつある。
よしみのあった先輩方が亡くなったと聞くと、
いつも涙を流し、声を放って泣いてしまう。
まして老任先生である……

先生はまれに優れた人で、
我が父も年長者として敬っていた。
文章ではいささか名誉を得て、
詩はきわめて清らかで堂々としている。
官員としての能力も高く、
談笑しつつ万人の上に立った。
問題の多い土地に行くのをむしろ喜び、
土地のならず者を赤子の腕をひねるようにしてやっつけ、
髭をびくりと動かすだけで狡猾な小役人を震え上がらせ、
悪だくみをする將軍には歯を噛み砕かんばかりの勢いで対峙した。
しかし、哀しいことに不遇の運命であったのか、
才能があるが故にいつも謗られ、
ついに低い地位のまま、
遠い山の地、あるいは荒廃した土地に行かなければならなかった。
私は官界に入って久しく樂まず、
川や山を隔てて先生を望み見ては、
いずれ退いて先生のもとで田畑を耕し、
季節ごとに酒食をもって労わりあいたいと思っていた。
この懐い^{いた}はもはや遂げることはできず、
郷里に帰っても、見られるのはうずたかく土が盛られた墓だけなのである。

泣いて都から西を見れば、
落日の内に千の峰が含まれる。
先生にはただ一人の男児があつて、
先生は掌中の珠のように大切に、
七、八歳のころからすでに牛を食らうばかりの気迫を見せていた。
いつかその人が都にやってきたなら、先生のことを語り合いたいものだ。
そのときに、
人はただ息子の優れた器量に驚くであろうが、
私だけは、それは先生譲りであると知っているのだ。

■代張方平諫用兵書

4月、蘇軾は都には入れないままに、新たな任地である徐州じょに向かった。
(蘇軾はかつて神宗皇帝しんそうから「近頃の政令の可否はいかがであらうか。朕の過失であつても指摘してよろしい」との言葉を直接に得ていた(第3章68ページ)。その後も神宗皇帝は蘇軾の文章をよく読んでいたようで、王安石おうあんせきが都を去って求心力が低下した改革派にとって、蘇軾の存在は脅威で、何としてでも皇帝に会わせたくなかったのだろう)

蘇軾の船路に、南京応天府なんけいおうてんの知事になったばかりの張方平ちやうほうへいの幕僚として招かれていた蘇轍べん がも同行し、2人は汴河を下って南京応天府に入った。3人が顔を合わせれば、話題は自然と政治上の問題に及び、西方での軍事

行動（本章 55 ページの詩参照）を止めなければならないと 3 人の考えが一致し、張方平が皇帝に意見書を提出することになった。それを蘇軾が代筆したのがこの文章である。

わたし 臣は兵（軍備ならびに実戦）を好むのは色（性的放縦）を好むのに似ると聞きます。色はいろいろな面で生命を損ない、色をやたらと好む者はきつと死に至ります。兵はいろいろな面で民を賊ない、兵をやたらと好む者はきつと亡びに至ります。これは必然の理であります。

いにしへ 古の聖人は皆やむをえないところから兵を用い、勝つときには完全に安らかであるような福を享け、勝たないときにも意外なところから患いが生じたりするようなことはありませんでした。後世の用兵は、皆しなくてもよいのにしないではいらなくなっての行為であったために、勝ったときにも、後から異変が生じて大きな禍いとなり、勝たないときには、すぐに異変が生じて小さな禍いとなりました。聖人は勝負によって得るものを算段してそれをあてにすることはなく、兵を用いた後の禍を深く戒めました。

これはどういうことかという、十万の軍隊を動かすと一日に千金を費やすばかりでなく、国中が大騒動となります。軍需物質を輸送するための人々が道路を行き来し、農業に携われなく者が七十万家にもなります。国庫はたちまち空になり、民衆は窮乏して飢えや寒さに迫まれ、その後には必ず盗賊が出没する憂いが生じ、死傷する者、愁い怨む者が多数になり、ついには各地で水害、旱害が頻発

するまでになります。すると將軍の中に兵士を擁して跋扈しようとの心を持つ者が現れ、あるいは民衆の中には長く苦役されたのを恨んで反乱を意図する者が現れます。このような異変が百出するのは皆兵を用いることから始まるのです。

このようになったときには、最初に事を興して用兵の議論を始めた者は、最も重い天罰を受けるべきであります。多数の平民が故なくして用兵のために死に、その怨みが天下に充積しているのですから、必ずその咎を受ける者がいなければなりません。だから聖人は兵を用いることには畏れを抱き、重大なこととして、やむをえないときでなければ敢えて兵は用いなかったのです。

古より人の上に立つ君主で、好んで干戈^{かんか}を動かし、敗れて亡んだ者は数え切れないほどたくさんいます。臣はそれらについては敢えて申し上げません。陛下のために、勝った者についてのみここで申し上げたいと思います。

秦^{しん}の始皇帝^{しこうてい}は六カ国を平定して天下を一つにし、さらに外に対して兵を構えました。そのために徴兵されて辺境に連れて行かれる患いを天下の人々は被りました。新たな領土を広げたことでは古代からかつてないほどでありましたが、始皇帝が死んで間もなく、天下は怨みから秦に離反し、二世皇帝は殺され、三世の王となった子嬰^{こえい}も擒となり、その滅亡の悲惨さはやはり古代からいまだかつてないものでありました。

漢^{かん}の武帝^{ぶてい}は文帝^{ぶんてい}、景帝^{けいてい}の時代の有り余る豊かな富^{きやうど}を用いて、まず匈奴に挑みました。戦争は連年続いて終わらなくなり、ついには様々な国へと戦争が拡大していきました。毎年毎年兵士も軍需物資もたくさん徴発し、兵の向かうところではどこ

でも成功を収めました。武帝が最初に兵を用いたとき、天には大空いっぱいの長さのほうき星が現れ、その春に皇太子が生まれました。それから戦争が続くと三十余年、無数の死者が生じました。さらには皇太子が反乱を起こして、都におびただしい血が流れ、死者は数万人に及び、皇太子もその子も死んでしまいました。歴史家の班固は、皇太子は用兵の時代に成長し、用兵とともに終始した生涯であったと評しました。武帝は悔んで兵を用いる欲望に自ら克ちましたが、生涯の恨みはついに取り戻すことはできなかったのです。

隋の文帝は南朝の陳を下し、ついで外国との戦争を始めました。皇位を嗣いだ煬帝もその用兵の心は衰えることなく、強国を亡ぼし、その威は万里を震わせました。しかし、民は怨み、賊が起り、隋は瞬間に亡んでしまいました。

唐の太宗は「神武」といわれるほどに無敵で、用兵を最も好み、突厥、高昌、吐谷渾などを破り滅ぼし、それでも満足しないで、自ら兵を率いて遼東に遠征しました。

その志は功を立てることにあって、やむをえず兵を用いたものではありませんでした。

その後には則天武后の難が起こって唐の皇室は衰え、わずかに一本の糸でつながるようなありさまとなってしまいました。思うに、兵を用いることの禍は物の道理として逃れられないものなのでありましょう。太宗は仁聖寛厚にして、己に克ち、人を裕かにして、ほとんど刑罰を用いないですむような治世を実現させました。しかし、その子に皇位を伝えた途端に、子孫は塗炭の苦しみに陥ったのは、太宗のなした善の報いとしてはありえないことであって、それはやはり兵を用いたことの禍によるものなのであります。

以上のように観てきますと、漢や唐が兵を用いたのは寛大な仁政の後であって、勝利もし、用兵の禍はあってもかろうじて王朝は存続しました。秦や隋が兵を用いたのは暴虐の後で、勝つてついに王朝は滅亡してしまいました。臣は史書を読んでこのようなところに至ると、国家の計の過ちを傷んで、涙を流さずにはいられません。もしも、始皇帝、武帝、煬帝、太宗の四人の君主に、兵を用いる最初のとときに、兵を用いることの難しさをよくよくわからせることができたならば、禍は歴史に記録されるようなところには至らなかったであらうでしょう。四人の君主は不幸にして兵を用いれば毎回勝ってしまったために、功利に馴れて、患を慮ることがほとんどなかったのです。

だから臣は、勝ったときにも、後から異変があって大きな禍いとなり、勝たないときには、すぐに異変があって小さな禍いとなると、最初に申し上げたのです。このことはよくよく考えなければなりません。

昔我が朝の仁宗皇帝は天下を覆い育み、兵に心を用いることはありませんでした。将士は怠惰になって安楽を偷み、武器は錆びて朽ちてしまいました。西夏の元昊がその隙に乗じて、密かに軍隊を動かし、西のはずれの延州、涇州、源州、麟州、府州のあたりに攻め寄せました。宋は破れること数回に及び、一万以上の兵士が失われたこともありました。しかし、天下は落ち着いたままで、一時期の戦闘が終われば事はやみ、民衆に怨みの言葉はなく、国に患いが残ることもありませんでした。それはどうしてかという、天下の人々は皇帝には兵を好む心がないのを知っていて、天地鬼神もやむをえず兵を用いたという実情をよく知っていたから

でありました。

いま陛下には天より賜った勇智があり、富強に意を置いています。即位以来、武器を整備し軍団を編成し、隣国の動きを探っています。群臣は陛下の意向を窺い見て、多くの者が兵を用いることを言うようになりました。そのようになってからは、国政を担う宰相には深く憂い遠くを思う心がなく、軍政を担う重臣には害を慮り難局に向き合い続ける見識がなく、官僚を監督する職にある者にはよい策を献じて忠を納める議論がなく、小さなところから大きなところへと、順に禍の階段を上るようになりました。

まず薛向が横山における謀をなし、韓絳は深く敵地に入る計画を立て、陳升之や呂公弼等は陰でこれと力を合わせましたが、軍団は敗れて喪われ、国の財産は消耗してしまいました。このときの敗北は、先の仁宗皇帝時代にくらべたら十分の一にも及ばないものでありましたが、天は怒り人は怨み、辺境の兵士は離反し、都は騒然となり、陛下はこのために一カ月にわたって身を慎まなければなりません。どうしてそのようになったのかというと、兵を用いる端緒を陛下自らが作ったからです。それで、官僚も民衆も、敵を怨むよりも陛下の過ちを思ったのでありました。我が朝の歴代皇帝の積み重なった徳の厚さと、天が天下を保とうとする恩の深さによって、王朝そのものは揺るがずにすみましたが、兵を出しても功がないと、陛下を感悟させるように仕向けて下さったのです。

ところが、浅はかな連中は、敗れたことを恥として、努めて勝を求めて、それで陛下の心に適おうとしました。それで、王韶は禍を熙河に構え、章惇は横山に隙を

見せ、熊本は渝瀘で難儀なことをしでかしました。これらは戦果があったように見せかけ、その実はすでに降参したものを殺害したり、老人や病弱な者を捕虜にしたりしたもので、中国本国を疲弊させて空しい無用の土地を取っただけでありました。陛下には勝利の虚名を受けさせ、実際の禍をゆるがせにし、ますます功名に奮い立たせようとするようなことになりました。。さらには、沈起、劉彝が南方の地で軍事行動を起こし、十余万人が気候の悪い土地に行かされて、死者が半分にも及び、輸送路に当たる民衆は道に倒れ、食糧や軍事物資は敵を見る前に尽き果ててしまいました。これで兵を用いる意は少しは衰えるものと思われたのですが、李憲が洮州から出兵し、軍団は勝利して、いまは鋭気ますます盛んなありさまとなっています。陛下が一つの勝利を喜ぶのなら、その背後には四方の外国を軽視し、敵国を侮る意があると申せましょう。そのときには、天の意はもはや測り難く、臣は実に畏れるものであります。

戦争の勝った後に陛下が御覧になるのは、凱旋した将軍が勝利を報告し、陛下がお褒めのお言葉を賜り、群臣が祝いを述べるという、実に耳目に目覚ましいありさまでありましょう。しかし、遠方の民が白刃のもとに頭や腹を切られ、あるいは餓えて骨と筋だけになり、あるいは財産を失って流浪し、子供を売り、あるいは失明し腕を折り、さらには絶望のあまり自殺するようなありさまは、決して陛下は御覧になることはないのです。慈父、孝子、孤臣、寡婦が泣き叫ぶ声は、決して陛下がお聞きになることはないのです。譬えれば、牛や羊を屠殺し、魚を切り刻んで、御馳走を作るようなものです。それを食べるならはなはだ美味でありましょうが、殺される

牛や羊や魚には非常な苦しみがあります。陛下が、刃の下で牛や羊が泣き叫び、魚がまな板の上でもがくのをご覧になったならば、最高の料理であっても、きっと食べるのは忍びがたくて箸を置くでありません。まして、人の命を奪って、耳目に目覚ましいありさまをなすというのはどうなのでしょう。

陛下の軍団が精強で、国庫が充実して、秦、漢、隋、唐の皇帝のようであっても、勝った後には、先に申し上げた通りに、禍乱がきつと起こり、救いがなくなってしまうでしょう。まして、現在の將軍や官僚は軟弱かつ凡庸で、昔の人に比べて全てにおいて及びもつきません。ここ数年来、公私ともに困窮し、長年国庫に蓄積してきたものは地を掃って余りがなく、地方の租税の蓄えも、上納されてほとんど尽きてしまい、官僚の俸給をかるうじて払い続けるだけで、国家の重要な儀式を行った際に払われるべき賞与はずっとないままとなっています。このようなことでは、よほどの知患者であっても、今後よい方向にもって行くことはできないのであります。

しかも飢饉があり疫病もあって、各地に盜賊が蜂起しているのは、京東路、河北路ばかりではありません。もしもさらに軍事行動がもう一回起こりましたならば、苛酷な徴発がすぐになされ、民衆にはその困窮を告げる先がなく、勢い大盜賊とならずには、自らの命を全うできなくなってしまいます。外国との争いが深みにはまり、内患も同時に起ったならば、秦が滅亡したときの形勢がまさにいま現出するようになります。これが臣が夜も眠らず、食事の間も嘆息がやまずに憂い、泣くことを止めることができないまでになっている理由であります。

臣はこのように聞いています。大きな事業を成し遂げるには必ず天の心に順わな

ければならない。天の向うところに向かって事を挙げれば必ず成功し、天の向かうところに背を向けて事を挙げれば必ず失敗します。天の心がどこに向かっているのかは、災害、祥瑞、豊作、凶作の間に現れます。近年は、日食、星変、地震、山崩れ、水害、旱害、^{れいえき}癘疫が連年続いて終わりがなく、民衆の半分が死にさらされています。天の心の向うところはここに現れているのです。しかし、陛下は断然として顧ることなく、事を興してやめようとしません。譬えるなら、父母の前で子が過ちをしているようなもので、子が静かに反省して恭順に自分の失敗を認めて自分を責めるのなら、きっと父母は許すであります。もしも子が召使たちを叱責して、ほしいままに鞭で打ち、それで父母に仕えようとしたならば、父母は決して赦してはくれないでしょう。

^{わたし}臣はこのように願います。遠く先の世の興亡の跡を見て、深く天の心の向うところの道理を察して、兵を用いる意を絶って、国境を保って隣国と仲睦まじくして、静かにして何か事を構えることなく、国家の長久の計画を固くしていただきたいのです。そして、太皇太后、皇太后のお二人に朝夕に仕え、天下の億兆の命を^{すく}済めていただきたいのです。そうすれば、^{わたくし}臣は溝に倒れて死んでも満足であります。

昔、前漢の高祖は群雄を破ってついに天下を一つにし、後漢の^{こうぶてい}光武帝は百戦百勝して漢を再興しました。しかし、高祖は白登城で外敵に囲まれると和親の方針を定め、光武帝は西域諸国から漢の配下に置いてもらいたいとの申し出があるとそれを謝絶しました。この二帝は兵を用いることを知らなかったのではありません。多くの戦乱を潜り抜けて、深く遠く患いを慮ったのであります。いま陛下は深く

宮中におられるままで、軽々しく討伐を議論されています。^{わたし}臣は凡庸で臆病であり
ますが、ひそかにそれは過ちであると思っています。

臣下の者が主君に意見を申すときに、主君がすでに厭わしく思っているときにそれを止めるのは、力を使わなくても簡単にできます。しかし、主君が鋭意行っているとしているときに、それを折るのは非常に成功しにくいことです。およそ血気さかんな者は皆勝つのを好む意があります。その意気盛んなときには、そこらのつまらない人間であっても、それをやめさせることはなかなかできません。智識が特別にあって、度量が人に過ぎたる者でなければ、勇み奮い立っている最中に、自分の考えを捨てて、人の意見に従って、正しい義を聴こうとする者はありません。今陛下は武を用いる意欲が盛んで、その勢いをほかに振り向けることはできません。そのようなことを臣は知らないわけではありません。しかし、意見を献じてやまないのは、陛下がまことに聖徳寛大で、よい考えを聴いて納められるのをこれまでに見ているからであります。衆人が普通に勝ちを好む心を陛下には望まないのであります。

さらに^{わたし}臣はこのように思います。陛下が将来自ら兵を用いたことの害を御覧になったときには、必ず哀痛悔恨されて、左右の大臣が一言も言わなかったのをなぜかと追求されるでまいしょう。だから敢えてここに申し上げるのです。

^{わたし}臣は老いて間もなく死ぬ身であります。地下で先帝にお会いしたときに、ここで何も申し上げておかなくていいのなら、合わせる顔がありません。そのような臣の思^{わたし}いを察してどうか哀れみください。

■宿州次韻劉涇

張方平^{ちやうほうへい}はすこぶる蘇軾^{そし}兄弟に厚く、蘇軾^{なんけいおうてん}が南京^{じょ}応天府から徐州に向かおうとすると、蘇轍も一緒に行くのを許してくれた。

途中^{しゆく}の宿州で知事の劉涇^{りゆうけい}（字は巨濟^{きよさい}）に会い、その詩に次韻した。この詩には「劉涇の亡くなった兄^{りゆうべん}の劉汴も文章に優れていた」と添え書きがあり、その兄の死は不本意なものであったようで、劉涇は世の中に対して不満を抱いていた。

私はいま引退して休みたいとの思いがあって、

楽器を奏でるような気分になることもはや稀で、

春に新しい衣服を新調して気の合う仲間とそぞろ歩きを楽しめるようになるのは、果たしていつのことだろうか。

あれこれ愁いがあるために、いわゆる「白髪三千丈」で、

用のない身であるために、皮ばかりがだぶだぶにたるんでしまっている。

若い頃から、富貴は危機を踏まねば得られないいやなものであると知っていたが、

いまでは、文章は実につまらない小さな技であると覚っている。

昔^{りくき}、陸機は刑に臨んで、かつて親しんだ鶴の声を想って嘆息した。

鶴はいまも大空を飛んでいようが、君の兄はもはやいない。

そのために私はこの詩を吟じつつ涙する。

（陸機の故事のココロは、死に際して、自分にとって本当に大切なことが何であるのかをやっと気付いたのでは遅いということ。劉涇

は不満を軽々しく口にする傾向があったので（本章 260 ページ）、もう少し深く物事を考えてはどうだろうかと、この詩はかなり遠まわしに言っているのだろう）

■和孔密州五絶

4 月 21 日、蘇軾^{じょ}は徐州^{けいとうとう}に到着した。徐州は京東東路に属し、彭城^{ほうじょう}、沛^{はい}、蕭^{しょう}、滕^{とう}、豊^{ほう}の 5 県が属し、州の役場は彭城県にあった。

蘇軾と交替で密州知事になった孔宗翰^{こうそうかん}（本章 134 ページなどに登場）から、密州^{みつ}の庁舎の近くの景物を詠んだ 5 首の絶句が送られてきて、それに和した詩から、東側の欄干の傍らにある梨の花を主題とした 1 首を訳す。

梨の花は淡い白、柳は深い青、

柳^{わた}の絮が飛ぶとき、町は梨の花に満たされる。

東の欄干のもとで雪のような花を開かせる二株の梨——

悲しく思うのは、

人生においてこのようにして清明節^{せいめいせつ}を迎えらるのはあと何回だろうか。

■司馬君実独樂園

司馬光（字は君実）は政界を退いて洛陽にいた。庭園を整備して「独樂園」（独りこの園に楽しむ）と名付けた。蘇軾は司馬光が書いた「独樂園の記」を読んで感動し、この詩を作って司馬光に送った。

（司馬光は蘇軾より 17 歳年長で、非常に学識があり、英宗皇帝からも神宗皇帝からも厚く信頼された。始め司馬光は王安石を高く評価し、国政の改革を王安石に託すことを皇帝に勧めるほどであったのだが、改革の中身が明らかになるにつれて批判的になり、後には鋭く対立するようになった。それでも神宗皇帝は司馬光にはしばしば意見を尋ねていたが、司馬光は次第に政治の実際から離れ、巨大な歴史書である『資治通鑑』の編集に専念し、後に洛陽に退いた。このころ、洛陽には富弼や司馬光など改革に反対の立場をとる政界の大物が集まり、先に范鎮が洛陽に赴いたのは、そのような人々と会うのが目的であったようだ。蘇軾はかつて母の墓誌銘の執筆を司馬光に依頼するなどの交流があり（第1章 70 ページ）、蘇軾が違法な商行為をしたと告発されたとき（第3章 97 ページ）には、司馬光は皇帝の前で蘇軾を庇う弁明をした）

独樂園の建物の上に青い山があり、

独樂園の建物の下に流れる水がある。

独樂園はわずかに五畝の広さ、

それでも花や竹が秀でて、自然の野の趣がある。

花の香りは、園を巡る人の杖や履についてまわり、

竹の色は、園で憩う人の盃や罍どべりの中に映る。

春の終わりは樽酒に楽しみ、長い夏は碁を打って過ごす。

洛陽いどしよには古より才子が多く集まり、風俗は今も優雅である。

先生は独樂園に籠って外には出ないけれど、

洛陽の人々を挙って先生のもとへと訪れる。

先生は衆人と楽しんでいるようではあるけれど、

実は独樂園は独り楽しむところなのである。

先生は独りで何を楽しんでいるのか——

自身に備わるものが完全であるとき、

その徳は形として外には現れ出ない、

だから、何を貴んでいるのかを知る人は稀である。

先生はそうして独り楽しんでいるのだから、

天下の人々は、

先生がこの世界を正しく鍛錬し直してくれることを望んでいる。

子供も先生を讃えて歌い、

使い走りの僕に至るまで先生を知らない者はいない。

このようであるのに、

先生は独りで一体どこに行こうとしているのか。

造物者は決してこのままにはしておかないに違いない。

私などは、いまだに世間の名声を追い掛けているのは、

天が罰として与える病のようなものなのだろう。

それでも、先生がずっとだんまりを決め込んでいるのは、

手を打って笑ってもよいのではないだろうか。

(司馬光は子どもでもその名を知っているとこの詩にあるが、蘇軾も引けを取らない
 くらいの有名人になっていた。ちょうどこのころに、高麗^{こうらい}国からきた使者が杭州を通
 過した際に、蘇軾の詩集を探して買って帰ったとの話が記録されている)

■保母楊氏墓誌銘

蘇軾と蘇轍にはそれぞれに乳母がいて、2人とも母が蘇の家に嫁いだ際
 に連れてきた女性だった。以来、乳母はずっと兄弟のもとにいた。その
 うちの蘇轍の乳母^{ようきんぜん}の楊金蟬が6月11日に徐州で亡くなった。それから8
 年後に蘇軾はこの墓誌銘を作った。

先夫人(兄弟の母)の使用人であつた楊金蟬^びは眉山の人である。三十歳のときに
 初めて蘇の家にきた。柔順で、善いことに素直に従い、弟の轍の乳母になり、熙
 寧^{ねい}十^き(1077)年六月己丑に徐州で亡くなった。六十八歳だった。臨終に至っても乱
 れることはなかった。そのとき轍は南京^{なんけい}応天府^{おうてふ}で官職に就いていたので、柩を應
 天府の開元寺に仮に安置した。

それから八年、軾は黄州から汝州に異動となった際に南京^{こう}応天府^{じょ}を通つたので、
 應天府の東南^{じゅ}三百里にある寿院の西に正式に葬^{げんぼう}った。元豊八(1085)年二月壬^{じん}

こ
午であった。

銘に曰く。

百世の後、^{おか}陵や谷は位置を変えることがあるだろう。しかし、蘇子の乳母のために、
こ^こは毀さずにおいてほしい。

■和子由与顔長道同遊百歩洪相地築亭種柳

徐州には百^{ひやく}歩^ほ洪^{こう}という景勝地があった。徐州の州庁がある彭城^{ほうじょう}の町から東南二里にある早瀬で、数里にわたって激流が岩に衝突する壯観を呈する。そこに弟と顔復^{がんふく}（字は長道^{ちやうどう}）と遊んだ。蘇軾は百歩洪のほとりに土地を選んで亭^{あずまや}を築き、柳を植えようと考えたことがこの詩の終わりに見える。

（顔復は先に見た「晁約先生詩集叙」（本章 90 ページ）にその名が記されていた）

朝早くに役所に座ったものの、席が暖まる前に帰り、

部屋を閉ざし、静かに一日を過ごそうとした。

臥せっていると、客人がきたのが聞こえ、

あわてて履き物をさかさまにはいて迎えに出た。

両眼は朦朧としてまだ半分眠っていた。

町の東の泗水^しに歩いて行こうでないかと誘われ、

曲がりくねる路を進んで百歩洪に出ると、

そこは雪の白さを翻すかのようだ。

私は想像する――

駿馬に青い綱を付ける、馬は身を縮める、馬は脚を踏み出す、

波の上を飛んで、向こう岸の柳の陰の下に行くであろう。

馬はたとえ激流に落ちて、両脚を踏ん張るなら、水中より三丈の高さに飛び上がり、

たてがみ
鬣をふるって、声も乾くばかりに長く嘶くのだ。

何かに取りつかれたような興奮、

少年のころにあったものから私は久しく遠ざかってしまった。

私は想う――

故郷の剣関けんかんを削って巡り流れる嘉陵江かりゅうの急流、

それでも、剣関には車でも通れるような広い道が通じている、

帰ろうと思えばいつだって帰ることができるのだ。

山中の昔馴染は大いに笑たろう――

百歩洪に亭を築いて柳を植える気でいながら、

いったいいつ還るつもりなのかと。

■顔楽亭詩

がんふく こう し 顔復は孔子の弟子のがんえん 顔淵の遠い子孫である。このころ、密州知事のこうそうかん 孔宗翰が顔淵の旧居とされる場所に あずまや 亭 を建て、がんらくてい 顔楽亭と名付けた。蘇軾はそ

の経緯を記した序文と詩を作って孔宗翰に寄せた。

顔淵の住まいは、狭い路地にあつたと『論語』に記されている。その後は井戸ばかりがあつて、顔氏が長くそこに住んでいたわけではない。密州知事の孔宗翰はその地を得ると、井戸を浚って修復し、そこに亭を作つて、顔楽亭と名付けた。

昔、孔子は、竹の器に飯を盛り、小さな瓢で水を飲むだけの質素な暮らしをしている顔淵の賢を讃えた。しかし、韓愈かん ゆうはそのようなことは道理に明らかに通じる哲人にとっては小さなことだと言つた。本当にそうなのだろうか。

私が思うに、古の人いにしへが人を観るときは、必ず小さなところを観察した。大きなところは偽りがありうるからだ。

人は、千金の価値のある壁たまを碎いて、釜を破るような大声を発することもできなくはないし、猛々しい虎を撃ち、蜂の大群に襲われても平然としているといったこともできなくはない。竹の器に小さな瓢が哲人にとって大きなことであるのを多くの人は知らない。

そこで私は「顔楽亭の詩」を作つて孔君に送り、韓愈の説を正し、もって自分自身の戒めとするものである。

天が人間を生んだとき、口と鼻を作った。

口はおいしいものを食べたがり、

鼻は香りのよいものを嗅ぎたがる。

おいしいものがあれば必ずまずいものがあり、
 香りのよいものがあれば必ず臭いものがある。
 そうした二項対立を離れて天(の道)に遊ぶのでなければ、
 口、鼻、耳、目、心、知の六種の鑿(の^{のみ}で作られた穴)のせめぎ合いに陥ってしまう。
 六種の鑿の執着するところに従って一步一步進むうちに、
 遠く帰れないところにまで至って大悪人になってしまうのだ。
 顔淵が偉大なのは、
 狭苦しい路地の奥で安らかに暮らしていたことにある。
 古代のある勇士は武者震いしただけで虎や豹を走らせたというが、
 顔淵の身の内にはその勇士以上のものがあつた。
 私は最高の楽しみとは何かを求め、手本となるものを探してきたのだが、
 小さな瓢を手にして顔淵に従おうとして、
 ふと気づくと、顔淵は我が後ろにいる――
 顔淵はあくまでも路地奥につつましく留まっているのである。

■和李邦直沂山祈雨有応

徐州^{じょ}周辺も雨不足に悩まされることが多かった。蘇軾が赴任した年には、
 春から夏にかけて雨が少なく、京東東路の役人であつた李清臣(字は邦^{けいとうとうろ}
 直)^{りせいしん}が沂山で雨を祈^{ほう}つた。するとそれに応じて雨が降つたので、李清臣^{ちよく きざん}
 は詩を作り、それに蘇軾が和した。李清臣は本章 100 ページなどにすで

に登場している。

日照りが続くと、

高い土地の田には黄色い土埃つちぼこりが生じ、

低い土地の田には蒼耳そうじ(荒れ地の雑草)が生じるといふ。

いまや蒼耳さえなく、麦はどうかと問うまでもない。

雨を司る竜は眠りにけていて、少しは恥ずかしいと思ったのか、

大麦も小麦も枯れてしまった後になって、

地を洗うような雨をようやく降らせたのだった。

雨はいったどこからきてくれるのだろうかと思っていたころは、

百歩ひゃくほ洪の急流こうの音を雷かと聞き違えたりしたし、

試しに町の高台に上って見たら、

天の際に至るまで、どこもかしこも菽まめも粟あわも枯れ枯れて、

飢えからくる火が腸はらわたを焼くばかりで、ぐうぐうと牛が吼ほえるよう、

秋の稔りのときまでとても待てるような気がしなかった。

半年も雨が降らなかったのは、竜がなまけていたからなのだが、

竜といえば、

「わしてはない、わしより偉い天公てんこうを怨んでくれ」

と、ぼやいた。

今朝のひと雨で罪はすっかり償えたと思ったのか、

竜も土地の神も、

「この雨はわしら功績だ」

と、言い立てている。

かく言う私も、実のところ、何の功績もなく、

天下の倉から毎日穀物を盗み食いしているのであるから、

竜と同じようなものだ。

李公は、皇帝のお使いとして竜の怠慢を赦さないとされる。

ならば、私も自分の罪をこの詩で白状しておかないとならない。

■次韻答邦直子由五首

李清臣（字は邦直）と弟が詠んだ詩に次韻した。5首のうち3首を訳す。

其の一は李清臣に向けて、後の2首は弟に向けて詠んだもの。

其の一

夢の中でも、役所の書類は乱雑にひっくりかえたまま、

これほどまでに間抜けで怠け者であるのなら、

たぶん、呆れ返って許してもらえるのではなかろうか。

門を閉ざせば、僧舎の冷やかなのにも似て、のんびりと詩を作り、

そのうち横になって、聞こえてくるのは遠い急流の音。

つまらない懐いおもを忘れるには酒がよく、人と逢ってともにするのはもっとよい。

酒を呑めば眠ってしまい、

夢の中では、今度は文章が手を翻すように思うがままにできあがる。

調子に乗って、

くちん

喙を三尺ほども伸ばしてとんでもないことを言ってしまういたくなるのだが、

貴公がいかお瞋りになるのが怖くて、呑みこんでしまった。

其の三

尊敬すべき弟が東からきてくれたけれど、

ここは何もなくて寂寞としている。

昔馴染の人と呑んでくさくさした思いを慰めている。

町のすみは草むらに埋もれ、

そこに新たな道を開いてひゃくほこう百歩洪に行くと、

雨で水かさが増え、もとの早瀬がなくなっている。

君の車馬の跡が消えるより先に僕の手車は追いつこうとし、

その間を詩文の応酬が往き来するので、字を丁寧に書いているいとまがない。

この詩は君に見てもらってから書き改め、李公殿に見てもらおうと思っている。

其の五

わずかな俸禄のために塵まみれになる労苦があっても、

官職に留まっている方がたましなのだろうか――

この鬱々とした思いを鎮めようと、戸を閉ざして部屋に閉じこもる。

ふくら 囊のきの内うちにあっても稲のこの尖とがった穎ひねが飛び出すように、

自分が目立つ存在になってしまうのを僕は恥ずかしく思う。

漢しゅうの時代うんの朱雲は、皇帝のお気に入りの人物を批判して罰せられたとき、

これいざしえで古の忠臣と地下で顔を合わせることができると言った。

僕はその朱雲と地下で遊べるようなことをまだしていない。

特にすべきことがなければ気持ちよく呑むのがよいだろう。

故郷に帰りたと思ったなら、昔の人の望郷の詩を唱えればよいだろう。

羨ましいのは、君の仕事場が僧舎のように静かであること、

毎日南の方を眺め、鴟とが水浴びをしているのを見ていればよいのだから。

(この詩の末尾は、弟が務めるのは張方平ちやうほうへいのもとであるから、何の問題もなく治められ、仕事もないだろうということ)

■宝絵堂記

都おうちんにいる王誥しんけい(字は晋卿)(本章 154 ページなど)に請われてこの文章を記した。

君子は、意こころを物ものに寓よせるのはよいけれども、意こころを物ものに留とどめるのはよろしくない。意を物に寓せるときには、ささいな物であっても十分に楽しみとすることができるであらうし、特殊な物であっても病となるほどのことにはならないだろう。意を物に留め

るときには、ささいな物であっても病となってしまふであらうし、特殊なものであっても楽しみとするには足りなくなってしまう。

ろう し
老子はこう言っている。

「五つの色は人の目をくらませ、五つの音階は人の耳をこわし、五つの味は人の口を損ない、野を駆けて狩猟することは人の心を狂わせる」。

聖人はこの四つのことが起こるまでにならないように、いささか意を寓せるだけにしたのである。

りゅう び
劉備は英雄であつたけれども特別な髪型に結うことにこだわり、けいこう
嵇康は達人であつたけれども刃物を鍛錬することを好み、げん ふ
阮孚は豪放であつたけれどもくつ履に蠟を塗る趣味があつた。これらは先の四つのこととはまた異なるけれど、三人は生涯これを楽しみとして厭ふことがなかつた。

いろいろと人が喜ぶべき物があるなかで、人を存分に悦ばせて、しかも人を惑わせてしまうようなことがない物といえば、書と画に優るものはない。それでも、意を書画に留めるあまり、執着心から離れられなくなつてしまつては、ひどい禍となつてしまふ。しょうよう
鍾繇はある人にある筆法を求めて教えてもらえず、悔しさのあまり胸を叩いて血を吐き、その人が死ぬと墓を暴いて得ようとした。こう ぶ おうそうけん
孝武と王僧虔は書法を巡つて憎み合い、かんげん
桓玄は書画を惜しむ余り、走る船の上に保存し、おうがひ
王涯は壁の後ろの秘密の部屋に隠した。これらの児童の戯れのような振る舞いは、その身に不幸にもたらし、国家を損ないもした。これは意を留めることによる禍いである。わざわ

私は若いころに書と画を好み、家に所有する物は、ひたすらそれを失うことを恐れ、

人の所有する物は、それを自分に与えてくれないのを残念に思った。

その後、自分で自分のことを笑ってこのように思った。

「私は富貴を軽んじて、それよりも書を重んじた。死生を軽んじて、それよりも画を重んじた。これは誤った逆さまの価値観で、人としての本心を失ったものではなかろうか」

それから以前のように好むことはなくなり、喜びを与えてくれるようなものを見て、ときにそれを自分の手元に蓄えることがあっても、それを他の人が取って行ったところで、惜しむようなことはなくなった。それは、雲や霞が前を通り過ぎて目に感じさせ、百種の鳥が鳴いて耳に感じさせるのに譬えることができるだろう。喜んでそれに接するけれど、自分のもとから過ぎ去っても、それに執着することない。ここにおいて書と画の二物は常に私の楽しみとはなっても、私の病となることはなくなった。

おう王君は皇室の親戚ではあるが、その服装、礼儀、学問、詩書はいつも貧窮の士とともに競い合い、普段の暮らしからは美食を除き去り、声色を遠ざけ、もっぱら書と画に従事し、私邸の東に「宝絵堂」を作り、ほうかいどう所有するところの物をそこに蓄えている。そのことについて書くよう私に文章を求めた。私が恐れるのは、王君が不幸にして、私が若いときに好んだのと同じようであることだ。それで、このことを書いて王君に告げることにした。その楽しみを十分なものにして、病から遠ざかることを願うものである。

きねい熙寧十年七月二十二日記す

■送顔復兼寄王鞏

がんふく

顔復（本章 185 ページに登場）が都に行くことになったので、その送別の詩を詠み、兼ねて王鞏（字は定国）に送った。王鞏は名宰相であった王旦の孫で、かつて蘇軾が都にいたころから、蘇軾に教えを請うような形での交流が始まっていた。王鞏はこの後しばしば登場する。

徐州の官舎は水のように冷ややかである。

ここで私とともに遊ぶのは誰であるのか、

がんえん

顔淵の遠い子孫の君である。

我は衰えかつ病み、君は困窮している。

衰窮したとはいえ、ともに正しい道理を守っている。

ところが、君はどういうわけで私を捨てて行ってしまうのか。

この暑さのなか、軽い上着をひっかけて千里の旅に出ようとしている。

君に問う。

「何か求めるものがあるのか」

君は答える。

「そうではなく、成り行きなのだ」

「都では万事日々に新たになって、

知り合いてもとのままであるのは今幾人もいないだろう。

ぎゅうこうがい

君は牛行街のもとの宰相のお宅を知っているだろう。

門を叩いて王居士(王肇)^{おう こう じ}に面会を求めるとよい。

王居士は詩も草書も妙所に入った人である。

王居士は別れてから紙を連ねてたびたび私に手紙を送ってきて、
会えないのがはなはだ残念であるとしている。

そして、重陽^{ちやうよう}の節句にはともに菊の花を愛でようと約束もしている。

君が都から帰るときには、王居士を呼んで一緒に連れてきてほしい。

王居士はいまは官職に就いていないので、

どこに行こうかとやかく言われることはないはずだ。

太乙老仙殿^{たいいつろうせん}(張方平のこと)は静かに家に籠っておられるだろうから、

王居士がその門に至って道を問うにはいまがちょうどよいだろう。

そこから徐州まではわずかな道のりである。

君よ、どうか王居士のお尻を叩いて引っ張り出してほしい」

仲間がそっくり集まって一酔を得るのもの実のところ簡単ではない。

いまから羊を飼い、酒を醸^{かも}して準備しておくでしょう。

(王肇は張方平の婿である。南京応天府を経由してくれば舅に挨拶をした上で自分の
ところにこられると言ったのである)

(この詩は7月の終わりから8月の初めのころに詠まれたと推測されている。そのころすでに重大な事態が徐州に迫りつつあった。7月17日、徐州から北に200kmほど離れた澶州曹村埕で黄河が決壊し、溢れた水が完全にコントロール不能になってしまったのだった)

■蝟虎

かつこ やもり
蝟虎は守宮のこと。

きがついば おし
鶏は黍を啄むように蝟を啄む。

窓の間に潜む守宮は蝟を食らうので蝟虎と呼ぶ。

守宮は暗い中で舌を伸ばして飛ぶ虫を捕る。

虫捕りが成功する工夫は、腰と背骨の使い方にあるらしい。

ずるずるにゆるにゆる壁に張り付いて動き、

そのいやしいありさまに感心する人は誰もいない。

今年の日照りではとかげ
蜥蜴を呼んで雨乞いをし、

子供達が歌ったり踊ったり大変な騒ぎで、

蜥蜴に水をかけたところ、雨が降り注いだ。

蜥蜴が竜に頼んでくれて、雲や雨を呼んだというのだ。

守宮が地道に努力してはえ
蠅を撃つありさまを見ていると、

来年がもし日照りであったならば、

守宮に雨を求めているような気がする。

（この詩で何がしたいのかよくわからないが、地味に虫を捕って人間の役に立っている守宮を頼りにしてはどうかということであろう）

■子由将赴南都与余会宿於逍遙堂作兩絕句讀之殆不可為懷因和其詩以自解余觀子由自少曠達天資近道又得至人養生長年之訣而余亦竊聞其一二以為今者宦遊相別之日淺而異時退休相從之日長既以自解且以慰子由云

長い詩題を訳すと、「弟はいよいよ南京なんけい応天府おうてんに赴くことになり、逍遙堂しょうようどうと一緒に泊まり、2首の絶句を作った。それを読んで私は思いに詰まってどうすることもできないくらいになった。その詩に和して、自分の思いを少しときほどそうとした。弟は少年のころから心が広く、物事にこだわらず、生まれながらの資質として道に近く、しかも仙人のように養生をして長生きをする秘訣を得てもいる。私はその一つでも二つでも見習いたいと思っている。官職に就いていて、弟と別れている歳月はもう長いものではなく、引退して後に一緒にいる歳月はきっと長いのだろう。そのように考えて、私の気持ちを解き、かつ弟を慰めようと思うのである」。

其の一

別れの時期が次第に近づく。

それが何時かと聞くことに僕は耐えられない。

風が寂しげに吹き、雨が寂しげに降る。

僕の魂はすっかり断ち切られてしまう。

それでも、

僕は^{か ふく}かの夏馥、^{か せい}夏静の兄弟と比べたら、ずっとましと思えば慰めになるうか。

夏馥、夏静は迫害に遇って姿形がすっかり変わり、

顔を合わせてもそれとはわからなかった。

ただ声の調子だけに昔の面影が残っていたのだった。

其の二

朱い火で仙薬を作る方法があるという。

この別れは、薬を練る車が一回転するようなものなのか。

仙薬によって永遠の寿命を得たらどうなるだろう——

銅で作られた像と会って、

「この五百年の間に誰もいなくなっていましたなあ」

と、一緒に嘆くのが関の山だ。

■陽関曲

弟との別れが迫るなか、中秋の名月を兄弟で見た。そのときの詞。

暮雲収尽溢清寒。(夕暮れの雲がすっかり消えると、溢れ出てくるさえずえとした光)

銀漢無声轉玉盤。(天の川は^{ほしぞら}声なく玉盤を回転させる)

此生此夜不長好、(この生もこの夜も長く^よ好いわけではない)

明年明月何処看。(明年の明月はどこで看るのでしょう)

（ごくあっさりとした詞である。これから 18 年後、蘇軾は都から遙か遠くに流された先で、中秋の月のもとで独りこの詞を吟じることになる）

■過雲竜山人張天驥

うんりゅうさん　ちょうてん　き　せい　と
雲竜山に張天驥（字は聖塗）を訪ねた詩。張天驥は、この詩にあるようにもともとはよい家柄の人であったようだが、いまは山の麓で、親に孝行しつつひっそりと暮らしている。雲竜山は彭城ほうじょうの町の西 2 里にある山。張天驥はこの後何度か登場する。

野原に雨が十分に足り、風は清く絶好の日和。

病みがちの知事も喜び、轎かこに乗って、町の南の門からの道を進む。

荒れた農地で、蝗いなごが飛び、蚯蚓みみずが鳴いている。

村の奥に、梨や棗なつめの実が下がり、そこに訪ねる人の住まいがある。

門が閉ざされ、雀さわが噪ぐばかり、

秋風に落ち葉が掃除もされずに積もっている。

斜めになった日ざしのもとに一人の僮僕が臥し、

衰えた馬が秋の野原に放たれている。

垣根は倒れたまま、近くの村人のほかに訪ねてくる者はいない。

君の家は、もとは高位に就いた人を出し、

賑やかな音楽がすぐ近くから聞こえてくるようなところに住んでいた。

君は名利の世界を脱し、高い道徳で己の身を洗った。

病気を抱えながらも自分で耕し、百歳の老人に孝養を尽くしている。

豆を煮て水を捧げて父母を飲ばせることに努めつつ、

いつも詩や書物を朗読している。

昔の^{てんずい}天隨先生は餓えと寒さに迫られ、菊を植えて食べていたという。

昔の^{とう}董先生は親孝行であったけれども、ひどい貧乏で、

鶏も犬も餌をもらえなくて、互いに労わり合っていたという。

私の人生は寄せるようなものだ。

帰る計画を失って、もはや遅いのか。

それでも故郷の山は忘れずにいてくれるのか。

ただ恐れるのは白髪^{もちあわ}の迫ってくること。

君に従って^{もちあわ}稊を植えることを学び、

自家製の酒で君と慰労し合いたいものだ。

(ここでも、本章 145 ページで見たのとはほぼ同じ言い回しの「吾生如寄耳(吾が生は寄せるがごときのみ)」という句が使われている)

■贈王仲素寺丞

^{おうけいじゆん}王景純(字は^{わゆうそ}仲素)に贈った詩。^{ほうじょう}王景純は彭城県の役人であったけれども、何らかの事情で故郷に帰ることになったようだ。

(途中の「仏法を妻として」の後に続く数句はかなり複雑な故事の用い方をしている

ので、この訳では省略した)

気を養うのは児を養うようなもの、

官職を棄てるのは泥を棄てるようなもの。

人は君の拙さ^{つたな}を笑うかもしれないけれど、

事を定めたからは、君は誰に何を言われても迷わない。

君は言う、

「帰って農地を耕します」

私は君が貧乏をするのではないと心配で、君に尋ねる。

「君は故郷に何を持って行くのかい」

君は言う。

「一尺四方の家でも己の身を覆うことができます。

一寸四方の農地でも作物は育ちます。

心に明るい珠^{たま}があるのなら、

よれよれの衣服だって明るく照らしてくれて、

おんぼろの部屋にも虹がかかарのです。

銭に仕えること兄に仕えるごとくしなければならぬことはなく、

妻がなくても、仏法を妻として楽しむことができます」

私の人生といえば、もともとひどく田舎じみでいて、

若いころは、気合で自分をぐいぐい押しまぐり、

ちつぽけな一艘の舟で大河を遊り、
素手で象や犀を捕えようとするようなものだ。
ここのところはこうした自分の振る舞いを自分で可笑しく思い、
氣を臍の下あたりに留めておこうとするようになった。
はなはだ残念なのは、
そうした道理を知ることが遅かったために、
何かしら淒しいなかに置かれてしまっていることだ。
昔ある人は、悪い病気になってからようやく養生の道を問い、
もやは遅かったかと、枯れた梨の木の詩を詠んだ
——私はそのことを悲しく想いつつ、君の決断に敬服する。

■水調歌頭

弟は、兄と中秋の名月を見た後に徐州を離れた。この詞は弟が去ってすぐに作られたもの。次のような短文が付いている。

去年の中秋は、密州で『水調歌頭』の詞を作って弟に寄せた。今年の中秋は、
弟とともに徐州で過ごし、その直後に弟は去った。弟は中秋に『水調歌頭』を作っ
て別れの詞としたが、それは悲しみが勝ち過ぎていると感じた。そこでいまそれに
和して、退くのに早過ぎることはない自分を戒め、退いてともに楽しむことを慰め
としようではないかと弟に告げようと思う。

(1年前の密州での詞は本章 123 ページで見ている)

安石在東海、(謝安^{しゃあん}が若くして隠棲していたのは東海のほとり)

従事鬢驚秋。(国政に従事したのは髪が白^{とし}くなった秋)

中年親友難別、(年を取ってからつらいのは親友との別れ)

糸竹緩離愁。(愁いを緩めてくれるのは管弦の音)

一旦功成名遂、(謝安がいったん功成り名を遂げてより)

準擬東還海道、(準備していたのは東の海の道への帰還)

扶病入西。(かえって病をおして入ったのは西の都)

雅志困軒冕、(官服の内でも苦しみ続けた雅な志)

遺恨寄滄州。(遺恨を海浜に寄せたのでした)

歳雲暮、(暮れゆく歳月)

須早計、(早く立てるべき計)

要褐裘。(要るものといえば粗末な衣服)

故郷歸去千里、(故郷は去ること千里)

佳处輒遲留。(留まるべきは佳^よき处)

我醉歌時君和、(僕が酔って歌うとき、和せよ君)

醉倒須君扶我、(僕が酔って倒れるとき、助けよ君)

惟酒可忘憂。(憂いを忘れさせてくれるのはただ酒)

一任劉玄德、(雄大な志を抱く劉備に勝手にしてくれと任せたら)

相對臥高楼。(僕なんぞは高楼の下の地べたに置かれてしまおう)

(詞の前半は、晋の時代の謝安(字は安石)に焦点を当てている。謝安はいかなる重大事にも悠々と対処し、国難を幾度も救った人物で、蘇軾はこれまでも何度か言及している(第2章70ページなど)。その謝安も、身を退くことは思いのままにならなかった。詩の最後は、三国時代の英雄の劉備(字は玄德)にまつわる次のような故事を引用している。許汜という人物が、劉備の前で、「陳登は世間では評判がよいらしいが、私に言わせたら、傲慢な嫌な男です」とけなした。陳登を批判して、己を高く見せようとしたのだ。「何しろ、かつて陳登に会ったときに、まともに人と話もしないで、しかも、自分だけは立派な寝台の上で眠り、私は床に寝かせたのですぞ」と息巻く許汜に、劉備は「私だったらこうするだろうな。私は百尺の高楼の上に眠り、君には地べた寝てもらおう」と言った。そのころ劉備は雌伏の時期で、高い志を抱いて天下の趨勢について考えていたのに対して、許汜は早くから土地を買って隱棲の地を得ることを考えていた。ということから、隱棲についていつも言っている自分などは、劉備からしたら実に語るに足りない奴だと自虐的に笑ったのである)

■答任師中家漢公

任伋(字は師中)と家勤国(字は漢公)から送られてきた詩に答えたもの。2人とも眉州の人で、任伋は、先に亡くなった「大任」(本章168ページ)の弟。家勤国は、家定国、家安国と3人兄弟で、少年時代にこ

の3人は蘇軾とともに劉巨先生^{りゅうきょ}について学んだことのある同門の友。家定国は蘇軾と同じ年の科挙に合格したが、家勤国は合格しなかった（後に家勤国の息子の家愿^{かげん}が国家の重職に就くようになる）。このとき任伋^{にんぎ}は瀘州^ろにいて、官職に就かない家勤国がしばらく身を寄せていたのだろう。

昔わが父がまだ出仕する前の皇祐年間^{こうゆう}（蘇軾の幼少の頃）、
父は門を閉ざして家に籠っていた。

父は高い道徳を保って貧賤であることなど気にかけず、
その立派な態度は郷里に照り輝いていた。

父自身がつまらない人物たちを疎んじることはなかったけれども、
つまらない人物たちは自分から父との距離を取るようになった。

父がたまに門から歩み出て行くところといえば、
町はずれの丘にある史経臣先生^{しきょうしん}の家だった。

その門前に万本の竹があり、家の内にはぎっしりと書物があつた。

紅消梨^{こうしょうり}（実の大きな梨）が高々とそびえ、小さな池に白い蓮があつた。

いつも素足で走りまわる下女が一人だけいて、
雨の中でも畑の野菜を採ってきたりしていた。

これより少し後に、

任伋先生^{にんぎ}が高い志を抱いたまま、官を罷めて旧居^{かえ}に還ってきた。

このときに村里の子どもたちは、

任佖先生の家の門に向かって車の轍が幾重にも付くを見て、
初めて「長者の車」(有徳者のもとに土地の名士が集まりくる)の意味を知ったのだった。
任佖先生は人がくると鶏を煮て酒を酌み交わし、
客人と相対して大いに楽しんだ。
ときに古の隱者いにしえのような人がいると聞くと、任佖先生は自らそのもとに訪れ、
逆にその人がくると、任佖先生の妻がかいかいしく接待し、
どちらが主であるのかまるでわからなかった。
私はこのときまだ幼く、漢の司馬相如し ば そうじょを慕って賦の勉強をしていた。
任佖先生が話をするのを傍らに立って聞き、
先生の精悍なありさまに私は発奮させられた。
それから歳月はどれほど経ったのか、
あころの老人たちは逝ってしまって、もはやいない。
思えば、史経臣先生が最初に亡くなり、
その墓に植えられた桑や櫟おうちは一抱えほどの太さにまでなった。
私は官職に就いて万里を旅する身となり、
父を喪って衣服を涙でぬらしつつ一度だけ帰郷し、
各地を漂流すること二十年に及び、
人間界の万縁ばんえんの虚しさを知った。
ただ喜ばしいのは、
任佖先生が老境に至って知事に就任し、

威信が未開の地にも及んで、中華の風俗に靡くようになったことだ。

任佖先生は任期が満ちても、特に再任が許されて俸禄も増し、都に出て朝廷に業績報告をした姿は、まことに盛んなものがあった。

ところが、任佖先生はこれ以上の栄誉を望まず、

田園に帰る意志は少しも緩まない。

それはなぜかという、

かつて蔡州^{さい}にいたときに土地の人に慕われてよい農地を寄贈されたからで、

そこには肥えた土に水路が走る百頃^{けい}の稲田があり、

安心して十年の儲えを得ることができる。

昔蔡州の地に、鹿や猪を狩って楽しんだ宰相がいたけれど、

任佖先生も十斤の重さの鷹を連れ、驢馬ほどもある猛犬を伴って、

猟にいそむことができるであろう。

陶淵明^{とうえんめい}が隠退してから、自ら鋤を手に農作業に苦勞したのとは同じではない。

私は今や四十二歳、

髪が衰えて、梳るだけの量がない。^{しげず}

ここ彭城^{ほうじょう}は歴史に名高い町であって、

人材の乏しさからたまたま私が任命されただけで、

私のこれから先はもう知れたようなもの、

遠からず、樵^{きこり}や漁^{すなとり}を我が仕事とするようになるであろう。

となれば、任佖先生のもとに従って、

わらじ

草鞋を穿いて荒れ地を開墾して老いていくのがよいだろう。

任佖先生^{しやうこう}はいま蔡州から遠い瘴江のほとりにいて、

その思うところを誰に述べたらよからうかと困っていたところに、

幸いにも私の同門の友である家勤国君が訪れた。

家勤国君と私は、飲んで一つの乗り物に乗って語り合うほどの仲で、

氷の上に刺身を並べ、酒を酌み交わしたこともある。

近ごろ、家勤国君は酔って、ふと私のことを思い出したのか、

玉を連ねたような清らかな詩を送ってきてくれた。

家勤国君は、私に思いに合うことが少ないのを知っていて、

その詩で私の気持ちをほぐしたり伸ばしたりしてくれた。

世間のことは、風の中で翻る旗のよう、

日々にあちらからこちらへとひっくり返る。

高位にあつて訪問客が絶えなかった大臣も、

ひとたび地位からすべり落ちると、門の外に雀取りの網が張れるほどにひっそりとしてしまい、

皇帝の寵愛を一身に集めていた後宮の美女も、

ひとたび愛情が他に移ると、秋の扇の悲さに沈んでしまう。

昇るも落ちるも一瞬のこと、

そのたびに人は喜んだり怒ったりする。

私がこの詩を作って任佖先生と家勤国君に送るのは、

我が父以来の故郷の人々を見てきて、
「国に道が行われているときは智者として振る舞い、
国に道が行われていないときは愚者として振る舞う」
あるいは、
「国に道が行われているときは官に仕え、
国に道が行われていないときは退いて帰る」
という古の人々に教えを師とすることを学んだからである。

■初別子由

弟が行ってしまってから思いを詩に詠んだ。

僕は若い時分に、君がどういう人物であるかを知った。
天然の資質として、君は温和で清秀である。
学問を好み、成長するとともに好学の心はますます堅くなった。
表も裏もなく、どこまでも明るく見通せる人になった。
僕にとって君がかかけがえのない存在であるのは、
君が我が弟だからというだけでなく、要するに賢友であるからだ。
僕が杭州^{こう}に行ってから、君を見ないことを六七年に及び、
微妙な言説を語り合う相手がいなかった。
僕は率直にものを言うてしまう性格であるから、

ほど

程というのをわきまえないで身勝手に振る舞ってしまうことを、

僕は自分でずっと恐れていた。

君と会ってみたら、黙って秤の前にいるような気分になった。

僕の妙な意気を鎮めてくれて、よからぬことが萌すことがなくなった。

君には六人の娘がいて、

皆女性としての振る舞いを得ていて心配がないのでは、

ひとえに君の賢婦人によるものだ。

家庭内がきちんとしていれば、粗末な食事でも正式の御馳走に等しいというは、

まさに君の家のことで、

君は内のことを気にしないで、外で思いのままに行動することができる。

ところが、出来の悪い官員である私は、明日の朝に炊く米もなく、

それでいながら、雷鳴のごとき鼾をかいて平気で眠っている。

秋になって東の部屋で眠って、夜に風雨の音を聴くと、

別れは長くは続かないと思えてくる。

それはどうしてかと聞かれても困る、

妙理は細かく分析することはできないのである。

この前、君は彭城の町の門から出て、一艘の舟に乗って西に行ってしまった。

君は南京なんけい応天府おうてふに帰ってから、

高殿に上って、古い建物が聳え立つのを空しい気持ちで眺めたり、

家において、僕とともに官職に就いたのは誤りでなかったかと、

ふとそういう考えにとりつかれて驚いたりしていることだろう。

南京はまことに繁華なところで、人事は水と火のように争い合っている。

僕が思うに、まずは門を閉ざして静かに座し、

身を無きもののようにして、見ざる聞かざるを決め込むのがよいだろう。

家族を養うなど小さなこと、

文章に励んでも虚名を得るだけ。

成り行きのまま白髪を靡かせるのでよく、

長生きの薬など用いる必要はさらさない。

■台頭寺雨中送李邦直赴史館分韻得憶字人字兼寄孫巨源二首

李清臣（字は邦直）が都で職を得て徐州を去ることになった。送別の宴が雨の中、台頭寺で開かれ、出席者に韻が配られて詩を詠んだ。蘇軾には「憶」と「人」の字が当たり、2首作った。詩に孫洙（字は巨源）へのメッセージも込めた。本章102ページで見たように、李清臣は孫洙の娘を妻としていて、このとき孫洙は都にいた。2首のうち1首を訳す。

其の一

葉が枯れ始めた林に、秋風がずっと強く吹き寄せ、

都に行く君を送る老いた私に、百の憂いが集まってくる。

人々が歌う送別の詩は、遙か遠くに行こうとする雲の中に入り、

詩の悲しみのために、雲は進まなくなり、天は泣く。

紅葉に黄色い菊、秋はまさに色の乱舞、

白い魚に紫の蟹、秋の美味にも君は立ち去り難い。

君に依って美しい髯の將軍(孫洙)に告げるのは、

私はもう病み衰えてしまって、逢ってもきっとわからないだろう――

■九日邀仲屯田為大水所隔以詩見寄次其韻

重陽の節句の当日になったが、その日までにはくると言っていた王鞏^{おうきやう}

(本章 195 ページ) はとうとう姿を見せなかった。また、呂梁^{りよりやう} (彭城^{ほうじやう}の東の町)^{ちゆうはくたつ}の仲伯達を重陽の宴に誘っていたのだが、大水のために行けなくなったとの断りの詩が送られてきた。それに次韻した詩。黄河^{かうが}から溢れた水がいよいよ徐州に迫ってきたのだった。

重陽の節句^{しん}といえば、晋の時代の賢人^{もうか}の孟嘉の故事を思い起こす。

今年の重陽の宴に君がこれらないのではその孟嘉を欠くの^に等しい。

西からきた黄河の神様は、どうもおのれの力の大きさを誇り過ぎだ。

船頭の黄色い帽子も吹き飛ばしてしまって君はこられなくなるし、

せっかくの樽酒も浪の花に浮かぶようなありさまだ。

君は鯉を使わして、大水のなかを詩を送ってきてくれたのだが、

その珠玉の文字に対して、私は瓦礫のような文字を並べて答える。

何時か君と会って、老い去ってからの秋の悲しさを語り合いたいものだ。

重陽の宴の酒に酔って詩を作ったので、

字が斜めになっているのを許してもらいたい。

(孟嘉の故事は非常に有名で、蘇軾もしばしば用いているので、ここで簡単に説明を加えておく。南朝の晋の時代に、皇位を奪うことを意図するほどの実力者であった桓温^{かんおん}が主催した重陽の宴で、孟嘉の被りものが風に吹かれて飛んでしまった。昔の中国では頭頂を顕わにするのは非常に恥ずかしいこととされていたのだが、孟嘉は気付かず、そのまま厠に行った。桓温はある人に命じて、孟嘉をからかう文章を作らせ、席に戻ってきたところで孟嘉に見せた。孟嘉はそれに応える文章をさりと作り、その内容が非常に立派だったので一同は感嘆した。権力者に阿ることなく、悠然と余裕のある振る舞いは、後世の手本となった。それからの連想で、船頭の被る帽子が出てくるのだが、その帽子が黄色であるのは、陰陽五行説^{いんようごぎょうせつ}で「水は火に勝ち、火は金に勝ち、金は木に勝ち、木は土に勝ち、土は水に勝つ」という関係があり、土の色である黄色を身にまえば水を自在に制御できるという意味である。この詩は酔っ払って書いたことになっているが、実際はそうではなかった。わざと余裕のあるポーズをとったのだ)

■ 獎諭勅記

こうが
黄河から溢れた水が、遠く 200km 先の徐州にまで到達した。上の詩を見る限りでは、9月9日の時点では、彭城^{ほうじょう}と呂梁^{りりょう}の間の行き来がまだ可

能であったようなのだが、実際にはどうだったのだろうか。

このときの洪水がどのようなもので、蘇軾がどのように対処したのか、弟の蘇轍が記した二つの文章から知ることができる。一つは翌年の秋に書いた『黄楼の賦』の序文、もう一つは 25 年後に書いた兄の墓誌銘。両者は重複するところもあれば補い合うところもあるので、適宜合成してここに訳す。

熙寧十年七月十七日、黄河が曹村で決壊した。水は梁山泊(黄河の南の低湿地帯)を水浸しにし、南清河に溢れ、さらに泗水に溢れ、彭城の南を取り囲む二つの山で止められて呂梁と百歩の間で滞り、八月二十一日、彭城の町にまで及んだ。たまたま徐州知事として彭城にいた兄の蘇軾は、水がくる前に人々に指示し、土を運ぶための畚や鍬を用意し、土や石を蓄え、干し草で城壁の穴を塞ぐ備えをした。水は町のまわりを囲み始め、いまにも城壁から入り込んで町が破壊されそうになったために、富豪たちは浮足立って町から出て水を避けようとした。

兄は言った。

「もしも富む者が出てしまったなら、民心が動揺してしまう。私は誰と町を守ったらよいのか。私はここに留まる。水は決して町を壊しはしない」

使いを出して人々を説得して町に呼び戻した。

兄は兵士のいる宿舎に行き、その隊長を呼んで言った。

「水はまさに町を害なおうとしている。事は急である。諸君等は皇帝の兵士で、中央からの命令に従う者であるけれども、私に力を貸してほしい」

隊長は言った。

「知事殿が洪水から逃げずにいるのですから、我等ごとき者はその指示に従うまでです」

兄は隊長とともに、短い衣を付けた裸足の兵士たちを率い、砂袋をもって町の外に出ると、町の南東の戯馬台げばだいから始めて城壁に至るまでの長い堤を築いた。堤が完成すると、水がその下にまできたが、町に害は及ばなかった。民心はこれで静まった。

しかし、雨は日夜やまず、水は勢いを増して暴れ、九月一日、町に及んだ水は深さ二丈八尺にもなり、東門も南門も北門も塞ぎ、水は町から山までを浸した。

兄は城壁の上に小屋をつくってそこに寝泊まりし、草鞋を履いて町を駆けまわって官吏のそれぞれに受け持ちの場所を与えて守らせた。

水は千余里にわたって漲り、人家を漂わせ、墓所を破壊し、老弱者は川に浮かんで流され、壮強な者は必死に走って水を避けたが、木や高台で孤立して食べる物がなくて餓死した。兄は水に慣れた者に命じて船を出し、食糧を配って大勢の者を救った。

朝廷は黄河を塞ぎ、ようやく水が引いたが、徐州について考慮する暇はなかった。

兄は言った。

「黄河が本当に塞がれたのなら徐州にはもう害が及ばないだろう。しかし、塞がれるか塞がれないかは天の定めにもよるだろう。徐州の人々を重ねて被災させるわけにはいかない」

城壁を補強し、水害の要となる場所を見定めて木製の堤防を作り、たとえまた水がきても町は安全であるようにしようとした。朝廷に労働力を調達することを請い、朝廷はそれを許し、事が終わる

と、詔みことりをもって褒められた。

徐州の人々は兄とますます親しみ、町の東門の脇に高い楼閣を築き、「土が水に勝つ」との意

味を示すために壁を黄色く塗ることを勧めた。完成すると黄樓^{こうろう}と名付けた。

この文の終わりにあるように、水害への対応が完了した後に蘇軾は皇帝から褒められ、また黄樓と名付けた樓閣を建てた。それを黄色く塗ったのは、先の詩で見たのと同じく、土は水に勝つ意味からである。黄樓の完成は洪水から1年後の秋で、そのことについて後で見ることにし、ここでは皇帝から褒められたことについて蘇軾自身が記した文章「獎諭^{しょうゆ}勅記^{ちよくき}」（獎め諭す勅書^{ほざとちよくしよ}についての記）を見ておこう。前半は皇帝の勅書の写しで、後半に弟の文章にはなかった幾つかの具体的な記述がある。

蘇軾に下された勅書に曰く。

「京東東路安撫使司^{けいとうどうろあんぶしし}ならびに転運司^{てんうんし}の奏するところを見ると、昨年、黄河の水が徐州城下に至ったとき、汝は自ら官吏を率い、兵夫を駆り、監督して、城壁を救い護^{まも}った。一城の人民ならびに倉庫、廬舎にいたるまで、漂流、水没の害を免れることができ、ついに全てがもと通りのままであることを得た。黄河は中国にとって長く患いとなっており、その堤が潰えて水が東に注ぎ、溢れて徐州にまで及んだ。汝がいたことで、民は住居に留まり、城郭を増強して、安らかであることができた。朝廷への使者がしばしばこのことを告げ、朕は甚だ喜ばしく思っている」

熙寧十^{せん}(1077)年七月十七日、黄河は澶州曹村埽^{そうそんたい}で決壊し、八月二十一日、徐州城下に水が及んだ。九月二十一日に至って、水の深さはおよそ二丈八尺

九寸にまでなり、東西に広がり、北は山に触れて止まった。皆清水で濁流ではなかった。水の高さは城壁の内側の平地よりも一丈九寸ほども高くなり、外壁の東南の隅では水沈するところまであと三版^{ばん}となった。

土地の古老がこのように言った。

「かつて天禧^{てんき}年間に二つの堤を築きました。一つは、小市門^{しょうし}外の壕^{ほり}を絶って南に向かい、少し西に振って戲馬台^{げばだい}の麓^{ふもと}に至るものでした。もう一つは、新牆門^{しんしょう}外の壕を絶って西に向かい、折れて城下の南京門^{なんけい}の北に至るものでした」

急遽^{きゅうそ}人夫五千人を集め、武衛奉化牢城^{ぶゑいほうかりょうじょう}の兵士も合わせて、昼夜兼行で堤を作った。堤が完成した翌日、水は東南の隅から溢れてきたが、堤に当たるとそこで止まった。

徐州には水門が六カ所あり、まだ水の至らないうちに、薪や芻で土嚢を作って城壁の外側から塞いだ。水が至ってから後は、城壁の内側からも塞いだのだが、どれも恃むに足りないものであった。

城中にはもともと土を掘った大きな坑^{あな}が十五あり、外の水と呼応して坑の水位が変化し、水が溢れ出るものもあった。徐州は三方を水に囲まれてしまったために、垂父^{あふ}の塚の東側だけから工事用の土を取ることができた。

町の附城の部分から始まる昔の長堤の址があり、それを大きくして長さ九百八十四丈、高さ一丈、そして幅を倍にした。

公私の船数百艘が風浪のために動けなくなっていたのを城下に繋ぎ、それで河の勢いをそいで水の怒りを鎮めた。

十月五日に至ってようやく水は退き、城は全きを得た。

翌年二月、朝廷より錢二千四百十万が支給され、人夫四千二十三人を集めた。

また、備えの常平錢六百三十四万と米一千八百こく斛を放出して、人夫三千二十人を募集し、城外の小城を改築した。木で堤防を四力所に作った(石が調達できなかったので木を用いた)。一つは天王堂てんのうの西、一つは彭城樓の下、一つは上洪じょうこう門の西北、一つは大城の東南隅である。十五あった大きな坑は皆塞いだ。

一方ですでに澶州靈平せん れいへいの堤防が完成したので、黄河の水はもうなくなった。

わたれ臣が思うに、黄河は常に五六十年来一度は決壊する。徐州は古汴河こべんがと泗水しすいの下流にあって、上下二百余里にわたって皆山に阻まれ、水が最も深くなり、そして排水が難しいことでは、他の地域と異なっている。恐れるのは、久しい後にまた緊急事態になったときに、役人も民衆もそうしたことをきちんと知らないでいることだ。そこで、皇帝から詔書を頂戴した機会に、この大略を記して、石に刻もうと思う。そして詳細は文書にして役場に納めておく。これを『熙寧防河録』という。

(次の災害に備えて今回の経験を石に刻んで残しておくところまで、蘇軾の措置は実に行き届いたものだった。詩にしばしば詠んでいるように、病み衰えて酒を呑んではかりいたわけではないのである)

■河復

以上は災害への対応が終わってから書かれた文章であったが、時間を戻して、洪水が引いた直後に詠んだ詩を見ておこう。さすがに蘇軾といえ

ども、町が一面の水の中で孤立して対応に奔走していたときには詩を詠むような余裕はなく、黄河の流れが戻ったことを聞いて、ようやくその喜びを歌うことができた。次のような序文が付いている。

熙寧十年秋、黄河は澶淵で決壊し、鉅野(梁山泊あたりの旧名)に注ぎ、淮水から泗河(南清河の旧名)に入った。澶の南、魏より北のあたりでは黄河の水が本来の川の流れを絶って溢れ、甚大な被害となった。彭城(徐州)の城門の下に深さ二丈八尺の水が迫り、七十余日間退かなかった。役人も民衆も懸命に水を防いだ。十月十三日、澶州で強い風が終日吹き、それが止むと、黄河の流れの一筋がもとの道へと戻った。これを聞いて私は非常に喜び、できうれば黄河が塞がれるようにと願った。そこで「河復」の詩を作った。これを人々が道々で歌うことで、民衆の願いが神に届けばと思ったのである。これはつまり土地を治める者の志なのである。

皆は知っているだろうか、

漢の元光年間に黄河は瓠子で決壊し、

それから二十年ほど後の元封年間にまたしても瓠子で決壊した。

鉅野は東に傾いて水が溢れ、淮水、泗河は水でいっぱいになり、

南方の人々は、黄河の魚を飽きるほど食べるようになった。

皇帝は予定されていた国の重要な儀式を取り止め、

えつ ふ

越の巫を使わし、河の神を鎮めるために白馬を水に沈めた。

しかし、河の神は、人力を使い果たすまで努めても許そうとせず、

堤防を塞ぐために投じた薪や芻を数限りなく流し下してしまった。

我が宋朝の皇帝の徳は古の堯^{ぎょう}のように盛んで、

神々もそれぞれに役目を皇帝から受けるようになったのに、

黄河の神だけがなお驕りたかぶっていた。

天帝は風の神を遣わして黄河の神に命令したので、

ようやく、夜のうちに、水は澶州橋から北に向けて流れることになった。

東の風も氷を吹いていささか助力したので、

これ以上の土木工事をしないでよかった。

こうして南方の人々は水が引いた後の土地で、

黄河の水がもたらした泥の上に麦を蒔き、

大木にひかかっている筏を仰ぎ見るのである。

■登望◆亭 (◆は谷+共という字)

高いところから洪水の痕を見て詠んだ詩。

黄河の水が西から漲^{みなぎ}りきたときには、

大きな谷間のようなこの地勢が全く失われ、

水の光のただ中に、徐州の城だけがぼつんと存在していた。

突然退くや、水はどこかに消えてしまい。

残された千里の土地では、稲も麻もみな空しくなっていた。

■有言郡東北荊山下可以溝畎積水因与吳正字王戸曹同往相視以地多乱石
不果還遊聖女山山有石室如墓而無棺槨或云宋司馬桓魋墓二子有詩次其韻
二首

長い詩題の前半は「ある人が徐州の東北の荊山の下に溝があって、ここに水を流すことができるだろうというので、^{けいざん}呉瑄と^{ごわん おうぶんこう}王文誥と一緒に見に行った。しかし、石がごろごろしていて、思うところを果たせそうになかった」(以下は略す)。次の洪水に備えて、蘇軾はできる限りのことをしようとしていたのだ。2首のうち詩題の前半部分に関連する1首を訳す。

其の一

「手を立てて黄河の水を遮る」ということわざがある――

ちっ掛けな素手で遮ることなどできるはずがない。

黄河の奔流は、一瞬にして千の家を巻き込んでしまった。

昔、^{ちほく}智伯は^{ちやう}趙の町を囲んで水攻めをした――

そのようなことが実際にできるものか私は疑っていた。

しかし、^{ちやうとう}張湯は^{しよく}蜀への道を整備するのに、

山をまわる坂道を繋ぎ合わせるのではなくて、

谷を穿って水路を通じさせたのだから、
やり方次第では、水を制御することも可能なのだろう。
私は世事に疎いためにこの徐州の地に出され、
苦勞の日々を送らなければならなくなった。
私のごとき知事があれこれ対策を立てたところで、
ごろごろと雷様の車の引かれる音が轟いて、大雨が降ったならば、
何の役に立ちもしないと笑われてしまうだけなのだろうか。

(以上、洪水に関連するいくつかの詩文を見てきたが、この先しばらく別のテーマの詩文が並んで、また洪水に戻る)

■表忠觀碑

杭州知事こうの趙抃ちやうべんからの依頼で、表忠觀ひやうちゆうかんという道教の寺院の由来を記したこの碑文を作った。

(趙抃は蘇軾より 28 歳年長の大先輩で、かつて副宰相も務めた官界の人物。王安石おうあんせきが神宗皇帝しんそうによって初めて副宰相に抜擢されたとき、趙抃は先輩副宰相として、王安石が進めようとする改革を強く批判した。しかし、王安石に国政を任せようとする皇帝の意志は固く、熙寧きねい3 (1070) 年 4 月、副宰相を辞して杭州知事に転出した。それは蘇軾が改革を批判する意見書を皇帝に提出したすぐ後のことだった (第 3 章 46 ページ)。それから 1 年ほどたった熙寧 4 (1071) 年 6 月に、蘇軾も都にいられなくなつて杭州副知事として転出した。蘇軾が杭州に着任したのは 12 月で、その直前に趙抃

は他州に移り、すれ違いとなった。そして、この年の5月に、趙抃は再び杭州知事になった)

(この碑文の大半は、趙抃が朝廷に提出した文章の写しで、蘇軾が作ったのは最後の銘文だけである。ここで主題となっている^{せん}錢氏の^{ごえつ}呉越国(唐と宋の間に興った地方政権の一つ)について、蘇軾が肯定的な見方をしていたことは第4章30ページなどですでに見ている。趙抃と歴史認識(ならびに政治的立場)を共有することから碑文の執筆を依頼されたのだろう。銘文は韻文としての体裁が見えやすいように訳してみた)

^{き ねい}熙寧十(1077)年十月^{ぼ し}戊子、^{し せい}資政殿^{だいがく し}大学士、^{う かん}右諫議^{だいい ふ}大夫、^{ち こうしゅうぐんしゅうじ}知杭州軍州事の趙抃は朝廷に次のように申し上げた。

「もとの^{せん}呉越国の王の^{せん}錢氏の墳廟と、その父祖、^{はか}妃、^{せんとう}夫人、子孫の墳で^{りん あん}錢塘県にあるもの二十六および臨安県にあるもの十一は、どれもが荒廃したままに放置され、土地の父老はそこを通るたびに涙を流しております。

^{わたし}臣が謹んで考えますに、^{せんりゅう}呉越国の最初の王であった^{せんりゅう}錢鏐は、民衆を兵士として集め、唐末に大乱を起こした^{こうそく}黄巢を破って走らせ、^{こうわい}江淮地方にその名が知られるところとなりました。次に、唐朝に背いた^{りゅうかんこう}劉漢宏を八組の兵団を率いて破って越州を平定し、それを^{とうしゅう}董昌に捧げ、自分は杭州を拠りどころとしました。ところが、董昌が越州をもって唐朝に反したために、すぐに董昌を討ち取り、越州も合わせて、^{せつとう}浙東、^{せつせい}浙西の地を平定しました。唐が亡んだ後には^{せんじん}呉越国の王となり、その子の^{せんげんかん}錢元瓘に王位を伝え、孫の^{せんじん}錢仁佐に至って^{なんとう}南唐国の兵を破って^{ふく}福州を取りまし

た。錢仁佐せんしゆの弟の錢俶が王位を継ぎ、再び南唐国を攻め、周朝の世宗皇帝しゅうせいの軍団を迎え入れました。その後、ついに宋朝に仕えるようになりました。

呉越国の三世四人の王は、五代十国時代の天下が大いに乱れた時代を過しました。このとき各地に豪傑が蜂起し、ほんの数州ばかりの土地に拠って勝手に王を名乗る者が大勢いました。今ではそれらの一族のほとんどが滅び去り、ひいてはそれに従わせられた無辜むこの民も子孫が残らないようなことになってしまいました。しかし、呉越国ばかりは千里四方の土地に兵士十万を擁し、山から金属を採り、海から塩を煮て取り、象牙、犀の角、真珠といった富にも恵まれ、天下第一といわれるほどに繁栄し、それでいて臣下としての節義を失うことなく、その時その時の皇帝に絶えることなく貢物を献じ、その地の民は老いて死ぬまで戦争を知らずに過ごし、四季の遊びを楽しみ、歌や鼓の音がいつも聞こえ、今に至ってもそれがそのままに続いています。呉越国の王が民に徳あることはなほだ厚いものがあったのであります。

宋朝が天命を受けて四方の乱れを順次平らげて行ったときに、蜀国の孟氏しゅうや南唐国の李氏りはその堅固にして遠く離れていることをたのみとして、宋の兵団に城下にまで迫られ、ついに力に屈して勢いが窮まって後になってようやく降参しました。また漢国の劉氏りゅうは死を賭して宋の軍団に抵抗して百回戦い、味方の遺骸を積んで城壁とし、池ができるまでに血を流して抵抗し、ついには宋が天下の力を尽してようやく勝利したのでした。ただ呉越国だけは、宋朝からの命令を待つこともなく、府庫に封印をし、土地と人民の帳簿をともに宋朝に提出し、宋朝から統治

するための官吏を派遣するようお願い、銭氏は駅舎から旅立つ旅人のように王の地位から去ったのでした。宋朝に功績があったこと、実に大きなものがあります。

昔、後漢の時代に竇融が河西地方を漢朝に献じたとき、光武帝は竇融の父祖の墳墓を治めて厚く祀るよう詔を下しました。今の銭氏の功德はほとんど竇融を超えるものがありますのに、百年に及ばない歳月の間に銭氏の墳廟は荒れ、道行く人は傷み嘆きありさまとなっています。これは忠臣を褒め、民心を慰めるという道理に反するものであります。

臣が願いますに、竜山にある廃れた仏寺の妙因院の址を道教の寺院とし、そこに銭氏の子孫で道士となっている自然という者を居させ、銭塘県にある墳廟をこの自然に管理させるとともに、臨安県にあるものはその県の浄土寺の僧で道微という者に管理させ、一年にそれぞれその弟子から一人ずつを道士、僧侶にし、世々この仕事を掌らせて、その土地からの収入をもって建物を維持させるようにしたいと考えます。もしそれらの者がきちんと仕事をしない場合には、県の役人が監督指導し、ひどい場合には管理者を交替させるようにします。こうすれば永久にこのことが続き、朝廷が銭氏を優遇する意を表すのに適いましょう。臣は死を犯して以上のことを申し上げます

これに対して朝廷からは「よろしい」との裁可が下り、妙因院には改めて表忠観の名が与えられた。

銘に曰く。

天目之山、苕水出焉。しょうけい（苕溪の水が流れ出る天目山）てんもくさん

竜飛鳳舞、萃於臨安。（そこは竜が飛び鳳凰が舞い集まるところ）

篤生異人、絶類離群。（ここに生まれ出たのは、人と大きく異なる者（すなわち錢鏐））

奮挺大呼、従者如雲。（かの者が奮起して呼べば雲のように集まり従う人々）

仰天誓江、月星晦蒙。（天を仰ぎ川に誓うとき、月も星も暗く、ただ輝くのはかの者）

強弩射潮、江海為東。（かの者が潮を射るなら、海も東に退く勢い）

殺宏誅昌、奄有呉越。（劉漢宏を殺し董昌を誅し、樹立した呉越国）

金券玉冊、虎符竜節。（その功を刻むのは金券、玉冊、虎符、竜節）

大城其居、包絡山川。（大きな町を作り、取り囲む山と川）

左江右湖、控引島巒。（町の左は大河、右は湖、遠くに控える島々）

歳時帰休、以燕父老。（時に故郷に帰って、父老を集めての酒宴）

曄如神人、玉帶球馬。ぎょくたい（玉帯を纏って馬にまたがった姿は神のよう）

四十一年、寅畏小心。（己を戒めて天に仕えて在位四十一年）

厥篚相望、大貝南金。（呉越国には次々に集まりくる宝玉を納めた箱）

五朝昏乱、罔堪托国。（ときは五つの王朝が乱れ立ち、民には生命を託す国はなく）

三王相承、以待有徳。（ただ呉越国だけは民に徳があり、継承した三代の王）

既護所帰、非謀非咨。（すでに帰順すべき皇帝を得れば、謀ることなく即決）

先王之志、我維行之。（後代の王が行ったのは先王錢鏐のもとからの志）

天胙忠孝、世有爵邑。（天は錢氏の忠孝を褒め、代々保つ爵位と領地）

允文允武、子孫千億。（錢氏は文武に優れ、繁栄する子孫は千億）

帝謂守臣、治其祠墳。(ここに皇帝は大臣に命じる——錢氏の祠墳を治めよ)

毋俾樵牧、愧其後昆。(樵や牧人によって荒らされ、錢氏の子孫が耳にぬやうにせよ、と)

竜山之陽、歸焉新宮。(竜山リゅうざんの南に新たに築いた堂々の宮)

匪私於錢、唯以勸忠。(それは錢氏を特に最賈するのではなく、忠を勧めるため)

非忠無君、非孝無親。(忠がなければ君はなく、孝がなければ親はない)

凡百有位、視此刻文。(あらゆる官吏はここに刻んだ文章を見るがよろしい)

■贈写御容妙善師

徐州じょに肖像画を得意とする妙善みょうぜんという僧がいた。その妙善みょうぜんが画いた仁宗じんそう皇帝の肖像を見ての詩。

憶い出すに、

私は昔、仁宗皇帝の御前で制科の試験を受けた。

珠の簾に翡翠のカーテンのかかる廂ひさしのところで、

紫の衣を着た皇帝の使いの者から詔が下され、

跪いて捧げ持つと、天からの香りがほんのりただよってきた。

仰ぎ見ると眩い光に目がくらみ、

ただ東の海から暁の色が開かれるかのようだった。

試験が終わると、

皇帝はお帰りになるべく迎陽門げいようから歩み出られ、

皇帝に付き随う前後の飾りが廊下を明るく照らした。

私のような野人は皇帝のお顔を見知ることではできなかったが、

それでも皇帝の瞳の光ばかりは記憶に刻まれた。

私は制科に合格すると鳳翔^{ほうしょう}で三年間の任に就き、

帰ってくると、真に一つの夢、

仁宗皇帝の御陵に凄然と風が吹いているのだった。

仁宗皇帝の天容玉色は誰にも描けるものではなく、

老先生は古寺に籠って昼も戸を閉ざし、

夢の中で神から技を授けられて心に得るものがあり、

覚めて後に、筆のあるのを忘れて手に任せて描いたのだった。

私は老先生の庵に入れていただき、

仁宗皇帝が普段のお召し物で、厳として動かずにお立ちになっているのを見て、

涙が止まらなくなった。

傍らには立派な髯や眉の元老が控え、

虎のような武臣が長い剣を持って立っている。

老先生は竜や鳳のような高貴な方だけを画き、

草の間に住む猿やら鹿やらを画くことは決してないので、

都の人が老先生の鉄の門を踏み破ぶって頼みにこようが、

黄金やら白い壁^{たま}を床に山と積んで頼んだところで聞くことはない。

ところが近ごろ私を画いて下さることになったのは、

私が仁宗皇帝にお仕えたことのある白髪の老人の一人だからであろうか。

かくて老先生の画いて下さった絵を見て、

鏡を見るまでもなく了解したのは、

かように老いぼれになったのでは、

明年にも身を引いて故郷に帰るべきだということ。

■哭刁景純

こう杭州時代に親しくした潤州の刁約じゅん（字は景純けいじゅん）（第4章163ページなど）の訃報を聞いて詠んだ詩。刁約は蘇軾よりも42歳上の大先輩。

書物を読んで先人に思いを馳せると、

いつももっと早く生まれなかったのを残念に思う。

それでも、何かと道を誤りやすい若い時分に、

私はこの老先生に会うことができ。

老先生は松や柏のように霜や雪にあっても枯れることなく、

ごく小さな芽から、自分自身を養って、ひと抱えもある大木に到った人である。

こうざい宏材（優れて汎用性のある木材）は手近な用にはなかなか役立たないので、

千年間も抛っておかれたままで、枯れて倒れてしまうようなことが多い。

ぎ しゅう し魏の正始年間（235-249）は学問が盛んで、

後に学術が衰えて再び興ってきたときに、

また「正始の音」を聞けるようになったといわれたものだが、
老先生の文章はまさにその趣があり、
白髪になるまで変わらない風節を貫いた。
普段から人のために努めるばかりで、
自分自身のためにすることはほとんどなかった。
是か非かは一つには決めがたいもので、
老先生の論じるところは反覆して看るとますます好いとわかってくる。
私は先に呉越地方を巡り、
酒を把って老先生の長寿を祝った。
朝でも夜でもかまわずに老先生の門を叩き、
かのほうとくこう龐徳公のようにどちらが主人であるかわからないほどに親しく接してくださり、
老先生のもとに百度立ち寄っても、
かの漢の高祖が若いころに友人を連れて伯母のもとにたびたび立ち寄って、
疎まれてしまったようなことはなかった。
最後に別れたときに老先生はすでに八十歳、
後にまた会えることは保証し難いと思った。
昨日友人からの手紙で、
去年は老先生の奥様が亡くなり、
今年は老先生が亡くなったと知らせてきた。
じゅん潤州の人々は、はんきょう范橋から下を覗いて、

冷たい水に藻が所在なく揺れ動くのを見て、

心を傷めているであろう。

飼われていた馬は、

家の内に主人がいないので、

痩せて空しく老先生を慕って嘸いているであろう。

ゆかり
所縁の水辺にもはや老先生の姿が映らないのを想うと、

遠くここで私は慟哭するばかりである。

私はそちらに行き、ひさご
匏に水を酌んで墓に詣でたいと思うのだが、

老先生が親しく岡に植えた一万本の松が、

手入れする人もなく秋の草に埋もれてしまっているのを、

見るのは忍びない。

■答呂梁仲屯田

先に重陽の節句に大水に阻まれてくることのできなかった仲伯達ちゅうはくたつ（本章
213 ページ）から詩が届いたので、それに答えた詩。

ほうじょう
彭城県の周りを、多数の山が折り重なるようにして囲っている。

仲君の官居は、その山の一つ、滝のかかる呂梁りよりょうにある、

そこはもの寂しいところで、民は鹿とともに暮らしている。

小さな市場はさびれて鶏や豚さえ売られていない。

黄河の水が西からきたときに、初めはそうだとはわからなかった。

いつもは清らかな洒水^{し すい}がなぜか濁って勢いを増したのを訝しく思ったのだった。

夜には、沙の岸辺でおうおうと鳴るのが聞こえ、

暁には、雪のような白い浪頭の上に巨大な魚が浮ぶのが見えた。

呂梁は昔からこのあたりの要^{かなめ}の地とされていたのだが、

万頃^{けい}もの広大な土地があっと思う間なく呑み込まれてしまった。

水はたちまち町に流れ入り、村をも巻き込んだ。

役人も民衆も走って逃げ、ただ仲君だけが留まった。

打つ手はなく、路は断たれてどこにも行けず、

仲君は壊れた家で愁いに沈む鳶^{うずくま}のように蹲って詩を歌うしかなかった。

冬の寒さがきて、霜が重く降るころになって、

屋根の瓦に沙の痕を留めて、水は退いていった。

人々が町に戻ってきて顔を合わせると、

あたかも夢であったかのようで、

かろじて魚や大亀の餌にならなかったのを喜んだのだった。

仲君は惜まずに酒や食べ物を用意して、

人々と笑って話して歌って踊った。

念うに、いま仲君の官舎は冬の氷雪の寒さ、

私のこの詩とともに酒を送るので、少しでも温まっていたきたい。

人生とは寄せるようなものであるのだから、

いささかでも楽しむべきではなからうか。

昔からいうように、黄昏時から蠟燭をたくさん灯して遊ぶのがよいのだ。

堤防はまだ築かれておらず、^{わいすい}淮水、泗水には水が満ちている。

黄河の以前の道は消えてしまって、洪水の傷が残っている。

来年の労苦は、きつといまよりも甚くなるであろう。

私も人々の先頭に立って土を運ぶつもりだ。

仲君に頼みたいのは、

万の指とともに、千の^{つち}鎚を雷のように鳴らして固い岩を撃って、

山の根を切ってもらいたい。

そうすれば、町は高く鉄のような壁で守られ、水路が快く通って、

水が勢いよく流れるのを笑って眺められるようになるであろう

農民が臂を振って働いてくれれば、飢饉を脱して、

秋には野に雲がむらがるように穀物が稔るのを見るようになるだろう。

そのときには、仲君ために、脚をへなへなしてしまうような強い酒を置いて、

太鼓を叩いて囃し立てながら、金の樽を傾けようではないか。

■臨江仙

^{しよく}蜀の人、^{おうかん}王緘が徐州にきて、帰郷するのを見送った詞。王緘は先に亡くなった^{おうふつ}蘇軾の最初の妻の王弗の弟であるとの説があり、それに従ってここでは訳す。

忘却成都来十載、(故郷のこと(そこに埋葬した妻のこと)を忘却して十年)

因君未免思量。(君に因^よって戻ってきたのは免れることのできないこの感情)

憑将清淚灑江陽。(君に憑^よって、故郷の川に注いてもらいたい我が涙)

故山知好在、(故郷の山はもとより好^よいままにあり)

孤客自悲涼。(私は独^{ひとり}りこで悲しみ傷むのです)

坐上別愁君未見、(送別の席上での愁い、そして君がまだ見ていないのは)

歸来欲断無腸。(君が帰った後で、跡形もなくずたずたに断ち切られた私の腸^{はらわた})

慙慙且更尽離觴。(さらに尽くそう、離れがたき別れの觴^{さかづき})

此身如伝舍、(私の身は宿場の駅舎のようなもの)

何処是吾郷。(どこでもあってもそこが故郷なのです)

(この詞の最後は、本章 138 ページで見た「東武の流杯^{とうぶ りゅうはい}に別れる」の詩にあった「官僚の住まいなんぞは宿場の旅館のようなもの」というのと発想が共通している。官舎も駅舎も次々に人が通過していく場であるのだが、(ある種の思考の飛躍をもって)官舎や駅舎とそこを通過する人とを同一視し、(さらに飛躍して)どこもが故郷であるという思いが生まれるのだろう)

■思堂記

げんぼう
元豐元 (1078) 年、蘇軾 43 歳。

元号が元豊に変わり、蘇軾は徐州知事として新しい年を迎えた。大洪水の後始末と、次の水害への備えに奔走しながらも、多数の詩文を作り続けた。これは章^{しょうほう}◆（字は質夫^{しつふ}）（◆は次の下に呆という字）に依頼されて書いたもの。

建安^{けんあん}の章君^{しょう}が官舎の西に部屋を築き、それを「思堂^{しどう}」と名付けた。

章君が私に言うには、

「私は、朝夕にここにおいて、およそ自分のすること全てについて、必ず思ってから、後に行くようにしています。私のためにこのことを文章に記して下さい」

天下のおよそ思慮のない者は、事に遭遇するとすぐに言葉や行動に出し、思う暇^{いとま}がない。言葉や行動に出す前に思ったところで不十分でしかなく、言葉や行動に出してから思ったのではすでに間に合わない。このようにして一生を過ごしてしまっ、思うということを知らずにいる。

天下のおよそ思慮のない者は、心に言葉が浮かんですぐに口から出す。そうすると、人と衝突してしまう。口から出さずに呑み込もうとすると、自分の心に逆ってしまう。自分に逆らうよりは他人と衝突した方がましだと、結局は言葉を吐き出してしまふ。

君子が善を好むのは、人が美女を好むくらいに強いものがあるといわれる。不善を嫌うのは悪臭を憎むのと同じである。だから、君子は事に臨んでから、小さな思慮を働かせて、善か不善かの判断をして、それを避けるか就くかを決めたりしな

い。義に臨んで、小さな思慮の結果、利を思うなら、義を果たすことはできない。
戦いに臨んで、小さな思慮の結果、生きることを思うなら、戦いで力を出すことは
できない。それで、失敗するも成功するも、得るも失うも、死も生も、禍も福も、結
局は自分自身にそのもとがあるというのである。

私は若いころにある隠者に遭った。隠者はこう言った。

「小僧、道に近づきたかったら、思慮を少なく、欲を寡^{すく}なくすることだな」

「思慮と欲を同じように少なくするのでしょうか」

「思慮のほうがひどいものだ」

と言って、隠者は庭に置かれた水をいっぱい^{かめ}に溜めた二つの甕を指し、

「こちらには蟻があけた穴があって漏れている。こちらからは一日に一升ずつ汲み
取って棄てる。どちらの甕が先にからになると思うか」

「きっと蟻の穴のあるほうでしょう」

「小さな思慮が人を損なうこと、それはこのようなものなのだ。少しずつ、そして休
みなく損なっていくのだ」

隠者のこの言葉に私に得心し、それから実践するようになった。

思慮を働かせない楽しみは名付けようのないものだ。虚にして明、一から万事に
通じ、安らかで怠りなく、恐れずして静か、酒を飲まずして酔い、目を閉じずに睡
る。

以上のようなことを書いて「思堂」の記念の文章とするのは変であろうか。私の言
う「思慮」と、章君の言う「思」とはそれぞれに意味するところがきっとあるのだろう。

天地間の万物は様々あって互いに損なうことはないし、道理はいろいろにあってそれで反目するものでもないだろう。

章君が賢人であることから、章君の「思」は私のような者が考える「思慮」とは異なって、むしろ「無思」ないし「無為」に近いのだろう。私は章君に学ばなければならない。つまり、『詩経』にいう「^{し きょう}邪のない^{よこしま}思い」、それを章君は実践しているのだ。

元豊元年正月二十四日記す

(この文章は「思」ということを巡ってかなりひねった議論をしている。「思」の多義性を、むしろ明確に区分けしないで曖昧なまま議論を展開することで、読む者に広く深く考えさせようとしているようだ。しかし、単純に日本語に置き換えると、何を言っているのかさっぱりわからなくなってしまうので、「小さな思慮」という語を持ち出して無理に若干の整理を試みたのだが、蘇軾の本意を損なうものであるのかも知れない)

■張寺丞益齋

張方平^{ちやうほうへい}の息子^{ちやうじよ}の張恕^{えきさい}が書齋を作って「益齋」と名付けた。それに寄せた詩。「益」は『論語』にある次のような話からとったもの。

孔子^{こうし}のもとに、客の取次ぎをする少年^{えき}がいた。ある人が孔子に、「あの少年は益する者（向上する者、進歩する者）でしょうか」と尋ねた。孔子は少年の日頃の態度を挙げて、「あれは益する者ではなく、速成^{そくせい}しよう（すぐにも先輩を並ぼう）としている者だ」と答えた。

張君は書齋を作り、「益」をもってその名とした。

私は孔子の言葉を聞いている――

学問において益^{えき}することを求めるのは、

学問において速成を求めることではない。

これを譬えれば、

遠く旅する者が、昼も夜も少しずつ進もうとするようなもの。

旅人はその積み重ねによって、

今年は遙か北に行き、来年は遙か南に走り、

東に大海を見極め、西に大河を渉る。

旅から帰って戸を閉ざして部屋の内に座ると、

旅した八方はすべて軒端の庭の内にあるようになる。

また譬えれば、

医を学ぶ者が、病^しを識るために徹底してたくさんの経験を積むようなもの。

天の六種^きの気が乱れると人の六種^{やまい}の疾が生じ、

六気の不足と充実は人の脈に表れ、

六気の静と躁は人の情に表れ、

六気の栄と枯は人の顔色に表れ、

そして寿命の長短は人の体に表れる。

そのようなことを、千人の病人を見て知るならば、

離れて見ただけでも、人の死生がわかるようになる。

学問を修めるには、日に日に益するよう努めなければならない——

このことは自分でよくよく考えて実行すべきことである。

逆に、道^{みち}を修める者は、日に日に失っていくことを貴ぶ——

それは知識はすでに十分にあって、

次には根本に立ち返って行かなければならないからである。

私が願うのは、この詩を書いて、君の益斎に掲げてくれること。

（学問を修めるには、少しずつ向上、進歩していくことが大切であるということは、蘇軾はこれまでもしばしば述べている。この詩でおもしろいのは、道を修める（自然界の法則ならびに人間界の道徳と自己が一体化して、それを意識することなく振る舞えるようになる）には、むしろ一度得た知見を捨て去るようなことが必要になると言っていることだ。漸進的理解と直観的理解の両者が大切なのだろう）

■春菜

春の野菜について詠んだ詩。

春になると、

冬に一度は枯れた蕪^{から}の根から葉が出て、

韭^{はら}の芽が蕪^{わらび}そっくりのかたちで土を持ち上げる。

薺^{なすな}を蒸してよく肥えた白魚に添え、

よもぎ

蓬を碎いて入れた小麦餅をつるんと食べると、

昨日の酒はすっかり醒め、春の眠気も飛んでしまう。

ちよいと畦のあたりを歩いてみると、

香りのよい花、茵陳^{いんちん}、甘菊^{かんぎく}、あれやこれがあり、

それらを細かくして堆^{うずたか}く盤に盛り上げて春のサラダにする。

それでも、この地の寒さはまだまだ終わらず、

雪の季節に備えておいた赤い根菜^{てつかぶ}は鉄甲のように硬い。

思えば、我が故郷^{しよく}の蜀の地に、たくさんの冬野菜があるのには到底及ばない。

蜀の地では、寒さの中でもどんどん芽を出し、

菊は秋から枯れないままほったらかしでよいし、

筍^{こうとん}は出てくるし、江豚は旨い——

思い出せばもう居ても立ってもいられない。

来年はきっともう官職を投げ捨てて帰るべきだ。

髪が抜けるのはまだしも、齒がぐらぐらになってからでは遅すぎるのだ。

■送鄭戸曹

ほうじょう

ていきん

げんのう

ほくけいだいめい

彭城県の^{ほうじょう}人、鄭僅^{ていきん}（字は彦能）が職を得て北京大名府に行くことになったのを見送った詩。

私はかつて杭州^{こう}の湖と山を遍く巡り、

知らず知らずに我が詩文は新鮮な香りを帯びるようになった。

しかし、いま私に従うのは疲れた僮僕と瘦せた馬だけである。

狭い路地奥に住まう君以上の賢人はここにはいない。

漢の時代の鄭太は広い土地を持っていたけれど、

賢豪と交わるのを好むあまり、いつも食べ物にも事欠くありさまだった。

唐の時代の鄭虔はやはり客人を好むあまり、家には敷物さえもなかった。

君も鄭姓の一人として同じように振る舞うことだろう。

君は、これから花が咲こうという時節に西に行く。

春風がここに美しい花を開かせても、

それは誰に見てもらえばよいのだろうか。

■訪張山人得山中字二首

うんりゅうさん ちょうてん き せい と
雲竜山の張天驥（字は聖塗）（本章 200 ページ）を訪ねた詩。「山」と
「中」の字を韻に用いて作った。

其の一

大水によって君の家は流され、

水が引くにつれて魚たちがいなくなると、

君が還ってきたので、猿や鶴が喜んだ。

君の旧居は岡の外にあったが、君の新居は山の中腹にある。

鹿はすでに君の足音に馴れ、
雑多な茂みの中から桂の木が伸び出している。
門前の路はきれいに掃除され、
そこを辿る私もまた山を愛する人間の一人である。

其の二

万木に鎖された雲竜山は、
天が君の与えたようなものだ。
山の前後の路に人は迷い、山の東西にだけ人家がある。
春の雪の後に薺や麦が成長し、
夕暮れゆすらうめの風に桜桃の花が落ちる。
町に戻ってきてみると、
はっきりとした記憶が残っていないのは、
帰路は酔っての眠りの中にあっただらう。

■寒食日答李公拱擇三絶次韻

さいり じょう こうたく じゆしゆん
齊州知事であった李常（字は公拱）（本章 145 ページ）が寿春に異動になり、南に旅する途中で徐州を訪れた。3 月の寒食かんしよくの節句に李常が詠んだ絶句に答えたもの。3 首から 2 首を訳す。

其の一

昔から蘇^そと李^りはペアとしてよく並べられ、
李君をここにお迎えするのは嬉しい限りではあるけれど、
斉州に比べて徐州が小さく田舎臭いと笑われてしまうのを恐れる。
李君の詩は空に懸る滝のようで、私の目はただくらむばかりだ。
私の詩も滝の勢いがあると李君は言ってくれるが、
それは人を欺いた言葉で、
せいぜいちろちろ流れる程度である。

(漢の武将の蘇^そ武^ぶと李^り陵^{りょう}、唐の文人蘇^そ味^み道^{どう}と李^り嶠^{きょう}など、「蘇李」と並び称せられる例は多い)

其の三

私は町を巡って工事の督促に歩き回り、
塵埃が目に入りくのに苦しめられ、
鞭を執って怠ける者を打たなければならない。
忙しさの余り着替えることもままならないので風が湧いてしまう。
李君がきて久しぶりに衣を改めた。
手を携えて黄色い蓮の花を見ようと、
いま病んだ眼を見開こうとする。

■約公挾飲是日大風

李常^{り じょう}は硬派の人物であるが、前の詩や生まれた間もない子の誕生祝いの詩(第4章194ページ)で見たような冗談も通じ合う気の置けない仲で、李常は徐州にしばらく滞在で、その間にたくさんに詩を詠み合っている。これは、飲む約束をしたのものの、当日になって風が強く吹いたために果たせなかったという詩。

(詩の冒頭に、李常が若いころに廬山^{ろ ざん}の僧坊に籠って勉強したことが歌われているが、そのことは本章127ページですで見ている)

李先生^りは廬山で成長し、山中で書物を読むこと三十年に及んだ。

孔子の弟子の顔淵^{がん えん}を範とし、水を飲んで学問に励んだと聞く。

李先生が、治めるのが難しい土地にばかりに行くのは、

自分から好んでしているわけではない。

盗賊どもが悪い役人と結託して、取り締まりにきた者に復讐するようなことは、

李先生は絶対に許せないので、

斉州に赴任するや、不良の役人どもを震え上がらせ、

半年間に七百人もの盗賊を捕えた。

それを見るなら、

李先生が家に九千巻もの蔵書がある文人であるとは誰も信じないだろう。

盗賊を一掃すると、春から秋は何事もなくなり、

時折は豪快かつ艶やかに歌舞の宴を催したりして過ごした。

冬に私が旅人となって行くと、

李先生は錢を惜しまずに歓待してくれた。

齊州の人々は李先生を慕い、

今回、李先生が齊州から離れたときには、

子供等が道に泣いて行く手を遮ろうとしたという。

私は、恥ずかしいことに、この山がちの土地にただいるだけで、

あまりに貧乏なので、兵士にも役人に笑われている始末。

李先生を迎えて、酒を御馳走しようとしても、

こんなものしかないのかと首をかしげないでもらいたいと、

官妓にきてくれるよう約束を取ったり、それなりに着飾って歓待しようしたり、

夜も眠らずに準備した。

ところが、詩を作って、今日の酒宴はやめにしようと断りに行かせたのは、

どうせ出費を渋ったのだらうと、笑うようなことは決してしないでほしい。

明け方から風が強く吹いて、土埃で空が真っ暗になってしまったからなのだ。

酒宴を中止にして、どうも気が縮まって仕方がない。

思えば、昔、天下第一といわれた牛を豪気にも賭け事的にした人がいたというけれど、

李先生ならそういう大胆なことをして、このもやもやをすっきりさせることだろう。

■続麗人行

とほ　　れいじんこう
杜甫に「麗人行（美しい女性の歌）」という詩がある。美人を称賛したのではなく、楊貴妃の一族が栄華を極めていることを嘆いた詩である。蘇軾の添え書きによると、「李仲謀（りちゅうぼう）の家に、唐の周昉（しゅうほう）の画があり、背中を向けて欠伸をしている宮女が極めて精緻に描かれている。それを見て戯れにこの詩を作った」。「戯れ」とあるが、「続麗人行」と題するからには、杜甫に続こうとの意気込みで取り組んだに違いない。

宮中の奥深くには人影がなく、春の日がゆったりと過ぎてゆく。

げんそう　　ちんこうてい
玄宗皇帝が建てた沈香亭の北に、百花が美しく咲いている。

美人はいま眠りから起き上がり、髪を軽く梳かして顔を洗う。

燕が舞い、鶯が啼き、美人は独り心を傷める。

画工は、窮まることのない美人の意（こころ）を写し取ろうとして、

春風に背を向けて起きたばかりのところを画いたのだらう。

もし首をこちらに向けて微笑んだならば、

町の貴公子たちは風に靡（よ）ようにこの美女に魅せられるのであろうか。

げんそう
楊貴妃が玄宗皇帝の寵愛をほしいままにしていたとき、

杜甫は飢えたさすらい人で、その眼差しは冷たく鋭かった。

杜甫は、脚の萎えた驢馬に乗り、破れた帽子を頭に載せ、

楊貴妃一族の、馬には金色の鞍を載せた豪華な行列の後ろに付いて行った。

花を隔て、水をはさんで、ほんの一目だけ、美女の後ろ姿を見た。

心は酔うばかりになって、

人間の世界には、かの伝説の美女である西施^{せいし}のような女性が実際にいるのを知ったのだった。

茅葺の小屋に帰って、「麗人行」の詩を作った。

ああ、画の美女、杜甫の見た美女、

それぞれに正面を向いたらどうであつたろうか。

思うに、二人はいくら美しくても、

漢の時代に梁鴻^{りょうこう}の妻となった孟光^{もうこう}には到底かなうものではない。

孟光は世間で評判になるほどの不美人であつたけれど、

あれこれ選り好みをして嫁に行かずにいた。

父母が訳を尋ねると、

「梁鴻のような賢人でなければ私は夫としないのです」

と答えた。

それを伝え聞いて梁鴻は娶ったのだった。

孟光は膳を必ず眉の高さにまで持ち上げて夫に差し出し、

春の光に背を向けて心を傷ませるようなことはしなかった。

■起伏竜行

詩題は「寝ている竜を起こす歌」。どうして竜を起こすのかというと、雨

を降らせてもらいたいからだ。次のような序文が付いている。

徐州の町じょうの東二十里せきたんに石潭があり、土地の父老ふちはこのように言っている。「潭の底し すいは泗水に通じ、水の増減、清濁は泗水に応じ、異なることがない。時に潭には川の魚が出現する」。元豊元年の春は日照りが続き、ある人が言うには、「石潭に虎の頭を置くと雷雨を呼ぶことができる」と。その説に基づいてこの詩を作る。

昔むかしのこと、

白い竹で作った千鈞ひどくつよい弩ゆみで、

南山にいる雪のように白い虎を射殺した。

その虎の頭は鋭い牙を付けたまいまどこかにあり、

天下の虎は、皆その虎を先祖として生じたものだという。

都の東の地方は久しい日照りのために土が赤くひび割れし、

この三カ月の間は、道行く人の口の中は土だらけになっている。

碧い石潭は町の東にあり、そこは神物わたかまが蟠るところとして崇められている。

上には岩が切り立った巖穴いわあながあり、

下には川に応じて地底の水が通じている。

ここに竜が棲んでいて、

眼光は電きんとなって金蛇だを走らせ、鼻息は雲えんとなって煙縷るを降らせるという。

太古の時代には、竜は天帝の命令を伝えたというが、

それから白玉を抱いて情眠をむさぼっている。

竜の腹にはたっぷり雷が貯まっているはずなのだが、

竜はそれを吐き出すことなく押し黙っている。

明日は、赤い竜と白を虎を闘わせようと人々は考えている。

そうなれば、黄河の水が逆巻いて、豪雨となるからだ。

しかし、私は両雄を闘わせることには気が進まない。

ちよいとだけ竜に怒ってもらって、ひと雨降らせてもらうくらいでよいのだよ。

■聞公扨過雲竜張山人輒往從之公扨有詩戲用其韻

り じょう こうたく うんりゅうさん ちょうさんじん ちょうてん き
李常（字は公扨）が雲竜山の張山人（張天驥）を訪ねたと聞き、すぐ
に後を追ひ、李常が詠んだ詩に和した。

私はもともと心配事が多いたちなのだろう。

昔から、肉を食べない者は顔色が悪いというけれど、

私は肉は食べているのに、いつも顔色がさえない。

李君に会って少しでも笑い、さらに酒を楽しく飲んで力を得たいと思っていたところ、

李君が雲竜山に行き、張山人と静かに黙って酒を飲んでいると聞いた。

急遽、歌の上手な女性を連れて、町を飛び出たところ、

まだ日が傾く前に着いた。

たった一つの飲みだって力づくで得られるものではなく、
期せずしての巡り合せというものがなければならない。
春の終わりの花ににぎやかに蜂が集まり、
草むらの中で雀が乱れ騒いでいる。
張山人はこうした自然の事物の巡り合せを楽しみ、
いつもは誰もそばにいない静けさのうちに過ごしている。
李君は独り憤慨することがあり、誰もわかりあえる者がいない。
三者三様でこのような次第であるから、
ここは皆で養生を学んで、
天地の気を我が内に納めるようにするのがよいであろう。

■送李公択

しばらく滞在していた李常^{リ ジョウ}が徐州を離れることになり、この送別の詩を詠んだ。

私には兄弟が少なく、天地間にたった一人の蘇轍^{そ てつ}がいるだけだ。
かつて友人だった者はたくさんいるけれど、
その出処進退は、私と考えを一緒にするものではなく、
手で招いて呼ぼうとしても、向こうに行ってしまっただけで留まろうとしてくれない。
わずかに残った友人はいま幾人なのか、

それぞれ天下の片隅にいる。

そうした友人は、

暁に至って多くの星が消えてゆく中で、

ただ明けの明星ばかりが明るく輝いているのに似ている。

私と李君とは気持ちが一つであるのは、まことに手と足のようだ。

去年も今年も会えて、

客と主人の立場を替えて盃を応酬することができた。

この十日間の楽しさといったら他にないものだった。

「和して流れず」とはこのことだ。

議論をかわして深夜に至ったときには、下僕達が立眠りをして倒れてしまった。

かつて李君は、このような客人があったのを見たらうか。

別れようとして言葉を出すことができない。

百の憂いが集まってきて痛くてならない。

思うに李君には兄上がおられる。

その名が天下に知られること三十年になるが、

李君を見てすでに兄上の人となりもわかった。

馬と牛を並べて見るまでもないのだ。

李君兄弟、そして我が兄弟、

いつしか皆が会うことがあるのならば、

時を忘れて髪が真っ白になるまで語り続けることだろう。

(この詩で、かつて友人だった者も出处進退と一緒にしないといっているのは、具体的に^{しょうじゅん}章惇(第2章97ページや本章70ページ)、^{りせいしん}李清臣(本章100ページ以降にしばしば登場)、^{ちやうこ}張琥(第2章89ページ)らであると、ある注釈家は記している。確かに、章惇は早くから改革派に加わり、李清臣もこのころから改革の担い手の一員となっていたのだが、蘇軾が敢えて批判しなければならないほど、この時点で距離が離れていたわけではないだろう。張琥は本章の終わりに見る「嵐」に加担し、実際にすでに遠く離れた間柄になっていた)

■蝶恋花

^{りじょう}李常との別れにこの詞も贈った。

簌簌無風花自墮。^{はらはら}(簌簌と風もなく自ずと落ちゆく花)

寂寞園林、(静まり返った庭の林)

柳老桜花過。^{ゆるらうめ}(老いた柳と、花の過ぎた桜桃)

落日有情還照坐。^{こころ}(情があるかのように別れの座を照らす落日)

山青一点横雲破。(たった一つの点から山の青さが横雲を破ってゆきます)

路尽河回人轉舵。(見送りに行く私の路は尽き、河は回り、君は転じる船の向き)

繫纜漁村、(そして、纜を繋ぐ漁村)

月暗孤燈火。(月は暗く、あるのはたった一つの燈火)

憑仗飛魂招楚些。(私は杖に頼って招き寄せようとする、君の飛んで行った魂)

我思君処君思我。(私は君の処を思い、君は私を思うのです)

(前半の最後の句「山青一点横雲破」(山青の一点 横雲を破る)は、日が沈んで山の青さが際立ってくるとともに、横にたなびく雲が消えてゆくありさまを歌っているのだろう。終わりの部分の「飛んで行った魂」は屈原の故事を用いている。屈原は讒言によって楚の都を追われたときに、南の地をさまよう自分の魂を呼び戻してはくれることはもうないのかと嘆いた(後に絶望して投身自殺した)。改革に反対して地方勤めを余儀なくされている李常を屈原になぞらえたのである。そして最後の句「我思君処君思我」が上から読んでも下から読んでも同じ回文になっているのは蘇軾の遊び心)

■浣溪沙

この詞は先の「起伏竜行」(本章 248 ページ)に続くもので、「雨に感謝するために石潭に行く途中での作」という添え書きがある。石潭で祈った効果があったのか、雨が降ったので、そのお礼を告げに出かけたのである。

其の一

照日深紅暖見魚。(夕日に深く紅く暖かく照らされた潭に見える魚)

連溪緑暗晚藏鳥。(緑は暗く溪に連なり、どこかに隠れる夕暮れの鳥)

黄童白叟聚睢盱。(ここに 黄 の子供と 白 の老人が集まって睢盱と目を動かします)

麋鹿逢人雖未慣、(人と出会うのにまだ慣れていない鹿)

猿猱聞鼓不須呼。(太鼓を聞いて呼ばずにやってくる猿)

歸家説与采桑姑。(子供と老人は家に帰って潭での儀式を桑を摘む女たちに話すのです)

(この第1首は、石潭で蘇軾が行った儀式の様子を描写している。後半の鹿は村の老人を、猿は村の子供に対応するのだろう。第2首以下は、石潭に着くまでに見た村々での幾つかの光景を詠んでいる。詞は、何度か記してきたように、宴席で男女の情を歌うものとして発展してきた。農村のありさまをさらりとスケッチした蘇軾のこの詞は、過去に類例のない画期的な作品だった)

其の二

施抹紅妝看使君。(知事殿を見ようと化粧を施した村の女性たち)

三三五五棘籬門。(三々五々突っ立っているのは枝で編んだ門の脇)

相挨踏破蒨羅裙。(互いに身を乗り出して赤い裙を踏み合うのです)

老幼扶携収麦社、(老人と幼子が手を携えて行くのは麦の神様の社)

烏鳶翔舞賽神村。(神様に供え物をすると、村の上で舞い飛ぶ烏や鳶)

道逢醉叟臥黃昏。(黄昏時には酔って道に臥す男に逢います)

其の三

麻葉層層篠葉光。(重なり茂る麻の葉、光り輝く^{いちび}篠の葉)

誰家煮繭一村香。(どこの家からなのか、村全体を香らす繭を煮る匂い)

隔離嬌語絡糸娘。(糸を繰る娘たちが垣根を隔てておしゃべりをしています)

垂白杖藜擡醉眼、(酔ったような眼で見ているのは藜^{あかざ}の杖を手にした白髪の人)

捋青擣麴饑腸。(餓えた腹が待っているのは採れたての麦で作った麦こかし)

問言豆葉幾時黃。(豆はいつごろ成熟するのかと私は尋ねます)

其の四

簌簌衣布落棗花。(簌簌^{そくそく}と衣に落ちてくるのは^{なつめ}棗の花)

村南村北響繰車。(村の南からも村の北からも響いてくるのは糸車の音)

牛衣古柳売黃瓜。(麻の衣をまとった瓜売りが柳の下で休んでいます)

酒困路長惟欲睡、(道の遠さに悪酔いしたかのようにひたすら眠くなり)

日高人渴漫思茶。(日が高く喉が渴き、ひたすら思うのは一杯の茶)

敲門試問野人家。(試しに農家の門を叩いてみるのです)

其の五

軟草平莎過雨新。(雨が降ってすっかり新たになった一面の柔らかな草々)

軽沙走馬路無塵。(軽やかに馬を走らせても路には立たない塵)

何時收拾耦耕身。(人々と一緒に耕す身にいつ私はなれるのでしょうか)

日暖桑麻光似澗、(日は暖かく、桑や麻からははしけるような光)

風来蒿艾氣如薰。(風は高く、充滿する蒿艾よもぎの薫り)

使君元是此中人。(知事殿は元来この風光の中の人なのです)

(蘇軾は、為政者側の人間として農村を見ているのではなく、もともと自分は農村の中に暮らす人間であって、いつかはそこに回帰するのだという眼差しで見ている)

■永遇楽

徐州にある燕子楼で詠んだ詞。燕子楼には次のような所縁ゆかりがあった。唐の時代に徐州知事となった張建ちやうけんは、徐州一の美女であった盼盼はんはんと恋に落ち、燕子楼を建て、盼盼を迎え入れた。後に張建が亡くなると、盼盼はその恩を思っいて、他所には適かいないと誓い、後に絶食して死んだ。蘇軾はその燕子楼に泊まり、夢に盼盼を見てこの詞を作った。

名月如霜、(霜のように明るい月の光)

好風如水、(水のようにさわやかな風)

清景無限。(無限に清らかな光景)

曲港跳魚、(入り江に飛び跳ねる魚)

円荷瀉露、(露を瀉ぐ円い蓮の葉)

寂寞無人見。(寂寞として人を見ることはありません)

紉如三鼓、(紉^{タンタン}と三回叩かれる太鼓)

鏗然一葉、(葉が落ちる響き)

黯黯夢雲驚断。(暗くぼんやりとした夢の雲はそこで断たれます)

夜茫茫、(夜はなお^{ぼうぼう}茫茫)

重尋無処、(夢を重ねて尋ねるところはなく)

覚来小園行徧。(覚めて小さな庭をくまなく歩きます)

天涯倦客、(天の涯の疲れた旅人)

山中無路、(山の中で見失った路)

望断故園心眼。(心の眼でも望み見ることのできない故郷の家)

燕子楼空、(からんとした燕子楼)

佳人何在、(かの^よ佳き人はどこに)

空鎖楼中燕。(楼中に虚しく閉ざされた一羽の燕)

古今如夢、(昔も今も夢)

何曾夢覚、(いつまでも覚めない夢)

但有旧歡新怨。(ただあるのはかつての歡びと今の怨み)

異時対、(次に対するのは)

黄楼夜景、(楼閣から見る夜景)

為余浩歎。(私は深く歎くのです)

■和孫莘老次韻

先の詩で、残る友人は明けの明星のように稀だと歌ったが、その1人に
孫覚そんがく (字は莘老しんろう) がいた。孫覚とは杭州時代に「墨妙亭」ぼくみょうてい についての詩
や文を作るなどの交流があった (第4章47 ページなど)。このとき孫覚
は蘇州その知事としてなお江南こうなんにいた。

故郷を離れと、

光陰は春の雪ようにたちまち消えゆき、

故郷に還ると、

たどってきた跡は野に飄ひるがえる雲のように空しい。

功名はきつと行楽を妨げる。

役所勤めがよいのはたった一つ、早朝に起きるのが平気になることだとか。

友人は離れてゆく一方でも、役所の部下とは親密になれる。

世間の讒謗を避けて地方に出ると、その土地の民衆の歌を知ることができる。

来年あたりはまた江南に行ってみたいものだ。

問題山積の地であろうが、片田舎であろうが構いはしない。

(江南に行きたいとの願いは、まさに翌年、叶うことになる)

■遊張山人園

うんりゅうさん ちょうさんじん ちょうてん き
雲竜山の張山人（張天驥）をまた訪ねた。

壁に掛かっているのは煙蘿えんら子しを描いた一つの軸。

盆に投げ込まれているのは錦被堆きんひたいの千本の枝。

私は、張先生の酒さけの伴ともになるのにすっかり慣れ、
先生は、知事さんがいつ来ても嫌わずに笑ってくれる。

いまは、麦の穂先が細くとかって黄色い花が乱れ、
詩を詠もうとしているうちに、さっとにわか雨がくる。

聞くに、先生の家いえの井戸は好い水であるとか。

帰るときに、どうか瓶びんにたっぷりいただきたいものだ。

（一句目の煙蘿子とは仙術を会得した昔の人の名。錦被堆とは、高さ一丈ほどで、小さな紅い花をたくさんつける木。そうしたものが部屋に飾られているということで張山人の暮らしぶりをスケッチしている）

■次韻答劉涇

しゆく りゅうけい きよさい
宿州知事の劉涇（字は巨濟）（本章 180 ページ）から送られてきた詩に
次韻したもの。劉涇には心にわだかまるものがあり、それを詩文に書き
表そうとしているのに対して、抑制することも必要なのではないかと蘇
軾はこの詩で助言しているようだ。

詩を吟じて、秋の虫のように鳴かないのがよいだろう。

てんこう

天公(造物者)は、君が物から情を引っ張り出し過ぎるのを怪しんで、

君がまだ若のに白髪を生じさせてしまったのではないだろうか。

れいし らんそう

霊芝と蘭草は香りよく気高い草だ、

雨に潤うと青さが増してさらに香りがよくなる。

自分自身を焼き焦がして香りを立てようとはしない。

君は千枚もの紙に細かく字を書き、みごとな行書もその中にある。

君の新しい詩は姿を百変させ、鶯のように巧みに囀っている。

しかし、言葉が過剰になると、蜂の巣をつついたような言い争いを引き出し、

ついには、舌先三寸で七十余城を落としてみせると放言するようなことになる。

万卷の書物を、胸の内にどっしりと動かないように積み上げ、

詩文の楽しみなどは病のようなものだと思うことはできないだろうか。

私には至上の味わいがある。

煮たり焼いたりする料理の味ではない。

その楽しみは名付け難い――

えんじゅ

緑の槐が山のように繁って庭に小暗い蔭を作り、

虫が耳のあたりを巡って細やかな音を立てる、

むしろ

おんぼろの筵に寝転がり、臥して音を聞き、起きて蔭を見る、

かといって立派な敷物を毛嫌いするわけではない、

出て歩くときは、
 溝あながあらうか坑あながあらうか、足に任せて行き、
 道に権勢家に出会っても、へいこら世辞を言ったりしない、
 役人や民衆は私が老いて頭も鈍いのを哀れんで、
 互いに戒めて、面倒な訴訟事で私を煩わさないようにしている、
 時にし すい泗水の流れに臨めば、
 微かな風も起こらず、鏡のように平らな水面にわが白髪を映し、
 葉のように軽い舟を得て、
 そこに臥していると、もう着きましたぞという声に起こされる、
 そのときに、ふと故郷のあの味のために帰ろうかと思う――
 やはり腹が減っては何もできないので、
 腹の虫をなだめるためにたっぷり食べるとしよう。

■携妓楽遊張山人園

うんりゆうさん 雲竜山ちようさんじんの張山人ちようてん きん（張天驥）のところに妓女がくじんや楽人（演奏家）を連れて
 いったらどのような反応をするだろうかと戯れた詩。

あんず
「杏の実が大きく黄色に熟しましたなあ」

「小麦の穂がたっぷりふくらんでよく稔りましたなあ」

かささぎ
「巢から落ちた鶺鴒かささぎの雛が竹をよじ登ろうとしておりますぞ」

そんなことを言い合いながら、
飾り立てた馬に乗った知事殿が、
紅く化粧した女性やら、
ことさら俗っぽい大勢の連中とともに、
ひっそりと山に住んでいる先生を驚かせてみようと、
雲竜山の谷を満たして押し寄せた。

「呑め、呑め」

と、鳴く声は提壺^{ていこ}(鳥の名)——それは我等の心。

「帰ろう、帰ろう」

と、鳴くのは杜鵑^{ほととぎす}——それは速やかに退散していただきたいとの先生の心。

それで酒盛りはお開きとなって、人が帰ってしまうと、
先生はびたりと門を閉ざす。

あたりは何もない静寂に返り、
斜めになった日が木の枝に掛かっているだけ。

■種徳亭

かつて杭州時代に交流のあった王復^{おうふく}のためにこの詩を詠んだ。詩には次のような序文が付いている。

処士^{しょし}(官に仕えない知識人)の王復^{おうふく}は代々杭州に住み、いろいろな技能を持ち、特

に医術に精通している。王復が目指すのは人を活かすことで、利益を得ようなどとは思っていない。候潮門の外に住まいがあり、庭や畑を整え、亭あずまやを建て、賢人たちを招いてそこに遊ぶ。王復はもてなしが十分でないかということだけを気にかけ、人に何かを求めることは一切ない。人は王復が花を育て、実を稔らせることに努めているのは知っているけれど、本当に王復が植えて育てているのは徳だということを知らない。私は王復の亭を「種徳しゅとく」と名付け、詩を作って贈ることにした。

王君の小さな庭は城郭沿いにあり、

門を閉ざしていても草の香りが溢れ出る。

王君の名は町の人々の中に埋もれて隠れているが、

その徳は庭の佳き木とともに長く伸びあがっている。

王君は、漢代の名医の華陀かだのように人の本来の力をよく養い、

古の名医の倉公そうこうのようにたくさんの薬方を用い、

助けて活かした人は数知れない。

しかし、道で逢っても王君は誰であるのか忘れている。

酒を置いて賓客を招き、花の間に人が満ちるのを王君は喜ぶ。

王君の庭には蒼く聳える二本の檜ひのきがある。

私は東南に旅して、再びそれを見たいと思う。

山茶さざんかはきっと庭からはみ出るまでに花を咲かせ、

橘は牆を超えて繁っていることだろう。

木は老いて徳もまた熟す——

この言葉はきっと荒唐無形ではないはずだ。

(第4章には訳出しなかったが、杭州時代に王復の家を訪ね、二本の檜を主題にした次のような詩がある。

王復秀才所居双檜 其の一

かつて呉越国^{ごえつ}の王の館であった遍重城^{へんちゆうじょう}、

その跡地である王君の庭には珍しい草、奥ゆかしい花がある。

呉越国は遠い昔に去ってその行方はわからない、

ただその名残として、太平を願って植えられた二本の檜が聳え立っている。)

■文与可有詩見寄云待将一段鵝溪絹掃取寒梢万尺長次韻答之

友人^{ぶんどう}の文同(字は与可^{よか})から詩が送られてきて、そこに「一段の鵝溪^{がけい}の絹を^{おく}将られるを^{かんしやう}待って、寒梢^{はら}の万尺の長さを^{よう}掃い取らん」(高級品である鵝溪の絹織物を得たなら、一万尺の長さの竹を画いてみせよう)とあったのを見て、次韻して答えた。このころ文同は洋州から都に還ってきていた。

(前に触れたように、蘇軾の家では蜀の人同士で姻戚関係を結ぶのを好んだ。文同も蜀の人で、このころに文同の息子の文務光^{ぶんむこう}と蘇轍の娘との縁談が進んでいた)

鵝溪^{がけい}(品質のよい繭を産することで知られる谷)の絹の輝く光沢を、

君は愛するあまり、

けい きょ

鶏距の筆(鶏のけづめのように堅い筆)の紫色の先端でかりかりと裂いて、

だめにしてしまおうというのかな。

だいたい世の中に千尋(すなわち万尺)の竹というのがあるのだろうか。

いやいや、それどころではない、

月が傾いて、広い庭に影がどんどん伸びたならば、

鵝溪の絹がどれほどあっても写しきれないだろう。

(文同とは仲がよいだけに、このような戯れの詩を贈ったのだ)

■次韻秦觀秀才見贈秦与孫莘老李公択甚熟将入京応挙

詩題は「秦観しんかんから贈られた詩に次韻する。秦観そんがくは孫覚りじょうや李常りじょうとかねてからの知り合いで、都に上って科挙を受けようとしている」。秦観(字は少游しゅう)は蘇軾より13歳年少で、後に蘇軾の4人の高弟(蘇門四学士そもんしがくし)の1人に数えられるようになる。四学士のあとの3人は黄庭堅こうていけん、晁補之ちやうぼくし、張耒ちやうで、黄庭堅はこの後すぐに登場する。

暗がりたきで光を発する珠をいきなり取り出したら、

人を驚かせ、警戒させてしまう。

君は、ちょうどよいときにちょうどよい人に向かって、

珠のような詩を見せたので何の心配もない。

昔のとある将軍は百回勝利しても昇進しなかったが、

昔のとある將軍は一斗の酒を袖の下で贈っただけで出世した。

君には腕力がまるでないようだから將軍には向かないだろう。

君が繁華な都会に十年間足を踏み入れなかったのは結構なことだった。

この前、李常君が徐州にきたときに、

君の文章を見て、古^{いにしへ}の人が書いたものだと思ったと言っていた。

君の詩は万物^{こころ}の情を説きつくし、書は王羲之^{おうぎし}さながらであるので、

新しいものか古いものかの区別が難しかったのだ。

李常君が徐州を去ってしまってから、

河畔の草がただ青々と生い茂るばかり、

人はおのおの生きる場所を異にするという諺の通りだと、

嘆いていたところ、

天は私の願いを入れて、君をここに連れてきてくれた。

ひとたび君の詩を読んで君の心を知ると、

我が眼中には、

君に重なって小柄な李常君と髯の孫覚君が見えるかのようだ。

江湖に放浪する間に君は真を全うし、

忽然としてひと声鳴くや人を驚かせることになった。

縦も横も自由に進んで可ならざるはなく、

新しいものを出すことを君は少しも恐れなくてよい。

しかし、世間^{や ほうき}には破れ簾と千金の価値の違いがわからない者もいる。

この私にしても、役人生活を続けているのがよい算段とはいえない。

山中に帰る計画さえまだ決められていない私が言うことであるから、

まあ軽く耳には入れておいてくれたまえ。

(秦観はこの年の秋に都で科挙の一次試験を受け、その結果は後で見ることになる)

■王元之画像賛

おう うえい (字は元之) の肖像画に添えた賛。王禹偁は蘇軾より 82 年先輩で、科挙に合格して国家の重要な仕事を担うようになった者はいかにあるべきかを実践的に示し、宋代士大夫の手本となった人物。この画賛を書くようになった経緯は本文中に述べられている。

なお、第1章で見た「眉州遠景楼の記」を書いたのはこの文章とほぼ同じ時期の7月のことだった。

魯の文公の十二(紀元前 615)年、新興国の秦からの使者を迎えた魯の公子遂は、その使者が礼節を十分にわきまえているのを見て、
「『君子がいないと国は成り立たない』といわれますが、秦はすでに立派な国になっております」

と、秦を対等の相手として認めた。

私は『春秋左氏伝』を読んでここに至り、「君子がいないと国は成り立たない」というこの言葉を唱え、三度繰り返すと、涙を流して大きく嘆息しないではいられなく

なる。

君子とはどのような人か。漢代の汲黯^{きつあん}、蕭望之^{しょうぼうし}、李固^{りこ}、呉張昭^{ごちやうしやう}、唐代の魏徵^ぎ、狄仁傑^{ちやくじんけつ}は、皆身をもってどこに義があるかを示し、仲間に引きずり込もうとする者がいても近寄らず、排撃して去らせようとする者があっても動かず、毅然とした姿で朝廷に立ち、大悪人と小悪人ともが互いに相手を潰し合うように仕向け、国家の禍が形にならないうちに消し去り、国が亡びるような危機に至る前に救った。それと似て非なるのは公孫弘^{こうそんこう}、張禹^{ちやうう}、胡広^{ここう}といった連中で、弁を弄して皇帝^{めう}に迎合するだけで、百千の議論を重ねたところで、国家の緩急に役立つことは何一つとしてなかった。

公^{こう}(王禹偁)は雄渾な文章、真直ぐな言説で、当時においてただ独り抜きに出ていて、汲黯、蕭望之、李固、呉張昭、魏徵、狄仁傑の六君子の次に並ぶべき人物であった。このとき朝廷は幸いにも清明で、大奸人も大悪人もいなかった。それでも公は人々の輪に加わることなく独り立ち、いわゆる「秋霜烈日^{しゅうそうれつじつ}」の厳しさで、周囲と慣れ親しまなかった。三度朝廷の外に出され、そのまま死に至った。もしも公が邪佞^{じゃおい}の衆の間に置かれ、あるいは国家存亡の際に遭遇したならば、公の為すところは必ず世俗を絶して時代を驚かし、安易を好む連中の心臓を破裂させたばかりでなく、実に大きな事績を残したに違いない。

私はかつて初めて蘇州^その虎丘寺^{こきう}に立ち寄って公の肖像画を見た。なおも烈しい遺風^{いふう}がそこにあるのを感じて、願わくば公の僕^{しもべ}となって仕えたいと思った。しかし、自分はその時代は及ばなかったのである。

それから七年が経って私は徐州^{じょ}にきた。公の曾孫^{おうふん}の王汾^{ぶん}が兗州に向かう途中で立ち寄られ、公の墓碑を見せて下さり、何か文章を添えてほしいと頼まれた。そこで蘇州虎丘寺の肖像画の画賛を作ることにした。

昔から聖賢は己を知る者がいないのに苦しまねばならない。

公は太宗皇帝^{たいそう}に出会い、その時代において認められた。

皇帝は公を用いようとしたが、公は少なからず^{おとし}貶められた。

三度辺地に追いやられ、ついに無念の死を遂げた。

それ以降、名臣といえば公たということになった。

一時の不遇^{まこと}も万世に信を残したのである。

いかなる者も公の肖像を拝すべきである。

見れば己を取じて誰もが冷や汗を流すに違いない。

公は恥じることを教えてくれても、人々は公のようにはなれない。

公がすでに茫茫^{ぼうぼう}とした地下の人となってまた起つことのないのを悲しむ。

(一読してわかるように、蘇軾は現在の政治情勢を踏まえてこの画賛を書いたのである。蘇州虎丘寺で肖像画を見たのは杭州に赴任する途中でのこと)

■雨中過舒教授

雨の日に、徐州の学校の教授を務める舒煥^{じょかん} (字は堯文^{ぎょうぶん}) を訪ねた詩。舒教授はこの後何度か登場する。

^{すだれ}簾の外では、竹をつたって、^{そ そ しずく}疏疏として滴が流れ下り、

^{りゅうりゅう}瀏瀏として雨が風とともに竹の間を通り過ぎる。

窓辺からこちら側には、動くものは塵一つない。

机の上の硯はひんやりとして、霧の中に置かれているかのようだ。

舒教授は奥深い孤独を楽しみ、

外界には慕うものがなく、内に得るものがたくさんにある。

座るのは簡素な禅の椅子、立って耳にするのはかめ甌に湧く湯の音。

私が来てももてなすものはなく、

淡いその接し方に、

頭のとっぺんから足の先まで涼しさを感じる。

濃い茶によって、私の心に積み上がったくら昏いものが洗われ、

妙こうえなる香の薫りによって、浮かびくるつまらぬ思慮がきよ浄められる。

家に帰ると、

^{かす}微かな螢の光が、暗がりの中を一つ二つと渡ってゆく。

人生は憂患の中にあるものなのか。

そうではあるまい、

一回の食事の中にこそ安閑のところがあるのか。

人は何かのきっかけで大切なことを知る――

ある人は、飛たこ鳶がぽとりと落ちるのを見て、先に笑い飛ばしたことを悔い、

ある人は、犬の吠え声を聞いて、悟るのが遅すぎたと後悔した。

静かな時間の内にある真の趣は、

舒教授のような人でなければわからないのだろうか。

(飛鷹は、遠くに行って功名を求めるより故郷で穏やか人生を送りたいと言った弟を笑ったのを悔いたという故事。犬の吠え声は、処刑場に向かう途中で昔の飼った犬と似た声を耳にして、人生の過ちを悟った故事)

■次韻舒教授寄李公枳

舒教授の詩に次韻して李常（字は公枳）に寄せた。

李君の草書は妙絶で、私は兄として仰ぎ見ている。

楷書ならば、少しは頭を上げて、李君とも並ぶことができようか。

しかし、文を論じて詩を作っても李君には敵わない。

結局は李君が余裕で笑っている前で、降参の旗を挙げなくてはならない。

去年は、私は齊州さいしゅうに一カ月余り滞在し、

昼間から君と劇飲し、首までどっぷりと酒につかった。

今年は、君が来て徐州にしばらく留まってくれたけれど、

李君は寂しくも酒に病んであまり多くを飲まなかった。

李君と別れたとき、これまでの飲びが虚しく墜ちてしまうのを知って、

涙を流して李君の髭を引っ張った。

松の下を縦横に歩いた足跡を残して、

李君の車は、門の前からはころころと走り去ってしまった。

李君の一身はすべて徳から成り立っているのだろうか。

だから李君に近付くと、肌から骨から、清らかに潤おしてくれる。

ただ細かく考えると残念なことが一つだけある――

李君は国を傾けるような美女に少々心を奪われたりする。

（最後のところは、李常と蘇軾の間だけでわかることであったようだ。詮索好きの注釈家によると、李常のもとには雲英^{うんえい}という名の婢^{はしため}がいて、李常はそれを外に出して自由の身にしようと考えつつ、まだできずにいた。雲英の名は、ある伝説の女性にちなみもので、傾国の美女で、それを娶った裴航^{はいこう}は夫婦ともに仙人になった。李常に何か執心するところがあるのを蘇軾がたしなめたのだろう。一方で蘇軾のもとには、第4章の終わりに見たように朝雲^{ちょううん}という少女がいた。この時点で蘇軾がどのように遇していたのかは何もわからない）

■又送鄭戸曹

先に鄭僅^{ていきん}（字は彦能^{げんのう}）が北京大名府に行くのを見送った詩を見たが（本章241ページ）、再び送別の詩を贈った。

（この詩の最初にある戲馬台は、洪水のときに堤防を築いた場所としてその名があった（本章216ページ）。戲馬台は彭城^{こうう}県の南1里にあり、昔、項羽^{こうそ}（漢の高祖と天下を争った英雄）が高台を築いて、そのまわりで馬を乗り回したといわれる。この詩は、

戯馬台から歴史を回顧し、前年の大洪水に及び、洪水対策の終わった後に築きつづあった黄樓へと焦点を合わせてゆく。黄樓については本章 218 ページで触れている。

水は彭城の樓閣をめぐり、山は戯馬台を囲む。

古来、この地には豪傑が多く、千年経っても哀しみを誘う余韻が残っている。

鼻筋の通ったいわゆる「隆準」の高祖は天上へと飛び上がり、

瞳が二重であつたいわゆる「重瞳」の項羽は敗れて灰になった。

徐州の地に拠った呂布(三国時代の群雄)は、白門樓に囲まれて曹操に降り、

徐州の地を治めた李光弼(唐代の名将)は、この地に星が墮ちると間もなく死んだ。

劉裕(南北朝時代に皇位に駆け上った人)はかつて戯馬台で酒宴を開いたのだが、

それからは、劉裕が独り徘徊したところもすっかりさびれてしまい、

荒れた田に苔が生じるまでになり、

いまや、百歩洪から響く川音を聞き、九里山のあたりで山並みが折れるのを見るだけである。

かの洪水のとき、

山と水とが激しくぶつかり合って夜も雷のような音が轟き渡り、

蕩蕩として清河から水が溢れ出てきた。

水の引いた後に、私は東の門に黄樓を築くことにした。

黄樓に登れば、

秋には城の隅へと月が墮ちてゆくを見て、

春には盃の酒を風が揺らすであらう。

君を黄樓の客として招けば、

君は珠玉のような詩を示してくれるであらう。

黄樓は完成しようとしているのに、

君はすでに徐州を去ってしまった。

人間界はとかくままならない。

いつの日か、

君が官界の旅に疲れて、白髪頭となってここに帰ってきて、

黄樓に登って詩を賦して長く吟じるときに、

果たしていまの知事はどこにいるだろうか。

■次韻黄魯直見贈古風二首

後に「蘇門四学士」(本章 266 ページ)の筆頭に挙げられるようになる黄庭堅(字は魯直)の古風の詩(昔のスタイルに習った詩)に次韻したもの。2首のうち1首を訳す。

(黄庭堅は李常の甥で、孫覿の婿である。2人を通じて蘇軾は以前から黄庭堅の名を知り、その詩を読んでいたが、次韻して返したのはこれが初めてであったようだ。なお、前にみた秦觀も李常と孫覿の縁で蘇軾とのつながりを得ているので、人脈の形成の仕方を推し量ることができるだろう。黄庭堅はこれより12年前に23歳で科举に合格している)

其の一

住き穀類^とは風雨によって倒され、我が農園は雑草ばかりが伸び、

私の前に置かれている膳の上に、玉のように輝く米の光はない。

天の空の下は広く、

美しいことと悪いこと、香りよいものと臭いもの^とが交互に生じる。

夏に、蚊がそこらを自由に飛び回っている間にも、

時は少しも容赦することなく、

たちまち葉は黄色くなって落ちてしまう。

君はきっと西王母^{せいおうぼ}の桃^{もも}といってよく、千年に一度の実を結ぶことだろう。

この私は苦い李^{すもも}で、道ばたに成っていても誰も採るとしないので、

どうにか生きていることだけはできている。

こうしたことは言うに足りないことで、

しおしと自分一人で傷ましく思っていればよいのだろう。

（西王母は伝説の女仙で、その桃は千年に一度だけ実を付け、不老長生の妙薬であるという。黄庭堅の詩はそれほどまでに優れていると絶賛したのだ）

■次韻答舒教授観余所蔵墨

舒教授^{じょ}（舒煥^{じょかん}）の「所有する墨を見て思う」という詩に次韻した。墨に関して蘊蓄を傾けた詩で、故事来歴のてんこもりであるので、適宜説明

を加えたり逆に省略したりした。

庾翼^{ゆよく}という人は、若いころは王羲之^{おうぎし}の書を笑い、
「あんなものは野生の鷺^{あひる}で、生臭^{けが}くて刀の汚れになる」
と言っていたのだが、

晩年には、家で飼い馴らされた鶏のような書を嫌って、
王羲之の書を見習うようになった。

王羲之と庾翼の二人は歴史に冠たる風流人であったが、
子供が好き嫌いを争うようなところもあったのだ。

唐^{たいそう}の太宗は十八歳で天下統一の大事業に乗り出したが、
晩年には書をひどく好むようになった。

私はというと、読書を好んで、他のことは一切眼に掛けない。
ところが、世の中の人には誤って私は書に巧みであるかのように言っている。

世間の人には誰にでも偏った癖があるものだ。

祖約^{そやく}という人はとにかく財物を好み、箱から出しては勘定するのを楽しみとし、
ある日、突然の来客に財物を箱に納めるのが間に合わなくて、
からたをしねらせて隠そうとした。

同じ時代の阮孚^{げんふ}という人は履き物に凝って、
自分でせっせと蠟を塗って磨き立てるほどであったが、
人は生きている間にどれほどの履き物を使うのだろうか。

ごくつまらないものから心にこだわりが生じてしまうのだ。

私にしても、墨を収集し、三十年間は十分に足りるくらいはあるので、その前に自分が老いてしまうのを心配しなければならない。

誰かが言っていたように、

人が磨って墨が減るよりも、人の寿命が磨り減る方が速いのだ。

おおもとが尽きてしまったのでは何もならない。

ここは官服を棄てて故国に帰ることを真剣に考えなければならない。

小さな畑を自分で耕して、たまに書を作って君に送ったりしようか。

王羲之に習って「来禽青李^{らいきんせいり}」の四文字だけを書くから、

笑って眺めてくれたらよい。

それならいくら書いたところで墨は使い切れない。

唐の李駙馬^{りふば}は、邸内には数々の美しい建物が並び、

大勢の美しい女性がいて、その求めに応じて百金も千金も惜しむことがなく、

墨には麝香^{じゃこう}を混ぜて入れる贅沢をした。

墨に御執心というのなら、そのくらいをすべきではないだろうか。

君はこの詩を見てきっと大笑いをし、

冬の窓辺に置かれて硯に張った氷が、笑い声ではげんと割れ、

春の水が生じることだろう。

■答范淳甫

はん そ う じゆん ぽ せい と
范祖禹（字は淳甫）に答えた詩。范祖禹は成都の人で、歴史に精通し、
し べ こう し ち つ がん
司馬光とともに『資治通鑑』の編集の任に当たった。このときは司馬光
と 同じく らく よう にいた。

（この詩は先に見た「また鄭戸曹を送る」(本章 273 ページ) の詩と合わせて読むと
理解しやすい。范祖禹は唐の歴史のスペシャリストで、その詩には、唐の時代に徐州
には ちょうけんほう り こうひつ
張建封や李光弼がいたことが詠み込まれていた。それを踏まえてこの詩は作られ
ている)

吾が徐州のはずれに、漢の高祖こうその生地がある。

そのことささ挙げておけば、張建封や李光弼などは数えるまでもないだろう。

瞳が二重だった項羽こううの遺跡じんあいもすでに塵埃に埋もれ、

いまはただ黄樓こうろうが泗水しすいを臨み見るだけである。

いまの知事は老いてかつ貧乏である。

遊侠の気はいくらもあるものの、

学問の士にありがちな臍抜けただらしさを払拭するほどではない。

それでも、白門樓はくもんろうに囲まれた呂布りょふが、とにかく命だけは長らえたいと、

敵だった曹操そうそうの馬の手綱を曳くのもよしとして仕えたのよりはましだろう。

（末尾は、出世のために改革派に靡くようなことはしないと言っているのだろう）

■送胡掾

徐州の獄を司る役人であった胡掾（字は公達）を見送った詩。父の胡允文がこの地で亡くなったために、柩を携えて故郷に帰ったのである。胡允文と蘇軾はかつて鳳翔時代に交流があった（胡允文の依頼を受けて「鳳鳴駅の記」を書いたことは第2章51ページで見た）。

空に糸を投げて散らすようにして雨は降り続き、

無数の葉が雨に和して音を立てている。

歳月はまさにこのようにして流れてゆくのか。

旅人はこの雨の中、ここを去ってどこへゆくのか。

節義は昔から人の重んじるところ、

艱難はここから始まるのである。

後にきっと君は清徳を世に顕わし、

むしろ人に知られることを畏れるようになるだろう。

（親が亡くなったら、官職を離れて足掛け3年の喪に服するのが子の果たすべき当然と節義であるとされていた。しかし、喪が明けて後に次の仕事を得られる保証はない。官僚は限られたポストを巡って争う状況にあった。最後に「人に知られることを畏れる」とあるのは、評判が立てばそれにふさわしい行動をとるようますます努めなければならぬということもあれば、昔の人は人に知られずに節義を守ることを貴んだということもあるからだ）

■祭胡執中郎中文

胡允文^{こ いんぶん}を祭る文章を息子^{こ ぶん}の胡掾のために書いた。

胡君^この霊に捧げる。

君は若いときに、父君に従って蜀^{しよく}にきた。蜀^{ひと}の士^{けん}で賢であろうとする者はみな君と友人なろうとした。私は君の名を聞いていたのだが、そのときは会うことができなかった。後に、鳳翔^{ほうしょう}で官の仕事をしたときに初めて君と面識を得た。ともに話して大いに喜び、百年の知己を得た思いがした。そのとき君の子息を見て、駿馬の子、鳳^{おおどり}の雛であるように感じた。君は罪なくして官職を失い、私より先に鳳翔を離れた。後に私が鳳翔での任を終えて都に向かう途中、華州^かの旅宿で君と逢った。君は何日も続く雨に濡れて、車が泥に埋もれるような境遇にあったので、人は君のために泣いたのだが、君は一人ゆとりがあって楽しんでいるかのようだった。その七年後、君は都で職務を得て、ひとたび安堵の笑いをもらすはずのところを、歓びはさほどではないようだった。後にまた七年、私が徐州に赴任すると、獄を司る役人となった子息とともに君は徐州にいた。いよいよ鳳の雛が大空を翔け、駿馬の子が千里を行くばかりときになって、私と君はすっかり老けてしまったのだった。老人には友がいらないのが常であるから、私と君は徐州で会ってからますます親しくなった。およそ鳳翔時代に一緒だった人々で今も生きているのは幾人いるのだろう。君は仁に厚い人であるから、君こそはたとえ病になったとしても、必ず長生きをするはず

のものと思っていたのだが、どうしたものか、運命というものはわからない。

ああ、胡君の霊に告げる。

人として誰か死なない者があろうか。君のように賢であっても現世にいつまでも留まることはできない。君はあたかも百回鍛え抜いた剛刀のように、一日に千頭の牛をさばいてもたゆむことなく仕事に励んだ。宝玉ののごとき君の才能を世間は十分に活かさずに箱の内に置いてしまった。しかし、君の子息はきっと世に高い名を挙げることだろう。君に一杯の酒を送る。永遠の世界へ帰り、この世に恨みを残すことなかれ。

■次韻答王定国

都にいる王鞏おうきょう（字は定国ていこく）（本章 195 ページなどにすでに登場）から届いた詩に次韻せいぎょんして答えた。詩の後半に出てくる清虚堂は王鞏の書齋で、後に少し詳しく見ることになる。

君の詩を得るたびに、書簡を受け取ったような気になる。

それでも、心の内を宣のべて妙所を写すには、書簡はやはり詩に及ばないだろう。

眼の前のあるとあらゆるものは、心に何かを生じさせずにはおかない。

憂うれいが生じて、君の詩は必ず駆除してくれる。

君の詩によれば、

都は十日以上も雨が続いて、馬の脚が泥に沈み、魚が街路で泳いでいると

か。

長い雨は、よくいわれるように、来るべき人を来なくさせてしまうものだ。

君はゆったりと独り清虚堂で酒を酌んでいることだろう。

太守となって郡を治めるのは、昔から楽しいことであるといわれている。

徐州の山川はまことに美しいけれど、

残念ながら、我が故郷ではない。

願うのは、

重陽ちやうようの節句すにくるといいう前々からの約束を廃すてずに、

衰えて心が冷え冷えとしているこの知事のもとへときて、

思い切って気合を吹き込んでくれたまえ。

(王鞏の詩は手紙のように近況が詳しく詠まれていたのだろうか。重陽の節句に会
にくるといいうのは、2年越しの約束である)

■次韻子由送趙屺鼎觀錢塘遂赴永嘉

弟の蘇轍そでつが趙屺ちやうき(字は景仁けいじん)を見送った詩に次韻した。趙屺は先に見た

趙抃ちやうべん(本章 223 ページ)の子で、永嘉けい かに赴任するに当たって、まず錢塘せんとう

(杭州)に立ち寄って父親に会うことにしていた。趙屺の故郷は杭州ではないが、父がそこにいるので、この詩はあたかも趙屺が帰郷するかの
ように詠んでいる。

帰り行く君の舟は河とともに幾度か曲り、
次次第に故郷の山々が青く見えてくる。
土地の役人が旅人を出迎えてくれると、
すでに君も故郷のなまりを帯びるようになる。
君はかの謝靈雲しゃれいうんのような父上に会い、
かの王延寿おうえんじゅうが父のために代作したような名文を献じるであらう。
四十歳での出仕は遅いなどと世間ではいうが、
三千里の高さへと飛翔する勢いを具えた君であるから、
そんなことは気にするまでもない。
君は風流にして清絶、
永嘉に至れば、
衣を濡らして溪谷を尋ね、
草鞋をはいて藥草を採り、
折々に詠む詩はすぐに一卷の書物になり、
繭紙けんしを広げて王羲之おうぎしのような筆を揮うことだろう。
君を迎えて永嘉は安らかに治まり、
海は穏やかで魚や鯨が泳ぎ戯れ、
山は静かで草木が自ずとよく成長することだろう。
官職にある限り、遠近を問わずに行かねばならない。
民を治めるには、種々の困難を嘗めなければならない。

君はお家の伝統をよく継いで

父上のように権威を恐れず不正を糾す人になってもらいたい。

(謝靈雲や王延寿がどのような人であったか知らなくてもよいだろう。謝靈雲は永嘉にゆかりがあるので用いられたのである)

■中秋月 寄子由三首

8月15日の中秋の月を詩に詠んで弟に寄せた。

其の一

去年、心をこめて君と見た月、

今年は、古い町の東にきらめいている。

去年、君とともにいた僕、

今年は、憔悴して病の床に臥っている。

月はあちらこちらを探し求めたのか、

しとやかに窓辺より入り込んできてくれた。

月は僕が病であることなど知るはずもないのだけれど、

楼台に月を愛でる歌声がないのを訝しく思ったのだろうか。

僕は枕を撫でて三度嘆息し、杖にすがって立ち、

せっかく入ってきてくれた月の光に誘われて外に出る。

夜の露が冷たく胸に入り込み、

秋の虫のように僕はかすかに詩を吟じる。

こんな病人を哀れまなくてよいので、

天の風よ、

手荒く吹いて月の宮殿へと連れて行ってくれまいか。

僕も李白のように豪放に振る舞ってみたい。

でも、かえって孟郊のように鬱屈した言葉を発してしまう。

僕に許された歳月はあとどれくらいなのだろうか。

この佳い月ともしばしば逢えるものではあるまい。

魚もこの夜は睡らずにいるのか、

さかんに水上で口をぱくぱくとさせている。

(孟郊は先に「元稹は軽薄、白居易は通俗、孟郊は寒々しく、賈島は痩せている」と評されていた人である(本章 149 ページ)。このころ蘇軾は孟郊の詩を詳しく読んでいたようで、その詩を論じた詩を作ってもいる(ここでは訳出しない))

其の二

この間に中秋の月に逢ったのは六回、

そのうち五回は君と離れて月に照らされ、

去年だけは一緒に、

しかし、そのときに君は別れの曲を歌い、

満座の人々は咽び泣いた。

なんけいおうてん

南京応天府は繁華で美しいところだけれど、

あの夜のことは忘れずにいてほしい。

今夜南京で君が見る月は、

広い湖に銀を流し込み、高い楼閣に鏡を掛けたかのよう、

夜遅くまで歌声が続き、

清らかな木のもとに人影が散り散りになって、

ようやく君は家に帰り着くのだろう。

葉の上にはすでに露が宿り、

月の光が翻されることだろう。

君は酒を呼び、

細君とともに飲み、子供たちに向かって僕の話を話したりするだろう。

しかし、君は知らないのだ、

僕が病後で酒が飲めずに梨や栗に対してののを。

僕がいま見ているのは、

川の東の蕎麥の花が、月の光を受けて雪を敷いたかのよう。

去年の君の曲に和そうと思って、

そうすると心がずたずたに断ち切られてしまうだろうかと、

僕はいま怖がっている。

其の三

去年の中秋の月を共に見たのは、

じょかん ていきん どん き ちゅうこう
舒煥、鄭僅、頓起、趙杲……。

舒煥はいま鄆州にいて、

科学の試験監督として閉ざされた門の内で、

この清らかな月に対しているのか。

ほくけいだいめい
鄭僅は北京大名府に赴任するために、

夜の間も独り舟を進めているのか。

頓起は同じ徐州にいるけれど、

やはり科学の試験監督として門で閉ざされた内側にいる。

趙杲からは手紙が届き、

僕が作った中秋の詞について書いてくれた。

四人は離れ離れであっても、

千里を照らす月明りのもとで心を一つにしている。

明月は人が老いることなど理解しないし、

良い夜に人々が揃うのはもとより難しい。

座を一つにする人々も、

ふと顧みる間に水に流れる浮き草のようにばらばらになってしまう。

かつて僕はこういことを聞いた――

各地を旅する商人が集まって話をしたところ、

中秋の日ばかりは、晴れも曇りも、どこもかしこも同じ天候なのだと。

とすれば、君も四人の者も同じ月を見ているのだらう。

天はそれだけの意を使ってくれているのだから、

中秋の会はとりわけ軽んじてはいけないのだ。

明年もまた各自が離れて月を望むであろうが、

一瞬ごとに変化する僕らであっても、

永遠に変わらない情を知るであらう。

■和子由中秋見月

同じ中秋の月を、弟は南京なんけい応天府おうてんで見て詩を詠んだ。それに兄が和した。

山の高みから明月がまだ出ないうちに、

仏陀ぶつだの白毫びやくごうから発するずいこうような瑞光が千丈の長さつ きに伸びる。

一杯の酒が尽きる前に銀闕ぎんきやうが湧き出し、

雲の乱れが波頭のように崩れ去る。

天の川こくの千斛ひとみの水が天の眸子を洗い去ったのか、

ぞくっとさせられるばかりの月の光に、

私の心はかえって水のように静まってゆく。

いつもなら弾丸のような光芒を放つ星も、

竜がわたかまるような星座も、

今宵は眼を凝らしても見えない。

清く澄んだ月の光に螢の火は争いようがない。

誰が川に舟を浮かべているのか、

千の燈火が魚のように動いている。

ある舟は浪のきらめきを無心に追い、

ある舟からは歌声が高くあるいは低く聞こえてくる。

浪はいつまでも揺れ、風はいつまでも回り、

舟の青い明かりは山の前に明滅する。

明月が低く落ちてゆくと人は散り散りになり、

私は家に帰って酒を呼び、

もう一度月を見る。

月の色はいよいよ清く好^よろしく、

露に湿った草の中で秋の虫が咽び鳴く。

簾を捲いて戸を推して静まり返った家に入ると、

窓辺でくずる孫の声だけがしている。

なんけい
南京にいる君よ、

貧乏であるのを恥じることはない。

君のように、月に対して詩を詠む人はそうは多くあるまい。

明日の朝になれば、人はそれぞれに用事があって出てゆく、

美しい月の楼台での夢から覚めてぼんやりとした気分のままに。

(川に見えた無数の燈火は、中秋の夜に舟に燈火を掲げる習慣があったことによる。
ぐずる孫は蘇軾の長男の子で、近頃^{そろう}誕生したばかりで楚老を名付けたと、蘇軾自身の
注記がある)

■九日黄楼作

洪水対策が一段落した後に着工した黄楼^{こうろう}は8月12日に完成した。しかし、8月15日の中秋には蘇軾が体調不良であったために、月見の宴は催されなかったようだ。9月9日の重陽^{ちやうよう}の宴を黄楼で行っての詩。

去年の重陽はいいようのないものだった――

前日の夜中に、町の南方に千の渦が湧き立ち、
城壁に向かって水が押し寄せ、雷のような音を立てた。

町中が泥だらけになり、そこに雨も降ってきた。

重陽の節句だからといって、菊の花とか酒どころではなかった。

日暮れには泥だらけになった履^{くつ}を洗い、

そのときに、

今年の重陽の節句を迎えられるようになるとは思ひもなかった――

さあ、花に向かって盃を挙げようではないか。

酒は薄いし、もてなしはまずいものだが、

これだって土囊をかついで泥の中をはいずりまわるよりはましではないか。

この黄樓はできあがったばかりでまだ壁は乾いていない。

霜が初めて降りようとするいま、今年の川は水量を減らしている。

今日は細かな雨のような霧に包まれ、南方の山並みは隠され、

黄樓の前には茫茫^{ぼうぼう}と海が広がっているかのようなのだ。

下からはぎしぎしと舟を漕ぐ音だけが聞こえてくる。

秋のうすら寒さは老人の体にはよろしくないというから、

まずは熱い酒を腸^{はらわた}に注いで、我が内なる氣^きを奮い立たせようではないか。

すると、いい塩梅に霧が消え始め、日が出てきて漁村が見えてきた。

遠く、水は鱗鱗^{きらきら}と流れ、山は巒巒^{ごっこつ}と聳え立つ。

ここに集まった三十余人、

詩人もいれば猛士もいれば、それこそ竜だって虎だってまざっている。

楚^その舞い、呉^この歌を披露して、それこそ鷺鳥や鴨の大宴会だ。

さあさあ、もう一杯、皆の衆よ、辞退するでないぞ。

この景色は天下第一の名勝にだって引けを取るものではないと、

この私が保証する。

(ちょうど1年前には洪水との格闘が始まっていた。最後の句は、もっと具体的に、

ここは苕溪^{ちようけい}に匹敵するほどに美しいと詠んでいる。苕溪は江南の名所で、かつて蘇軾^{こうなん}は訪れたことがあり(第4章68ページ)、いかにそこが美しいかを一座の人々にさんざん語り、しかし、ここも劣らないと、とってつけたように言ったのだろう)

■太虚以黄楼賦見寄作詩為謝

しんかん 秦觀（字は太虚）が「たいきょ黄楼の賦」を作って寄せてきたので、その謝礼に
詩を返した。

私は黄楼の上で黄楼の詩を作ろうとしていた。

そこに友人から手紙からきて、中になんと「黄楼の賦」が入っていた。

黄楼は高さ十丈、その下に五丈の旗が立つ。

そざん 楚山をもって黄楼を守る城とし、

しすい 泗水をもって黄楼を巡る池とする。

私が作ろうとした詩にはこれといってよい句がない。

すべての風景がそれぞれに自己主張をして、

私の意に従って詩の中におさまってくれないのだ。

君は、何とも知れぬ妙技をもってして、

電を自在に降らし、雷をやすやすと鎮めてしまう。

君の堂々とした詩句は古今の傑作の中に雑ぜることができる。

南山の石は磬けい（打楽器）を作るのによく、清く脂を流すかのようになめめらかである。

朱い蠟石ろうせきは印を刻むのによく、ごくわずかな線もきめ細かく作ることができる。

君の詩は、磬石や朱蠟の原石のように、

どれほどのすばらしさが内に具わっているのか、

いまはまだわからない。

後の人々が真価を知ることだろう。

■送頓起

先の中秋の詩（本章 288 ページ）にその名があった頓起^{とんき}の送別の詩。試験監督の仕事を終えたので徐州を去ったのだろう。

旅路にある者同士が逢うのは難しく、

いつも満足に楽しむことができない。

君が旅立つに当たって袖を引き、

重陽の節句に折り残した菊を愛でようと勧める。

君は何を念うのか、送別の歌は悲しさを増す。

酒闌^{たけなわ}にしてまだ別れる気になれず、

もうしばらくと、蠟燭を一寸伸ばす。

留めても限りがなく、いつかは別れを促すことになる。

君が行く先には、泰山^{たいざん}が見えてくるだろう。

君は先人に習って踏み登り、

四十里にわたる山並みの向こうから湧き出る朝日を浴びるだろう。

そして、頭^{こうべ}をめくらせてこの徐州のあたりを望めば、

大海に浮かぶ一粒の粟、

そこに君の友がいて、塵土の上をあくせく歩き回っているのだ。

君は黄樓の詩を残してくれた、
私はその名編をずっと大切にするだろう。

■送孫勉

そんべん孫勉の送別の詩。孫勉は孫覺そんがく（本章 259 ページなど）の弟で、やはり試験監督のために徐州にきていた。頓起とんきと一緒に送別の会が行われたのだろう。

（詩の冒頭ほつかいに北海県について言及しているのは、孫勉がかつてそこにいたのだろう。
途中に「髯ひげの將軍」とあるのは立派な髯を蓄えた孫覺のこと）

私は先みづに密州の職を辞めたときに北海県を通過した。

河では、雪のような白い浪が暴れ、
黄土は蒸し饅頭のようにひび割れていた。

そのあたりは桑や麻の一大産地で、
そこが豊作になると天下の桑や麻の値が下落するといわれている。
ところが、このところ毎年のように饑饉に見舞われ、

盗賊の難にもずっと苦しめられている。
気の毒なのは盗賊を追捕する役人で、
顔が裂けるような烈風の中でも野宿をしなければならない。

君は淮南出身わいなんの秀才で、

首席で科挙に合格するほどの文才の主でありながら、

筆を投じ、腰に^や箭を束ねて武事に奔走するようになり、

髯の將軍の薰陶もあってか、

戦を促すような豪快な詩文を作るようになった。

私は州知事として近隣の三つの州を対象に科挙の地方試験を行った。

私には、受験生の中の玉石を見分ける能力がない。

君には、しかるべき人物を見分ける力が具わっていることはよく知られているから、

試験に落第しても、君の判定ならばきっと受験生も善ししてくれるだろう。

君の才能には可ならざるものはないが、

さらに百煉すればますます立派なものとなろう。

私の詩は咀嚼するに耐えるものではないけれど、

君との別れの酒の肴として贈ろうと思う。

■李思訓画長江絶島図

^{り し くん}李思訓が描いた画を見ての印象。李思訓は宋代の山水画の創始者といわれる人。画には、^{ちやうこう}長江に浮かぶ二つの小島が描かれていた。

^{あ お}山は蒼蒼く、

^{かわ ひ る}江は茫茫い。

^{だい こ ざん しやう こ ざん}江の中央に浮かぶ大孤山と小孤山、

崖は崩れ、路は絶たれて、猿も鳥もない、

ただあるのは天を刺すばかりの高い木々。

旅人の舟はどこから来たのか、

ふと画中より、

抑揚ふなうたのある棹歌の声。

江かわべりの平らな沙へと、

画の外の遙か遠くより軟らかな風が吹き寄せる。

二つの島は姉と妹だとか――

たちまち島は女性の豊かな鬘まげに変わり、

暁の鏡の前で化粧が終わったばかりのあでやかさ、

舟の上の旅人よ、

むやみに恋に落ちてはいけない、

妹も先年、彭郎ほうろうというよい男にもとに嫁したのだから。

（山水画には、舟に乗る孤独の人物がよく描かれ、それは俗世間から超越した隠者であるとするのが、普通の見方である（本章 62 ページ）。ところが、この詩では、他所の女性に岡惚れしてしまう俗人として詠んでいるのが蘇軾の遊び。悪ふざけがすぎると、この部分を酷評する人もいたが、西湖せいこを西施せいしに譬えたり（第 4 章 94 ページ）、名筆を楊貴妃ようきひに譬えたり（第 4 章 49 ページ）するのは蘇軾がよくする戯れ）

■張安道見示近詩

昨年の秋から来る来ると言っていた王翬^{おうきゅう} (字は定国^{ていこく}) (本章 195 ページ)
 がようやく都からやってきた。王翬が携えてきた張方平^{ちやうほうへい} (字は安道^{あんどう}) の
 新しい詩を読んでの感想。王翬は張方平の婿である。

世の人物の質がひとたび衰え出すと、奥深い言葉が聞かれなくなる。

かつてそのような時代があったときに、

再び正しい言論が聞かれるようになったと讃えられた人がいた。

それとて、張公^{ちやうこう}が時に感じて深い意^{こころ}から発する言葉にはとても及ばない。

私は少年の頃に奇特定の志を抱き、古代の琴の音に和そうとした。

ところが、林は荒れて蟬が勝手にがんがん鳴き叫び、

沼は廃れて蛙^{みだ}が淫^{みだ}りがわしく鳴き叫び、

ついには両耳を覆い、ただ黙って嘆息することとなった。

ここに王君^{おうくん}が颯爽とやってきて、

「僕は山に仙人を見ました、

月明かりのもとで嶺に笛を吹き、

その音は淮水^{わいすい}、泗水^{しすい}に落ちて、

水の生き物も感動して唱和します」

ならば、さらに公に願うのは、

王者の徳を正して、古代の正しい音を後世にもつなぐようにしていただきたい。

(張方平は蘇軾にとって大恩人であることから、過剰とも思えるような賛辞を贈るのを常としている。張方平を持ち上げるあまり、蟬がギャンギャン、蛙がゲコゲコと戯画化されたのは改革の担い手たちで、これを読んだらさぞ不快であろう)

■次韻僧潜見贈

道潜^{どうせん} (字は参寥^{さんりょう}) から贈られた詩に次韻して返した。

道潜は、杭州時代に蘇軾が何度か足を運んだ於潜^{よせん}の僧で、そのときには会う機会がなかった。道潜が何かの旅の途中で徐州に立ち寄り、初めて蘇軾と親交を結んだ。これより2人は親密な間柄になり、蘇軾は道潜のことをもっぱら参寥師と呼ぶようになる。

参寥師^{さんりょう}の胸中は水の鏡のように清く、

森羅万象がそこに映っては消え、一切の形を残さない。

独り古い寺に住んで菊を植え、詩を詠む人とともにその花を食らう。

人間世界にはどうして南と北の差異があるのか、

渡り鳥はどうして遠くに飛んで行くのか。

師はかつて門を閉ざし、穴の深みに禅榻^{ぜんとう}を置いて座し、

その頭の上に歳月が高く積み上がって行った。

今年になってたまたまそこから出て、

智慧の剣をもって煩惱の賊に刑を加えようと、

僧衣を新たにして仏法を求める山水の旅に出た。

子どもたちは、髭を全く^き翦らずにいた師の姿に驚き、

お歴々は師に逢おうとしたが、師は民衆の内に隠れて搜し出せなかった。

あたかも夢の中の出来事のように、

^{わいすい}淮水のこちら側へ吹き寄せる秋風とともに、

殺風景な^{きつゆう}片舎の庭に、たわわに実の成る橘柚の木(参寥師)が現れた。

^{ほうじょう}彭城のこの老知事は誰にも顧られることなく、

古い友人は互いに天空の片隅に分かれ、暁に残る星を望むかのよう、

ただ棗の林や桑の野だけが迎え入れてくれる。

師は千の山の遠さも憚らず、荒野に家のないを厭わず、

二本の脚は飛ぶ猿のように軽やかに旅をする。

世には虚飾の言葉がごろごろしているが、

その中にいくらかなりとも詩人の情^{こころ}というものがあるのだろうか。

猿が鳴き鶴が叫ぶのは本来何かの意^{こころ}があつてのことではなく、

その下を心を傷める旅人が行くなど知りもしない。

夜の雨が石段に降り注ぐのは自ずから清らかなだけで、

人の心を悲しみで満たして泣かせようとするものではない。

私はもう詩などは廃して、山に入って^{はこ}筐いっぱい^{はこ}の仙草を採ろうかとも思う。

しかし、現実には公文書が堆積し、鞭打ちの刑罰を加えなければならない。

昼間は無理でも、せいぜい夜の間ぐらいいは、

茶を煮て栗を焼いて過し、

師とともに傾く月を見つめつつ、

師の珠玉のような智慧で、私の濁った水のような心を照らしていただきたく思う。

■次韻潜師放魚

徐州の虚白齋^{きょはくさい}で参寥^{さんりょう}と話をしていたところ、ある人が蘇軾のために魚を持ってきた。蘇軾は、この魚を水に放って詩を詠んでみてはと参寥に勧め、そのようにしてから参寥が詠んだ詩に、蘇軾が次韻した。

師は、泗水^{しすい}のほとりに立って魚を放ち、仏法を説く。

師の私^{ほっす}子に天から無数の花が降ってくる。

師は、淨らかな行いをして西方浄土に行く種を植えよと教える。

夢のお告げに、命の終わるときがきたと知ってからでは遅い。

悲しいかな、私は魚のように年中口をばくばくさせているだけ、

ろくな目に遭わず、退くべき時期もつかめずにいる。

かつて、案外知恵のないお人だと笑われた子^{しさん}産どころではない、

本当にぼんくらな知事で、

尾が赤く変色したくたびれた魚のような状態に民衆がなっているのに、

目が細か過ぎる網を取り除いてやることもしないで、

ただ額に油汗を流しているだけだ。

師はもとより衣の内にたま仏法という珠を有しているので、
泥の底に潜って真珠を探し求めなくてもよいのだ。

(会って間もない参寥とたちまち心の波長が合ったのだろう、すぐにこのような戯れの詩を詠むようになった。魚を放したので、魚に縁のあるいろいろなことが詠み込まれている。途中にある子産の故事は次のようなこと。賢人としての誉れ高い大臣の子産にある人が魚を贈った。子産はその魚を水に放てと池の管理人に命じた。管理人は魚を煮て食べて、子産には池で悠々と泳いでいると報告した。子産はそれを聞いて管理人を褒めたので、管理人は、子産は知恵者だと聞いているが、それほどではないと笑った。目の細かい網とは、改革に伴って作られた数々の新法をいうのだろう)

■次韻参寥師寄秦太虚三絶句時秦君举進士不得

都で科挙に挑んだしんかん秦觀(字はたいきょ太虚)(本章 266 ページ)は不合格となり、
参寥が慰めの詩を寄せ、それに次韻した。3 首のうち 1 首を訳す。

其の一

しん秦君が文字を自由に使うことは世から超然と抜き出でいて、
仙人が大空を凌ぎ上るありさまがある。
ところが、どうしたことか秋の試験に及第しなかったの、
私は座禅を組んでそのわけを諸天の菩薩に尋ねようと思う。

(菩薩が出てくるのは、参寥の詩に次韻したからだ)

■滕県時同年西園

徐州の管轄下の滕^{とう}県には蘇軾と同時に科挙に合格した時^じ君（名は不明）がいた。その人の庭について詠んだ詩。

人はみな成長の早い^{にれ}榆や柳^うを種えて、
十畝^ぼの陰がすくにも作られるのを待つのだが、
私は自分のちょっとした信念として松や柏を種えることにしている。
村里を見ても、それぞれの家はせわしく盛衰を繰り返し、
木を種えても徳を種えないのなら、飛び去る鳥のように雲散霧消してしまう。
時^じ先生のことを私はいままで知らなかったのだが、
その用意するところのものは実に深く、
千金よりも義を重んじ、数人の友だけがいる。
先生の自らの手で西園^{せいえん}を開き、千の峰から珍しい木を持ってきた。
霜にも雪にも耐える根を養い、
遥かな高みで鶯や鳳が吟じるようになるのを待っている。
池に水を引き、亀や魚が自由に浮き沈みしている。
桂の木が日夜成長し、歩む人の肩に白い花が乱れ落ちる。
繁るのは草や木だけではない、
先生の子孫もすでに林を成すまでになり、

両手に余るまでに大きくなった子がたくさんいて、
 必ずや千尋の高さにまでもなるであろう。
 昔、漆を種えて長い歳月の後に富豪となった者がいた。
 私はこの西園の詩を作って、
 近隣の人々に先生を見習うよう勧めるものである。

(徳を種えるということは先に「種徳亭の詩」で見ている(本章263ページ))

■日喩

「道」は中国の思想史において極めて重要かつわかりにくい概念である。
 「道」とは何か、『中国思想文化事典』(溝口雄三・丸山松幸・池田知久編、2001年)には、「人が通行する道というのが原義だが」「宇宙・自然・万物の普遍的規律や根源的真理として、また社会・政治・道徳の当為や規範として、高い位置づけが与えられた」と記されている。この説明からその「位置づけ」はわかるとしても、「道」に達する(理解して実践すること)はできない。「道」に達するにはどうしたらよいのか、蘇軾は若い学徒に向かってこの文章を書いた。

一つの譬え話がある。

生まれながらに目の見えない人がいて、太陽がどのようなものであるのかを知らなかった。そこで、目の見える人に尋ねた。

ある人は、

「太陽の格好は銅のたらいのようだ」

と教えた。

そこで、たらいを叩いてみると音がした。後に鐘の音を聞いて、それが太陽であろうかと思った。

別の人は、

「太陽の光は蠟燭のようだ」

と教えた。

そこで蠟燭を触ってみて、その形状を知った。後に、笛に触れて、それが太陽であろうかと思った。

太陽と鐘や笛は遠くかけ離れたものであるが、目の見えない人はその違いがわからなかった。見たことのないものを、人に尋ねて答えを求めたのでこのようなことになったのである。

「道」というものは、太陽よりもずっと見えにくい。そして、人がまだ道に達していないときは、目が見えないのと異なるものではない。達した者が、巧みな譬えを用いて善く導いたとしても、それはたらいや蠟燭よりましだということにはならない。たらいから鐘に進み、蠟燭から笛に進み、鐘やら笛やら堂々巡りをしていつまでたっても終わらない。

世間の「道」について言う者は、ある者は見えたと考えたところから「道」を説明し、ある者は見えてもいないのに適当に憶測する。

こうした過ちは、いずれも「道」についての答えを人に求めることから生じたのである。

ならば、「道」はどうあっても答えを求められないものなのだろうか。

私が考えるに、道は「^{いた}到す」ことはできても、「求める」ことはできないものなのだ。

それでは「到す」とはどういうことなのか。

^{そん し}孫子はこのようなことを言っている。

「上手に戦う者は、人を『^{いた}到し』て、人に『^{いた}到され』ない」

^{こう し}孔子はこのようなことを言っている。

「職人は作業場において、自分の仕事を成し遂げる。君子は学問をして、道を『^{いた}到す』」

この二つから「到す」の意味を考えると、人に「求める」のではなくて、自ずとやってくるのが「到す」ということなのである。だから、道は「^{いた}致し」てこそ達するものなのである。

もう一つの譬え話がある。

南方には潜水の得意な人がたくさんいる。南方の人は毎日水辺で生活をし、七歳になると水を歩いて渡れるようになり、十歳になると泳げるようになり、十五歳になると上手に潜水ができるようになる。潜水はたやすくできることではない。きっと水の「道」を会得した者が潜れるようになるのだろう。毎日水と一緒にいるから十五歳で「道」を会得するのである。

生まれてから水に馴染みのない者は、立派な大人になっても、舟を見ただけでも

怖がるという。

水に縁の薄い北方の勇者が、南方の潜れる人に、潜り方のコツを求めたという話がある。北方の勇者は答えを聞いて、それを川で試してみたところ、皆が溺れてしまった。

つまり、日々に学ぶことをしないで、「道」についての答えを人に求めようとするのは、北方の人が潜水を求めるのと同じなのである。

さて、以前は科挙において詩賦を課してしかるべき士^{ひと}を採用していた。士は音律も含めて様々なことを学び、安易に「道」を知ろうと志すことはなかった。いまは試験で経典について問い、それによって士を採用しているので、士は「道」について規範的な答えを知ることを求め、いろいろなことを学ぶ努力をしなくなった。

渤海^{ぼっかい}の呉瑄^{ごかん}君は学ぶことを志す者である。そして科挙を受験するために上京しようとしている。そこで私はこの「日の喩え」^{たと}の文章を作って、呉瑄君に告げるものである。

（王安石^{おうあんせき}が科挙と学校の大改革を志向し、その手始めとして試験で詩賦を課すことをやめようとしたときに、蘇軾が反対意見を皇帝に提出したことは第3章 32 ページで見ている。経典の理解度を試験で測ろうとしたら、その前提として、経典の正しい解釈が一つに定まっていなければならないだろう。正しい解釈が提示されれば、受験生は当然のことながらそれを丸暗記して試験に臨むようになる。実際にそのように事が進み、いわば潜り方のコツを教わっただけの人間が官僚として採用されるようになり、道に達することが疎かになってしまったと、蘇軾は憂慮していた。呉瑄^{ごかん}（字は彦律^{げんりつ}）

は蘇軾の考え方に共鳴する人物であったので、この文章を書いて送った。なお「君子は学問をして、道を『到す』」というのは孔子の言葉でなく、弟子の子夏^{しか}の言葉である。広く様々なことを地道に学び続けることで、自ずと道に達する（人として大成する）という考え方は本章 87 ページ「塩官^{えんかん}の大悲閣^{だいひかく}の記」や 90 ページの「晁約^{ふやく}先生の詩集の叙^{じょ}」とも共通する。たくさんの知識を蓄え続けるとどこかで飛躍がおこるというのは、現代の AI でも見られる現象である）

■百歩洪二首

徐州の名所、百歩洪^{ひやくほこう}（本章 185 ページ）で詠んだ詩。この詩には序文が付いている。2 首のうち 1 首を訳す。

王翬^{おうきゅう}が彭城^{ほうじょう}の私のもとに訪ねてきて、ある日のこと、王翬は顔復^{がんふく}とともに小さな舟に棹^{へん}し、盼^{えい}、英^{けい}、卿^しの三人の妓女^{しすい}を携えて泗水^{せいじょざん}に遊んだ。北に聖女山^{せいじょざん}に上り、南に百歩洪^{ひやくほこう}に下った。笛を吹き、酒を飲み、月に乗じて帰った。私は事情があつて行くことができなかった。その夜、私は黄樓^{こうろう}の上に立って、舟の上の人と互いに見て笑い合った。このような月の光のもとでの楽しみは李白^{りはく}が死んで三百余年の間、ほとんどなかったものではないかと思った。王翬が彭城を去ってから一カ月を超えてから、私は参寥師^{さんりょう}とともに百歩洪に舟を放ち、先の遊びの跡を尋ねて追懐した。そして長嘆息してこの二首の詩を作り、一つを参寥に贈り、一つを王翬に寄せ、かつ顔復^{がんふく}と舒煥^{じょかん}に示し、その二人を迎えて詩に和してもらおうと思う。

其の一

百歩洪の長い流れに、

北斗星^{ほく と}が天から水を注ぎ落としたように波が跳ねる。

舟^{はた お}は、機織^ひりの梭を投じる速さで南に下る。

船頭^{けり}が「鳧^{かり}か雁が飛び立った」と叫ぶ間に、

無数の岩のつるつるの面が、一本の線のようになって過ぎ去る、

鷹に追われて走る兎か、千丈の堤を走り下る駿馬か、

切れた絃が飛び、矢が手を離れ、飛電が一寸の隙間をよぎり、

四方の山が目の中を転がり、風が耳を掠め、

ついには流れの中に千の渦だけを見る。

危うい中に楽しみを得るのは一つの快感であるけれど、

黄河の神が己の大きさを誇ったのにも似て、

より広大な世界から見れば、それほど大したことではないのである。

我が生は常に変化して日夜に過ぎ逝き、

世情^{ふん ぶん}の紛紛とした争奪は酔った夢の中のこと、

銅の駱駝もいずれは草の下に埋もれ、

千劫^{ごう}の歳月とても俯仰の間に失われ、

万事はこの水がうねり流れるのを見る間のことなのであろう。

岸辺の青い岩の上には、釣棹を立てた穴が蜂の巣のように開いている。

昔から無数の釣り人がそこに座し、
 いずれの人の心も定住するところを得なかったのだろうか。
 造物者は速やかに時を過ぎ去るものとしているが、
 しかし、私は必ずしもそれに流されるだけのものではないのだろう。
 かくて、舟を回らし、馬に上っておのおの帰り去る。
 これ以上がやがやと多言を用いたならば、
 参寥師さんりょうに叱られてしまうだろう。

(前半の軽快な急流描写だけでも詩として成り立ち得るのだろうが、その後に思索を
 巡らさないと気がすまないのが宋代の詩（特に蘇軾の詩）の特徴であろう）

■放鶴亭記

これまでに何度も登場した張天驥ちやうてんき（字は聖塗せいと）（本章 200 ページなど）
 が新しい住まいに移り、その近くの高所あずまやに亭を作った。蘇軾はその亭
 を「放鶴亭ほうかくてい」と名付け記念の文章を書いた。

熙寧十年の秋、彭城県は洪水に襲われ、雲竜山人うんりゅうさんじんこと張君の草堂ちやうにも水が及
 び、扉の半ほどまで水につかった。水が引いた後、翌年の春、もとの住まいよりも
 東、東山の麓とうざんに居を移した。そこから高みに昇ると、とりわけ優れた眺望が得られ
 たので、雲竜山人は上に亭を作った。

彭城県の四方は岡と嶺で、大きなこんもりとした環わに囲まれているかのようである。

ただ西のところに、十分の二ほどの欠けた箇所がある。雲竜山人の亭はちょうどその欠けたところに当たる。

亭から見ると、春と夏の境目のころは草や木が天の際にまで伸び上がり、秋と冬の月や雪のときには千里にわたって一つの色に染まり、風雨の折りには暗くなったり明るくなったり、一瞬のうちに風景が百変する。

雲竜山人は二羽の鶴を飼い、よく馴れていてよく飛ぶ。朝に西山^{せいざん}の欠けたところに向かって放つと、鶴は行きたいところへと自由に飛び、田に立ったかと思うと雲の上へと翔け上がる。夕暮れになると東山に向かって帰ってくる。

それでこの亭を「放鶴亭」^{ほうかくてい}を名付けた。

知事の蘇軾は時どき賓客や同僚の役人を連れて雲竜山人に会いに来て、この放鶴亭で酒を飲んで楽しむ。

知事は雲竜山人に会釈して、このように言う。

「先生は隠れ住むことの楽しみをよくご存じでありましょうから、いまさら言うまでもないことではあるのですが、天子となつての楽しみも、これには替えられないものであろうかと思います。『易経』に『鶴が岩蔭で鳴くと、その子も声を合わせる』とあります。また『詩経』には『鶴は奥深い自然の中で鳴き、その声は天に聞こえる』とあります。鶴が「清遠聞放」^{せいえんかんほう}（清潔で俗を離れ、静謐で自由）で、塵埃の外に超然と脱け出ていることから、このように歌われたのでありましょう。『易経』と『詩経』は鶴を賢人、君子、隠徳の士になぞらえています。ですから、鶴と狎れ親しみ、鶴と遊ぶのは、益するところがあって、損なうところがないようであるのですが、昔、衛国の

懿公は鶴をあまりにも可愛がりすぎたために、家臣に背を向けられて国を亡^いれてしまいました。その一方で周公は『酒誥』を作^{しゅう}って酒を慎^{しゅ}むよう訓戒^{こく}し、衛国の武公は『抑戒』を作^{よくかい}って自ら酒を慎^{しゅ}みました。「荒惑敗乱」(荒^{こう}さみ惑^{わく}い、人倫^{じんりん}を敗^すり乱^{らん}す)であることで酒以上にひどいものはないと考えたからでした。しかし、劉伶や阮籍は酒の内に隠れることで自身の真実を全^{りゅうれい}し、後世にまでその名が伝^{げん}えられました。天子は鶴のように「清遠閒放」のもので自分の思うままに好^すむことができなくて、好^すみ過ぎて国を亡^いれてしまうことがあります。一方で、世を逃れて山林に住まう者は、酒のように「荒惑敗乱」のものであっても、害がなくすむことができます。まして、隠れ住む者が鶴を好^すむのです、その楽しみはいくら尽^すくしてもよろしいのです。このように考えますと、隠れ住むことの楽しみは天子の楽しみとはとても同日に語れるものではありません」

雲竜山人が楽しげに笑って言うには、

「そうでございましょうかな」

そこで知事は「放鶴^{ほうかく}」「招鶴^{しょうかく}」の歌を作った。

鶴飛去兮、(鶴は飛んで行くぞよ、兮^{イェーイ})

西山之缺。(西山^{せいざん}の欠けたところから)

高翔而下覧兮、(高^み翔んで、下を覧^{らん}るぞよ、兮^{イェーイ})

挹所適。(適^ゆく所を挹^{えら}ぶんだ)

翻然斂翼、(翼を翻^{ひら}し、翼を斂^めめ)

婉将集兮、(うつくしくも集まるぞよ、兮)

忽何所見、(たちまちどこかに見えなくなり)

矯然而復撃。(勢いよく翼をまた撃つぞよ)

独終日於澗谷之間兮、(一日中、谷の間にいるぞよ、兮)

啄蒼苔而履白石。(苔を啄み、白い石の上にいるんだ)

鶴归来來兮、(鶴が帰ってきたぞよ、兮)

東山之陰。(東山の陰に)

其下有人兮、(その下に人がいるぞよ、兮)

黄冠草履、(黄色い冠、草の履き物)

葛衣而鼓琴。(葛の衣で、琴を弾くぞよ)

躬耕而食兮、(食べるものは自分で耕しているぞよ、兮)

其余以汝飽。(そして余ったもので、鶴の腹を満たすぞよ)

归来归来來兮、(帰ってきたぞよ、帰ってきたぞよ、兮)

西山不可以久留。(西山にずっと留まっているんだぞ)

(後に、蘇軾の弟子がこの文章について、「張天驥はふつうの村人でしかないのに、古の隠者の仲間であるかのように讃えたのは、褒めすぎではありませんか」と尋ねた。

蘇軾は「話をちよいと盛ったまでだ」(装舗席耳)と答えたという。蘇軾の詩文は、事実をありのままに記述するよりは、言いたいことをより印象的に伝えるために、舗席を装うところがあるのは、この文章に限らずここまでに訳した諸作品からも知れるとこ

ろであろう)

■送参寥師

参寥さんりょうが徐州じょを離れて南に帰るのを見送った詩。

上人は「苦」「空」を学び得て、

世の人が有する百の思念などは灰のように冷え、

目の前で剣を振り下げられても動じないし、

焦げた稲からは穎のぎが出ないように雑念なども生じないはずだ。

それなのに、どういうわけで、

我等のような者と詩文の華美を争ったりするのだろう。

上人の新しい詩は玉の雪のようにきらびやかで、

語はいずれも鋭い警句ばかりである。

唐の韓愈かん いくは、ある上人の草書を評して、

万事を斥けることなく、憂愁を抱くときには書も平静ではなく、筆の騁はすところに全てを寓まかせているといった。

しかしながら、

仏門の人は、己の内を視るなら、井戸の底の水のよう、淡く静まり返って、猛々しく波立つことはないという。

よくよく考えてみると、そのどちらでもないのだろう。

真に巧みであるものは、

瞬時に生じて瞬時に消えたりするようなものではない。

だから、「空」にしてかつ「静」であっても、

絶妙な詩語が生まれ出てくるのだ。

「空」であるなら「万境」を納め、「静」であるなら「群動」を了^{おえ}させることができる。

俗世を閱して人間世界の中で走っていても、

仏法の高い雲の嶺の上に臥しているのと同じである。

鹹^{から}いも酸^{っぱ}いも衆人の好みの中に雑じってこそ、

詩語の永遠の「至味」が含まれる。

つまり、詩と仏法とは妨げ合うものではないのだ。

このようなことが当たっているのかどうか、

さらに教えを請うものである。

（この訳はそこそこ読めるように日本語にしてみたまでで、仏教用語を多用して展開している詩論が、果たして何をいっているのか、参寥でも蘇軾でもない私にはさっぱりわからない）

■雲竜山観焼得雲字

張天驥^{ちやうてん き}の隠棲^{くもりゆうさん}する雲竜山で「焼」^{しょう}（火を使った祭り）を観て、何人かで詩を詠んだ。蘇軾^{そし}には韻として「雲」の字が当たった。

火の神の^{ていじょ}丁女は実は水の神でもある。

冬、山に霜が降りて草が枯れる時季に、火を焚いて丁女を祀る。

麻を束ね、石を敲いて火を付ければ、

たちまち、国家の急を告げる^{のろし}烽火のように^{ほうぼう}燿燿と燃え立ち、

決戦場を覆う戦雲のように^{もうもう}氤氲と煙が横たわる。

火に追われて、蛇は木に上り、^{みづち}蛟は雲へと飛び出し、

煙に追われて、雁は驚いて^お墮ち、鹿は狂ったように走りまわり、

山の妖しいもの、木や石の^{けしん}化身はあわてて隠れ、

竹は破裂してぱちぱちと音を立て、桂は燃えてよい香りを翻し、

ふと悲しくなるのは、秋の蟹が赤く焼かれたかのよう、

ふと心地よくなるのは、夏の蚊が全部退治されたかのよう、

^{たいまつ}松明を付けた牛、^{のろし}烽火をまとった象が敵陣に駆け込むばかりの勢いで、

谷のほとり、山の陰にも火が迫り、

強い風に紅い衣を翻すようにして、溪谷の絶壁へと至る。

私はもともと山中の人で、山のことは見慣れているが、

このような火の祭りは聞いたことがない。

たまたま二三の友とともに、^{ちやういんくん}張隠君を訪ねてこれを見ることになった。

君の家に何ががあるのかというと、季節のままに移り変わるものだけ。

酒を把って燃え終わった痕を眺めやると、庭にはらはらと灰が落ちてくる。

かくて悪いものをすっかり焼き尽くしたので、

来年は農事が盛んであるのを見ることになるだろう。

冬の厳しい霜は雑草を倒し、春の細やかな雨は発芽を促すというが、
一本の炬たいまつの力で一切の悪いものを焼き尽くしてしまうとは初めて知った。

■祈雪霧猪泉出城馬上作贈舒堯文

この年は百日余りにわたって雨がなく、蘇軾だいかんざんは大観山おほくせんの霧猪泉で雪を祈った。その道すがら、馬上でこの詩を詠んで舒煥じょかん（字は堯文ぎょうぶん）（本章 270 ページなどに登場）に贈った。

私はかつて三年の間、呉越こえつ地方を走りまわり、
遍せんちようく千重の山を踏んだ。

朝には白雲の湧くのに従って出発し、

暮れには埒らちに向かう鴉とともに還った。

木を得た猿のように身を翻し、誰よりも早く歩み、岩もよじ登った。

それがいまでは、

公文書に埋もれ、罪人を罰する鞭の傍らで老いる身となってしまった。

それでも今回ばかりは、

足腰が固まってしまったのをいささかほぐすことができた。

町から遠く西南に進んで行けば、

山々は半円形の玉のように環めぐり、

山の下さくら はしほみの農民の家には、桑、柘、榛、菅が生い茂っている。

年の暮れても、風も日ざしも暖かく、人と牛が呑気に向かいあっている。

しかし、土を覆うまでの雪が降ってくれないので、

これでは麦の苗の成長が期待できない。

君よ、どうか豪快な詩句を発して、

造物者を思わず笑わせ、

雪を降らせまいとしている頑なその心を破ってくれたまえ。

(ある人がこの詩を批判して、天に雪を祈るのであれば誠心誠意であるべきなのに、
 こういうときにも諧謔を交えてしまうのは蘇軾の悪い癖であると記している。そのよ
 うなところで、蘇軾を好むか嫌うかが分かれるのだろう)

(この詩を舒煥に送ると、早速、詩が返ってきたので、蘇軾はそれに次韻して返した。
 その詩は難解な語句並べただけの面白味のないものであることから、ある人は、そも
 そも次韻などという不自然なことをするからこういう駄作を数多く作ってしまうのだ
 と酷評している。確かに蘇軾にそのような一面があることは否定できないだろう)

■石炭

石炭を主題にした詩。次のような短い序文が付いている。

彭城県ほうじょうにはもともと石炭げんぼうがなかった。元豊元年十二月、徐州の西南の白土鎮はくどちんの
 北で初めて発見された。それで鉄を鍛えて刀剣を作ってみたところ、他の石炭より

も鋭利なものが作れた。

去年の冬は雪が降り続き、

道を行く人の姿がぱったりと絶え、

町中の民は、すねの骨を裂くばかりの風に、布団にくるまり、

半束ほど薪に火を付けようとしたけれど、湿ってしまって燃え立たず、

どこを探しても乾いた薪と取り換えることができなかった。

今年は、思いがけず、山の中に宝ものを見つけることがでた。

黒い石がごろごろとして、一万の車でも運び出せないほどにある。

黒い油のような液を流し、怪しげな風を吹き出していたのに、

これまで人に知られることがなかった。

その根元が一度発見されると、際限なく存在し、

千人が見に行って、万人が飲び舞った。

石炭を泥に投げ入れると水をはじいてますます黒光りし、

石炭を燃やすと勢いよく金色の焰を立てる。

南の山で炭焼きのために木が切り出されることはもうなくなるだろう、

北の山で鉄を鍛えるのに悪い石炭に苦勞させられることももうなくなるだろう。

新たに得た石炭で、かの「百鍊剛刀」^{ひゃくれんごうとう}のような名刀を鑄て、

巨大な鯨を叩き切って見せよう。

(去年の冬に乾いた薪がなかったのは、洪水の後だったからなのだろう)

■人日獵城南会者十人以身輕一鳥過槍急万人呼為韻賦得鳥字

げんぽう

元豊2（1079）年、蘇軾44歳。

詩題にある「人日」^{じんじつ}とは1月7日のこと。その日に、10人が集まって町の南で獵をした。「身輕一鳥過、槍急万人呼」の句をばらばらにして1人の1字ずつ配って韻として詩を作った。蘇軾には「鳥」の字が当たった。

町の子供等は知事殿を笑いものにしている、

いつだって、何やら憂いてさえない顔をしているからだ。

そんな知事殿の頭を白い布で包み、

金の鞍を置いた馬にまたがらせたのは誰なのか。

浅い春の風が湿った雪を吹き上げたので、

知事殿は、こんな朝早くに手が凍えてしまうと、おびえている。

それでも、知事殿が音高く二本の鏑矢^{かひらや}を放ったので、

それを合図に、人々は虫のような小さな獲物も逃すまいと追いかけてまわす。

知事殿は弓を大空に向かって引き、

一羽^{おひとり}の鴻が渡って行くのを目で追いつつ、長く嘯く^{うそぶ}。

知事殿は詩を案じ、手綱を取るのも忘れ、黙って頭を振っている。

知事殿は粗食を好み、芹や蓼を味噌で煮たものを食べる。

こんな知事殿であるから、

顔に六本の矢を受けても、両眼を怒らせて立ち続けた昔の將軍には似ても似つかない。

それでも、若いときには武將になろうと考えたりしたらしい。

獲^とった兎が焼き上がるのを待つことなく、馬上で銀の酒瓶を飲み倒してみせ、若いころの大きな志をいまも持ち続けて、百戦するくらいの意気込みがあるのだと示そうとするのだが、

実際には百の憂いのまわりをよたよた巡っているのである。

考えてみれば、英雄といわれるような人でも、

むなしく老いて死んでしまった例も^{ためし}少なくはない。

青春は一つの夢、

余すところの歳月は飛ぶ鳥のように過ぎ去ってしまうのだ。

■三槐堂銘

都にいる王^{おうきょう}鞏（字は定^{ていこく}国）（本章 195 ページなど）の家の庭には三本の^{えんじゅ}槐
が高く聳え、その脇に「三槐堂」がある。王鞏に頼まれてその堂の銘を
書いた。中国の古代、周^{しゅう}の時代に、3 本の^{えんじゅ}槐^{さんこう}の前に三公（国の最高レ
ベルの三つの官職）の座席を設けたことから、三槐は三公の異称となっ
た。

（この文章の最初で、「仁^{じんじゃ}者には必ず立派な後継者がいる」と、それがあたかも必然法

則であるかのように記しているのは、納得しがたいのだが、蘇軾は別の文章でも同じ趣旨のことを書いていた（本章76ページ）。ここでは、それが必然法則である所以が説き明かされる）

天は必ずかくあるべきようにするものなのだろうか。実際には、賢者は必ずしも貴くはならないし、仁者^{じんじや}は必ずしも長寿ではない。では、天は必ずしもあるべきようにしないのだろう。しかしながら、仁者には必ず立派な後継者がいる。この二つの事実の関係はどのようになっているのだろうか。

私は申包胥^{しんほうしよ}がこのように言ったと聞いている。

「人は天の定めを破ることがあり、天は人の定めを破ることがある」

申包胥はこのように宣言して、起死回生の一発勝負にかけた。

世間の天を論じる者は、天の定めを待つことなしに、自分の望む通りのものを天に求めるために、天の為すところは茫茫^{ぼうぼう}としてわからないとぼやく。その論に従うならば、善者は怠り、悪者は肆^しに振る舞ってしまう。

大盗賊^{どうせき}の盗跖は長寿を全し、孔子^{こうし}やその弟子の顔回^{がんかい}は不遇であった。それは、天がいまだ定める前に起こったことなのである。松や柏が山林に生じ、その始めのころは雑草に苦しめられ、動物の害に遭いもする。しかし、その終わりに至ると、四季に栄え、千年も変わらない姿になる。それは天の定めによるのだ。善悪の報いが子孫に至って現われるのは、同じように、天の定めには久しい時間がかかるからである。

自分で見るところ、伝え聞くところから考えるに、以上のことはきっとその通りであるのだ。

国家がまさに興ろうとするときには、世に徳のある大臣が必ず現れ、厚く徳を施すのだが、それによってその人自身が報われるとは限らない。しかし、その子孫は後の太平の主とともに平和を守って、天下の福を享受する。

かつて兵部侍郎晋国公の王祐は五代十国時代の漢朝、周朝のころから活躍し、宋の太祖皇帝、太宗皇帝に仕え、文武、忠孝に秀で、大臣となることを望まれた。しかし、公が直言の士であることが時代に遇わなかったために、ついにそれは叶わなかった。そこで、公は手づから三本の槐を庭に植え、「吾が子孫に必ず三公となる者が出るであろう」と言った。実際に、その子の魏国文正公の王旦は眞宗皇帝の景德、祥符年間に宰相となり、朝廷は清明、天下は何事もなく安らかに治まった。王旦が多くの禄を受け名を輝かすこと十八年に及んだ。

もしも物を人に預けて、翌日にそれを返してもらったなら、新たに得るものはない。王祐が身に徳を修めたのは、天に報われるところのものを預け、数十年後に返してもらったということなのであろう。いわば債券のやりとりのようなものだともいえる。

このようなことから、私は天の果が必ずあると知ったのである。

私は王旦の時代には間に合わなかったが、その子の懿敏公の王素を見ることができた。王素は皇帝を諫める役目を負って仁宗皇帝に仕え、朝廷に出入りすること三十年余り、しかし、その地位はその徳に十分に見合うものではなかった。とすると、天は王氏を再び興そうとしているのではないだろうか。事実、その子孫には

実に大勢の賢者がいるのである。

世には王祐り せい いんを唐代の李棲筠と比較する者がいる。その雄才、直気は真にあい譲らないものがある。李棲筠り きち ほの子には李吉甫り とく ふうが、孫には李徳裕り とく ふうがいて、功名、富貴は現代の王氏ちゅうじょ じん こうにはほぼ等しい。ただし、忠恕、仁厚の点では、李吉甫、李徳裕の父子は、王旦、王素の父子には及ばない。このことを見れば、王氏の福はまだ十分には稔りを得ていないのである。

王素おう きょうの子の王鞏は私と交流があり、徳を好み、立派な文章を書く。きっと家を栄えさせるであろう。それでこの文章を作ったのである。

(以下、韻文の銘が続くが、王氏の徳を称揚するだけのものなので訳は省く。この文章全体も、名門の息子に頼まれて、ヨイショをただけのつまらない文章のように見えてしまうのだが、ここにも当時の政治状況、蘇軾の置かれた立場が反映している。王鞏が家を栄えさせるであろうと、将来に期待を託しているのは、現在はそうなる条件が整っていないからだ。王鞏に実力がないからではない。当時の官界で出世の坂道を勢いよく駆け上っているのは、改革の時流に乗ってにわかに台頭した連中だけとなっていた。蘇軾はそうした連中を「新進」と表現している。「新進気鋭」といえばよい意味になるが、暗に「成り上がり者」という意味合いで蘇軾はこの語を使っている。先にみた王禹偁おう う しやう（本章 268 ページ）やここに見た王旦、あるいは欧陽脩おう いうしゅうといった先人が築いてきた宋代士大夫の伝統を全く踏まえない「新進」が（王安石おう あん せきの去った後の）朝廷の枢要を占めていることを蘇軾は憂い、いつか王鞏が家を栄えさせるような本来の姿に戻ることへの期待を籠めてこの文章を書いたのである。なお、蘇軾はこれと同

じころに、^{はんちゆうえん}范仲淹の子の^{はんじゆんすい}范純粹のために文章を書いている。范純粹は徐州の管轄内にある^{とう}滕県の知事で、異動に伴って滕県を去るに当たって、蘇軾は送別の意を籠めて、范純粹が在任中に滕県の官舎を改修したことに賛意を示す文章を書いた。当時、節約が尊ばれ、官舎の改修を批判する声もあったのに対して、蘇軾はその意義を説いている。しかし、蘇軾の展開する論理が十分には理解できないので訳せなかった。この時期に蘇軾は宋代士大夫の伝統を重視する文章を連続して書いたのである)

■祭文与可文

蘇軾の大切な親戚であり先輩であり親友である文同（字は与可）（本章48ページなど）が1月20日、^{ちん}陳州で亡くなった。62歳だった。蘇軾は2月5日にこの祭文を作った。冒頭にこの時点での正式な肩書が記されている。

^{げん ぽう}ここに元豊二年二月五日、従弟に当たる朝奉郎尚書祠部員外郎直史館權知
^{ちやうほうろうしやうしよ し ぶ いんがいろうちやく し かんごん ち}
^{じよしやうぐんしやう じ き と い}徐州軍州事騎都尉の蘇軾は、^{こしやうぶん ふく ん}謹んで清らかな酒を捧げ、湖州文府君の文同の
靈を祭る。

その祭文に曰く、

ああ、哀しいかな。文君はまた酒を飲むことができるのだろうか。文君はまた詩を賦して自ら楽しむことができるのだろうか。文君はまた琴を弾いて自らくつろぐことができるのだろうか。

ああ、哀しいかな。私はなお忍びつつこのように言い、気が塞ぎ、胸が填まって
嗚咽する。涙が下って止まらず、衣が濡れる。

涙を収めて自問する。人は誰のために慟哭するのか。道が行われないうち、私は
哀しまずにはいられない。ともに悲しんでくれる友がいけないわけではない。しかし、
激しくもなく鈍くもなく、人に招かれて靡くでもなく、人に排撃されて去くでもなく、親しく
しようとしてもできるものでもなく、疎んじようとしてもできるものでもない、そういう人は
ただ文君だけだった。

ああ、哀しいかな。徳に則り義を乗るに当たって、文君のように和にして正だった
者が他にいたろうか。民を養い風俗を厚くするに当たって、文君のように寛にし
て明だった者が他にいたろうか。詩を詠み賦を作るに当たって、文君のように婉
にして清だった者が他にいたろうか。世に称賛されても辱められても、得ようが
喪おうが、文君のように安にして軽だった者が他にいたろうか。

ああ、哀しいかな。文君の死を聞いてから三日間、夜は眠らずにずっと座ってい
て、ふと夢に文君と一緒にいると見て、驚いて目覚め、夜具が涙でいっぱいにな
った。

念へば生ある者は必ずことごとく帰り行き、百年生きても必ず至るのである。ただ文
だけが不朽で、その中で人は不死でいられるという。いくら富貴でもいくら長寿で
も不朽にして不死ということはない。

しかし、私はかつて文君からこのように聞いた。「この身は浮き雲のようだ。去くこ
ともなく来ることもなく、亡びることもなく存することもない」。ならば、不朽だとか不死だ

とかはいうに足りないことなのだ。

ああ、哀しいかな。

(文同の人となりをいうのに、蘇軾は、和、正、寛、明、婉、清、安、輕の8文字を並べている。これらの先にどのような人物像が見えてくるだろうか)

■種松得徠字

多数の松の苗を植え、人々と詩を詠んだ。蘇軾には「徠」の字が当たった。苗の4割は懷古堂に、6割は石經院に植えたとき、蘇軾自身の注記がある。詩中にある「山の僧」は石經院の主なのだろう。

春風が榆の林を吹き、榆の莢が乱れ飛んで堆く積もった。

そこにひと雨通り過ぎた後に、

戢戢と千本、万本の松の苗を植える。

青い松は植えてもなかなか成長しにくい。

百株から一本でも立派な幹になれば御の字である。

一本の幹でも十分で、千畝の広さの槐の林よりも堂々とした存在感がある。

これらの苗はいわゆる魯の地の「徠松」で、

穀物一斗で一本の苗を買った。

魯の人たちはこの松の価値を知らないので、

惜しみなく竈で燃やして灰にしてしまう。

松の苗がどのようにしてここに運ばれたのかというと、
 縄で束ねてぐるぐるに縛って、車にぎゅう詰めにしたのだった。
 それを見て、悲しく思って、縛りをほどき、清らかな水で埃を洗い流した。
 しかし、枝は傷み葉は縮れ、生気がなかなかもどってこない。
 山の僧は老いて子がなく、この稚い^{おきな}松を愛お^{いと}しんで赤ん坊のように大切にする。
 これらの松が、竜が走るような姿となって、大きな清らかな蔭を作り、
 その根が山の岩をも裂き、その太い幹が雷をも斥けるほどになるには、
 どれだけ待たなければならぬのだろうか。

私はこの地にいるのも残り百日の旅人、
 それでいながら千年を生きようとする松を養うのである。
 千年の松の根元に、不老の靈藥となる茯苓^{ぶくりょう}が生じるといって、いまは影も形もない。

茯苓を待てない私の髪は日々に抜け落ちて行く。

古今は一俯仰の間、

この詩を作ってわが哀しみをここに託す。

(徐州での任期を終えるまであと 100 日ほどに迫っていた)

■以双刀遺子由子由有詩次其韻

ふたふりの刀を弟に贈ったところ、それについて弟が詩を詠んで返してきたので、次韻して答えた。

刀を納める匣^{はこ}はなかったけれど、

古代の「竜雀環^{リョウジャクカン}」のような宝刀だと僕は見た。

これまでに蛟蛇^{ウワバミ}も堅い岩も斬ったことがないとしても、

こそ泥どもがこれを見たら、ぞっと首をすくめるに違いない。

僕の刀がどれほどのものであろうかと君に問いはしないが、

心の内に愧ずべきものがある人間は肝を冷やすであろう。

そのような刀であるから、虎の皮に包んで僕は秘蔵していた。

この刀を見るとき、心は古井戸の水のようで、一切波立つことがない。

この刀が用いられずに置かれていることを、刀のために残念がることはないだろう。

用いることのできる者を選ぶのが難しいのを、僕は憂^おいでいたのだ。

これを佩^{おび}るのがしかるべき人でなければ、刀はきっと長く嘆息するだろう。

僕自身はといえば、

老いて衆人に軽んじられ、しばしば思いもよらない目に遭わされている。

昔、王祥^{おうしょう}は、庭の蘭が香しく成長するように我が子がきっと大きな人間になると知って、特に選んで刀を与える相手とした。

僕も同じようにして君に贈ることにした。

これでちまちま肉を切って、年に六回も七回も研ぎ直すようなことはしないでほしい。

じっと秘め置いて、いざというときに宝刀たる所以を示してほしいのだ。

この詩をもって刀の背に刻む銘とし、後に知者が見るのを待とうと思う。

■遊桓山会者十人以春水満四沢夏雲多奇峰為韻得沢字

10 人の者と近くの桓山^{かんざん}に遊び、「春水満四沢、夏雲多奇峰」の句から 1 字ずつを分けて韻として用いて 10 人が詩を作った。蘇軾には「沢」の字が当たった。

東の郊外に春を尋ねようとしたものの、

まだ鶯を見なければ咲いた花もない。

春風はいまはまだ流れる水の中にあるのだろう。

鳥が春の水を拍拍^{ぱたぱた}と打つのに誘われて、

篙^{さお}半分ほどの深さの水に舟を浮かべる。

ゆらゆらと流れに任せ、桓山^{かんざん}の下に纜^{ともづな}を繋ぐ。

詩を長く吟じつつ軽やかに山を登り、

古い墓所と思われるところで、

泉下の人を弔おうと琴を奏でると、

かそけき音が磔磔^{たたく}と響く。

昔の人を偲ぶものは何も遺されておらず、

人間世界は真実の永遠の住まいではないと悟る。

暮れ方^{ひゃく ほう}に百歩洪に回り、おのおの岩の上に座る。

ここに皆の顔ぶれを見て、

私はこの仲間にふさわしい人間ではないの恥ずかしく思う。

月が現れ、流れに臨んで^{ふえ}簫を吹く二人を照らし出す。

このときの歓びこそは不朽のもの。

首を回らせば遠く^{こうべ}歳月を隔てて、斜川^{しゃせん}での遊びが想像され、

この詩を陶淵明^{とうえんめい}に寄せる。

（この詩の終わりにある斜川での遊びとは、陶淵明が 700 年ほど前に郷里の川で遊んだことをいう。陶淵明がその日の遊びを詠んだ詩は、淡々と叙述する中に深い味わいを湛え、叙景詩の新たな世界を拓いた名作とされる。蘇軾のこの詩もそれに近いものがあり、後に、陶淵明の詩境に迫るその先駆けとなる作品であるといえるだろう）

■戴道士得四字代作

上の詩の続き。同行した戴道士^{たい}には「四」の字が分け与えられたのが、詩が得意ではなかったのだろう、蘇軾が代作した。

某^{それがれ}は子ども^{こうなん}のころは江南のあたりにおったのだが、

世俗を脱する道士の跡を慕い、

たまたま白雲に従って郷里を流れて出て、

いまでは彭城^{ほうじょう}の町で薬草を売っておる。

髪には白いものが多くなり、衣服は塵や土にまみれているが、
 三尺の琴を携え、その音の中に山水このろの意を籠めて過ごしておる。
 太古の七絃の琴はすでに棄てられ、
 四絃こきんの胡琴がいまではさかんに用いられている。
 ところが、徐州知事は独り古を慕い、
 この誰のものとも知らぬ墓所で某が弾く三絃の琴の音に、
 古の賢人を想って涙を流しておられる。
 帰り来て、琴を匣はこの内に納めて独り思うのは、
 某が死んでもせいぜい石壁にその名が掲げられるくらいだが、
 某の琴の音を真に聴き取ってくれた者がいたということは、
 遠く千年の後にまでも残るようなことであったのかもしれない。

(この詩から、琴を弾いたのは戴道士であったことが知れ、蘇軾の詩のお蔭ではぼ千年を経て、われわれは戴道士を偲ぶことができる。先の田員外でんいんがいも賀秀才がしゅうさいも雲竜山人うんりゅうさんじんも皆同様に、蘇軾の詩文がなければ、歴史にその名が伝わることはあり得なかった)

■月夜与客飲酒杏花下

月夜あんずに杏の花の下で酒を飲んだときの詩。面倒な典拠もない平明な詩。

残りの春を散らすようにして、簾へと杏の花が飛びくる。
 月の明りも、風雅に遊ぶ人々を尋ねようと、簾から入ってきた。

我等は衣をたくし上げ、月の光のもとへと歩み出す。

明るい光が水草をひたすように流れる中で、花の影を踏む。

酒を置くと清らかな香りが漂い、枝を曳いて花を雪のように散らせるまでもない。

山辺の町の酒は薄くて飲むに耐えないものだが、

諸君等に勧めるのは、

杯の中の月を吸うようにして飲んでみたまえ。

憂うのは、

洞簫^{ふえ}の音が終わり、月が落ち、酒杯が空になること、

そして、明日の朝にもしも強く風が吹いたなら、

緑の葉の中に見るのは、わずかに残る紅だけになってしまうこと。

■答郡中同僚賀雨

役所の同僚と「雨を賀す」ということについて話し、蘇軾は自分の考えをこの詩で示した。蘇軾は天に祈ることをあまり重視しておらず、(原詩はさほど明示的ではないけれど) 人が何らかの対策を講じるべきだと言っているようだ。

水害あるいは旱害^{かんがい}が十年にもなり、

飢えと疫病が全土に遍く広がり、

困窮してますます悪い方に向かいつつあるときに、

私は、毎年毎年、よい天候を祈り続けている。

それは自分のために天の恵みを求めるものではないのだが、

何度も天に請うのは、民に責任のある者としては、^{いいこと}古から恥ずべきこととされ、

私が祈るしかできない無策であるのは鬼神もわかっているであろう。

私は老いて腰も背も病んでしまい、人に向かってろくにお辞儀もできないのだが、

さすがに天は^{こころ}祈る意を無視はしないで、

乾いた空に雲が重なり合い、石段が微かな潤いを帯び、

^{しとしと}蕭蕭と雨が降り、止んではまた降り、雨音は真夜中に及び、

明け方に役人が集まってきて、その履き物とは見ると泥にまみれている。

私は人々ともに高樓に上ると、

麦畑に風が緑の浪を立てるかのように見える。

人々は雨を賀すのだが、

私は、諸君等が立派な賢策を論じているのに対して恥ずかしく思う。

豊作の年には五日に一度風が吹き、十日に一度雨が降るという。

天地はもとより常に完全に整っているわけではないから、

いくら祈ったところで、実は何の足しにもならないのではないだろうか。

優れた長官が治める土地には蝗も虎も入らないというけれど、

そもそも蝗も虎もいなければよいだけの話だ。

まして、^{がちょう}白い鵞鳥を殺して雨を祈るなど無意味なことと、

そうした下策は取ってはならないのである。

■留別叔通元弼坦夫

3 月、朝廷から湖州知事^こに任じる辞令が下り、蘇軾^{じょ}は徐州を去ることになった。田叔通^{でんしゆくつう}、寇昌朝^{こうしょうちよう}（字は元弼^{げんひつ}）、石夷庚^{せき い こう}（字は坦夫^{たん ふ}）の3人に見送られてこの詩を詠んだ。3 人は徐州在任中ずっと蘇軾の仕事を支えてきた人々だった。

でん
田君は、昔、同僚となったことがあり、

私に向かっていつも敬意を払ってくれた。

徐州にきてからはいろいろ間違っことをしても、

その都度、ますますよく私のためにしてくれた。

こう
寇君は、私と同じ蜀^{しよく}の人で、

孝悌の道をもって近隣の人々を感化し、

老いに至っても学問に努めている。

せき
石君は我が眉州^びの後輩で、

強い風の中でも真っ直ぐに立ってしようとする草に似ている。

官職に就いてからは、釜に塵が生じ、父母に炊事をしてもらわなければならない
貧窮に甘んじている。

私は窮して旧くからの交わりを絶ち、世過ぎの計が拙いので、

私のまわりに集まるのは枯れ枝のような人々ばかりである。

その中で三君は最も厚く^{よしぬ}誼を保ち、
 互いに衣服を融通し合うような仲であることを続けてくれた。
 三君は、私が徐州にきたときには、淮水^{わいすい}の北で迎えてくれ、
 三君は、私が徐州を離れるときには、睢陽^{きよう}の道^{よう}を送ってくれる。
 願わくは、金石^{きんせき}のような堅い契りを保ち、
 白髪に至るまで凜凜と友情を貫きたいと思う。

■江神子

同じく徐州を去ったときの詞。

天涯流落思無窮。^{はて}（天の涯に流れてきて窮まることのない思い）
 既相逢。（逢ったばかりで）
 却忽忽。（たちまちの別れ）
 携手佳人、（妓女と手を携え）
 和淚折殘紅。（涙とともに折り取る名残の紅い花）
 為問東風余幾許、（花のために問う、春風が吹いているのはあとどれくらい）
 春縱在、（たとえ春がまたいてくれても）
 與誰同。（私は誰と一緒にいればよいのでしょうか）

隋堤三月水溶溶。（ゆらゆら揺れる三月の運河の水）

背歸鴻。(北に歸る雁に背を向け)

去呉中。(南の国に行く私)

回首彭城、(振り返れば彭城^{ほうじょう}の町)

清泗与淮通。(泗水^{しすい}と淮水^{わいすい}が一つになってそちらに流れて行きます)

欲寄相思千点淚、(そこに思いを託して寄せる千点の涙)

流不到、(流れて彭城に行ってくれるでしょうか)

楚江東。(つれなくも川は東に行ってしまうのでしょうか)

■罷徐州往南京馬上走筆寄子由五首

徐州を発った蘇軾^{なんけいおうてん ふ}は、まず弟のいる南京応天府を目指した。その馬上で作った詩。

其の一

徐州の人々よ、そんなに引っ張らないでくれたまえ。

歌も笛も、そんなに悲しい響きを立てないでくれたまえ。

僕の生は寄せるがごときもの、別れはただこれだけではない。

別離は随所にあり、愛を結ぶからこそ悲しみ悩みがあるのだ。

僕はもとより皆に恩を施したことがない。

いったい誰のために皆は泣くのか。

子供ではないのだから、

鞭や鞍が裂けるほどに引っ張るのはやめてくれたまえ。

ほら、あそこの道ばたに、二人、石に刻まれた人が並んでいる、

あの石人^{せきじん}は知事が去るのを何度となく見てきたはずだ。

いまこのありさまが知れたなら、

石人は手を打って大笑いし、冠を結ぶ石の紐も切れてしまうだろう。

（この詩で、例の「吾生如寄耳」（吾が生は寄せるが如きのみ）を用いている。地方官としての移動を繰り返して、「寄せる」ということにますます実感が籠るようになったのだろう。徐州の人々が蘇軾との別れを惜しんだと、ユーモラスかつやや大げさに詠んでいるのだが、弟に向かって（実態とかけはなれた）自慢をしたわけではないのだろう。蘇軾は洪水との闘いで顕著な功績があっただけでなく、その他にも重要な施策を朝廷に具申して実施している。分け隔てなく多くの人と交わる大らかな人柄と世に抜きん出た文才は非常に魅力的で、真実別れを悲しんだ人々が大勢いたのだろう）

其の二

どこから土地の父老たちはやってきたのか、

たくさんの赤い花束を抱え、僕の馬の前で盃を洗って捧げ持ち、

僕の長寿を祈りたいと言う。

「かの年に知事殿がおられませなんだら、

我等はみな魚の餌になっておりました」

僕は鞭を挙げて父老に頭を下る。

「諸君等はこの知事を困らせないでくれたまえ。

この知事はひどく外聞の悪い困った人間で、

行く先々で災害、凶年を招いてきたのだ。

たとえ、水害がきたのは知事が怠けていたのが原因ではないとしても、

水害が去ったのは明らかに知事の功績ではないのだ」

（「行く先々で災害、凶年を招いてきた」というのは、杭州時代には飢饉と蝗害、密州時代には日照りと蝗害、盜賊の難に見舞われたことをいうのだろう）

其の三

西から流れてくるのは古汴河、

南京なんけいに向かう僕を迎えてくれる。

古汴河は東に流れて淮水わいすい、泗水しすいに入る。

僕が徐州に向かったときに、

古汴河は僕を見送ってくれた。

しばらく僕は古汴河と別れていたけれど、

またここで見ることになった。

古汴河はずっとここに余情を湛えていたかのようだ。

春の雨は古汴河をさざ波でいっぱいにし、

一夜を経て彭城へと至るであろう。

古汴河の水は僕の黄樓こうろうの下を通過し、

あの朱い欄干と高い薨を水の光で照らすことだろう。

ひゃくほこう
そして百歩洪へと至り、

かの月の夜に川音を聞いたあの人がいないのを悲しむのである。

其の四

なんけい よぎ 前年、南京を過ったときには、ゆすらうめ 麦が稔り、桜桃の実が熟していた。

いまかつて遊んだところにきてみると、

桜桃の実も麦の穂もまだ黄緑色である。

三年の歳月も遠い昔のよう、

人間世界にはどれほどの変化があっただろうか。

しがない下級官吏のまま老いてしまった人もいれば、

活躍の場もないはずに筋肉がふやけしまった将軍もいるだろう。

僕は羽根を翻すように三度任地替えとなり、

迎えられたり送られたり、車を転じるようなせわしなさだ。

郷里に帰ると決めるのは何時になるのか。

でも、ここに住もうと決めた場所は田舎にあるのだ。

其の五

ぼく 僕がどの地をトして行こうとしているのかというと、

せきぶつさん
石仏山の南の路、その下に川があるだろう、

そこらあたりに千畦^{けい}の土地を得て、
食べるための稲と酒を醸^{かも}すための稲を植えるつもりなのだ。
竜が棲んでいるといわれてきた山の泉に湧く水は、
流れ下って豊饒の土地を育み、
かつては一畝^ぼが一金の価値を生んだのだが、
近ごろでは破綻して逃亡した農家が多いと聞く。
僕は官服を棄て去り、剣を売って牛と農具を買い、
廃屋に丈高く草が生えてしまっているその山の地に行くのだ。
僕はそのように思っていて、ひとつ恐れているのは、
帰ろう帰ろうとずっと願っていないながら、
墓所に永遠に祀られるときになってようやくそれを果たす身になってしまうことだ。

■靈壁張氏園亭記

蘇軾^{なんけいおうてん ふ}は南京応天府^{そ てつ ちょうほうへい}に行き、蘇轍^{おうてき}や張方平^{おういつ}に会い、半月ほど滞在し、3月末に南京を発った。そのときに王適^{じょ}、王適の兄弟が同行した。王適は蘇轍の娘の婿で、2人は先に徐州在任中に蘇軾に詩文を教わりきたことがあり（本章 332 ページの「月夜与客飲酒杏花下」の詩で洞簫^{どうしょう}を吹いたのは王兄弟だった）、今回は見聞を広める目的で、恐らくは蘇轍が勧めたのだろう、2人は半年ほど蘇軾の近くで過ごすことになる。そのことで後に大きな役割を担う。

南京からは運河を使った船旅で、^{れいへきちん}靈壁鎮で^{ちようせき}張碩に会い、この文章を書いた。

都から東に道をとると、水路を選べば濁流に浮かび、陸路を選べば土埃を浴びながら見渡す限りの田の中を行くことになって、どちらにしても行く者をうんざりさせる。およそ八百里で、^{れいへき}靈壁の^{ちよう}張氏の^{べんが}園庭が^む汴河の北側にあるのを見えるに及んで、初めてほっとした気分になる。

外に向かってたくさんの竹がすらりと飛び出し、背の高い木々がこんもりと繁っている。中には汴河の水を引き込んだ池があり、そのまわりに山から取ってきた奇岩が、^{いらいざり}険しい丘のように積まれ、水辺には蒲や葦や蓮があって江湖の景観を作り、^{あおざり}桐、檜、柏が並んで山林の気配を生み、珍しい花や美しい草は都会的な雰囲気を出し、華やかな大きな建物は^{ごしよく}呉蜀の巧みの技を見せている。

この園庭の奥深さは身を隠すに十分で、その豊かさは身を養うのに十分である。収穫される実や野菜は近隣の人々をも満足させ、魚や筍を茹でれば四方からの賓客をもてなすことができる。

私は^{ほうじょう}彭城(徐州)から^{ごこう}呉興(湖州)に移るに当たって、^{そう}宋(南京応天府)から舟に乗り、三泊してその園庭のもとに至った。^{かご}興に乗ってその門を叩き、^{せき}張氏の子の碩に会うと、碩は私に文を求めた。

張氏は代々世に^{あらわ}顕れ、その^{でんちほうくん}伯父の^{つうはんふくん}殿中君とその父の通判府君が初めて靈壁に住まいを構え、この園庭を作り、^{らんこうてい}蘭皋亭を建てて親を養った。その後、朝廷に出て

仕えて、その当時に名声をもって聞こえ、その余力をもって、日に日に園庭を豊かにして今に五十余年に及ぶ。木々はみな十人が腕を伸ばして抱えるばかりになり、岩壁は暗く聳えるまでになった。およそ園中の百物は、人の意に適わないものは一つもなく、長くいろいろな用途に用いられてきた。

^{いりこえ}古の君子は必ずしも仕えたわけではなく、必ずしも仕えなかったわけでもない。仕えるときはその身を忘れ、仕えないときはその君を忘れた。これを飲食に譬え、
たまたま餓え、たまたま飽くというだけのことである。

^{ひと}いまの士で、義を踏み行い、節に赴く者は希である。郷里に安らかに^おゐる者は出るのは難しく、出て利に^{なれ}狃る者は帰るのを忘れる。前者は親の期待に背き世間との交わりを絶つとの^{そしり}譏を受け、後者は俸禄を慕って事なかれで過ごす弊害を生む。

張氏の父君が子孫のために計画し^{おもんばかり}慮ったことは遠大かつ行き届いたものだった。場所を汴河と泗水の間を選び、舟も車も集まりやすく、朝廷に仕えるにしても、宴遊を楽しむにしても、他に求めることなくここで足りるのである。その子孫が門を開いて仕えるのなら、半歩で都に行け、門を閉ざして帰って隠れるのなら、山林を仰ぎ見て過ごすことができる。生を養うにしても、性を治める(心の本源を鍛える)にしても、義を行^いうにしても、志を求めて適くところ可ならざるはないのである。それ故に、その子孫で仕える者は皆官員として優れた能力があると称賛され、園庭にいる者は節を有して潔く退いたとされるのである。このようであるのはまさしく先祖の君子の余沢によるものである。

私は彭城にいること二年、その風土を楽しみ、そこを去るのは忍び難いものがあった。彭城の父老が私を厭うことがなければ、泗水のほとりに田を買って、そこで余生を送りたいと思う。そうなれば、南に靈壁を望み見て、鶏や犬の声が互いに聞こえ合う距離にあり、ふらりと歩いては張氏の園庭に往き来して、季節ごとにその子孫と遊べるであらう。必ずその日があるに違いない。

元豊二年三月二十七日、記す。

(前の詩では、退隱する場所として石仏山せきぶつさんの南の路の川辺を思い描いていた。蘇軾は張氏の園庭を見て、退隱のもう一つのイメージを思い描いた。都から遠く離れた蜀の地でなくてもよいのだ。「必不仕則忘其君」(必ず仕えざれば則ち其の君を忘れる)とは大胆な言い方ではなかろうか。蘇軾は、国家の隅々にまで皇帝の威令を浸透させることを任務とする官員である。孔子の教えを学び、8歳とのにきに4人のスーパースターに憧れ、科挙を受け、制科にも合格して、己には国のため民のために働く使命があると固く考えてきた。しかし、その皇帝の威令の多くが蘇軾がよしとはしない新法に入れ替わり、自分の信念と職務の実態との矛盾に深く悩むようになった。詩文においてしばしば退隱を言いつつも、それはいまますぐに実現してよいものではないと考えていた。杭州、密州、徐州で矛盾に苦しみ続けつつも、官員としての責務を果たそうと懸命に努めてきたのだが、張氏の園庭を見て、「必不仕則忘其君」の言を吐くに至ったのである。退隱に踏み出すまであと一步のところに来てきたのだが、蘇軾はなお湖州へと向かった。それは、湖州がなじみのある土地で、そこであればまだしも希望があると思えたからだ。実際に、湖州は蘇軾の期待を裏切らずに迎えてくれるのだが、そ

れは突然にごく短期間で最悪の終り方をする)

■過淮三首贈景山兼寄子由

運河を南へ進み、宿州で孫奕(字は景山)らに会い、そして淮河に出た。
詩を詠み、孫奕に贈るとともに、弟に寄せた。

其の一

ご機嫌うるわしいかな、大河、淮河よ。
ここを往来するのはこの十年に三度目。
功名を挙げる気などすでに消え、
故郷に帰る計画は遥かに遠い。
今日の風はこの旅人を憐れむのか、いつもの高い浪はない。
夕方に向かう洪沢の入り口では、
船の停泊場所を求めて撚索(船を岸に繋ぐ綱)の音が雷のように響き合っている。
(船着き場のある入り江で、よい場所を確保しようと、たくさんの船がひしめきあっ
ていたのだろう)

其の二

淮河を過ぎると山はやや山らしくなり、
松や檜も立派な姿に繁るようになる。

ぼんやり

藹藹とした霧の中に隠れる一つの寺、

そのあたりを訪ねると、

さらさら

冷冷と小さな泉が流れ出る。

いわお

巖に寄り添うように巡らされている小さな欄干、

そこに住まう友人はまことに吏隠^{り いん}の人である。

振り返って臨淮^{りんわい}の町を望むと、

東風に乗って町のさざめきが聞こえてくる。

（「吏隠」とは、官職に就きながらも隠者の精神を有する人で、ここに訪ねた人が誰であったのかはわからないが、孫奕もそのような人であるというのがこの詩の含意であろう）

其の三

こうべ

首を回らせば、君は南京^{なんけい}の役場^{やくば}にいて、

高く積まれて簿書の中に埋もれている。

いつか淮河の水で、人を汚す塵を洗い流してしまうとよいだろう。

ここから僕の旅はいよいよ佳境へと入って行く。

しかし、独りであるから長く寂しい思いをしなければならない。

だから、君が百首の詩を作って、そちらの春を写して送ってくれるのを、

僕は心待ちにしているのだ。

■舟中夜起

前の詩に見た洪沢こうたくに停泊した夜のことだろうか、舟の上で目覚めて詠んだ詩。

微かな風まこもに、菰がまや蒲さんさんが蕭蕭と音を立てている。

雨であろうかと、舟の戸を開けて見る。

湖に月の光が満ちている。

舟の上の人も水の上の鳥も同じく夢の中。

何かに驚いたのか、大きな魚が狐のように走る。

夜は深まり、人と物とはもはや関わりを持たない。

私だけが、自分の影と喜びを共有している。

渚の蚯蚓が悲しげに鳴くのは、

ひそやかに潮が上がってきたためだろうか。

月が柳に落ちかかって、蜘蛛の糸が浮かび上がる。

生きとし生けるものは、

あわたたくも憂患の内にあるのだろうか。

この清境よいときが眼を過るよぎのはほんの一瞬でしかない。

鶏が鳴き、鐘が鳴り出せば、鳥たちが罅を離れて行くだろう。

そして、船頭が太鼓を撃って呼び合い、

舟はまた出て行くのである。

■西江月

ちようこう よう へいざんどう
 長江北岸の揚州に至り、平山堂でこの詞を詠んだ。平山堂はかつてこの
 地の知事であった欧陽脩おうようしゅうが建てたもの。詞の冒頭にあるように、蘇軾が
 平山堂を訪れたのはこれが3度目（先の詩で淮河を3度往来したと詠ん
 だのと同じ）。1回目は杭州に赴任する途中で、そのときは直前に欧陽脩
 に会っていた。2回目は杭州から密州に移る途中で、そのときは欧陽脩
 はすでに亡くなっていた。

三過平山堂下、へいざんどう（三度通り過ぎる平山堂の下）

半生彈指声中。（人の半生などは指を弾く音のうち）

十年不見老仙翁、ろうせんおう（老仙翁（欧陽脩）を見なくなって十年）

壁上竜蛇飛動。（しかし、翁が書いた字は壁の上で竜のように勢いよく飛んでいます）

欲弔文章太守、（文章を一生の仕事としたかの知事を弔うために）

仍歌楊柳春風。（歌うのはかの名詞「楊柳春風」）
ようりゅうしゅんふう

休言万事转头空、（言うのはよそう、万事は頭を回らす間に空しくなるなどとは）

未转头時皆夢。（なぜって、頭を回らす前にみな夢となってしまうのですから）

（「楊柳春風」とは、欧陽脩が平山堂で作った詞にある「手づから種える堂前の楊柳、
 別れ来て幾度の春風」を縮めたもの。欧陽脩が植えた楊柳がこのときも残っていたか

どうかはわからない)

■余去金山五年而復至次旧詩韻贈宝覺長老

ちょうこう 長江を渡って南岸のちんこう 鎮江に至りきんざん 金山に登った。金山には5年前にりゅうきん 柳瑾や
ちようやく 刁約とともに登っていて、そのときは、酒を飲み過ぎてほうかく ぜんとう 宝覺の禪榻で眠
りこけてしまったという詩を詠んでいた(第4章 166 ページ)。その宝
覺長老がいまも金山にいたのでこの詩を贈った。

その昔、一斗の酒を贈ってまんまと知事の地位を射止めた者がいた。

私は、酒よりも、寺の厨房なっとうの法鼓の香りを愛するものである。

かつてここにきたことは、真に一つの夢として過ぎ去り、

師のおしふかい 高談によって、五年間のせわしなさが洗われる。

時折、山ひだの折れ曲がりまがりのあたりから風が吹いてきて、

ゆっくりと、明るい月が寺の屋根に沿って動いて行く。

頭を深く下げ、師に願うのは、

この旅人を憐れんで、遙かな「帰路」を指し示されよ。

ほうし (法鼓は大豆を発酵させた、納豆と同様のもの。最後の「帰路」は、金山からの帰り
道に重ねて、心の究極的な安定へと帰る行く道をいうのだろう。蘇軾は迷いのある「旅
人」なのである)

■大風留金山両日

ほうかく
宝覚長老に帰路を教わった蘇軾であつたが、強い風のために金山きんざんに足止めされてしまった。

塔の上方にぶらさがる鈴が、何やら独り言を言っていた。

「明日は顛びっぴするような風。川は渡れやしないよ」

朝になってみると、

白い浪が山の崖に打ち付け、軒や窓に、下から雨を飛ばしている。

万斛こくをも載せる竜驤おおぶねも敢えて江かわに出ようとはしない。

むしろ、木の葉のような一艘の漁船が、波にもまれるがままになっている。

よく考えてみると、赴任先の町で急ぎの用事が待っているわけではない。

竜王は誰に腹を立ててこの風を吹かせているのやら、

笑ってみていればよいのだ。

それほどのことでもないのに、金山に留まると決め込んだので、

下僕たちは意外に感じているが、

それでもこの風であるから、私が町に戻ってこなくても、妻子は許してくれるだろう。

こうした騒ぎのなかでも、

さんりょう
参寥師だけは、朝の粥の時刻を報せる太鼓が鳴るまで、

一晩中眠らずにいたのはどうしてだったのだろうか。

(この詩から、参寥どうせん(道潜)(本章 299 ページ以降たびたび登場)が鎮江にまできて

いて、一緒に金山に登ったことが知れる。一方で、家族は鎮江の町に留まっていた。
その家族の中には、5年前に引き取った王朝雲おうちょううんもいた（第4章 199 ページ）。12 歳だった少女も 17 歳の乙女となり、この頃には蘇軾の愛を享ける女性となっていたと推測される)

■祭弔景純文

5 年前に一緒に金山きんざんに登った弔約ちようやく（字は景純けいじゆん）も柳瑾りゅうきん（本章 147 ページ）もこのときにはすでに亡くなっていた。蘇軾は、潤州じゆんにある弔景の墓に詣で、この祭文を読み上げた（弔約が亡くなったのはこれより 2 年前、84 歳だった（本章 230 ページ））

ああ、私は貴君よりも年少であること四十二歳。貴君は私を年少者として扱わずに、兄弟のように思ってくれた。いま私はすでに老い、髪が白くなってしまった。貴君は永遠のもとへと帰り、もう年を取ることがない。服喪の期間は過ぎてしまったけれど、私は悲しみのあまり泣くずにはいれない。

貴君が亡くなり、この地の風俗を私は哀しむ。長江を渡って東にきて、美しい風光の中に、見上げる一万本の松がある。鬱蒼と繁り、青く勢いが盛んである。なお想うのは、この松の下で、ゆったりとした衣をまとい、杖をついて、貴君が私を門に迎え入れてくれたときのこと。手を取り合って笑ったのに、まさか、たちまちにして、貴君がこうして墓の中に納まってしまうとは。山はかつてのまま、草木には再び春

が巡り戻ってくる。親しくしてきた人のうち、天下にいま半分も残っているだろうか。
 日中は心が乱れ、夜は眠れない。私は道に通じた至人ではないので、心が右
 往左往してやまないのだ。
 ここにあるのは一斗の酒と二羽の鶏だけ。いささか私の哀しみをここに写すもので
 ある。

(刁約は家の近くにたくさんの松を植えていたことは本章 110 ページなどで見ている)

■遊恵山

大運河を使って潤州じゅんから湖州こに向かうルートは、杭州の副知事だったと
 きに幾度も通っていた。見るもの全てが懐かしく、あちこちに知り合い
 がいた。この赴任の旅は、実際のところなかなか楽しいものであった。
 無錫むしゃく県の西にある恵山けいに遊んで詩を詠んだ。次のような序文がある。

私はかつて杭州の副知事となり、杭州から無錫へと往来するたびに、恵山に行
 かないということはなかった。それから過ぎ去ること五年、私は湖州の知事となり、
 高郵こうゆう県の秦観しんかん、杭州の僧の参寥さんりょうも一緒に、また恵山に登った。ここには唐の時
 代の处士しよし(官に就かなかった読書人)の王武陵おうぶりょう、竇群どうぐん、朱宿しゅしゆくが賦した詩が残され、
 その語は清簡せいかんにして蕭然しょうぜんとして俗塵から抜け出た姿がある。それを愛し、その韻を
 用いて三首を賦した。

(秦観(本章 266 ページなどで登場)も加わって、一行はさらに賑やかになった)

其の一

過ぎ去った五年の夢、
覚めると、左右の鬢の毛は白い。
塵土にまみれた足で、漪瀾堂へと歩む。
下に松の影が落ちるのを見て、上に鶴が飛び行くのを見る。
堂に置いた我が身に、氷の玉のような光が差し込み、
肺と肝臓の間が炯然となる。
虚明の中に「色」があり、清浄から自ずと「香り」が生じる。
世俗の世界へとまた還るとしても、
この光があるなら、永く世俗を忘れることもできようか。
(恵山の漪瀾堂で何かを体験して、得るものがあつたのだらう)

其の二

薄い雲は山を遮るほどではなく、
まばらな雨は人を濡らすほどではない。
滑らかな松の径を蕭蕭と歩むと、新しい芒鞋が策策とよい音を立てる。
嬉しいことに、
同行するのは、黒く暗いところがなく、白く明るい人々ばかりである。
この勝地は昔と異なることなく、

塵にまみれずに清らかな句がそのまま残っている。

古い歴史に泣き、^{さんげん}讒言を憎むその詩、

しかし、それを詠んだ人も、真の隠者の隣に棲む人にはなれなかったのだ。

其の三

木が重なり覆うところで山の泉を汲み、

明るい窓辺で火を^{たた}こ^にいて茶を煮る。

紫の^{ちやさん}茶盞を傾けると、色も味も絶妙である。

私の人生は食べることと眠ること、

ひとたび満腹になって眠りに入るなら、

一万の想念が消滅する。

笑ってしまうのは、茶を好むあまり、

何も食べずに茶葉三百片を飲み尽した御仁がいたとか。

それよりも、山中で眠りから覚めると、花が開き、

そこに一杯の茶。

さて、誰かこの茶を共にする者がいないかを見ると、

門の外にはどこにも^{わたち}轍がついていない。

■贈銭道人

蘇軾の行くところに人が集まってくるようで、杭州から^{こう}銭道人^{せん}がきたの

でこの詩を贈った。銭道人は、本章 223 ページで見た表 忠観^{ひょうちゆうかん}の自然道^{じねん}士である。

世間の書生さんは、

書物を読んでも何を信じたらよいのかわからなくて、

あれこれ勝手な憶測で物事を考える。

自分の力量もわかっていないから、

「こいつはおいらが成し遂げて見せるぜ」

と軽々しく広言する。

そのときは結構な心持ちであろうけれど、

後で格好のつかないことになる。

いまやどこでも、なまぐらな鉄を鋳型に流し込んで、

できそこないの書生さんばかりを作っている。

そのような時代を生きていると、

自分はいつも憂患の中にあって、

己の罪惡を助長しているだけではないかと恐れを抱く。

泥に突っ込んだ足がまだ浅ければ、またたやすく退くこともできるだろう。

静観すること、いやそれ以上に、

銭道士が初めから何もしないているのを、喜ぶべきなのだろう。

無病なら無薬、銭道士と逢っても何も言うことはない。

(冒頭にある「世間の書生さん」とは、改革の潮流に乗ってにわかに大手を振って歩くようになって連中をいうのだろう)

■与秦太虚参寥会於松江而関彦長徐安中適至分韻得風字二首

詩題は「秦観と参寥と松江で落ち合い、そこに関彦長と徐安中がたまたま来たので、五人で韻を分け合って詩を詠んだ。私は風の字を得た」。

其の一

呉越の溪と山の興さは窮まりがない。

わが衰病をいたわりつつ、

東西百余丈の垂虹橋を渡ると、

天に浮かぶ心地、

ここ東南の地は古からの水の郷である。

今朝の西北の風に送られ、

千里の遠さも忘れて、この絶景の地にきた。

この五人がまた揃ってすばらしい遊びをともにするのは難しい。

船頭は、我等がいつまでもぐずぐずしている気持ちをわかってくれない。

夕日に万頃の水が紅く染まるのを橋の上から見たいのである。

(垂虹橋は、太湖に注ぐ呉江(松江)にかかる橋)

其の二

秦觀君と参寥師は詩に巧みでさらに窮めようとしている、
人間世界には、長い虹のような句を吐けるところはないだろうに。

私はというと、人に笑われてばかり——

ここのところ三度続いた左遷にも慣れて、

岸辺からの風に揺れる舟の中で、

一日、雨音を聞きつつ、たっぷりと眠っている。

天はありがたいことに、ひとつの酒樽のもとに皆を集めてくれた。

さあ、銀盤ぎんぱん(水面)に紅い魚の尾と馬の鬣たてがみが翻るのを見て、

その感動を詩に詠んでくれたまえ。

(最後は、上の詩にあった垂虹橋からの夕景をいうのであろう)

■湖州謝上表

4月20日に湖州に到着。蘇軾は、新しい任務を与えて下さったことを皇帝に感謝するこの文章を書いて皇帝に差し出した。

(これは皇帝に提出する「表」^{ひょう}という形式の文章で、特定のルールに則って格調高く書かれたものだが、それをそれらしく日本語に移すのは私のよくするところではなく、大意をとって訳す)

わたし
臣軾が申し上げます。

御恩を蒙って前任地より移動し、今月二十日に着到し終わりました。こちら東南の地は風俗が安らかで、何事もなく治まり、山水が美しく、もとより朝廷の優賢とされる方がこられるところでありますのに、どうしたことか^{わたし}臣のような者をここにお選びいただきしました。

伏して思いますに、^{わたし}臣は本性が頑なで^{いなか}鄙びて、低い身分の出で、議論するところは粗雑な大風呂敷で、学問は浅くい加減です。凡人でも必ず一つは取り柄のあるものでありますが、^{わたし}臣には一寸たりとも長じるところがありません。かつて先帝がうっかり御恩を下しおかれたのでありましょ、^{さんかん}三館(朝廷のアカデミー)のメンバーに加えていただき、さらに陛下の過剰なお許しによって^{みつ}密州、^{じょ}徐州の知事にさせていただきました。自分のお尻を激しく叩いて、少しでも御恩に酬いなければと奮闘いたしましたが、何といっても才能に限られているために、功績のないままに終わってしまいました。国にはきちんと法令が具わり、^{わたし}臣のような者が勤めても何ら補うものではなく、この罪は大きいと^{わたし}臣はよくよく存じ上げております。それなのに、諸賢を超えてこのすばらしい場所をお選びいただきまして、さらに何をいたせばよろしいのでしょうか。この残念なありさまを顧みますと、恩知らずと言わざるを得ません。

皇帝陛下が天下を御覧になること、天を覆い海をひたして全てのものの生を全うさせ、人を用いるに当たっては、才能の及ばない者であっても受け入れてその善いところを嘉しとされています。^{わたし}臣が愚かで時代に合わず、新進の者に付いていけないことを御存知で、私が老いて事を構えることがないのを察せられて、民衆を

養うことを委ねられたのでありましょうか。

わたし

臣は先頃、杭州にあってその風土を楽しみ、自然界に生きる魚鳥の本性をその湖や川で知ることができました。そうした臣の指導を、湖州の人も安心して受け入れてくれることでありましょう。臣は職務に努め、できうるならば訴訟事をなくして刑罰を用いないですむようにしたいと思います。

陛下におかれましては朝廷の真心をさらに広められ、父老の望みを慰められますように。

（己を卑下してこれより勤務に励むと、皇帝に提出する文章として当たり前のことが書いてあるだけのように見えるが、「難以追陪新進、察其老不生事」（新進に追陪すること難く、老いて事を生ぜざることを察し）の部分、蘇軾を嫌う人々をひどく刺激したとされる。「新進」は、通常はよい意味に用いられるが、蘇軾は以前から「改革の時流に乗ってにわかでかい面をするようになった不学不才の連中」という意味を暗に含ませて用いていた。つまり、上の 12 文字は、「新進は事を生じる（政治を乱す）恐れがあるけれど、蘇軾は新進に追従することがないのでそのような心配はないと、皇帝は承知している」という意味にとることができなくもない。この文章が朝廷に届くと、「新進」はすぐに動き出し、3 カ月後に大きな嵐となって蘇軾に襲いかかった）

■端午遍遊諸寺得禪字

湖州では 3 カ月後に何がおこるかなど誰一人として知る由もなく、蘇軾はどこに行っても蘇軾で、職務の傍ら人々と詩を詠み合って過ごした。

5月5日の端午の節句、人々と湖州の州庁のある呉興^{ごこう}の町の寺を巡り歩き、蘇軾^{そし}には「禪」の字が当たったので、それを韻にして詩を詠んだ。

興^{かご}にかつがれ、連れて行かれるがまま、景色がよろしければそこにしほし留まる。

香を焚^{めい}いて静かに歩み、筵^{めい}を敷いて茗茶^{ちや}を酌む。

かすかな雨が止んではまた降り、小窓からの眺めは、明るくなったり暗くなったり。

庭に築かれた小山^{しんざん}には草木がよく茂り、本物の深山のように日が射し込んでこない。

塔の一番上まで登り、大千世界^{はて}の涯まで眼を窮めようとする。

下山^{べんざん}の峰に街並みが映り、雲間^{たいこ}に太湖が浮かぶ。

深沈^{しんしん}（寺の趣）をすでに喜び、曠蕩^{こうどう}（あたりの風光）を楽しむのもよろしい。

奥行きの深さをまだ尋ね終わらないうちに、

村里からは夕餉の煙が昇り始める。

官舎に帰ってからこのように書いてくると、

歴^へたところが耿耿^{ありあり}と戻ってきて眠れなくなる。

寺の道人もまたまた眠らずに、孤燈のもとで夜の禪に務めていることだろう。

（呉興^{ひえい}の飛英寺には高い塔があり、そこをからの眺めを詠んだのだろう。卞山は呉興の西にある姿のよい山。太湖は呉興の北に広がる大きな湖。この詩に詠んだ風光について、「呉越^{ごえつ}に至らざればこの景を見ず」と蘇軾自身が注記している。再び江南の地にきて、潤いのある風光にまた触れることができ嬉しかったのだろう）

■祭張子野文

杭州時代に交流のあった張先^{ちやうせん}（字は子野^{しや}）（第4章74ページなど）は湖州の人。湖州知事として再びこに地にきた蘇軾であつたが、張先はすでに前の年に亡くなっていて、残念ながら再会を果たすことができなかった。89歳だった。蘇軾は張先の家を訪ね、この祭文を捧げた。

張郎中殿の靈に捧げる。

人は官に仕えたと本心が蔽^{おお}われて帰るのを忘れ、たとえその志があっても果たせないままに月日が過ぎ去ってしまう。ただ張先生だけはなお壮健のうちに帰り、故郷で優雅に遊び、もう一つの人生を送った。人に対して開けっぴろげで、古の「愷^が悌^い」（和らぎ楽しむ）という言葉がぴったりであつた。大らかに老成し、敏にして多芸、詩は俗臭を絶って甚だ典雅で華麗、物の真髓を捉え、生き生きとして陰影に富み、わずかな言葉にも曲折があり、『詩経^{しきやう}』の伝統を受け継ぐものであつた。窮乏に陥って塩や米がなくなっても、嘯歌^{しょうか}して慌てず騒がず、酒のあるところへと出かけて行った。

私は杭州に赴任して初めて張先生の客人として迎えていただき、年齢の違いを忘れ、細かいことを気にすることなく、欣び合つた。私が北方に移ることになると、張先生は黙って指を折って数え、生きている間に会えることはないだろうと、泣きながら私の袖を曳いた。

私が先生の故園に再びやってきたのは実に五年を経てからで、病のために少し遅くなってから先生のお部屋をお訪ねすると、遺影が置かれ、先生に仕えていた女性たちはもはや残っていなかった。友を喪った者は、琴を手にとって奏でることはないという。私は空しく鶴のように泣くばかりである。觴^{さかずき}を捧げて再拝し、目に涙が溢れる。

■和孫同年卞山竜洞祈晴

先の詩にあった卞山^{べんざん}には黄竜洞^{こうりゅうどう}という水の湧くところがあった。蘇軾と同じ年に科挙に合格した孫氏^{そん}(名は不詳)が黄竜洞に晴れることを祈り、その詩に和した。密州や徐州ではしばしば雨を祈ったのだが、湖州の5月は雨の季節で、逆に晴れを祈らなければならなかった。

呉興^{ごこう}のあたりは一カ月続雨^{こしき}、釜や甑で魚が泳ぎ蛙が鳴く。

「どうして己^{すみか}の住処でじっとしていないのか」

竜に問いたたしてやろうと、孫君は下山に登る。

空に梯を掛けなければならない陰しさ、

下をみると、ぱっくりと谷が開いている。

雲に覆われたところに神々しい水が湧き、

暗い崖に苔の花が垂れ下がる。

蛇の群れのように、百の流れが谷に向かって走り、

その先はどこに落ちて行くのか、
糸車を回すような音が低く聞こえている。
孫君は洞の前にきて、石の戸を叩く。
蝙蝠が飛び出し、頭の白い鳥が翼を翻す。
孫君は竜に言う。
「睡眠は、結構な味わいだと思うよ。
雨を司る君よ、柄杓を振るのをちよいと止めたらどうなのかい。
雷を司る君よ、太鼓を撃つのをちよいと止めたらどうなのかい。
大地に溢れた水が谷に戻ってくれたなら、
泥に埋もれた稲の苗が伸びてくれし、
農夫は顔に血の気が通うようになるし、
竜君だって、お供えものの豚肉にたんまりありつけるではないか」
この願いの通りになるなら、孫君は間もなく公務が暇になり、
夕刻前に早々と役所から引き揚げて、
ゆったりくつろいでぐっすりと眠れるようになることだろう。

■乗過賈収水閣収不在見其子三首

湖州の町の近くに賈添丁（字は収子、号は賈耘老）の水閣があった。舟に乗って訪ねたところ、賈添丁は不在で、その息子がいたので、この詩を書き置きした。3首のうちの1首を訳す。

其の一

舟を古びた柳の根元に繋ぎ、

杖を突いて青い苔のむす岸边を歩いてきたのだが、

ほうとくこう

龐徳公のような隠者である貴公は墓参りに出ていたので、

しろ

子路のような親孝行者である貴公の子息に私は言を託す。

貴公の水閣は、蒲と魚の入り江を占め、

さらに、松と菊の庭を作ろうとしている。

これから足繁くこちらにこよと思うが、

貴公が留守でも、すでに親しくなった子等が迎えてくれるであろう。

しょうかつこうめい

(龐徳公は三国時代の諸葛孔明とも交流があった著名な隠者。子路は孔子の弟子で親孝行で知られた)

■与客遊道場何山得鳥字

かざん

せいしん

ある客人と何山にある正真寺に遊び、「鳥」の字を得て詩を詠んだ。何山は湖州の南にある山。

清らかな溪川が尽きて山に到り、小路は飛んで空を盤る。

こうてい はくとう

木の枝先に紅亭と白塔が見え隠れする。

途中で休みたいと思うと、雲に寄り添うようにして小さな庵がぽつんとある。

いおり

北の扉の下は太湖、天の際まで雲と水が広がっている。

庵の僧は、俗界との縁を断って業を浄めつつあるが、

まだ完了していないのか、

十年にわたって鵲や竹を描き、自分から詩に繞つかれている。

御仏の像を置いた高堂も、禅を組む部屋もそれぞれに奥深い趣がある。

泉水はどこからくるのか、庵を通して溪へと流れ、

何山は谷と向き合って清く静かである。

高い松に蔓草がかかり、絶壁で鳥が啼いている。

杭州からきた友は、まだ十分に見ていないと嘆くのだが、

帰途につくと、風雨が起り、

紅い夏の日差しの燎けるような熱さを洗ってくれたかと思うと、

俄かに山は乱れて大騒ぎとなり、

川べりの草の上では黒い霧が渦を巻いている。

舟に乗る人々の顔はすっかり青ざめ、

鷗が平気な顔をしているのを羨ましく見ている。

私は独り酒杯を呼び、

「溺れ死ぬより醉死する方がよほどましだ」

と、例によって書生の強がり、訳のわからないことをあれこれ並べ立てる。

これで明日になれば、

いま辿ってきた道も、美しい風光も、杳としてどこかに消えてしまうのだから、

詩を作って、この歓びを記しておこう。

遙か昔から現在までの時間だって、

この暮れ方から暁までの短さと変わりはないのだ。

■僕去杭五年吳中仍歳大饑疫故人往往逝去聞湖上僧舎不復往日繁麗独淨
慈本長老学者益盛作此詩寄之

詩題は「私が^{こう}杭州を去ってから5年、その地では毎年のように飢饉と疫病があり、知り合いの多くが亡くなり、西湖周辺の僧舎にもかつての賑わいはないという。ただ淨慈寺の本長老^{ほん}ばかりは学びに来る者がたくさんいると聞き、この詩を作って寄せる」。淨慈寺の本長老に仏教を教わったことは第4章127ページで見ている。

杭州、湖州あたりの三吳地方を往き来する間に、

一つの夢が過ぎ去り、

知る人の半ばは高く盛られた塚の中に帰ってしまった。

ただ独り、以前のままの寺で真の仏法を伝える人がいる。

飢饉から生き残った人々と、この災害の歳月を乗り越えてきたのだ。

近ごろ、趙抃^{ちようべん}知事は官の印を返されたと聞が、

本長老はかねてから俗世を離れた林泉のもとにおられる。

いつかは私も師に従って、

我が本性のままに「不学の禪」のうちに逍遙したいものである。

ちようべん
(趙抃のために「表 忠 観の碑」を書いたことは本章 223 ページで見ているが、趙
ひょうちゆうかん ひ
抃は少し前に杭州知事を辞めて政界から引退した。「不学の禪」とは、そういうものがあるらしい。蘇軾は湖州まできたので、杭州に行く機会もいずれあるのではないかと期待していたのかも知れない。しかし、それが実現したのは10年後のことである)

■舶蕙風

詩題の「舶蕙はくたくの風」とは何か。蘇軾の序文がある。

こ
呉の地では梅雨が終わると、颯然さつぜんと清風が吹いてきて十日間ほど続く。これは毎
年のことで、湖州の人々はこれを「舶蕙はくたくの風」と呼ぶ。このころにとお越外洋を巡る
船舶が回ってきて、海上からのこの風が船舶とともにくるのでこのようにいうの
だ。

梅雨からすでに三十日が過ぎ、

万里の彼方から初めて舶蕙の風が吹いてきた。

風はあちこちを回り巡って、山の隅々にまで入り込みながら、

一息に疾走して江東の地を満たしてしまう。

葉を驚かせて、秋にならないうちに簌簌ささささと落としてしまい、

こんこん
昏昏と眠っていた翁が飛び起きる。

この風のよさを昔の宋玉そうぎょくに習って詩に詠もうとして、

風には雌雄の違いがあるとか、分別臭いことは言わないでおこうと思う。

（屈原くつげんの弟子とされる宋玉に「風の賦」という有名な作品があった。そこに風には雄風ゆうふう、雌風しふうの違いがあると詠まれている。この詩の末尾は、誰よりも分別臭いことを詩に詠み込むことを好む蘇軾がこういうことをいうとおかしいよねというオチであろう）

■泛舟城南会者五人分韻武詩得人皆若炎字四首

湖州の町の南に舟を浮かべて遊んだ。5人で韻を分け合って詩を詠み、蘇軾には「人皆若炎」の4文字が当たったので、4首作った。実際にひどく暑かったのだろう。3首を訳す。

（気安い仲間との戯れの詩であるようなので、蘇軾に叱られるのを承知で戯れに訳す）

其の一

強い日差しに、町の楼閣は魚の鱗のようにぎらぎらと輝き、

水草にさえ風が立たない。

ちよいと溪川たにかわの一番奥まで行くなどして、

我等を不羈やんちやな人と呼ばせてみようか。

この舟の顔ぶれでは、

鶴が舞い降りてきてくれる気配はなく、

燈火に向かって勝手に馴れ馴れしく虫がくるだけだ。

町を繞る蓮の花の広さは一千頃^{けい}、
六月でも蓮の葉の下だけは春である。

其の三

紫の蟹も鱸魚も土くれのように値が賤^{やす}く、
錢を渡しても数えることなく売ってくれる。
蓮の葉を丸めて盃に見立てると、酒は少し苦みを帯びる。
板前が肘を運らせると、
風が起こって、白い雪が飛ぶようにして刺身ができあがる。
酔った勢いで新しい詩を作ろうとしても、
満腹で腹鼓を打つことしかできない。

其の四

橋の上で遊ぶ人々は、夜になっても飽きることもなく、
欄干に依って蓮を吹く風の音を聞いている。
楼阁の上で遊ぶ人々は、蓮根を肴に酒を呑み、
化粧が終わったばかりの妓女が簾から月を覗き見る。
町の南で遊ぶ我等は、南朝貴族の風雅を受け継ぎ、
さらには家に帰って後に、北の窓辺で大の字になって眠るなら、
太古の朴訥な人々と等しくなるのだ。

人間世界は熱さ寒さの窮まりがないところで、
 自分で自分を笑うような^{あほくさい}疏頑ことでもしなければやっていけない。

■送淵師帰径山

^{じょう ぎ}澄慧大師（^{えん}淵師）が^{けいざん}径山の帰るの送った詩。径山は杭州時代に登っている（第4章136ページ）。

私は昔、^{けいざん}径山の客となり、
 山の風景は私の詩筆には手に負えないものだったと、今も思っている。
 師はその山に住むこと三十年、
 山の真髄を得ているので、師は妙語を発せられるのである。
 湖州の町は六月は水に蒸され、蚊が猛然と鷹のように襲いくる。
 師の方丈では、御明かしが動かずに灯り続け、
 氷雪に閉ざされたように冷ややかであるのを羨ましく思う。
 径山の人々は私が湖州にまで来ていると知って、
 私はどうしているのかと、争うようにして尋ねるだろう。
 そうしたら、言ってほしい、
 「あの男は何をやっても一人前ではないけれど、
 ただ眼だけはきいて、いまでも細かい字を書くことができる」
 （この詩の終わりは、径山に^{りゅうせい}竜井という井戸があって、その水で洗うと眼病が治ると

され、かつて径山に遊んだときの詩に、老人になっても細かい字が読めるように眼を洗っておこうと詠んでいたことにちなむ（その詩は訳出しなかった）

■次韻周開祖長官見寄

杭州時代に親しくした周邠（周長官、第4章123ページなど）から詩が寄せられたので、次韻して返した。

一度うなずく間に東西数州を旅して道に老いる――

それは旅芸人だけではない。

地方勤めの身は、

惜しまれつつ父老と別れたかと思うと、

すぐに子供等の出迎えを受けるのだ。

私の政は拙く、水害だ日照りだと年々祈るだけ、

民衆は疲れ、私を嘲笑する声を避けて歩かなければならない。

河が広大な野を呑んだときは水を塞げなかったし、

盗賊が山に入り込んだときは捜し出せなかった。

お上に仕えてこんなことでは、

孔子、孟子の教えに恥じなければならぬし、

国家の急に役立たずであった昔の人々を偉そうに責めることなどできない。

田舎に帰ることを思いつつも俸禄に魅かれ、

世間の風濤から脱けられずに州知事をしている。

憐れにも家^{いしな}を喪った犬のように惘惘し、

人の乗っていない舟のように行き当たりばったりである。

これまで経てきたことは全て夢のようで、

今はただ楼閣に身を寄せて水を見ているだけ、

味も香りも抜けてしまった酒か、

はたまた落ち、ぶれた楽工^{がくこう}が風^{から}に空の瓶をたたいているようなもの。

遠くは唐朝や晋朝の名臣を思ってみたり、

近くはかつて交流があった人々を思ってみたりする。

湖州では、風がないと豹^{たけ}脚^{あし}が窓から入り込み、

雨の後には蝸牛が欄檻を這い登ってくる。

昔ともに遊んだ人の多くは苔むす土の下となり、

ただ同年^{どうねん}の君だけがいまも黒々とした頭のままだ。

君とは湖山の名勝を尋ね、酒杯を重ねて二人とも憂いを忘れた。

酔って雪の中で梅の花を見たこともあるし、

夏の夜に舟を浮かべてみたものの汗が流れて仕方なかったことも、

山の上で百首の詩を詠んだことも、

月と君と私の三人で遊んだこともあった。

君は本来、翼を翻して朝廷の高官として飛ぶべき人であるのに、

南の地の谷底で県令の座についている。

君は春風のような詩を送ってくれたけれど、
私の筆は老いてろくな返事ができない。
歳月はいよいよ速く過ぎ行き、
晩節を全して功名を立てるということもきっとできないのだろう。
とりあえずは事無く飲むのがよいであろうか。
この地の魚は旨いからと留まるのもよし、
この地の酒は薄いと笑いながらも留まるのもよいだろう。
(詩の中ほどで「近くはかつて交流があった人々」として蘇軾^{ちようせん}は張先らの名を具体的に挙げている)

■林子中以詩寄文与可及余与可既没追和其韻

林希^{りん き} (字は子中^{しちゆう}) という人が蘇軾^{ふんどう}と文同^{ぶんどう} (字は与可^{よ か}) に寄せた詩があった。文同は本章 325 ページで見たようにすでに亡くなっていて、林希が詩を詠んだのはしばらく前のことで、何かの折にその詩を思い出して、文同のことを偲んでその詩に和したのだろう。

この人(文同)が甚しく嫌ったのは、
餌のように投げ与えられたものを受けること。
こんなことをするのはほんのわずかな間だからと、
人に後れまいと奪い取り、

得たもの(地位)を死んでも守ろうとする者がいる。

天賦の才には大きい小さいがあり、

^{こく と}斛と斗のように単位が異なりもするのだから、

それぞれの分^{ぶん}に安んじるのがよいのに、

外物に誘われるがままに、時節到来と見てとると、うごめき出し、

誰かれかまわず意気を合わせて、結構な場所を占拠し、

本当ならそこにふさわしい人を、鶏小屋のようなところに押し込めてしまう。

こうして文同は五百人もいないような土地の長官になっていたのだが、

いざ亡くなると、一万もの人々が泣いた。

私は文同の死を聞いて以来、胸の内に大きなわだかまりがある。

世俗と絶つ^{ことろ}その意を、一度手を執り合って語りたいと思っていた。

遥かに隔たったまま、その窓辺に寄ることができなかった。

文同は遺文を弟子に、後事を諸友に託した。

文同には一人のよい息子と、よく釣り合った妻がいる。

世の人は目の前に見えているものを軽んじる傾向があり、

一方で、自分のものはぼろぼろの箒でさえ大切にする。

文同の詩文はいずれ識者によって必ず価値あるものとされるはずだが、

ただ墨竹の画だけが愛されているのを、

私は以前からずっと残念に思っていた。

我等の昔からの知り合いは、いまや皆が厚禄を受ける身となっているが、

その中の誰が文同のことを哀しんでいようか。

おろん、林某^{りん なにがれ} やら蘇某^{そ なにがれ} やらが饑寒に迫られて走り回っていることなど見向きもしないのだ。

(この詩には、先に見た「湖州謝上表」(本章 357 ページ) にあった「新進」を嫌う気持ちがかかなり強く筆められているようだ。文同の一人息子の文努^{ぶん む}光^{こう}は蘇轍^{そ たく}の娘と結婚していた(本章 265 ページ))。

■与王郎昆仲及兒子邁繞城觀荷花登峴山亭晚入飛英寺分韻得月明星稀四首

王適^{おう てき}、王適^{おう いつ}の兄弟(本章 341 ページ)と、長男の蘇邁^{そ まい}を伴^こって湖州の町をめぐる蓮の花を見てまわり、峴山亭^{けんざんてい}に登り、晩^{ひ えい}に飛英寺^じに入った。そこで、韻を分け合って詩を詠み、蘇軾には「月明星稀」の字が当たったので4首を詠んだ。そのうち3首を訳す。

其の一

昨夜は水路で雨音がしていた。

暁ごろに風が月を吹き現した。

蕭然^{さやう}と秋の気配を覚え、

城を環^{まわ}る三十里の水は清く澄んで啜^{すす}れるほど。

蓮の葉が海のように広がり、どこもがすばらしい景色。

その中に一艘の舟が見え、
 青い笠を深く被るのは、真に世を避ける人であろうか。
 逢って話をしようと思ううちに、飛び去る鴟とともに消えてしまった。

其の三

この流れは漢水かんすいに似て、鱗鱗きんきんと鴨の頭の青色である。
 この町は襄陽じょうようよりも勝り、万の家の瓦が青い空に浮かぶ。
 私はかつての羊祜ようこの足元にも及ばないので、
 この岨山亭けんざんていに登るのは面はゆく思われるのだが、
 それでも歳月が流星のように消え去るのを悲しみ傷む意は同じである。
 私と同道する王兄弟おうはいまぎに羽ばたこうとする鴻おおとりのようで、
 羊祜と一緒にいただけでその名を残した鄒湛そうたんとは違い、
 自分自身の徳をもってその名を歴史に刻むことだろう。

（蘇軾はかつて都に上る旅で襄陽に立ち寄り、漢水を見て詩を詠み（1章 51 ページ）、
 岨山けんざんに登った（1章 52 ページ）。岨山はかつて羊祜が山頂で悠久の時の流れを嘆じた
 ことで知られる。そこにちなむ湖州の岨山亭で、自分は羊祜に及ばないが、いま一緒
 にいる王兄弟は、岨山で羊祜と言葉を交わしただけで名を残した鄒湛（本章 95 ページ）
 とは大違いであると戯れたのだ）

其の四

湖州の役人と民は私がものぐさなのを憐れんで、
訴訟事などは減多に起こすまいとしてくれている。
それで何事もないので、酒を食らって夜も遊んでいられる。
さらに飛英寺を訪ねて、月の光のもとでの楽しみを尽くそうとする。
知事殿の到来を告げる鐘が撞かれると、履の音がにわかに集まってくる。
中にはあわててさかさまに衣を付けた者もいる。
私が来るのは決まった時節がなく、杖の自ずと向かうところで扉を推すのだ。
どうか私のことを知事だとは見ないでほしい。
外見はそうであっても、中身は似て非なるものなのだから。

■次韻章子厚飛英留題

前の詩で訪問した飛英寺の壁に章惇（字は子厚）が書いた詩があったので、それに次韻した。章惇が一時期湖州知事であったことは本章 70 ページで見ている。その後いまでは改革派の一員として都で活躍している。

足の遅い馬に乗ってかつて一緒に遊んだ君は、
いまは仙宮のような皇城の内にいる。
宰相御用達の酒店で昔を思い出したら、

蓮の花が天にまで続くこの場所へと飛んで来るがよい。

■趙閑道高斎

趙抃ちょうべん（字は閑道えつどう）は、先の詩（本章 366 ページ）にあったように政界を引退し、高斎こうさいと名付けた書斎を作った。それにちなんで詩を詠んで送った。

公が奔走するのを見ては公の労苦を言い、

公が隠退するのを見ては公の高潔を言う。

我等はその時その時であれこれ言うけれど、

公の心は高くなったり下くなったりすることなく、

この世は夢幻あ、遭うところに従って去来するだけなのだ。

だから、「高斎こうさい」の意味などは公の関知することではなく、

人が勝手にその名を設けたのである。

公は、孟子もうしが「四十歳で心動かず」と言ったのと同じく道を得ていたのだが、

俗縁がまだ尽きなかったために政事に関わっていなければならず、

功名も富貴もほんのそのときだけ身を置く旅館のようなものと心得、

黄金をいくら積んでも公の袖を取って引き留めることはできなかった。

超然と一大事を成し遂げ、瞬時に官職から去ったのだった。

猿が網に落ちてても手に掴んだ物は決して放すまいとするのとは大違いなのだ。

けんたつ ぐろう

賢達と愚陋とは、九頭の牛の毛を一行に並べたくらいの差があり、
百尺の松は己の高さを気にもかけないが、蓬は羨んで同じ高さになろうとする。
私は自分の食い扶持を担いで公に道を教わりに行きたく思うが、
どうか肘だけ上げて追いついたりするようなことだけは勘弁いただきたい。
(末の句は、このような無作法な仕草で面談を断られた昔の人がいたのである)

■次韻和劉貢父登黄樓見寄並寄子由二首

りゅうはん あぎな こう ほ

劉攽（字は貢父）（本章 65 ページなどに登場）が徐州にある黄樓に登
って詩を詠んで送ってきた。それに和して、1 首を劉攽に 1 首を弟に寄
せた。後者を訳す。

其の二

君と一緒に故郷を去って十年、僕も君も天の片隅にいる。

歳の巡り合わせが悪いのか、生きる算段が拙いのか、

枯れた梧あおざりにしがみついている。

窮状に陥った人との交際は普通は嫌うものだが、

劉君のように、ちゃんとした地位りゅうにあることを誇ったりせずに、

僕等のことを好んで下さる人もいる。

劉君の清らかな句は金の糸よを繕より合わせたようなもの、

吟じると、高い樓閣で白い月の光を浴びている気分になる。

このような新しい意匠の詩が生まれたのも、
 君が徐州のあの場所に楼阁を建てるとよいと言ってくれたからだ。
 近ごろ君は、君が作った「黄樓の賦」を六幅の図に写したところ、
 一座の者は身をそばだててそれ見て、
 一文字でもいいから自分のために筆を執ってほしいと頼んだと聞く。
 僕から君に頼むのは、
 僕のまわりの人々に怨みを抱かせないようにしてくれること。
 だって君はどうせここらには来てくれないんだらうね。

■文与可画筧谷偃竹記

蘇軾の手に、文同（字は与可）が描いた筧谷の偃竹（横に寝そべった竹）の画があった。筧谷は洋州にあり、そこの竹を主題とした詩を蘇軾はかつて詠んでいた（本章 109 ページ）。7 月 7 日、梅雨が明けて空気が乾燥してきたのだらう、書画の虫干しをしたところ、この画が出てきたので、思うところを記したのがこの文章である。

竹が生まれたばかりのときはたった一寸ばかり。そこには節も葉も具わっている。
 筧たけのこがごく小さいうちは蟬の腹に似て、少し大きくなると蛇の腹のようになり、いつしか十尋じん（20 メートルほど）もの長い剣を抜き放ったように高く伸びあがる。しかし、竹の全ては生まれたときに具わっているのである。

いま竹を画く者は、節を一つずつ作り、葉を一枚ずつ累ねてゆく。これでどうして竹となるのだろうか。

竹を画くときには、必ず先に、胸の内に成長した竹を得ておかなければならない。筆を執ってそれを熟視し、画こうとするものが見えてきたなら、さっと始め、見えたままに従って筆を揮って、直ちにやり遂げるのである。見えたものを追うのは、兎が跳んで鶻が急降下するような具合で、少しでもぐずつくと、見えたものは逝ってしまう。

このように文同は私に教えてくれた。私は、自分ではそのようにはできないけれども、心にはそうであることを識った。

心にはそうであることを識っても、そのようにはできないのは、心の内と外とが一つになっていなくて、心と手が応じ合わないからである。それはよく学ばないことからくる過ちである。心の内に見えているものがあっても、これを習熟するまで繰り返し行っていない者は、普段は自分ではっきりわかっていると思い込んでいたところで、実際に事に臨むと、たちまち見えていたはずものを喪ってしまうのである。

これは竹に限ることではない。

弟の蘇轍は『墨竹の賦』を作って文同に贈った。そこにはこのように記してある。

「古の庖丁は牛を上手に解体する職人で、その技を見て、人は命を養う極意を得た。古の輪扁は車輪を削って作る職人で、その技を見て、人は書物を読む極意を得た。先生は竹を画くことに託して、道を会得して生きるありさまを示されているのではないだろうか」。

弟は絵を画いたことがない。だから、文同のしていることこころの意だけを理解した。私のような者は、その意だけでなく、あわせて画く方法も得た。

文同は竹を画いて、それが価値のあるものだとは全く思っていなかった。あちこちから画いてほしいと白い絹を持って頼みにくる者が、足を踏み合うようにして門に押し寄せると、文同はそれを嫌って、絹を地に投げつけ、罵って言った。

「こんなもの、わしの襪たびにしてやる」

士大夫したいふ(官僚仲間)はこれを言い伝え、語り草にした。

文同が洋州の知事から都に還ったとき、私は徐州にいた。文同は私に手紙でこのように言った。

「近ごろ私は士大夫連中に言ってやった。『吾が墨竹の一派が都に近い彭城ほうじょう(徐州)にいる。行って頼んだらよいだろう』。だから、そのうち、君のところには襪たびの材料が集まることでしょう」

手紙の終わりに詩が一首書き添えてあった。そのさわりの部分は、

擬将一段鵝溪絹、(一段(長さ一尺)がけいの鵝溪の絹(高級な絹織物)を用いて)

掃取寒梢万尺長。(長さ一万尺の冬の竹を画こうと思う)

私は文同に言った。

「竹の長さが一万尺なら、絹織物にしたら二百五十匹分の長さに相当します。これに画くとなると筆を動かすのを墨を磨るのも大変でしょうから、その絹を頂戴したいものです」

文同は答えようがなくて、こう言ってきた。

「私はてたらめを言ったのだ。世の中に一万尺の竹などあるはずもない」

私は自分が言ったことを真実とするために、詩で答えた。

世間亦有千尋竹、(世間にはよく千尋^{じん}の竹があるとされる)

月落庭空影許長。(月が傾いて広い庭に落ちるその影はどれほどの長さであろうか)

文同は笑って言った。

「蘇君はああ言えばこう言うたな。しかし、二百五十匹もの絹があったら、私は田を買ってすぐに隠居するよ」

そして簗簗谷の偃竹を画いて私に贈ってくれて、こう言った。

「この竹は数尺しかない。しかし一万尺の勢いがある」

簗簗谷は洋州にある。かつて文同は私に「洋州三十詠」を作らせたことがあり、簗簗谷もその一つだった。そのときの詩は、

漢川修竹賤如蓬、(簗簗谷の竹は立派であるけれど、その値は蓬のように安い)

斤斧何曾赦籜竜。(この筍は伐り取るのを禁じられている)

料得清貧饒太守、(清貧を自称するこの実は大食らいの知事殿が)

渭渚千畝在胸中。(いつも竹が胸中にあると言いつつも、

本当は自分だけが腹の内におさめようとしているに違いない)

私の手紙が届いた日、文同は妻と簗簗谷に遊んで、採ってきた筍を焼いて晩のおかずにしていた。手紙の入った箱を開き、この詩を見ると、笑いをこらえることができなくて、ご飯が卓上いっぱいになり飛び散ってしまった。

文同は元豊二年正月二十日に陳州^{ちん}で亡くなった。

同じ年の七月七日、私は湖州にあって書画の虫干しをしてこの竹の画を見て、巻き物を置き、声を失って泣いた。

昔、曹操そうそう（三国時代の英雄）は、「橋玄きょうげんを祭る文」を書き、そこに「車過」「腹痛」の話があった（橋玄はかつて曹操に向かって、「私が死んだ後、もしも君が私の墓の近くにまできて、車に乗ったまま知らん顔で通り過ぎようとしたら、三步も行かないうちにきっと腹が痛くなるだろう」と冗談を言っていた）。私もまたここに文同との昔の戯れの言葉を載せるのは、文同と私が親密で隔てるものがなかったことを示すためである。

（一万尺の長さの竹に関するやりとりは、本章 265 ページにあった）

■書楊樸事

7月28日、湖州での日々は突然終わった。蘇軾は詩文をもって朝政を誹謗した罪状で逮捕され、都の獄へと連行された。告発したのは御史台ぎょしだい（官員の不法行為を取り締まる部署）の李定りてい、舒亶じょたん、何正臣かせいしんで、皇帝が蘇軾の取り調べを命じる詔を下したのは7月4日、蘇軾が文同の画を虫干しするよりも前であった。逮捕のために都から皇甫遵こうほうじゆんが派遣され、獄に置かれてからは張璪ちやうそうと李定が蘇軾の罪を厳しく吟味した。

（李定は、母の喪に服すべき期間中であることを隠してよいポストを獲得した人物で、蘇軾はそのことをある詩で揶揄していた（第3章97ページ）。張璪は、かつて蘇軾から、収穫を早く得ようと焦るのはよろしくないという助言を受けた張璪ちやうこと同じ人物である（第2章89ページ）。李定も張璪も、舒亶も何正臣も、蘇軾が湖州着任時に皇帝

に提出した「湖州謝上表」(本章 357 ページ)において「新進」と記した人々で、蘇軾の日頃の言動を嫌い、その詩文を徹底的に調べて、朝政(すなわち皇帝)を悪意をもって誹謗したとして告発した。皇帝への不敬罪が成り立てば蘇軾には死が宣告される。「新進」は蘇軾の口を完全に塞ごうとしたのである)

(蘇軾の逮捕がどのように行われたのか、孔平仲^{こうへいちゆう}の随筆『孔氏談苑』^{こう し だんえん}に詳しく記されている。孔平仲は蘇軾と交流のあった孔文仲^{こうぶんちゆう}(第4章 57 ページ)の弟で、その場に居合わせた祖無頗^{そむは}が目撃したことであるとして記録しているので、いかにも信憑性が高そうなのだが、孔平仲は「諧謔狂放」^{かいぎやくきやうほう}で書いたものの史料的価値は怪しいとされる。つまり話を面白く盛る癖があるようなので、そのつもりで用心して読む必要がある。以下に訳すので、いわば講談の類だと思って見ていただきたい。

蘇軾が詩で朝政を誹謗^{かみ}、お上を侮る言動があったことをもって、朝廷は御史台^{ぎょしだい}に対して、役人を派遣して逮捕するよう命じた。このとき李定^{りてい}は御史台の長官として人に対して荒く、蘇軾を逮捕することに熱心であった。

ここに皇甫遵^{こうほじゆん}が派遣されることになり、皇甫遵は息子と御史台の役人二人を連れて湖州へと急行した。一方で、王誼^{おうしん}(本章 154 ページなど)はこのことを知ると、蘇軾と日頃から親しくしていたので、密かに人を遣わして南京にいる蘇軾に報せた。蘇軾はすぐに兄のもとに人を走らせた。皇甫遵は通常の二倍もの速さで飛ぶようにして湖州に向かったために、追いつくのは難しかった。ところが、皇甫遵が長江^{ちやうこう}を渡って潤州に至ったところで、たまたま息子が病気になる、医者^{じゆん}を求めて半日そこに留まった。それで蘇軾の使者がわずかに先んじることができた。

皇甫遵が湖州に到着した日、蘇軾は休暇を取って、祖無頗^{そむは}が知事代行を務めていた。皇甫遵はただちに州の庁舎に踏み込んだ。皇甫遵は長いブーツ^{しやくと}を履き、笏を兼って中庭に立った（朝廷の使者としての姿）。従う二人の役人は白い衣に黒い頭巾で、獰猛そうな顔であたりをねめつけた。湖州の役場の人々は何が起こったのかわからず恐れおののいた。

蘇軾も恐れ、すぐに外には出ないで、祖無頗に相談した。祖無頗は言った。「事態がこうなったからにはどうすることもできません。すぐに出て使者に会うべきです」。蘇軾はいかなる服装で出るべきかと祖無頗に相談した。罪人として使者の前に出るのなら、官員としての正式の服装はふさわしくないのではないかと思ったのである。祖無頗は言った。「まだいかなる罪であるかのわかっておりません。正しい服装でお会いするべきです」。そこで蘇軾もブーツを履き、笏を兼って中庭に下り立った。祖無頗と湖州の役人も蘇軾の後ろに並んだ。

御史台の二人の役人は朝廷からの書状を衣の内に抱え持ち、それはあたかも剣がそこに潜んでいるかのように見えた。皇甫遵はしばらく何も言わなかったので、人々はますます恐れた。ようやく蘇軾が言った。「私は朝廷の政事に激しく悩むところがあり、今日は必ず死を賜るものでありましょう。死はもとより辞すものではありません。どうか、家人と訣別するために家に一度帰らせていただきたい」。皇甫遵は初めて口を開き、「そこまでのことではない」。祖無頗が前に進んで行った。「何か朝廷から授けられた文章がございましょう」。皇甫遵は尋ねた。「そちは何者か」。祖無頗は言った。「知事の代行です」。皇甫遵は朝廷からの文章を祖無頗に渡した。それを開いてみると、蘇軾を都に連れて来るようにとだけあった。

皇甫遵がすぐに発つよう蘇軾を促すと、二人の役人はとうとう蘇軾を捕えた。即座に町を出て、蘇軾は舟に乘せられた。湖州の人々はそれを見送って、雨のように涙を流した。わずかの間に、

州の知事を犬か鶏のように掴まえて、連れ去ってしまったのだった。

皇甫遵が初めに何も言わずにいたのは、蘇軾が恐れて勝手に自殺してしまうよう暗に仕向けたというのが、書かれてはいないけれど、このいかにも講談調のこの文章のミソである。読者をハラハラさせるために、蘇軾は弟の使者から一瞬早くに聞いていながら（それも出来過ぎた話だ）、なすすべもなく朝廷の使者を迎え、祖無頗に相談しなければ何もできないほどまでに動揺してしまったよう描かれているのであろう。これが事実なら、かつて母の前で自分は漢の時代の范滂はんぱうのようになると誓った蘇軾としてはなはだ面目ないであろう（范滂は、逮捕しにきた朝廷の使者の前に自ら進んで出て行った。第1章33ページ）。また、一瞬のうちに犬か鶏のように連れ去られたとあるが、実際には妻子と話をしたことが、この事件からずっと後になって蘇軾自身が書いた次の文章から知ることができる。

かつて洛陽らくようを通過した際に、李簡りかんに会って次のような話を聞いた。

眞宗皇帝しんそうが泰山たいざんで封禪ほうぜんの儀を行った際に、皇帝は天下の隱者を探し求めた。杞きの人で楊樸ようぼくという隱者がいて、巧みに詩を詠むというので、皇帝は楊樸を呼び寄せた。楊樸は詩など上手に作れないことは自分でよく知っていたけれど、皇帝のお召しに応じないわけにはいかなかった。

皇帝は楊樸に言った。

「そちが出発するに当たって、誰かそちに送別の詩を贈ってくれなかったかな」

「妻が贈ってくれた一首だけがございます」

「どういう詩だ」

楊樸が吟じた。

更休落魄耽盃酒、(酒に耽溺して魂を落としちゃだめよ)

且莫猖狂愛詠詩。(詩に凝り過ぎて頭をパーにしちゃだめよ)

今日捉將官裏去、(そう言ってたのに、今日は引っ立てられてお上のもとに連れられ)

這回斷送老頭皮。(その老いばれ頭をすぱっと切られちゃうのよね、かわいそうね)

皇帝は大笑いして楊樸を山に還した。

私は湖州にいたときに、詩をもって罪を問われ、獄に連れて行かれた。妻子は私を見送って門の外で大泣きをした。妻子に語る言葉もなかったのだが、つい妻を顧みて、

「何かい、君は楊樸の妻のように詩を作って僕を送ってくれないのかい」

妻は思わず笑ってしまい、私はそれを背に出て行ったのである。

蘇軾にも話を面白く脚色する癖があるので、本人がこのように書いていてもこれがそのまま事実であったかどうかはわからない。楊樸の話は、蘇軾が脚興で思い付いて、動揺して為すすべを知らない人々を泣き笑いさせたという解釈がある。知事代行にいちいち尋ねないと何もできなかったというよりは、蘇軾の実像に近いように思われる)

■杭州召還乞郡状

蘇軾は逮捕され、船中に軟禁され、都に連れて行かれた。弟の蘇轍^{おうえき おういつ}に後を託す手紙を書き、そのときまでずっと湖州^{こうしゅう}にいた王適^{おうてき}、王適^{おういつ}の兄弟が蘇軾の家族を蘇轍^{なんけい}のいる南京^{なんけい}応天府^{おうてんふ}にまで送り届けることになった。蘇軾の長男^{そまい}の蘇邁^{そまい}は父が護送される船の後を追った。

上^{こうへい}に見た孔平仲^{こうへいちゆう}の「講談」は湖州を離れて以降、獄中で何があったかまでを語っているのだが、それを見る前に、蘇軾自身が 12 年後にこの事件をどのように回顧しているかを、時の皇帝^{しんそう}（神宗の子の哲宗^{てつそう}）に差し出した次の文章で見ておきたい。

げん ゆう
元祐六年五月十九日、

わたし じ へい ほうしゅう へい せい
臣は昔、治平年間に鳳翔の職から替わって朝廷に入り、初めて英宗皇帝の知遇^{こうむ}を被りました。皇帝陛下は臣を用いようとして下さいましたが、当時の宰相^{かん}の韓琦^きは臣がまだ若く資質に浅いところがあり、官の任に耐えられるか試めされてもいないことから、しばらくの間はと館職^{かんしよく}を与えて下さいました。

わたし
臣は父の喪に服するために官職を去り、喪が終わって改めて朝廷に参内いたしました。そこで、神宗皇帝のお招きをいただき、面と向かって激励のお言葉を賜り、わたし
臣が職掌外のことも申し上げるのを許して下さいました。そのとき臣は、遠国からきた臣下はまだこれほどまでの優遇を受けるはずがないので、これはきっと英宗皇帝^{わたくし}が臣を知っていて下さったことによるのであらうと思いました。

このとき王安石おうあんせきが新たに政治を司り、法度を変易しました。臣わたしがもし少しばかり王安石に擦り寄りましたならば、きっと昇進して用いられたであります。しかし、臣わたしは朝廷から遠い人間でありながら、英宗皇帝、神宗皇帝の特別な知遇を蒙り、それでいて天を欺き自分の心に背くようなことはできないと、王安石がしようとしていて施行してはならないことを具さに論じて、万に一つでの国政に補うところがあればと考えました。しかし、神宗皇帝の御心みこころが臣わたしのことはどれほど認めて下さっているのか、その浅い深いをまだ測ることができませんでした。折しも、上元じょうげんの節に四千の灯籠をお買い上げになって、しかも役目の者が理由もなく価を値切るということでありましたので、臣わたしはそのことを論じて意見書を出しましたところ、先帝せんてい(神宗皇帝)は大いに喜ばれて、即時に臣わたしが申し上げ通りに施行して下さいました。臣わたしはこれによって、先帝が聖明にして、言葉を尽した意見を受け入れて下さることを知り、六千余言にわたって新法のよろしくないことを詳しく論じた意見書を提出いたしました。また、科挙についても意見を申し上げ、王安石には人を見る力がなく、王安石が勧める人間は用いてはならないことを申し上げました。先帝はそれを聴いて従って下さったわけではありませんでしたが、臣わたしの愚直をよしとして、譴問されることはありませんでした。しかし、王安石は大いに怒り、その仲間は皆齒嚙みして怒り、臣わたしを傾けようしました。御史台の謝景温しゃけいおんが首謀者となって必死にあら捜しをして、臣わたしが父の喪に服して帰郷した際に、舟の中で私的に塩を販売したとの告発をしました。そして、各地に指令を下して、当時の舵取りから竿さしまでも捕えて拷問にかけて、証拠を集めようしました。しかし、その実体はなく、罪をでっちあげ

ることはできずに終わったのでした。

^{わたし}臣はこれによって禍を懼れ、都の外に出ることを乞い、三回連続して地方官に任
 ぜられました。それでも、先帝は^{わたし}臣を大切に思って下さることは衰えず、^{わたし}臣が差し
 出す文章が届くと、それを左右の者に示して褒めて下さいました。それで、改革派
 の人々は^{わたし}臣がまた朝廷で用られるのを疑い、^{りてい}李定、^{かせいしん}何正臣、^{じょせん}舒亶の三人が、
 飛語を組み合わせ、いろいろな罪状を作り上げて、必ず^{わたし}臣を死罪にしようしまし
 ました。先帝は初めは許しませんでした、この三人が訴え続けてやまなかったため
 に、^{わたし}臣は罪を得て獄に下ることになりました。^{りてい}李定らは乱暴な役人である^{こうほう}皇甫遵を
 派遣し、^{わたし}皇甫遵は吏卒を率いて湖州にきて、^{わたし}臣を盗賊のように捕えました。^{わたし}臣は
 妻子と訣別し、手紙を弟に留めて、後の処置を託しました。自分で思うに、必ず
 死ぬであろうと考え、^{ちやうこう}長江を過る際に、江中に身を投げようしました。しかし、吏
 卒が監視していたために果せませんでした。獄に到ると、何も食わずに死のうとし
 ました。しかし、先帝は使者を獄に遣わして、命じられるところがあり、獄吏は敢え
 て非道な仕打ちを加えるようなことはなくなりました。それで、^{わたし}臣は、先帝に^{わたし}臣を殺
 すお気持ちはないと知ったのであります。それによって、余命を留めて今日に至る
 ことを得ました。……(後略)……

この文章も、本人が書いているのだからこれがそのまま事実であったと
 は限らない。歳月を経てから書いていることと、皇帝に提出した文章で
 あることからすると、露わな意図はなくても、筆を飾ったところが全く

ないとは言いきれないだろう。一方で、先に見た『こう し だんえん孔氏談苑』には、逮捕後の蘇軾について次のように記している。これこそはかなりの眉唾物と思うべきであろうが、同じ時代の人たちがどのようなこの事件を認識でいたかがわかるだろう。

こう ほ じゅん蘇軾は皇甫遵に逮捕され、たい こ ろ こうてい太湖の蘆香亭の下にまでくると、乗っていた船の舵が破損したので修理をした。その夜は、風と波があり、月が昼間のように明るかった(7月28日であるからこれは明らかに事実に反する)。

蘇軾は考えた。

「慌ただしく捕まえられ、これからどうなるのか。きっと厳しい取り調べをされて、連座する者が多数になるだろう。目を閉じて水に入るなら、すぐに事は終わる」

そうしようと思って、また考えた。

「弟を困らせたくない」

つまり、自分にもしものことがあれば、弟はきっと独りでは生きられないと思ったのである。

それで、水には入らず、都に行き、御史台の獄に入れられた。

り てい じょたん か せいしん李定、舒亶、何正臣は、蘇軾を罪に陥れようとして、はなはだ厳しく取り調べた。蘇軾はきっと死罪になると思い、死を言い渡されたならそれを飲んで自殺しようと、毒薬を獄の土の中に埋めて備えた。

一人の獄卒が思いやりがあり、蘇軾を礼儀正しく扱った。夕方になると、毎日蘇軾の足を湯で洗った。

蘇軾はその獄卒に誠をもって向き合い、

「私はきっと死ぬことになる。私には弟がいる。弟との別れに、そなたに詩を託したい」

獄卒は言った。

「きっとそのようなことまでにはなりませんでしょう」

「万一死を免れるのなら、恨むところは何もない。しかし、もしも免れず、詩が弟に渡らなかったなら、私は目をつぶることができない」

獄卒はその詩を受けとった。……(中略、その詩は以下に見ることになる)……

皇甫遵が蘇軾を逮捕しに行ったとき、夜は厳しく監禁して連れてこようとしたが、皇帝はそのようなことは許さず、詩についての告発が事実かどうかを調べるためにだけ、知事の職を解いて蘇軾を都に呼んだのだった。御史台において始めは蘇軾を弾劾することが厳しく、扱いも乱暴であったので、人々は蘇軾のことを心配した。しかし、皇帝の真意が知れると、人々は蘇軾は死罪にはならないだろうと思い、果たしてそのようになった。天子は聡明にして寛厚で、臣下に対して礼儀正しかった。しかし、小人どもは天子の意向を勝手に伺い見て、酷いことをしてしまうのだった。皇甫遵のような人間はたくさんいるのだ。

■御史台榆槐竹柏四首

蘇軾が御史台の獄に入れられたのは8月28日。獄中で蘇軾がどのように過ごしていたのか。秋の終わりのころに詠んだ詩がある。御史台の庭に植えられている榆、槐、竹、柏の4種の植物それぞれに託して、獄中にいる自分の思いを歌っている。

其の一 榆^{にれ}

私は、汴河^{べん が}の堤の上を行くとき、
榆の緑の蔭を見るのは好きではなかった。
榆は千株あってもその蔭は一畝^ぼにも満たない広さで、
斬伐したところで一束の材にしかない。
私は、幽囚の中に置かれるに及んで、
またこの木を見ることになった。
虫に食われた皮に秋の雨がしたり、
病んだ葉が落ちて牆^{かき}の曲がったあたりを埋めている。
霜や雪の厳しさはよくいわれるが、
生意が足りないのはそれだけによるのではない。
春風がくるまで待つことができるのなら、
その榆からも花が飛んで、
からっぽになったこの部屋のあたりを覆うようになるのだろうか。

其の二 槐^{えんじゅ}

思えば、私が初めてこの獄に来たのは、
草木が衰えに向かう時季であった。
槐の高い枝には、秋であるというのに、

季節に後れた蝉が葉を抱いていた。

私も蝉もここに居続けるのはもういくばもないだろうと、思った。

いま、槐にはまばらに莢^{さや}が残っているだけ。

寒くなってきてはまだ棲みついて^{からず}いる鴉がいる。

雪を啄んで餓えに哀しく叫ぶようになるのだろうか。

槐に壊れた巢の枝が空しくかかっている。

そこに沈み行く月が影を宿す。

鳥には両の翼がないわけではない。

この我が愁絶^{しゅうぜつ}に寄り添うためにここにいてくれているのか。

其の三 竹

今日は南の風が来て、庭先の竹を吹き乱した。

刃^{やいば}(竹のこと)と刃がさかんに触れ合って、低く高く音階に適った音を立てた。

雪をもたらず蕭然^{さびし}げな風に、

たとえ竹を折るような意^{こころ}があっても、

竹が辱められることはない。

風が止めば竹はもとに戻り、

猗猗^{うらわし}も緑の光の玉をあたりに散らすのである。

故郷にはいま何があるのだろう。

荒れた籬^{まがき}の菊に秋の雨が注いでいるのだろうか。

竹は健やかでいてくれるのだろうか。

帰って南の軒端でその緑の葉に触れてみたい……。

其の四 柏

ここの庭には珍しい木が多くあり、
緑の柏がまるで葦原のように林立している。

幽囚の身には楽しみがなく、
百日の間この柏を見続けている。

時に幹に流れる樹液に触れ、
落ちた実を踏むのは忍びない。

誰がこの木を植えたのか。
私と同じくらいの年齢なのではあるまいか。

たかだか
蒼蒼と幹を見上げる。

柏はたくさんの囚人を見てきたのだろう。

思えば、

唐の世に武勇で名を馳せた李祐^{りゆう}將軍も、
御史台^{おんぞう}の温造の厳しい調べに胆を落としたのだった。

（御史台における蘇軾の取り調べは厳しいものであったようだ。67の詩文が証拠として挙げられ、逐一誹謗の有無を問われた。当初、蘇軾は罪を否定していたが、途中で全て認めた。67の詩文にはすでにここの訳で見たものも多く、朝政を批判する意図が

あったことは否定しようがない。むしろ、政治の過ちをきちんと指摘したと、胸を張るのが宋代士大夫の輝かしい伝統に則るものである。ただ、蘇軾は皇帝を誹謗するようなことは断じてしていないので、当初は否定したのだ)

■己未十月十五日獄中恭聞太皇太后不予有赦作詩

御史台での厳しい取り調べが続くなか、10月15日、太皇太后たいこうたいごうが重い病に陥り、その平癒を願って大赦が行われると、獄中の蘇軾の耳にも聞こえてきた。太皇太后は仁宗皇帝じんそうの皇后であった曹氏そう（建国の功臣曹彬そうひんの孫）で、神宗皇帝にとっては祖母に当たる（ただし、仁宗皇帝には男子がなく、仁宗皇帝の弟の子えいそう（英宗）が皇太子となって皇位を継ぎ、神宗しんそうはその子であるから、血縁関係はない）。蘇軾は自分も大赦の対象になるのではないかと期待してこの詩を詠んだ。

御史台の庭の柏くわは陰陰く昼も門を掩っている。

鳥は大赦があると知っているのか、黄昏の空に騒いている。

漢かんの宮殿では罪を赦して三世にわたる恩を施したことがあり、

楚その王宮では遠く流して九回死ぬべきであった魂を呼び戻したことがあった。

もしも、私も赦されて、鋤をもって田を耕す身になれたとしても、

故郷の人々には面目なくて顔を合わせることはできないだろう。

堯ぎょうや舜しゆんのような聖主が治めておられるこの世界であるから、

私を赦してなおも官員の一人に加えて下さるだろうか。

(このころに、太皇太后と神宗皇帝の間に、次のようなやりとりがあったと伝えられている。信憑性は先の『こうし だんえん孔氏談苑』よりさらに低い¹が、当時の人々はいかにもありそうだと思ったのだろう。

蘇軾が御史台に置かれていたある日、太皇太后が皇帝に言った。

かん け
「官家(皇帝)はここ数日、気分がすくれない様子ですが、何かあったのでしょうか」

「幾つか決着しない問題があり、その中に蘇軾という者が、朕を誹謗して、そのことがはっきりと文字に出ているのです」

「それは、蘇軾、蘇轍兄弟のことでしょうか」

「二人を御存知なのですか」

「私ははっきりと覚えています。仁宗皇帝が制科の試験をなさったときに、嬉しそうにこのようにおっしゃいました。『朕は今日、二人の文士を得た。蘇軾と蘇轍という者だ。しかし、朕は老いたので、たぶんこの二人を用いることはできないだろう。しかし、将来のためにこの二人を遣すのだ。よいとは思わぬか』」

太皇太后は泣いて、いまその二人がどうしているかを皇帝に尋ねると、皇帝は、

「まさにその蘇軾が獄中にいるのだ」

太皇太后が再び泣いたので、皇帝は心を動かし、蘇軾を赦す気になった。

はくたくへん
(『泊宅編』)

もう一つの話として、皇帝と皇后の間で次のようなやりとりがあったとされる。

太皇太后の病が悪化し、いよいよ危うくなったときに、神宗皇帝は純孝の心から大赦令を出そうとした。皇后が言った。

「天下の凶悪な人間たちを赦す必要はありませんでしょう。ただ、蘇軾一人を放免すれば十分なのではないでしょうか」

せいとうしゅう ききゅうぞくぶん
(『西塘集耆旧続聞』)

しかし、李定等^{りてい}が強く抵抗したために、蘇軾は大赦の対象にはならなかった)

■十月二十日恭聞太皇太后升遐以軾罪人不許成服欲哭則不敢欲泣則不可故作挽詞二章

詩題は、「十月二十日、恭しくも太皇太后が亡くなられたと聞き、私は罪人の身であることから喪に服すことを許されなかった。哭声^{こくせい}を挙げることは敢えてしないとしても、普通に泣こうとしても、それも許されなかった。そこで挽詞を二つ作った」。

其の一

宋朝^{いさお}が初めて開かれたとき、高く聳える勲^{そうひん}があった曹彬。

まことに優れた人は得難く、

そのときの宋朝にも賢臣は十人ほどしかいなかった。

曹彬は太祖の廟の脇に祭られ、

こうなん
江南を平定した際に数多の命を救っただけではないその功績は、

百世にわたって語り継がれるべきものである。

その曹彬の孫の太皇太后は、

漢代の優れた皇后を遙かにしのぐお方であった。

どう 鄧皇后は幼帝を輔^{たす}けてよく朝政をみたものの、位を貪る心があり、

ば 馬皇后は皇帝をよく支えたものの、その恩徳は民にまでは及ばなかった。

月が落ちたのを風も悲しみ、天は雨を降らせて泣く。

誰か、大きな筆で太皇太后の光溢れるお姿を写してはくれないだろうか。

其の二

私は制科の試験で仁宗皇帝の御恩を受けていながら、

まだ何も報いないうちに、

御陵を廻る松や柏が高く聳えるまでになってしまった。

ひと声慟哭することも、ここはそれができる場所ではなく、

万死をもって御恩に酬^{むく}いするには、私にその時間があるのだろうか。

夢に天の道を歩もうとしても、

狭くて私は通ることができないので、

人間世界に留まって、

白い帷^{とばり}が赤く変色するまで涙を流し続けるのだろうか。

平生より私は、

太皇太后が仁宗皇帝を追慕するお心に感嘆していたのだが、

三代にわたってお仕えてしてきたこの老臣は、

詩のために罪に落ちてしまった。

■ 予以事繫御史台獄吏稍見侵自度不能堪死獄中不得一別子由故作二詩授
獄卒梁成以遺子由

長男の蘇邁^{そまい}は湖州から連行された蘇軾の舟の後に付いて都にきて、獄中の蘇軾に食べ物を送るなどして、蘇軾の獄中生活を支えていた。それに関して信憑性の低いまことしやかな話が伝わっている。

蘇邁^{そまい}は食糧を送るのに、野菜と肉だけを添え、もしも不測の事態になった場合には、野菜と肉を止めて魚を添えることで、外の様子を伝えると決めていた。蘇邁は一カ月以上にわたって決めた通りしていたのだが、食糧の蓄えが尽きたので、補充しに出かけることになり、ある親戚に代わりを頼み、その決まり事を伝えるのを失念した。親戚はたまたま魚が手に入ったので、それを獄中に送った。蘇軾はそれを見てひどく驚き、皇帝の慈悲にすがってもそれは皇帝に耳に達することがなく、死は免れないのだと思い、弟に向けて二つの詩を作り、獄吏に渡した。きっと獄吏はそれを隠すことができなくて、皇帝の耳に達するであろうと思ったのだ。

ひょろくわ
(『避暑録話』)

蘇軾が獄中から弟に詩を寄せたことは、先に見た『孔氏談苑』^{こう し だんえん}にも記されていたが、その経緯はかなり異なっている。実際に詩は存在し、蘇軾自身は詩題で次のように記している。「私は事をもって御史台の獄に繋がれ、獄吏によっていささか酷い扱いを受けた。自分で推量するに、これに堪えることができなくて、獄中に死んで、弟に会って別れを告げることはできないだろうと思った。そこで二つの詩を作って、獄卒の梁成^{りょうせい}に授けて、弟に遺^{おく}った」

其の一

聖主は天のよう、万物はそのもとで常に春。

小臣だけが愚暗にして自ら身を亡ぼしてしまった。

人としての百年の寿命を満たす前に、

前世の罪業を死をもって償わなくてはならない。

僕の十人の家族は帰る場所がなく、

さらに君を累わすことになってしまう。

いたるところの青山、そのどこにでも僕の骨を埋めてくれたまえ。

いつか夜の雨に、君は独りで心を傷めるのか。

君とは世世、兄弟でいようではないか。

この現世では尽くせなかった縁を、

きっとまた次の世で結ぶのだ。

其の二

御史台の夜は凄^{ぞつと}凄するばかりの霜の気に満ち、
風が罪人^{くさり}の瑯璫に冷たく吹き寄せる間に月が低くなる。
夢は故郷の山を繞って、心はあたかも鹿のようになるが、
熱湯や火に責められて魂は飛び、命はあたかも料理前に鶏のようだ。
眼に浮かぶ額の形が賢者の相を示しているのは、
まさに我が子のことであろう。
僕が死んだ後に、牛にかける襪褌の麻布を衣として着なければならなくなるの
は、
恥ずかしいことにそれが僕の妻なのだ。
死んで僕の魂^{こまよ}はどこを彷徨うのか。
杭州、湖州の人々が、きっとその地に葬ってくれることだろう。

（この詩の末尾について、蘇軾自身の注記がある。「獄中で聞くに、杭州や湖州の人々は、寺社において私のために厄を解くことを何カ月にもわたって祈っていると」。蘇軾も杭州、湖州の風光を愛し、民衆も蘇軾を慕っているのであれば、その地に葬られた
いと思ったのだ）

蘇軾の厳しい尋問と審理は4カ月にわたって続いた。罪を問われたのは

蘇軾だけではなく、蘇軾と詩文のやりとりをした 39 人も取り調べの対象になった。それらの人の多くが、自分が罰せられることは恐れないけれども、蘇軾が死罪になることだけは赦してほしいと朝廷に願った。特に張方平^{ちやうほうへい}は、詩で治世の問題点を指摘するのは儒学の聖典である『詩経』^{しきやう}以来の伝統で、蘇軾は何ら恥ずべきことをしていないと強く抗弁した。また、改革政治の重要な担い手として活躍していた章惇^{しょうじゆん}も弁護を買って出た。

本章の最後に蘇轍の嘆願書「為兄軾下獄上書」(兄の蘇軾が獄に下った為に朝廷に申し上げる書)を見ておこう。弟にのこした 2 首の詩を読んで後に書かれたものなら、一段と感動的であるのかも知れないが、実際は蘇軾が獄に下ってすぐに書かれたものであると推測されている。沈着冷静な蘇轍にしては、文章に乱れや重複があつて、相当に慌ただしく書かれたものであるようだからだ。

わたし
臣はこのように聞いています。

困難、危急のときに天を呼び、疾病、痛苦のときに父母を呼ぶのは人の至情^{しじやう}(純粹な心)からくるものであると。

わたし　そうもう　び
臣は草芥の微(身分卑しいごくつまらない者)ですが、危うく差し迫った願ひがあります。ただ天地、父母だけが哀しんで憐れんでくれるのでしょうか。

わたし
臣は早くに父母を失い、ただ兄の軾一人だけを命の頼みとしてきました。いまひそかに聞きます

ところでは、兄は罪を得て逮捕され、獄にあるとか。一家中が驚き叫び、いかなることになるうかと憂っています。

わたし

臣がひそかに考えますに、兄は家にいても官職にあつて、大きな過失、大きな罪悪はありませんでした。ただ、生来愚直であり、古今の政事の得失を議論するのが好きで、しばしば意見書を朝廷に提出し、いろいろな事を論じてきました。その言論は一定しておりませんでした。陛下の御聖徳は広大で兄に譴責を加えることはありませんでした。兄は狂狷(きやうけん)（思い込みが強くそのままに行動してしまう）で、思慮が足りず、天地をも包み込む陛下の恩を恃みとして、自分を抑制して畏れることをしませんでした。

兄は先頃は杭州の副知事であり、密州の知事でありましたが、何か物に触れて興を発するたびに、それを託するに詩歌を作り、ときに軽はずみな語を出すこともありました。先に臣下の者がそれらを集めて陛下の御覧に供しましたが、陛下はそのまま置いて問われることをなさいませんでした。兄は御恩を頂戴したことに感じ入り、深く後悔し、それからは決して再び行うようなことはありませんでした。しかし、以前に作った詩は自ずと広まってしまうしました。

わたし

臣は兄のことをまことに衰れに思います。兄は自分を信じてしまうほどに愚かで、軽々しく言葉を出し、それが不遜の域に達してしまったことに気付かなかったのです。過ちを改めて自身を一新しようとしたときには、すでに刑罰に陥るまでになり、救いようがなくなっていました。

わたし

兄は逮捕されましたときに、使いをよこして臣にこのように言いました。

「私はすでに衰え、病いがちである。きっと牢獄で死ぬだろう。もとより死は定めとしてあるものだ。しかし、残念に思うことがある。若くて抱いた志があった。世に稀な優れた天子様に巡り合えて、いまは失敗ばかりしてはいても、死ぬまでの間にほんのわずかも節義を尽くしたかった。いまこ

の禍に遭い、過ちを改めて自分自身を一新して、心を洗って明主にお仕えしたいと思っても、もはやその道がなくなってしまった。まして、朝廷において私は最も孤立し、皇帝の左右の親近に、自分のために弁護してくれる者はいない。ただ、兄弟の親しみのある者だけが、陛下に哀れを求めようしてくれるのだろうか」

わたし

臣は兄の心を哀れみ、手足ともいうべき兄弟の情を抑えることができないままに、死を冒してこのように一言申し上げる次第です。

昔、漢の時代^{じはん う い}に、淳于意^{てい い えい}が罪を得たときに、その末娘の緹縈^{てい えい}は、自分の身を官の奴隷に落として、父の罪を贖^{あがな}いたいと願い出ました。漢の文帝はこのことから身体を害う肉刑を用いることを止めました。

わたし

臣の誠などは虫けらのもの、緹縈^{てい えい}には遥かに遥かに及びません。しかし、陛下の聡明、仁聖は漢の文帝を遠く超えるものであります。臣^{わたし}はいま頂戴している官職をお返して、兄の罪を贖^{あがな}うことをお願いいたしたいと思います。兄の罪を軽くいただくまでを願うものではありません。ただ、獄で死ぬことさえ免れられるのなら幸いいたします。

兄の犯したことが文字にはっきりと明らかであるのなら、罰を受けることを拒み続けて、さらに罪を重ねるようなことはありませんでしょう。

もしも陛下の哀憐を蒙り、その万死が赦されて、牢獄から出ることができましたならば、それは死んでまた生き返ったようなもの、いかにして御恩に報いたらよろしいでしょうか。臣^{わたし}が願いますのは、兄とともに心を洗い、過ちを改め、骨を粉にして御恩をお返し、ただ陛下のお使いになるままに行動して、死んで後に終えるものであります。

わたし

臣は孤り危難の迫切したことに堪えられず、苦しさを訴えるところもなく、誠の心を陛下に捧げるも

のであります。この狂わしい振る舞いを見逃され、この乞い願うところをとくにお許し下さい。

わたし

げきせつゐんえつ

臣は天に祈り、命に代えて請い、激切隕越(激しく死ぬばかりの思い)の至りに堪えることができま
せん。